

早稲田大学大学院

SYLLABUS OF GRADUATE SCHOOL OF SCIENCE AND ENGINEERING WASEDA UNIVERSITY

理工学研究科要項

1988



教 旨

早稲田大学は学問の独立を全うし、学問の活用を効し、模範国民を
造就するを以て建学の本旨と為す。

早稲田大学は学問の独立を本旨と為すを以て、之か自由討究を主と
し、常に独創の研鑽に力め以て世界の学問に裨補せん事を期す。

早稲田大学は学問の活用を本旨と為すを以て、学理を学理として研
究すると共に、之を實際に応用するの道を講し以て時世の進運に資せ
んことを期す。

早稲田大学は模範国民の造就を本旨と為すを以て、個性を尊重し、
身家を発達し、国家社会を利濟し、併せて広く世界に活動す可き人格
を養成せん事を期す。

【 1988年度大学院理工学研究科要項正誤表 】

科目番号	講義	担当	単位数	履修条件	備考
P. 11	作業研究特論	講義 徳尾川	2-2-4	→	作業研究特論 (正)
P. 13	高度環境工学	講義 石山	2-0-2	→	高度環境工学 講義 石山 2-0-2
P. 14	C360			→	香取任工学 講義 徳尾川 2-0-2
P. 16	D270			→	高度環境工学 講義 石山 2-0-2
P. 16	D280			→	高度環境工学 講義 石山 2-0-2
P. 24	G660			→	高度環境工学 講義 石山 2-0-2
P. 25	H060			→	高度環境工学 講義 石山 2-0-2
P. 26	H680			→	高度環境工学 講義 石山 2-0-2
P. 32	L311			→	高度環境工学 講義 石山 2-0-2
P. 32	L321			→	高度環境工学 講義 石山 2-0-2
P. 32	L360			→	高度環境工学 講義 石山 2-0-2
P. 32	L421			→	高度環境工学 講義 石山 2-0-2
P. 36	M230			→	高度環境工学 講義 石山 2-0-2
P. 36	M250			→	高度環境工学 講義 石山 2-0-2
P. 36	M310			→	高度環境工学 講義 石山 2-0-2
P. 65	H260			→	高度環境工学 講義 石山 2-0-2
P. 125	H310			→	高度環境工学 講義 石山 2-0-2
P. 159	L311			→	高度環境工学 講義 石山 2-0-2
P. 160	L320			→	高度環境工学 講義 石山 2-0-2
P. 160	L321			→	高度環境工学 講義 石山 2-0-2
P. 161	L360			→	高度環境工学 講義 石山 2-0-2
※)	下線部分が修正した項目です。				

理 工 学 研 究 科 要 項

1 9 8 8 年 度

早 稻 田 大 学
大 学 院 理 工 学 研 究 科

昭和63年度 大 学 曆

区 分		期 日		
入 学 式	学 部	63年 4 月 1 日 (金)		
	大 学 院 科	4 月 2 日 (土)		
前 期	授 業 始 始	学 部	4 月 2 日 (土)	十 六 週
		大 学 院 科	4 月 4 日 (月)	
	授 業 終 了	7 月 21 日 (木)		
	夏 季 休 業	自 7 月 22 日 (金) 至 9 月 14 日 (水)		
後 期	授 業 開 始	9 月 16 日 (金)	十 七 週	
	創 立 記 念 日	10 月 21 日 (金)		
	冬 季 休 業	自 12 月 17 日 (土) 至 64年 1 月 7 日 (土)		
	授 業 終 了	2 月 6 日 (月)		
授 業 期 間		33 週		
春 季 休 業		自 2 月 7 日 (火) 至 3 月 31 日 (金)		
学部卒業式, 専攻科修了式および大学院学位授与式		3 月 25 日 (土)		

目 次

教 旨

昭和63年度大学暦

I 概要・沿革	1
II 学籍番号	3
III 学科目履修について	4
1 前期課程	4
2 後期課程	4
IV 学科目配当	5
1 学科目分類	5
2 隔年講義について	5
3 特定課題演習・実験について	5
4 共通科目・随意科目の学科目配当	6
5 各専攻・専門分野の学科目配当	7
機械工学専攻	7
機械工学専門分野	7
工業経営学専門分野	10
電気工学専攻	12
電気工学専門分野	12
電子通信学専門分野	15
建設工学専攻	17
建築学専門分野	17
土木工学専門分野	20
資源及材料工学専攻	23
資源工学専門分野	23
材料工学専門分野	25
応用化学専攻	26
応用化学専門分野	26
化学専門分野	29
物理学及応用物理学専攻	30
数学専攻	35
V 研究指導・授業科目内容	39
共通科目・随意科目	39
機械工学専攻	43
機械工学専門分野	43

工業経営学専門分野	60
電気工学専攻	74
電気工学専門分野	74
電子通信学専門分野	84
建設工学専攻	93
建築学専門分野	93
土木工学専門分野	105
資源及材料工学専攻	112
資源工学専門分野	112
材料工学専門分野	122
応用化学専攻	132
応用化学専門分野	132
化学専門分野	144
物理学及応用物理学専攻	150
数学専攻	176
Ⅵ 教員免許状取得について	189
Ⅶ 学生生活	190
1 「学生の手帖」について	190
2 奨学金制度	190
3 各種証明書類の交付	190
4 システムカードについて	190
5 学生相談センター	191
6 各種願・届	191
7 掲 示	192
8 授業時限および交通機関のストと授業について	192
9 事務所の事務取扱時間等	193
10 教室の使用について	193
11 学生の研究活動について	193
12 安全管理	194
13 理工学図書室	195
14 理工学図書室利用内規	198
15 施設賠償責任保険について	200
早稲田大学大学院学則	201
早稲田大学学位規則	208
大学院外国人特別研修生に関する規程	212
大学院研修生に関する規程	213
大学院研究生に関する規程	214
大久保構内建物配置図	

I 概要・沿革

概 要

大学院理工学研究科は、高度にして専門的な理工学の理論および応用を研究、教授し、その深奥を究めて、文化の創造、発展と人類の福祉に寄与することを目的としている。

課 程

本大学院は昭和26年4月に修士課程が、昭和28年4月に博士課程が設置されたが、昭和51年4月に大学院学則改定により、博士課程一本となった。(早稲田大学大学院学則、巻末参照)

博士課程5年を前期2年と後期3年に区分し、前期2年の課程はこれを修士課程として取り扱う。

修士課程を修了するには、大学院に2年以上在学し、本研究科の定めるところの所要の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上修士論文の審査および最終試験に合格しなければならない。修士課程を修了したものには工学修士または理学修士が授与される。

博士後期課程を修了するには、博士後期課程に3年以上在学し、本研究科の定めるところの研究指導を受けた上、博士論文の審査および最終試験に合格しなければならない。ただし優れた研究業績を上げた者については、本研究科委員会が認めた場合に限り、この課程に1年以上在学すれば足りるものとする。博士後期課程を修了したものは、工学博士または理学博士あるいは学術博士の学位が授与される。

専 攻

現在の理工学研究科には下記の専攻、専門分野が置かれている。

- 1) 機械工学専攻 (機械工学専門分野, 工業経営学専門分野)
- 2) 電気工学専攻 (電気工学専門分野, 電子通信学専門分野)
- 3) 建設工学専攻 (建築学専門分野, 土木工学専門分野)
- 4) 資源及材料工学専攻 (資源工学専門分野, 材料工学専門分野)
- 5) 応用化学専攻 (応用化学専門分野, 化学専門分野)
- 6) 物理学及応用物理学専攻
- 7) 数学専攻

沿 革

大正9年2月	大学令による大学となる
大正9年4月	大学院新設
昭和26年4月	工学研究科（機械工学，電気工学，建築工学，鉱山及金属工学，応用化学の5専攻）の修士課程を設置 堤 秀夫工学研究科委員長就任
昭和26年11月	堤 秀夫工学研究科委員長再任
昭和28年3月	博士課程設置
昭和29年3月	応用物理学専攻の修士課程を設置
昭和29年9月	伊原貞敏工学研究科委員長就任
昭和31年9月	青木楠男 "
昭和32年10月	早稲田大学創立75周年
昭和33年9月	山本研一工学研究科委員長就任
昭和35年9月	宮部 宏 "
昭和36年3月	工学研究科を理工学研究科と改称 数学専攻の修士課程，博士課程および応用物理学専攻の博士課程を設置
昭和37年9月	難波正人理工学研究科委員長就任
昭和37年10月	早稲田大学創立80周年
昭和39年9月	難波正人理工学研究科委員長再任
昭和41年9月	岩片秀雄理工学研究科委員長就任
昭和43年9月	葉山房夫 "
昭和45年9月	葉山房夫理工学研究科委員長再任
昭和47年4月	鉱山及金属工学専攻を資源及金属工学専攻と改称
昭和47年9月	並木美喜雄理工学研究科委員長就任
昭和48年4月	応用物理学専攻を物理学及応用物理学専攻と改称
昭和49年9月	並木美喜雄理工学研究科委員長再任
昭和51年4月	学則改正
昭和51年9月	斎藤 孟理工学研究科委員長就任
昭和53年9月	斎藤 孟理工学研究科委員長再任
昭和55年9月	加藤一郎理工学研究科委員長就任
昭和56年4月	研究生制度新設 委託学生を委託研修生に特殊学生を一般研修生に改称
昭和57年9月	加藤一郎理工学研究科委員長再任
昭和57年10月	早稲田大学創立100周年
昭和58年7月	特別選考制度による学生募集開始（昭和59年度生より）
昭和59年9月	堀井健一郎理工学研究科委員長就任
昭和61年9月	堀井健一郎理工学研究科委員長再任
昭和63年4月	資源及金属工学専攻を資源及材料工学専攻と改称

II 学籍番号

本研究科は、学生個人について入学時に学籍番号を定めている。この学籍番号は、修士課程、博士後期課程別になっており、それぞれの在学期間を通じて変更はない。

最初の1桁(6)は理工学研究科、次の1桁は入学年度(西暦下1桁)、次の1桁(アルファベット)は専攻専門分野別、最後の3桁は所属専攻・専門分野内における学生の番号を示す。

なお、上記6桁に1桁の C、D (チェックデジット) が付加される。

	修士課程	博士期後課程
機械工学専攻・機械工学専門分野	68 A001～	68 A501～
機械工学専攻・工業経営学専門分野	68 B001～	68 B501～
電気工学専攻・電気工学専門分野	68 C001～	68 C501～
電気工学専攻・電子通信学専門分野	68 D001～	68 D501～
建設工学専攻・建築学専門分野	68 E001～	68 E501～
建設工学専攻・土木工学専門分野	68 F001～	68 F501～
資源及材料工学専攻・資源工学専門分野	68 G001～	68 G501～
資源及材料工学専攻・材料工学専門分野	68 H001～	68 H501～
応用化学専攻・応用化学専門分野	68 J001～	68 J501～
応用化学専攻・化学専門分野	68 K001～	68 K501～
物理学及応用物理学専攻	68 L001～	68 L501～
数学専攻	68 M001～	68 M501～

Ⅲ 学科目履修について

履習方法

1. 修士課程

- (1) 第1年度のはじめに自己の専攻しようとする部門から一つの研究指導を選ぶ。この研究指導の担当教員が指導教授となる。
- (2) 修士論文に着手するためには、各専攻・専門分野の定める第1年度の必要単位を取得し、第1年度の終りに修士論文の研究計画書を提出しなければならない。
- (3) 修士の学位を取得するためには、少くとも2年在学し、30単位以上を取得し、修士論文の審査に合格しなければならない。
- (4) 演習科目の取得単位数が、各専攻・専門分野の定めた制限単位を超える場合には、その超えた分については修了必要単位数に算入しない。
- (5) 演習科目を選択する場合には、担当教員の許可を得なければならない。
- (6) 講義科目の選択は、原則として理工学研究科内に置かれた科目の中からとするが、4単位に限り他の研究科から選択できる。
- (7) 特別な事情がある場合には、関連教員の許可を得て、第2年度に入る時に専門分野内で他の研究指導に移ることができる。
- (8) 修士論文の作成、その他研究一般については、指導教授の指示に従う。
- (9) 修士課程においては、4年間を超えて在学することはできない。

2. 博士後期課程

- (1) 第1年度のはじめに自己の専攻しようとする部門から一つの研究指導を選ぶ。この研究指導の担当教員が指導教授となる。なお、同時期に博士論文の研究計画書を提出しなければならない。
- (2) 博士後期課程では必要取得単位数はないが、理工学研究科に設置された講義科目はその担当教員の了解のもとに聴講することができる。他研究科の講義科目についてもこれに準ずる。
- (3) 博士論文の作成、その他研究一般については、指導教授の指示に従う。
- (4) 博士後期課程においては、6年間を超えて在学することはできない。
- (5) 博士論文を提出しないで退学した者のうち、博士後期課程に3年以上在学し、かつ必要な研究指導を受けた者は、退学した日から起算して3年以内に限り博士論文を提出し最終試験を受けることができる。

課程の修了および学位の授与

後掲大学院学則第13条より第16条まで参照のこと。

IV 学 科 目 配 当

1. 学 科 目 分 類

設置されている研究指導・授業科目にはそれぞれ、科目番号がつけられている。

機 械 工 学	A 0 1 0 ~
工 業 経 営 学	B 0 1 0 ~
電 気 工 学	C 0 1 0 ~
電 子 通 信 学	D 0 1 0 ~
建 築 学	E 0 1 0 ~
土 木 工 学	F 0 1 0 ~
資 源 工 学	G 0 1 0 ~
材 料 工 学	H 0 1 0 ~
応 用 化 学	J 0 1 0 ~
化 学	K 0 1 0 ~
物理学及应用物理学	L 0 1 0 ~
数 学	M 0 1 0 ~

2. 隔年講義について

授業科目の前に付した△印は隔年講義，※印は本年度休講をしめす。

3. 特定課題演習・実験（4単位）について

科学・技術の急速な発展に対応し、各専攻（専門分野）が必要に応じて企画して行なう特定のトピックスに関するゼミナールまたは実験である。当該分野で集中講義，集中ゼミナールなどと内容を明示してある年度に限り選択ができる。

4. 共通科目・随意科目の学科目配当

共通科目

番号	学 科 目 名	区 別	担 当 教 員	毎週授業時間数		単位
				前期	後期	
5000	ラプラス変換論	講義	杉山	2	2	4
5010	現代数学概論A	〃	足立	2	0	2
5011	現代数学概論B	〃	入江	0	2	2
5020	量子力学概説(学部合併)	〃	並木	2	2	4
5030	原子核概説(学部合併)	〃	山田	2	2	4
5040	統計力学概説(学部合併)	〃	斉藤, 加藤(柄)	2	2	4
5050	建築音響学	〃	伊藤(毅)	2	2	4
5060	情報理論	〃	平澤	2	0	2
5070	同位元素工学	〃	黒沢	2	2	4
5080	画像情報処理特論	〃	釜江	0	2	2
5090	騒音・振動制御工学	〃	中野	0	2	2

〔注意〕 共通科目のなかの各概説(量子力学, 原子核, 統計力学の概説)は, 応用物理学科および物理学科卒業以外の学生の便宜のために設置されたものであるから, 上記学科卒業生, および学部で既に取得した他学科卒業生には, 単位を与えない。騒音・振動制御工学は「環境工学特論」2単位を修得していることを前提とする。

随意科目

番号	学 科 目 名	区 別	担 当 教 員	毎週授業時間数		単位
				前期	後期	
6000	テクニカル・コミュニケーションⅠ	講義	篠田	2	2	4
6001	テクニカル・コミュニケーションⅡ	〃	チェスター ブロンファン	2	2	4

5. 各専攻・専門分野の学科目配当

機 械 工 学 専 攻

A 機械工学専門分野

本専門分野は思索される想像を实在の形象に移す工学である。

自然法則の科学的認識にもとづく体験と実践の確立により、形象能力を昂める高度の機械工学を研修する。この分野はさらに専門別にそれぞれの部門に分かれる。

(1) 研究指導

部 門	番 号	研 究 指 導	担 当 教 員
産 業 数 学 部 門 流 体 工 学 部 門	A 010	産 業 数 学 研 究	山 本
	A 020	流 体 工 学 研 究	田 島
	A 021	流 体 工 学 研 究	川 瀬
熱 工 学 部 門	A 022	流 体 工 学 研 究	大 田
	A 023	流 体 工 学 研 究	松 木
	A 030	内 燃 機 関 研 究	斎 藤
	A 031	内 燃 機 関 研 究	大 聖
	A 032	熱 工 学 研 究	永 田
	A 033	熱 工 学 研 究	勝 田
機 械 設 計 部 門	A 041	構 造 振 動 研 究	山 川
	A 042	機 械 設 計 研 究	和 田
	A 043	材 料 力 学 研 究	林(郁)
	A 044	機 器 設 計 研 究	山 根
	A 045	設 計 基 礎 研 究	林(洋)
	A 046	C A D 工 学 研 究	山 口
精 密 工 学 部 門 機 械 材 料 工 学 部 門	A 050	精 密 加 工 研 究	中 沢
	A 060	応 用 材 料 工 学 研 究	井 口
	A 061	材 料 設 計 研 究	三 輪
計 測 制 御 工 学 部 門	A 071	生 物 制 御 研 究	加 藤
	A 072	生 物 制 御 研 究	土 屋
	A 073	プ ロ セ ス 工 学 研 究	河 合
	A 074	制 御 工 学 研 究	橋 詰
	A 075	制 御 工 学 研 究	武 藤
金 属 加 工 部 門	A 080	材 料 加 工 学 研 究	松 浦
	A 082	塑 性 工 学 研 究	本 村

(2) 授業科目

番号	学 科 目 名	区 別	担 当 教 員	毎週授業 時間数		単位
				前期	後期	
A 210	オペレーションズ・リサーチ	講 義	前 田	0	2	2
A 220	統 計 学 特 論	〃	前 田	2	0	2
A 230	生 体 情 報 解 析 学	〃	野 呂	0	2	2
A 240	レ オ ロ ジ ー	〃	山 本	0	2	2
A 250	材 料 力 学 特 論 A	〃	林(郁)	2	2	4
A 251	材 料 力 学 特 論 B	〃	山 川	0	2	2
A 260	潤 滑 工 学 特 論	〃	和 田, 林(洋), 石 渡	2	0	2
A 270	不 規 則 振 動 論	〃	下 郷	2	0	2
A 271	非 線 形 振 動 論	〃	辻 岡	0	2	2
A 280	機 械 設 計 特 論	〃	山 根	2	0	2
A 290	流 体 力 学 特 論	〃	田 島, 大 田	2	2	4
A 300	ガスタービン工学特論	〃	松 木	2	2	4
A 310	内 燃 機 関 特 論 I	〃	斎 藤	2	0	2
A 311	内 燃 機 関 特 論 II	〃	大 永	0	2	2
A 320	燃 焼 工 学	〃	永 田	2	0	2
A 330	伝 熱 工 学 特 論	〃	勝 田	0	2	2
A 340	※熱 装 置 特 論	〃	未 定	0	2	2
A 350	熱 機 関 特 論	〃	永 島	0	2	2
A 360	自 動 車 工 学 A	〃	山 中	2	0	2
A 361	自 動 車 工 学 B	〃	木 原	0	2	2
A 370	機 械 加 工 学 特 論	〃	中 沢	2	2	4
A 380	※歯 車 工 学 特 論	〃	未 定	2	2	4
A 390	精 密 加 工 システム 特 論	〃	古 川	2	2	4
A 400	溶 接 システム 工 学 特 論	〃	山本(一), 荒 谷	2	2	4
A 410	物 性 計 測 システム 特 論	〃	岸 本	2	0	2
A 420	植 物 工 学 特 論	〃	三 輪	0	2	2
A 430	溶 接 工 学 特 論	〃	蓮 井	2	0	2
A 440	材 料 工 学 特 論 (I)	〃	井 口	2	0	2
A 441	材 料 工 学 特 論 (II)	〃	西 川	0	2	2
A 450	システムの力学	〃	川 瀬	2	2	4
A 460	制 御 系 の 解 析 設 計	〃	河 加	2	2	4
A 470	生 物 制 御 工 学 A	〃	藤 屋	2	2	4
A 471	生 物 制 御 工 学 B	〃	土 屋	2	2	4
A 480	制 御 工 学 特 論	〃	町 山, 橋 詰	2	2	4
A 490	制 御 工 学	〃	武 藤	2	0	2
A 500	塑 性 工 学 特 論	〃	松 浦, 本 村	2	2	4
A 510	※表 面 加 工 特 論	〃	未 定	2	0	2
A 520	精 密 機 器 系 の 設 計	〃	川 上	2	2	4
A 530	流 体 関 連 振 動 論	〃	田 島	2	0	2
A 540	C A D 工 学 特 論	〃	山 口	2	0	2

A 610	産業数学演習Ⅰ	演習	山本	2	2	4
A 611	産業数学演習Ⅱ	〃	山本	2	2	4
A 620	流体工学演習Ⅰ	〃	田島, 川瀬, 大田,	2	2	4
A 621	流体工学演習Ⅱ	〃	松田, 田島, 川瀬, 大田,	2	2	4
A 630	熱工学演習	〃	松田, 藤, 永田, 大聖,	2	2	4
A 631	熱工学特別演習	〃	勝田, 藤, 永田, 大聖,	2	2	4
A 640	内燃機関演習Ⅰ	〃	勝田	2	0	2
A 641	内燃機関演習Ⅱ	〃	斎藤	0	2	2
A 650	エネルギー・環境演習	〃	大聖	2	2	4
A 660	伝熱演習	〃	永田	2	2	4
A 670	構造振動演習Ⅰ	〃	勝田	2	2	4
A 671	構造振動演習Ⅱ	〃	山川	2	2	4
A 680	設計工学演習Ⅰ	〃	山川	2	2	4
A 681	設計工学演習Ⅱ	〃	和田	2	2	4
A 690	材料力学演習Ⅰ	〃	和田	2	2	4
A 691	材料力学演習Ⅱ	〃	林(郁)	2	2	4
A 700	機器設計演習Ⅰ	〃	林(郁)	2	2	4
A 701	機器設計演習Ⅱ	〃	山根	2	2	4
A 710	設計基礎演習Ⅰ	〃	山根	2	2	4
A 711	設計基礎演習Ⅱ	〃	林(洋)	2	2	4
A 720	CAD工学演習Ⅰ	〃	林(洋)	2	2	4
A 721	CAD工学演習Ⅱ	〃	山口	2	2	4
A 730	精密加工演習Ⅰ	〃	山口	2	2	4
A 731	精密加工演習Ⅱ	〃	中沢	2	2	4
A 750	材料工学演習Ⅰ	〃	中	2	2	4
A 751	材料工学演習Ⅱ	〃	井口, 三輪	2	2	4
A 760	バイオメカニクス演習Ⅰ	〃	井口, 三輪	2	2	4
A 761	バイオメカニクス演習Ⅱ	〃	加藤	2	2	4
A 770	バイオメカニクス演習Ⅰ	〃	加藤	2	2	4
A 771	バイオメカニクス演習Ⅱ	〃	土屋	2	2	4
A 780	プロセス工学演習Ⅰ	〃	土屋	2	2	4
A 781	プロセス工学演習Ⅱ	〃	河合	2	2	4
A 790	制御工学演習Ⅰ	〃	河橋	2	2	4
A 791	制御工学演習Ⅱ	〃	河橋	2	2	4
A 800	計測・制御工学演習Ⅰ	〃	橋詰	2	2	4
A 801	計測・制御工学演習Ⅱ	〃	武藤	2	2	4
A 810	材料加工工学演習Ⅰ	〃	武藤	2	2	4
A 811	材料加工工学演習Ⅱ	〃	松浦	2	2	4
A 812	材料加工工学特別演習	〃	松浦	2	2	4

A 830	塑性工学演習Ⅰ	演習	本村	2	2	4
A 831	塑性工学演習Ⅱ	〃	本村	2	2	4
A 832	塑性工学特別演習	〃	本村	2	2	4
A 840	特定課題演習・実験	演習・実験				4

機械工学専門分野履修方法

1. 指導教授が担当する演習科目は必ず履修しなければならない。
2. 演習科目は13単位以上履修してもその分は修了必要単位数に算入しない。
3. 第1年度には講義科目16単位を取得しなければならない。

B 工業経営学専門分野

本分野における研究の対象は、社会的生産、分配、流通に関する科学・工学的思考に基づく総合的および部分的システムの分析、設計、評価が主たるものである。

社会的生産の対象は単に財貨のみではなくサービスも大きな比重を占めるものであるから、これをも研究の対象として取扱う。

したがって現在本分野に設置されている生産管理学、オペレーションズ・リサーチ、プラント・エンジニアリング、労務管理学、生産工学および産業公害6部門それぞれを構成する研究の内容をよく認識、理解して履修するように心掛けられたい。

(1) 研究指導

部 門	番 号	研 究 指 導	担当教員
経 営 管 理 学 生 産 管 理 学	B 033	経 営 管 理 学 研 究	石 渡
	B 011	生 産 管 理 学 研 究	十代田
	B 021	生 産 管 理 学 研 究	池 沢
	B 010	生 産 管 理 学 研 究	片 山
	B 034	生 産 管 理 学 研 究	長谷川
	B 012	生 産 管 理 学 研 究	中 根
プラントエンジニアリング	B 040	プラントエンジニアリング研究	石 館
	B 041	プラントエンジニアリング研究	高 郷
	B 042	プラントエンジニアリング研究	吉 本
オペレーションズ・リサーチ	B 020	オペレーションズ・リサーチ研究	春日井
	B 023	オペレーションズ・リサーチ研究	森 戸
インフォメーションシステム	B 022	インフォメーションシステム研究	平 沢
	B 024	インフォメーションシステム研究	東
ヒューマンファクターズエンジニアリング	B 050	ヒューマンファクターズエンジニアリング研究	尾 関
	B 031	ヒューマンファクターズエンジニアリング研究	横 溝
環 境 工 学	B 060	環 境 工 学 研 究	塩 沢

(2) 授業科目

番 号	学 科 目 名	区 別	担 当 教 員	毎 週 授 業 時 間 数		単 位
				前 期	後 期	
B 210	生 産 管 理 学 特 論	講 義	片 山	2	0	2
B 220	生 産 管 理 解 析	〃	十 代 田	0	2	2
B 230	電 子 計 算 法	〃	十 代 田	2	0	2
B 240	オペレーションズ・リサーチ	〃	春 日 井	2	2	4
B 250	特 品 質 管 理 特 論	〃	池 沢	0	2	2
B 260	情 報 シ ス テ ム 特 論	〃	平 沢	2	2	4
B 271	数 理 計 画 特 論 A	〃	森 戸	2	0	2
B 272	数 理 計 画 特 論 B	〃	森 戸	0	2	2
B 290	マーケティングリサーチ特論	〃	石 渡	0	2	2
B 300	人 間 工 学 特 論	〃	野 呂	2	2	4
B 310	作 業 研 究 特 論	〃	長 谷 川	2	2	4
B 321	生 産 シ ス テ ム 設 計 特 論 A	〃	中 根	2	0	2
B 322	生 産 シ ス テ ム 設 計 特 論 B	〃	長 谷 川	0	2	2
B 331	工 場 計 画 特 論 A	〃	高 橋	2	0	2
B 332	工 場 計 画 特 論 B	〃	吉 本	0	2	2
B 340	設備管理及エンジニアリング	〃	石 館	0	2	2
B 350	エレクトロニクス	〃	尾 関	2	0	2
B 360	ヒューマンリソース	〃	尾 関	0	2	2
B 370	マネジメント特論	〃	尾 関, 宮 本	0	2	2
B 370	環 境 工 学 特 論	〃	塩 沢, 平 田	2	2	4
B 380	△エネルギー管理特論	〃	塩 沢	2	0	2
B 392	経 営 科 学 A	〃	土 方	2	0	2
B 393	経 営 科 学 B	〃	村 越	0	2	2
E 394	応 用 統 計 学 A	〃	宮 崎	2	0	2
B 395	応 用 統 計 学 B	〃	小 林	0	2	2
B 400	工 業 管 理 会 計	〃	小 沢	2	2	4
B 410	ソフトウエアマネジメント	〃	東	2	0	2
B 411	オフィス情報システム特論	〃	東	0	2	2
B 610	生 産 管 理 演 習 I	演 習	十 代 田, 片 山	2	2	4
B 611	生 産 管 理 演 習 II	〃	十 代 田, 片 山	2	2	4
B 612	生 産 シ ス テ ム 設 計 演 習 I	〃	中 根	2	2	4
B 613	生 産 シ ス テ ム 設 計 演 習 II	〃	中 根	2	2	4
B 630	オペレーションズ・リサーチ	〃	春 日 井	3	3	6
B 630	演 習 I	〃				
B 631	オペレーションズ・リサーチ	〃	春 日 井	3	3	6
B 631	演 習 II	〃				
B 640	品 質 管 理 演 習 I	〃	池 沢	2	2	4

B 641	品質管理演習Ⅱ	演習	池沢	2	2	4
B 650	情報システム演習A	//	平沢	2	2	4
B 651	情報システム演習B	//	平沢	2	2	4
B 655	ソフトウェア工学演習Ⅰ	//	東	2	2	4
B 656	ソフトウェア工学演習Ⅱ	//	東	2	2	4
B 660	数理計画演習A	//	森戸	3	3	6
B 661	数理計画演習B	//	森戸	3	3	6
B 680	マーケティングリサーチ演習A	//	石渡	2	2	4
B 681	マーケティングリサーチ演習B	//	石渡	2	2	4
B 700	作業研究演習A	//	横溝	2	2	4
B 701	作業研究演習B	//	横溝	2	2	4
B 702	応用ロボット工学演習Ⅰ	//	長谷川	2	2	4
B 703	応用ロボット工学演習Ⅱ	//	長谷川	2	2	4
B 710	工場計画演習A	//	吉本	2	2	4
B 713	工場計画演習B	//	高橋	2	2	4
B 711	設備管理及エンジニアリングエコノミイ演習	//	石館	2	2	4
B 712	プラントエンジニアリング演習	//	石館, 吉本	2	2	4
B 720	ヒューマンリソースマネジメント演習A	//	尾関	2	2	4
B 721	ヒューマンリソースマネジメント演習B	//	尾関	2	2	4
B 730	環境工学演習Ⅰ	//	塩沢	2	2	4
B 731	環境工学演習Ⅱ	//	塩沢	2	2	4
B 732	管理システム分析実習	実習	十代田, 池沢, 片山	3	3	2
B 740	特定課題演習・実験	演習・実験				4

工業経営学専門分野履修方法

1. 指導教授が担当する演習科目は必ず履修しなければならない。
2. 演習科目は13単位以上履修してもその分は修了必要単位数に算入しない。

電気工学専攻

A 電気工学専門分野

電気工学分野は、システム工学、計算機、計測制御工学、半導体工学、電気機器、電力システム、高電圧エネルギーおよび回路理論の8部門から編成されている。

(1) 研究指導

部 門	番 号	研 究 指 導	担 当 教 員
システム工学部門	C 010	確率システム研究	秋月
	C 011	情報システム研究	
計 算 機 部 門	C 020	計 算 機 研 究	白井倉門
	C 021	計 算 機 制 御 研 究	
	C 022	計 算 機 工 学 研 究	
	C 023	計 算 機 ソ フ ト ウ ェ ア 研 究	
	C 030	制 御 工 学 研 究	
計測制御工学部門	C 031	制 御 工 学 研 究	示村
	C 032	制 御 工 学 研 究	
	C 040	半 導 体 工 学 研 究	
半 導 体 工 学 部 門	C 041	半 導 体 工 学 研 究	木俣
	C 042	半 導 体 工 学 研 究	
	C 050	電 気 機 器 研 究	
電 気 機 器 部 門	C 051	電 気 機 器 研 究	小貫
	C 060	電 力 シ ス テ ム 研 究	
電 力 シ ス テ ム 部 門	C 061	電 力 シ ス テ ム 研 究	石山
	C 070	高 電 圧 工 学 研 究	
高 電 圧 エ ネ ル ギ ー 部 門	C 071	高 電 圧 物 性 研 究	岩本
	C 080	回 路 理 論 研 究	
回 路 理 論 部 門	C 080	回 路 理 論 研 究	大木
			松本

(2) 授業科目

番 号	学 科 目 名	区 別	担 当 教 員	毎 週 授 業 時 間 数		単 位
				前 期	後 期	
C 210	確率システム理論A	講義	秋月	2	0	2
C 211	確率システム理論B	〃	秋月	0	2	2
C 220	情報システム論	〃	白井倉門	2	0	2
C 230	計 算 機 特 論	〃	門倉	2	0	2
C 240	計 算 機 制 御	〃	成田	2	0	2
C 250	非線形システムの安定論	〃	示村	0	2	2
C 260	最適制御理論	〃	内田	2	0	2
C 270	半 導 体 工 学	〃	木俣	0	2	2
C 280	固 体 電 子 工 学	〃	尾崎	2	0	2
C 290	固 体 論	〃	鈴木	2	0	2
C 300	エ ネ ル ギ ー 機 器 工 学	〃	小貫	2	0	2
C 310	※電 気 機 器 工 学	〃	石山	2	0	2

C 320	回路理論	講義	松本	0	2	2
C 330	線形システム理論	//	小林(精)	2	0	2
C 340	電力回路	//	田村	2	0	2
C 350	電力系統理論	//	岩本	2	0	2
C 360	高電圧工学	//	入江	0	2	2
C 370	プラズマ・ダイナミックス	//	入江	2	0	2
C 380	誘電体電子物性	//	大木	2	0	2
C 390	計算機アーキテクチャ特論	//	大笠原	2	0	2
C 400	ソフトウェア工学	//	深沢	0	2	2
C 610	確率システム理論演習I	演習	秋月	2	2	4
C 611	確率システム理論演習II	//	秋月	2	2	4
C 620	情報システム演習I	//	白井	2	2	4
C 621	情報システム演習II	//	白井	2	2	4
C 630	計算機特論演習I	//	門倉	2	2	4
C 631	計算機特論演習II	//	門倉	2	2	4
C 640	計算機制御演習I	//	成田	2	2	4
C 641	計算機制御演習II	//	成田	2	2	4
C 642	計算機工学演習I	//	笠原	2	2	4
C 643	計算機工学演習II	//	笠原	2	2	4
C 644	ソフトウェア工学演習I	//	深沢	2	2	4
C 645	ソフトウェア工学演習II	//	深沢	2	2	4
C 650	制御工学A演習I	//	示村	2	2	4
C 651	制御工学A演習II	//	示村	2	2	4
C 660	制御工学B演習I	//	小林	2	2	4
C 661	制御工学B演習II	//	小林	2	2	4
C 670	制御工学C演習I	//	内田	2	2	4
C 671	制御工学C演習II	//	内田	2	2	4
C 680	半導体工学A演習I	//	木俣	2	2	4
C 681	半導体工学A演習II	//	木俣	2	2	4
C 690	半導体工学B演習I	//	尾崎	2	2	4
C 691	半導体工学B演習II	//	尾崎	2	2	4
C 700	半導体工学C演習I	//	鈴木	2	2	4
C 701	半導体工学C演習II	//	鈴木	2	2	4
C 710	電気機器工学A演習I	//	小貫	2	2	4
C 711	電気機器工学A演習II	//	小貫	2	2	4
C 720	電気機器工学B演習I	//	石山	2	2	4
C 721	電気機器工学B演習II	//	石山	2	2	4
C 730	回路理論演習I	//	松本	2	2	4
C 731	回路理論演習II	//	松本	2	2	4

C 740	電力システム工学演習Ⅰ	演習	田村	2	2	4
C 741	電力システム工学演習Ⅱ	〃	田村	2	2	4
C 750	電力系統理論演習Ⅰ	〃	岩本	2	2	4
C 751	電力系統理論演習Ⅱ	〃	岩本	2	2	4
C 760	高電圧工学演習Ⅰ	〃	入江	2	2	4
C 761	高電圧工学演習Ⅱ	〃	入江	2	2	4
C 770	高電圧物性演習Ⅰ	〃	大木	2	2	4
C 771	高電圧物性演習Ⅱ	〃	大木	2	2	4
C 780	特定課題演習・実験	演習・ 実験				4

電気工学専門分野履修方法

1. 指導教授が担当する演習科目は必ず履修しなければならない。
2. 演習科目は9単位以上履修してもその分は修了必要単位数に算入しない。

B 電子通信学専門分野

電子通信学専門分野では回路工学、情報工学、光・電波工学、電子工学および音響工学の5部門に分けて研究指導を行う。

(1) 研究指導

部 門	番 号	研 究 指 導	担 当 教 員
回 路 工 学 部 門	D 010	回 路 工 学 研 究	平 山
	D 011	情 報 通 信 網 研 究	富 永
	D 012	ネ ッ ト ワ ー ク ・ シ ス テ ム 研 究	大 附
情 報 工 学 部 門	D 020	情 報 シ ス テ ム 工 学 研 究	小 原
	D 021	情 報 通 信 基 礎 研 究	堀 内
	D 022	情 報 数 理 工 学 研 究	大 石
光 ・ 電 波 工 学 部 門	D 023	情 報 構 造 研 究	村 岡
	D 030	光 ・ 電 波 工 学 研 究	香 西
	D 031	光 ・ 電 波 工 学 研 究	副 島
	D 032	光 ・ 電 波 工 学 研 究	加 藤
	D 033	光 ・ 電 波 工 学 研 究	高 畑
電 子 工 学 部 門	D 040	電 子 工 学 研 究	伊 藤(紉)
	D 041	電 子 工 学 研 究	内 山
	D 042	電 子 工 学 研 究	大 泊
音 響 工 学 部 門	D 050	音 響 工 学 研 究	伊 藤(毅)

(2) 授業科目

番号	学 科 目 名	区 別	担 当 教 員	毎週授業数		単 位
				前 期	後 期	
D 210	情報回路工学(学部合併)	講 義	富 永	2	0	2
D 220	電 磁 気 学 特 論	〃	副 島	0	2	2
D 230	情報システム工学	〃	小 原	2	0	2
D 240	電 子 材 料	〃	伊藤(綱)	0	2	2
D 250	音 響 工 学	〃	伊藤(毅)	2	0	2
D 260	回 路 工 学	〃	平 山	2	0	2
D 270	マ イ タ ロ 波 回 路	〃	香 西, 大 石	2	0	2
D 280	システム解析特論	〃	堀 内	2	0	2
D 290	半 導 体 計 測	〃	大 泊	2	0	2
D 300	生 物 工 学 特 論	〃	内 山	2	0	2
D 310	光・量子電子工学	〃	加 藤	0	2	2
D 320	電子回路のCAD	〃	大 附	0	2	2
D 330	情報処理システム設計I	〃	村 岡	2	0	2
D 331	※情報処理システム設計II	〃	(未定)	0	2	2
D 340	衛星通信工学	〃	高 畑	0	2	2
D 610	回路工学演習I	演 習	高 畑	2	2	4
D 611	回路工学演習II	〃	平 山	3	3	6
D 620	情報通信網演習I	〃	富 永	2	2	4
D 621	情報通信網演習II	〃	富 永	3	3	6
D 630	ネットワーク・演習I	〃	大 附	2	2	4
D 631	ネットワーク・演習II	〃	大 附	3	3	6
D 640	情報システム工学演習I	〃	小 原	2	2	4
D 641	情報システム工学演習II	〃	小 原	3	3	6
D 650	情報通信基礎演習I	〃	堀 内	2	2	4
D 651	情報通信基礎演習II	〃	堀 内	3	3	6
D 660	情報理工学演習I	〃	大 石	2	2	4
D 661	情報理工学演習II	〃	大 石	3	3	6
D 670	情報構造演習I	〃	大 村	2	2	4
D 671	情報構造演習II	〃	村 岡	3	3	6
D 680	光・電波工学A演習I	〃	香 西	2	2	4
D 681	光・電波工学A演習II	〃	香 西	3	3	6
D 690	光・電波工学B演習I	〃	副 島	2	2	4
D 691	光・電波工学B演習II	〃	副 島	3	3	6
D 700	光・電波工学C演習I	〃	加 藤	2	2	4
D 701	光・電波工学C演習II	〃	加 藤	3	3	6
D 705	光・電波工学D演習I	〃	加 高	2	2	4
D 706	光・電波工学D演習II	〃	高 畑	3	3	6

D 710	電子工学B 演習I	演習	伊藤(紉)	2	2	4
D 711	電子工学B 演習II	〃	伊藤(紉)	3	3	6
D 720	電子工学C 演習I	〃	内山	2	2	4
D 721	電子工学C 演習II	〃	内山	3	3	6
D 730	電子工学D 演習I	〃	大泊	2	2	4
D 731	電子工学D 演習II	〃	大泊	3	3	6
D 740	音響工学A 演習I	〃	伊藤(毅)	2	2	4
D 741	音響工学A 演習II	〃	伊藤(毅)	3	3	6
D 750	電子通信特別実験	実験	全教員	3	3	2
D 760	特定課題演習・実験	演習・実験				4

電子通信学専門分野履修方法

1. 指導教授が担当する演習科目は必ず履修しなければならない。
2. 授業科目については次の区分によって履修すること。

第1年度	演習I	電子通信特別実験
		講義科目 10単位以上
	第2年度	演習II
3. 講義科目の選択にあたっては、指導教授の指導を受けること。

建設工学専攻

A 建築学専門分野

本学大学院の建設工学専攻は、建築学分野と土木工学分野とからなっている。

建築学分野は、建築史、建築計画、都市計画の計画系部門と、建築構造、建築設備、建築材料及施工の技術系部門とからなり、併せて6部門によって構成されている。

これら6部門の博士後期課程は、その部門の専門研究者として独立して研究する能力を養成することを目的としているが、修士課程における教育目標は、系によりまた部門による特質をもつ。

計画系部門は、建築の変革と創造の理論を歴史的に考究する建築史研究、建築における現代の創造そのものを命題とする建築計画研究、建築の集合としての都市に視点をあてる都市計画研究の、それぞれが部門としての命題と研究方法の独自性を持ちつつ、修士課程においては、専門的深化に閉ざされず、建築に対する設計計画者としての広い視野と高い見識の養成を等しく目標としているのが特質である。修士論文において、部門の枠をこえて互に関連し合う計画系一般としての主題が許容されているのは、この反映であり、課程修了後の社会への進出コースも、画然たる区別を見ない。

技術系部門には、建築構造部門・建築設備部門、建築材料及び施工部門があり、それぞれの部門で独自の性格を持つ。建築構造部門では耐震構造、架橋の力学、曲面構造、基礎構造、地盤、構造体の振動、光弾性、木構造など、建築構造の力学的基礎から実務の構造設

計に互る広い範囲の専門的科学技术を学ぶ。建築設備部門には、空調設備の省エネルギー設計と設備機器の特性を扱う建築設備研究、気候風土に適応した建築形態の本質と人間と環境との対応を科学する建築環境研究、都市施設と広域環境の将来像を局地的および総合的に促える都市環境研究がある。建築材料及び施工部門では、建築材料における新技術応用としての新素材の特性と用法、各種の異なる目的に対応した建築工法やディテールの開発、コンピューターを導入した建築生産システムと施工管理技術の開発などの実務に直結した課題にとり組む。

(1) 研究指導

部 門	番 号	研 究 指 導	担 当 教 員
建 築 史 部 門	E 010	建 築 史 研 究	渡 辺
	E 011	建 築 史 研 究	中 川
建 築 計 画 部 門	E 020	建 築 計 画 研 究	石 山
	E 021	建 築 計 画 研 究	穂 積
	E 022	建 築 計 画 研 究	池 原
	E 023	建 築 計 画 研 究	渡 辺(仁)
	E 030	都 市 計 画 研 究	(未定)
都 市 計 画 部 門	E 031	都 市 計 画 研 究	佐 藤
	E 032	都 市 計 画 研 究	戸 沼
	E 040	建 築 構 造 研 究	風 間
建 築 構 造 部 門	E 041	建 築 構 造 研 究	松 井
	E 042	建 築 構 造 研 究	谷
	E 043	建 築 構 造 研 究	田 中
	E 044	建 築 構 造 研 究	古 藤 田
	E 045	建 築 構 造 研 究	西 谷
	E 050	建 築 設 備 研 究	井 上
建 築 設 備 部 門	E 051	建 築 環 境 研 究	木 村
	E 052	都 市 環 境 研 究	尾 島
建 築 材 料 及 施 工 部 門	E 060	建 築 材 料 及 施 工 研 究	田 村
	E 061	建 築 材 料 及 施 工 研 究	神 山
	E 062	建 築 材 料 及 施 工 研 究	嘉 納

(2) 授業科目

番 号	学 科 目 名	区 別	担 当 教 員	毎 週 授 業 時 間 数		単 位
				前 期	後 期	
E 210	建 築 史	講 義	渡 辺	2	2	4
E 220	建 築 美 学 及 建 築 論	//	中 川, 上 松	2	2	4
E 230	※ 建 築 計 画 A	//	石 山	0	2	2
E 231	建 築 計 画 B	//	穂 積	0	2	2

E 232	建 築 計 画	C	講 義	池原	2	0	2
E 240	建 築 設 計 計 画 理 論		〃	渡辺(仁), 中村	2	2	4
E 250	都 市 計 画 特 論	B	〃	田村(明)	0	2	2
E 251	都 市 計 画 特 論	C	〃	佐 藤	0	2	2
E 252	都 市 計 画 特 論	D	〃	戸 沼	2	0	2
E 260	建 築 構 造	A	〃	谷, 桜井	2	2	4
E 261	建 築 構 造	B	〃	田中, 堀江	2	2	4
E 262	建 築 構 造	C	〃	田治見, 松井	2	2	4
E 270	振 動 論		〃	風 間	0	2	2
E 280	建 築 基 礎 工 学		〃	古藤田	2	2	4
E 290	地 震 学		〃	笠 原	2	0	2
E 300	建 築 設 備 工 学		〃	井 上	2	0	2
E 310	建 築 環 境 論		〃	木 村	2	0	2
E 311	自 然 エ ネ ルギ ー 論		〃	木 村	0	2	2
E 320	都 市 環 境 論		〃	尾 島	2	0	2
E 330	※△設 備 特 論	A	〃	吉 川	0	2	2
E 331	※△設 備 特 論	B	〃	前 田	2	0	2
E 332	△設 備 特 論	C	〃	李	2	0	2
E 333	△設 備 特 論	D	〃	村 上	0	2	2
E 340	建 築 材 料		〃	田 村 (恭)	2	2	4
E 350	建 築 施 工	A	〃	伊 藤	2	0	2
E 351	建 築 施 工	B	〃	田 村 (恭)	0	2	2
E 360	建 築 生 産 論		〃	岩 下	2	0	2
E 370	建 築 構 造 法		〃	神 山	2	2	4
E 380	建 築 生 産 管 理		〃	嘉 納	2	2	4
E 390	空 間 構 成 論		〃	鈴 木	0	2	2
E 610	建 築 史	A 演 習 I	演 習	渡 辺	2	2	4
E 611	建 築 史	A 演 習 II	〃	渡 辺	2	2	4
E 620	建 築 史	B 演 習 I	〃	中 川	2	2	4
E 621	建 築 史	B 演 習 II	〃	中 川	2	2	4
E 630	建 築 設 計 計 画	A 演 習 I	〃	石 山	2	2	4
E 631	建 築 設 計 計 画	A 演 習 II	〃	石 山	2	2	4
E 640	建 築 設 計 計 画	B 演 習 I	〃	穂 積	2	2	4
E 641	建 築 設 計 計 画	B 演 習 II	〃	穂 積	2	2	4
E 650	建 築 設 計 計 画	C 演 習 I	〃	池 原	2	2	4
E 651	建 築 設 計 計 画	C 演 習 II	〃	池 原	2	2	4
E 660	建 築 設 計 計 画	D 演 習 I	〃	渡 辺(仁)	2	2	4
E 661	建 築 設 計 計 画	D 演 習 II	〃	渡 辺(仁)	2	2	4
E 670	※都 市 計 画	B 演 習 I	〃	(未定)	3	3	6

E 671	※都	市	計	画	B	演	習	Ⅱ	演	習	(未定)	3	3	6			
E 680	都	市	計	画	C	演	習	Ⅰ	〃	佐	藤	3	3	6			
E 681	都	市	計	画	C	演	習	Ⅱ	〃	佐	藤	3	3	6			
E 690	都	市	計	画	D	演	習	Ⅰ	〃	戸	沼	3	3	6			
E 691	都	市	計	画	D	演	習	Ⅱ	〃	戸	沼	3	3	6			
E 700	建	築	構	造	A	演	習	Ⅰ	〃	風	間	3	3	6			
E 701	建	築	構	造	A	演	習	Ⅱ	〃	風	間	3	3	6			
E 710	建	築	構	造	B	演	習	Ⅰ	〃	松	井, 西	3	3	6			
E 711	建	築	構	造	B	演	習	Ⅱ	〃	松	井, 西	3	3	6			
E 720	建	築	構	造	C	演	習	Ⅰ	〃	谷		3	3	6			
E 721	建	築	構	造	C	演	習	Ⅱ	〃	谷		3	3	6			
E 730	建	築	構	造	D	演	習	Ⅰ	〃	田	中	3	3	6			
E 731	建	築	構	造	D	演	習	Ⅱ	〃	田	中	3	3	6			
E 740	建	築	構	造	F	演	習	Ⅰ	〃	古	藤	3	3	6			
E 741	建	築	構	造	F	演	習	Ⅱ	〃	古	藤	3	3	6			
E 750	建	築	構	造	G	演	習	Ⅰ	〃	桜	井	3	3	6			
E 751	建	築	構	造	G	演	習	Ⅱ	〃	桜	井	3	3	6			
E 760	建	築	設	備		演	習	Ⅰ	〃	井	上	3	3	6			
E 761	建	築	設	備		演	習	Ⅱ	〃	井	上	3	3	6			
E 770	建	築	環	境		演	習	Ⅰ	〃	木	村	3	3	6			
E 771	建	築	環	境		演	習	Ⅱ	〃	木	村	3	3	6			
E 780	都	市	環	境		演	習	Ⅰ	〃	尾	島	3	3	6			
E 781	都	市	環	境		演	習	Ⅱ	〃	尾	島	3	3	6			
E 790	建	築	材	料	及	施	工	A	演	習	Ⅰ	〃	田	村	3	3	6
E 791	建	築	材	料	及	施	工	A	演	習	Ⅱ	〃	田	村	3	3	6
E 800	建	築	材	料	及	施	工	B	演	習	Ⅰ	〃	神	山	3	3	6
E 801	建	築	材	料	及	施	工	B	演	習	Ⅱ	〃	神	山	3	3	6
E 810	建	築	材	料	及	施	工	C	演	習	Ⅰ	〃	嘉	納	3	3	6
E 811	建	築	材	料	及	施	工	C	演	習	Ⅱ	〃	嘉	納	3	3	6
E 820	建	築	史	調	査	・	実	習	実	習	渡	6	6	4			
E 830	特	定	課	題	演	習	・	実	演	験	・	中		4			

建築学専門分野履修方法

1. 指導教授が担当する演習科目は必ず履修しなければならない。

但し、自己の研究に相応しい演習を行うため、指導教授及び科目担当教授の許可を受けて他の教授が担当する演習科目を履修した場合は、その演習科目をもってこれに代えることができる。

2. 演習科目は13単位以上履修してもその分は修了必要単位数に算入しない。

B 土木工学専門分野

土木工学は直接・間接に人間の生活基盤をなす諸施設を造り、かつそれを維持向上するという使命を担っている学問分野である。したがってこの分野の技術者には高い次元の工学的判断力が特に要求されることになるので、高度の技術とすぐれた人間性とが調和することが望まれている。

ここではそれにふさわしい人材の養成を目指した研究・教育を行っている。この分野は大別して構造工学、都市計画、土質工学、水工学および土木数理解析の各部門に分けられる。それぞれが相互にかなり異質の内容を含むところが土木分野の特徴のひとつであるが、それだけに学生は自分の志望と適性をよく考えて、部門ならびにその中のどの研究を選ぶかを慎重に決める必要がある。

(1) 研究指導

部 門	番 号	研 究 指 導	担 当 教 員
構 造 工 学 部 門	F 010	構 造 設 計 研 究	村 上
	F 012	構 造 解 析 研 究	平 嶋
	F 014	コ ン ク リ ー ト 工 学 研 究	関
	F 011	構 造 設 計 研 究	堀 井
	F 013	構 造 解 析 研 究	宮 原
都 市 計 画 部 門	F 020	都 市 計 画 研 究	中 川
土 質 工 学 部 門	F 030	土 質 力 学 研 究	赤 木
	F 031	土 質 施 工 学 研 究	森
水 工 学 部 門	F 040	水 工 学 研 究	吉 川
	F 041	水 工 学 研 究	鮭 川
	F 042	水 工 学 研 究	遠 藤
土 木 数 理 解 析 部 門	F 050	土 木 数 理 解 析 研 究	依 田

(2) 授業科目

番 号	学 科 目 名	区 別	担 当 教 員	毎 週 授 業 時 間 数		単 位
				前 期	後 期	
F 210	地 中 構 造 特 論	講 義	村 上	2	2	4
F 220	構 造 解 析 特 論	〃	平 嶋	2	2	4
F 230	コ ン ク リ ー ト 工 学 特 論	〃	関	2	2	4
F 240	構 造 設 計 特 論	〃	堀 井	2	2	4
F 250	構 造 力 学 特 論	〃	宮 原	2	2	4
F 260	応 用 弾 性 学	〃	村 上, 宮 原	2	2	4
F 270	都 市 計 画 特 論 A	〃	中 川, 鈴木	2	2	4
F 280	土 質 力 学 特 論	〃	赤 木	2	2	4
F 290	土 質 施 工 学 特 論	〃	森	2	2	4
F 300	河 川 工 学 特 論	〃	吉 川	2	2	4

F 310	※△ 海岸工学特論	講義	鮫川	2	0	2
F 320	水質汚濁制御工学特論	〃	遠藤	2	2	4
F 330	水理学特論	〃	鮫川	2	2	4
F 340	土木数理解析特論	〃	依田	2	2	4
F 610	△構造設計A演習(a)	演習	村上	3	3	6
F 611	※△構造設計A演習(b)	〃	村上	3	3	6
F 620	△構造解析A演習(a)	〃	平嶋	3	3	6
F 621	※△構造解析A演習(b)	〃	平嶋	3	3	6
F 630	※△コンクリート工学演習(a)	〃	関	3	3	6
F 631	△コンクリート工学演習(b)	〃	関	3	3	6
F 640	△構造設計B演習(a)	〃	堀井	3	3	6
F 641	※△構造設計B演習(b)	〃	堀井	3	3	6
F 650	△構造解析B演習(a)	〃	宮原	3	3	6
F 651	※△構造解析B演習(b)	〃	宮原	3	3	6
F 660	△都市計画A演習(a)	〃	中川, 鈴木	3	3	6
F 661	※△都市計画A演習(b)	〃	中川, 鈴木	3	3	6
F 670	△土質力学演習(a)	〃	赤木	3	3	6
F 671	※△土質力学演習(b)	〃	赤木	3	3	6
F 680	△土質施工学演習(a)	〃	森	3	3	6
F 681	※△土質施工学演習(b)	〃	森	3	3	6
F 690	△水工学A演習(a)	〃	吉川	3	3	6
F 691	※△水工学A演習(b)	〃	吉川	3	3	6
F 700	△水工学B演習(a)	〃	鮫川	3	3	6
F 701	※△水工学B演習(b)	〃	鮫川	3	3	6
F 710	△水工学C演習(a)	〃	遠藤	3	3	6
F 711	※△水工学C演習(b)	〃	遠藤	3	3	6
F 720	△土木数理解析演習(a)	〃	依田	3	3	6
F 721	※△土木数理解析演習(b)	〃	依田	3	3	6
F 730	都市計画A特別実習	実習	中川	6	6	4
F 740	特定課題演習・実験	演習・実験				4

土木工学専門分野履修方法

1. 指導教授が担当する演習科目は必ず履修しなければならない。
2. 演習科目は13単位以上履修してもその分は修了必要単位数に算入しない。
3. 指導教授以外の担当教員による演習科目を選択する場合は、指導教授と選択する演習の担当教員の承認を必要とする。

資源及材料工学専攻

A 資源工学専門分野

資源工学分野の目的とするところは、近代産業の成立におよそ不可欠な原材料資源、エネルギー資源等の自然界における存在状況の把握、その開発および有効利用、資源の開発に関連する作業の安全および公害の防止等広範囲の学問、技術に関する研究をおこなうところにある。なお当分野において必要とする外国語の主なもの、英、独、仏、露などである。

(1) 研究指導

部 門	番 号	研 究 指 導	担 当 教 員
資 源 科 学 部 門	G 010	資 源 科 学 研 究	今 井 大 塚 大 翰 子
	G 011	資 源 科 学 研 究	
	G 012	資 源 科 学 研 究	
探 査 開 発 工 学 部 門	G 013	資 源 科 学 研 究	堤 橋 本 野 口 岩 崎
	G 021	応 用 力 学 研 究	
	G 022	探 査 工 学 研 究	
原 料 工 学 部 門	G 051	開 発 ・ 環 境 工 学 研 究	(未定)
	G 030	原 料 工 学 研 究	
	G 031	原 料 工 学 研 究	
石 油 工 学 部 門	G 032	原 料 工 学 研 究	原 田 中 村
	G 040	石 油 工 学 研 究	
安 全 工 学 部 門	G 052	安 全 工 学 研 究	山 崎(豊) 名 古 屋
	G 060	地 層 学 研 究	
地 質 学 部 門	G 061	構 造 地 質 学 研 究	山 崎(純) 坂 野
	G 062	古 生 物 学 研 究	

(2) 授業科目

番 号	学 科 目 名	区 別	担 当 教 員	毎 週 授 業 時 間 数		単 位
				前 期	後 期	
G 210	岩 石 鉱 床 成 因 論	講 義	今 井	2	0	2
G 220	資 源 地 質 学	〃	吉 川	2	0	2
G 230	堆 積 岩 特 論	〃	山 崎(純)	0	2	2
G 240	層 位 学	〃	山 崎(純)	2	0	2
G 250	実 験 物 学	〃	大 塚	0	2	2
G 260	金 属 鉱 床 学 特 論	〃	大 翰 子	2	0	2
G 270	非 金 属 鉱 物 学 特 論	〃	堤 橋 本	0	2	2
G 280	無 機 結 晶 化 学 特 論	〃	宇 田 川	0	2	2
G 290	探 査 工 学 特 論	〃	龍 神	0	2	2
G 310	△ 坑 内 通 工 学 特 論	〃	橋 本	0	2	2
G 320	岩 盤 工 学 特 論	〃	菊 地	2	0	2

G 330	※△岩	石	レ	オイ	ロ	ジ	一	講	橋	本	0	2	2
G 340	△資	源	リ	ク	ク	ン	グ	義	原	田	2	0	2
G 350	※△資	選	サ	イ	ク	ン	論	〃	原	原	2	0	2
G 360	※△資	選	炭	学	料	工	学	〃	今	泉	2	0	2
G 370	選	鈦	製	練	工	場	画	〃	後	藤	0	2	2
G 380	機	器	分	析	工	特	論	〃	中	村	0	2	2
G 390	油	層	工	工	工	特	学	〃	山	崎(豊)	0	2	2
G 400	石	油	探	査	開	発	術	〃	松	田(義)	2	0	2
G 410	石	油	工	業	化	学	論	〃	森	田(義)	2	0	2
G 420	※△粉	油	塵	工	工	学	学	〃	岩	崎	0	2	2
G 430	※△防	災	環	境	工	学	学	〃	名	古屋	2	0	2
G 440	△開	発	環	境	工	学	学	〃	岩	崎	2	0	2
G 450	△開	発	環	境	工	学	学	〃	松	坂	2	0	2
G 460	△開	発	環	境	工	学	学	〃	坂	野	0	2	2
G 470	△古	生	物	学	学	特	論	〃	平	野	2	0	2
G 480	△古	生	物	学	学	特	論	〃	野	口	2	0	2
G 490	△古	生	物	学	学	特	論	〃	野	井	2	0	2
G 610	△資	源	科	学	A	演	演	習	今	井	3	3	6
G 611	※△資	源	科	学	A	演	演	習	今	井	3	3	6
G 620	※△資	源	科	学	C	演	演	習	大	塚	3	3	6
G 621	※△資	源	科	学	C	演	演	習	大	塚	3	3	6
G 630	※△資	源	科	学	D	演	演	習	大	鞠	3	3	6
G 631	※△資	源	科	学	D	演	演	習	大	鞠	3	3	6
G 640	※△資	源	科	学	E	演	演	習	堤	堤	3	3	6
G 641	※△資	源	科	学	E	演	演	習	堤	堤	3	3	6
G 660	△△	応	用	力	学	B	演	演	橋	本	3	3	6
G 661	△△	応	用	力	学	B	演	演	橋	本	3	3	6
G 670	△探	査	工	学	B	演	演	習	野	口	3	3	6
G 671	△探	査	工	学	B	演	演	習	野	口	3	3	6
G 680	△原	料	工	学	A	演	演	習	(未	定)	3	3	6
G 681	△原	料	工	学	A	演	演	習	(未	定)	3	3	6
G 690	△原	料	工	学	B	演	演	習	原	田	3	3	6
G 691	※△原	料	工	学	B	演	演	習	原	田	3	3	6
G 700	△原	料	工	学	C	演	演	習	中	村	3	3	6
G 701	※△原	料	工	学	C	演	演	習	中	村	3	3	6
G 710	△石	油	工	学	学	演	演	習	山	崎(豊)	3	3	6
G 711	※△石	油	工	学	学	演	演	習	山	崎(豊)	3	3	6
G 730	△△	安	全	工	学	学	演	演	名	古屋	3	3	6
G 731	※△安	全	工	学	学	演	演	習	名	古屋	3	3	6
G 740	△開	発	環	境	工	学	演	演	岩	崎	3	3	6
G 741	※△開	発	環	境	工	学	演	演	岩	崎	3	3	6
G 750	△地	層	学	学	学	演	演	習	山	崎(純)	3	3	6
G 751	※△地	層	学	学	学	演	演	習	山	崎(純)	3	3	6
G 760	△構	造	地	質	学	学	演	演	坂	野	3	3	6
G 761	※△構	造	地	質	学	学	演	演	坂	野	3	3	6
G 770	△古	生	物	学	学	演	演	習	平	野	3	3	6
G 771	※△古	生	物	学	学	演	演	習	平	野	3	3	6
G 780	特	定	課	題	演	習	・	実	験	演	習	・	実
													験

資源工学専門分野履修方法

1. 指導教授が担当する演習科目は必ず履修しなければならない。
2. 演習科目は13単位以上履修してもその分は修了必要単位数に算入しない。

B 材料工学専門分野

材料工学分野の研究指導は、7部門に分かれている。各部門とも実験研究を主としているので、学問に対する謙虚な態度と、誠実な努力とが強く要望される。

(1) 研究指導

部 門	番 号	研 究 指 導	担 当 教 員
金 属 製 錬 学 部 門	H 010	非鉄金属製錬学研究	不 破 草 川
	H 011	鉄鋼製錬学研究	
材 料 化 学 部 門	H 020	金属電気化学研究	藤 瀬 加 藤
	H 021	高温材料化学研究	
金 属 材 料 学 部 門	H 030	鉄鋼材料学研究	南 雲 中 井 佐 藤
	H 031	耐食材料学研究	
	H 032	結晶構造研究	
金 属 加 工 組 織 学 部 門	H 040	金属加工組織学研究	(未定)
材 料 表 面 工 学 部 門	H 051	材料表面工学研究	上 田 堤 中 江
	H 060	鑄造工学研究	
	H 061	凝固工学研究	
素 形 材 工 学 部 門	H 070	粉体金属加工学研究	渡 辺 大 坂
	H 052	薄膜材料学研究	
機 能 性 材 料 学 部 門	H 080	セラミック材料学研究	一ノ瀬 宇 田
	H 081	電子材料学研究	

(2) 授業科目

番 号	学 科 目 名	区 別	担 当 教 員	毎 週 授 業 時 間 数		単 位
				前 期	後 期	
H 210	非鉄製錬学特論	講 義	不 破	2	0	2
H 220	鉄鋼製錬学特論A	〃	草 川	2	0	2
H 230	鉄鋼製錬学特論B	〃	関 根	0	2	2
H 240	金属電気化学特論	〃	藤 瀬	2	0	2
H 250	高温材料化学特論	〃	加 藤	0	2	2
H 260	鉄鋼材料学特論	〃	南 雲	2	0	2
H 270	腐食防食学特論	〃	中 井	0	2	2
H 280	※非鉄金属材料学特論	〃	(未定)	2	0	2
H 310	材料表面工学特論	〃	上 田	2	0	2
H 320	電子線材料学特論	〃	大 坂	0	2	2
H 330	素形材工学特論	〃	堤	0	2	2
H 331	凝固工学特論	〃	中 江	2	0	2
H 340	粉末冶金学特論	〃	渡 辺	2	0	2
H 350	機能性材料学特論	〃	一ノ瀬	2	0	2

H 360	結晶構造特論	講義	佐藤	0	2	2
H 370	電子材料学特論	//	宇田	2	0	2
H 610	非鉄鉄製錬学演習A	演習	不破	3	3	6
H 611	非鉄鉄製錬学演習B	//	草川	3	3	6
H 620	鉄鋼製錬学演習A	//	草川	3	3	6
H 621	鉄鋼製錬学演習B	//	瀬藤	3	3	6
H 630	金属電気化学演習A	//	藤瀬	3	3	6
H 631	金属電気化学演習B	//	藤瀬	3	3	6
H 640	高温材料化学演習A	//	加藤	3	3	6
H 641	高温材料化学演習B	//	加藤	3	3	6
H 650	鉄鋼材料化学演習A	//	南雲	3	3	6
H 651	鉄鋼材料化学演習B	//	南雲	3	3	6
H 660	耐食材料学演習A	//	中井	3	3	6
H 661	耐食材料学演習B	//	中井	3	3	6
H 670	結晶構造演習A	//	佐藤	3	3	6
H 671	結晶構造演習B	//	佐藤	3	3	6
H 680	金属加工組学演習A	//	(未定)	3	3	6
H 681	金属加工組学演習B	//	(未定)	3	3	6
H 710	材料表面工学演習A	//	上田	3	3	6
H 711	材料表面工学演習B	//	上田	3	3	6
H 720	薄膜材料学演習A	//	大坂	3	3	6
H 721	薄膜材料学演習B	//	大坂	3	3	6
H 730	鑄造工学演習A	//	堤	3	3	6
H 731	鑄造工学演習B	//	堤	3	3	6
H 740	凝固工学演習A	//	中江	3	3	6
H 741	凝固工学演習B	//	中江	3	3	6
H 750	粉体金属加工学演習A	//	渡辺	3	3	6
H 751	粉体金属加工学演習B	//	渡辺	3	3	6
H 760	機能性材料学演習A	//	一ノ瀬	3	3	6
H 761	機能性材料学演習B	//	一ノ瀬	3	3	6
H 780	電子材料学演習A	//	宇田	3	3	6
H 781	電子材料学演習B	//	宇田	3	3	6
H 770	特定課題演習・実験	演習・実験				4

材料工学専門分野履修方法

1. 指導教授が担当する演習科目は必ず履修しなければならない。
2. 演習科目は13単位以上履修してもその分は修了必要単位数に算入しない。

応用化学専攻

A 応用化学専門分野

応用化学分野は学部教育を基礎として、さらに細かい専門分野の高度な教育を行い、研究能力と研究指導能力を涵養させる。

応用化学分野は無機化学、高分子化学、燃料化学、応用生物化学、工業物理化学、化学工学、有機合成化学、反応有機化学、物理化学の9つの部門に分れており、学生はそれぞれの部門に設定されている研究科目を選定して講義、演習、実験の科目を受講し、さらに教員の指導のもとに研究論文の作成を行う。

各部門内の講義は必ず履習しなければならない。また関連する分野の講義も受講すること

とが望ましい。

(1) 研究指導

部 門	番 号	研 究 指 導	担 当 教 員
無 機 化 学 部 門	J 010	無 機 材 料 化 学 研 究	加 藤
	J 011	無 機 合 成 化 学 研 究	
高 分 子 化 学 部 門	J 020	高 分 子 化 学 研 究	土 田
	J 021	高 分 子 化 学 研 究	
燃 料 化 学 部 門	J 030	燃 料 化 学 研 究	西 出
	J 031	燃 料 化 学 研 究	
応 用 生 物 化 学 部 門	J 040	応 用 生 物 化 学 研 究	森 田
	J 041	応 用 生 物 化 学 研 究	
工 業 物 理 化 学 部 門	J 050	電 子 材 料 化 学 研 究	菊 地
	J 060	化 学 工 学 研 究	
化 学 工 学 部 門	J 061	化 学 工 学 研 究	平 田
	J 062	化 学 工 学 研 究	
	J 063	化 学 工 学 研 究	
	J 070	合 成 有 機 化 学 研 究	
有 機 合 成 化 学 部 門	J 080	反 応 有 機 化 学 研 究	佐 藤
	J 081	精 密 化 学 研 究	
	J 090	量 子 化 学 研 究	
物 理 化 学 部 門			清 宮

(2) 授業科目

番 号	学 科 目 名	区 別	担 当 教 員	毎 週 授 業 時 間 数		単 位
				前 期	後 期	
J 210	無 機 化 学 特 論	講 義	黒 田	0	2	2
J 220	無 機 材 料 化 学 特 論	〃	加 藤	2	0	2
J 230	応 用 鉍 物 化 学 特 論	〃	加 藤	0	2	2
J 240	高 分 子 物 性	〃	西 出	2	0	2
J 250	高 分 子 合 成 化 学	〃	土 田	2	0	2
J 260	高 分 子 材 料 学	〃	西 出	0	2	2
J 270	生 体 高 分 子	〃	土 田	0	2	2
J 280	燃 料 化 学	〃	森 田	2	2	4
J 290	触 媒 化 学 特 論	〃	菊 地	2	0	2
J 300	有 機 接 触 反 応 特 論	〃	菊 地	0	2	2
J 310	生 物 化 学 特 論 I	〃	鈴 木	2	0	2
J 311	生 物 化 学 特 論 II	〃	宇 佐 美	0	2	2
J 320	微 生 物 工 学 特 論	〃	宇 佐 美	0	2	2

J 330	食料工学特論	講義	鈴木	2	0	2
J 340	工業物理化学特論	〃	逢坂	2	0	2
J 350	電気化学特論	〃	逢坂	0	2	2
J 360	成分分離工学特論	〃	城塚	2	0	2
J 370	△反応工学特論	〃	城塚	0	2	2
J 380	※△システム工学特論	〃	城塚	0	2	2
J 390	プロセス設計特論	〃	豊倉	2	0	2
J 400	生体工学特論	〃	酒井	0	2	2
J 410	輸送現象特論	〃	平田	2	0	2
J 420	プロセスダイナミクス	〃	村上	2	0	2
J 430	化工研究手法特論A	〃	未定	0	2	2
J 431	化工研究手法特論B	〃	古崎	0	2	2
J 440	プロセス開発特論	〃	小久保	0	2	2
J 450	有機合成化学特論	〃	佐藤	2	0	2
J 460	有機反応特論	〃	清水	0	2	2
J 470	有機反応速度論	〃	長谷川	2	0	2
J 480	分子軌道論	〃	宮崎	2	0	2
J 610	※△無機材料化学演習	演習	加藤, 黒田	3	3	6
J 611	△応用鉱物化学演習	〃	加藤, 黒田	3	3	6
J 620	△高分子物性演習	〃	西出	3	3	6
J 621	※△高分子材料演習	〃	西出	3	3	6
J 630	△高分子合成化学演習	〃	土田	3	3	6
J 631	※△生体高分子演習	〃	土田	3	3	6
J 640	燃料化学演習	〃	森田	3	3	6
J 650	触媒化学演習	〃	菊地	3	3	6
J 660	△生体物質化学演習	〃	鈴木	3	3	6
J 661	※△応用生物化学特別演習A	〃	鈴木	3	3	6
J 670	△生体反応化学演習	〃	宇佐美	3	3	6
J 671	※△応用生物化学特別演習B	〃	宇佐美	3	3	6
J 680	△工業物理化学演習A	〃	逢坂	3	3	6
J 681	※△工業物理化学演習B	〃	逢坂	3	3	6
J 690	△化学工学特別演習A	〃	城塚	3	3	6
J 691	※△反応工学特別演習	〃	城塚	3	3	6
J 700	△化学工学特別演習B	〃	平田	3	3	6
J 701	※△輸送現象特別演習	〃	平田	3	3	6
J 710	△化学工学特別演習C	〃	豊倉	3	3	6
J 711	※△プロセス設計特別演習	〃	豊倉	3	3	6
J 720	△化学工学特別演習D	〃	酒井	3	3	6
J 721	※△生体化学工学特別演習	〃	酒井	3	3	6

J 730	△有機合成化学特別演習	演習	佐藤	3	3	6
J 731	※△有機反応化学特別演習	〃	佐藤	3	3	6
J 740	△反応有機化学特別演習	〃	長谷川	3	3	6
J 741	※△有機光化学反応演習	〃	長谷川	3	3	6
J 750	△量子化学特別演習B	〃	宮崎	3	3	6
J 751	※△有機量子化学演習	〃	宮崎	3	3	6
J 760	※△有機金属化学特別演習	〃	清水	3	3	6
J 761	△有機合成計画法特別演習	〃	清水	3	3	6
J 770	応用化学特別実験	実験	全教員	3	3	2
J 780	特定課題演習・実験	演習・実験				4

応用化学専門分野履修方法

1. 指導教授が担当する演習科目は必ず履修しなければならない。
2. 演習科目は13単位以上履修してもその分は修了必要単位数に算入しない。

B 化学専門分野

化学分野においては、学部で履修した知識を基とし、原子分子の立場から、さらに高度の学習と研究を行ない優れた研究能力を身につける事を目的とする。

化学分野は有機化学、量子化学、構造化学、無機錯体化学の4部門に分れている。

学生は指導教授が担当する講義・演習科目は必ず履修しなければならない。また、演習科目は13単位以上履修してもその分は修了必要単位数に算入しない。

(1) 研究指導

部 門	番 号	研 究 指 導	担 当 教 員
有 機 化 学 部 門	K 010	有 機 化 学 研 究	高 宮
	K 011	有 機 化 学 研 究	多 田
	K 012	有 機 化 学 研 究	新 田
量 子 化 学 部 門	K 020	量 子 化 学 研 究	井 口
	K 021	量 子 化 学 研 究	伊藤(礼)
構 造 化 学 部 門	K 030	構 造 化 学 研 究	高 橋
	K 031	構 造 化 学 研 究	伊藤(紘)
無 機 錯 体 化 学 部 門	K 040	無 機 錯 体 化 学 研 究	松 本

(2) 授業科目

番 号	学 科 目 名	区 別	担 当 教 員	毎 週 授 業 時 間 数		単 位
				前 期	後 期	
K 210	※△有機化学特論A	講義	多田	2	0	2
K 220	△有機化学特論B	〃	新田	0	2	2

K 230	※△有機分析化学特論	〃	高 官	2	0	2
K 240	量 子 化 学 特 論 A	〃	伊藤(礼)	2	0	2
K 241	量 子 化 学 特 論 B	〃	井 口	0	2	2
K 250	※△構造化学特論A	〃	高 橋	2	0	2
K 251	△構造化学特論B	〃	伊藤(紘)	0	2	2
K 260	△無機錯体化学特論	〃	松 本	2	0	2
K 610	△有機化学特別演習B	演 習	高 官	3	3	6
K 611	※△有機触媒反応演習	〃	高 官	3	3	6
K 620	△有機化学特別演習C	〃	多 田	3	3	6
K 621	△有機化学特別演習D	〃	新 田	3	3	6
K 630	※△有機化学理論演習	〃	多 田	3	3	6
K 631	※△構造有機化学演習	〃	新 田	3	3	6
K 640	△量子化学特別演習A	〃	井 口	3	3	6
K 641	※△固体量子化学演習	〃	井 口	3	3	6
K 650	△量子化学特別演習C	〃	伊藤(礼)	3	3	6
K 651	※△水素結合論演習	〃	伊藤(礼)	3	3	6
K 660	△構造化学演習	〃	高 橋	3	3	6
K 661	※△分子分光學演習A	〃	高 橋	3	3	6
K 670	△生体高分子構造化学演習	〃	伊藤(紘)	3	3	6
K 671	※△分子分光學演習B	〃	伊藤(紘)	3	3	6
K 680	※△無機錯体化学演習A	〃	松 本	3	3	6
K 681	△無機錯体化学演習B	〃	松 本	3	3	6
K 690	化 学 特 別 実 験	実 験	全教員	3	3	2
K 700	特 定 課 題 演 習・実 験	演 習・ 実 験				4

化学専門分野履修方法

1. 指導教授が担当する演習科目は必ず履修しなければならない。
2. 演習科目は13単位以上履修してもその分は修了必要単位数に算入しない。

物理学及応用物理学専攻

物理学及応用物理学専攻では、現代物理学の重要な課題とその工学的応用の研究を行う。研究分野は、数理物理学、素粒子物理学、原子核物理学、宇宙線物理学、天体物理学、原子核工学、物性物理学、高分子物理学、生物物理学、応用結晶学、光学、計測制御工学など多岐に亘っているほか、学際的研究も行っている。当専攻を希望するものは、学部の物理学科、応用物理学科卒業程度の学識を身につけていることが必要である。

(1) 研究指導

部 門	番 号	研 究 指 導	担 当 教 員
数 理 物 理 学 部 門	L 010	数 理 物 理 学 研 究	梶 野 飯 場
	L 011	数 理 物 理 学 研 究	
理 論 核 物 理 学 部 門	L 020	素 粒 子 理 論 研 究	大 並 山 田
	L 021	素 粒 子 理 論 研 究	
	L 022	理 論 核 物 理 学 研 究	
	L 030	实 験 核 物 理 学 研 究	
实 験 核 物 理 学 部 門	L 031	实 験 核 物 理 学 研 究	藤 本 長 谷 川
	L 040	原 子 核 工 学 研 究	
原 子 核 工 学 部 門	L 041	原 子 核 工 学 研 究	道 家 黒 沢 菊 池
	L 042	原 子 核 工 学 研 究	
	L 050	核 物 性 · 粒 子 線 物 性 研 究	
物 性 理 論 部 門	L 051	統 計 物 理 学 研 究	大 加 相 澤
	L 052	統 計 物 理 学 研 究	
	L 053	理 論 固 体 物 理 研 究	
物 性 物 理 学 部 門	L 060	粒 子 線 物 性 研 究	木 名 瀬 市 ノ 川
	L 061	電 波 物 性 研 究	
物 性 物 理 学 部 門	L 062	光 物 性 研 究	植 大 松 井
	L 063	磁 性 体 物 理 研 究	
生 物 物 理 学 部 門	L 070	理 論 生 物 物 理 学 研 究	近 木 鈴 渡 石 藤 浅 井 安 增 石 居 菊 山 平 井 島 野 並 木 (秀)
	L 071	实 験 生 物 物 理 学 研 究	
	L 072	統 計 物 理 学 · 理 論 生 物 物 理 学 研 究	
	L 073	分 子 生 物 物 理 学 研 究	
	L 074	発 生 生 物 物 理 学 研 究	
	L 075	発 動 物 生 理 学 研 究	
	L 076	内 分 泌 学 研 究	
	L 077	遺 伝 学 研 究	
	L 078	植 物 生 理 学 研 究	
	L 079	生 態 学 研 究	
L 07A	生 理 生 態 学 研 究		
L 07B	生 体 制 御 研 究		
高 分 子 物 理 学 部 門	L 080	巨 大 分 子 物 性 研 究	千 葉 浜
	L 081	放 射 線 分 子 物 性 研 究	
応 用 結 晶 学 部 門	L 090	結 晶 物 理 研 究	小 林 (謙) 上 江 洲
	L 091	結 晶 物 理 研 究	
光 学 部 門	L 100	応 用 光 学 研 究	大 頭 小 松
	L 101	光 物 理 研 究	
計 測 制 御 工 学 部 門	L 110	情 報 工 学 研 究	大 照 中 村 小 林 (寛) 久 村
	L 111	情 報 変 換 工 学 研 究	
	L 112	電 子 計 測 工 学 研 究	
	L 113	制 御 工 学 研 究	
实 験 天 体 物 理 学 部 門	L 120	实 験 天 体 物 理 学 研 究	大 師 堂

(2) 授業科目

番号	学 科 目 名	区 別	担 当 教 員	毎週授業時間数		単位
				前期	後期	
L 210	※△数 理 物 理 学 特 論 A	講 義	飯 野	2	0	2
L 211	△数 理 物 理 学 特 論 B	〃	堤	0	4	4
L 220	△量 子 力 学 特 論	〃	並木, 大場	2	2	4
L 230	※△素 粒 子 物 理 学 A	〃	並木, 大場	2	2	4
L 231	素 粒 子 物 理 学 B	〃	二 宮	2	2	4
L 240	△原 子 核 物 理 学 A	〃	山 田	2	2	4
L 241	※△原 子 核 物 理 学 B	〃	藤本, 長谷川	2	2	4
L 250	※△天 体 物 理 学 特 論 A	〃	大師堂	2	0	2
L 251	△天 体 物 理 学 特 論 B	〃	大師堂	2	0	2
L 260	放 射 線 物 理 学	〃	道 家	2	0	2
L 270	原 子 核 工 学 特 論	〃	道 家	0	2	2
L 280	保 健 物 理 学	〃	黒 沢	2	2	4
L 290	統 計 力 学 特 論	〃	加藤, 清水	2	2	4
L 300	プラズマ物理学特論I(学部合併)	〃	加 藤	2	0	2
L 301	プラズマ物理学特論II	〃	加 藤	0	2	2
L 310	△物 性 物 理 特 論 A	〃	植 松	0	2	2
L 311	△物 性 物 理 特 論 B	〃	木名瀬	2	0	2
L 312	※△物 性 物 理 特 論 C	〃	大 井	2	0	2
L 313	※△物 性 物 理 特 論 D	〃	大 槻	0	2	2
L 320	△結 晶 物 理 学 特 論 A	〃	市ノ川	2	0	2
L 321	△結 晶 物 理 学 特 論 B	〃	星 埜	0	2	2
L 330	△結 晶 物 理 学 特 論 C	〃	小林(謙), 上江洲	2	0	2
L 340	相 対 性 理 論 特 論	〃	江 沢	0	2	2
L 350	※△生 物 物 理 A(学部合併)	〃	鈴 木	2	0	2
L 351	※△生 物 物 理 B(学部合併)	〃	石 波	0	2	2
L 352	△生 物 物 理 C(学部合併)	〃	斎 藤	2	0	2
L 353	△生 物 物 理 D(学部合併)	〃	浅 井	0	2	2
L 360	内 分 泌 学 特 論 A	〃	菊 山	0	2	2
L 361	内 分 泌 学 特 論 B	〃	石 居	2	0	2
L 370	生 理 学 特 論	〃	安 増	2	0	2
L 380	遺 伝 学 特 論	〃	平	0	2	2
L 390	植 物 生 理 学 特 論	〃	桜 井	2	0	2
L 400	生 態 学 特 論 A	〃	大 鳥	2	0	2
L 411	生 態 学 特 論 B	〃	伊 野	0	2	2
L 412	細 胞 生 物 学 特 論	〃	並木(秀)	2	0	2
L 420	※△高 分 子 物 理 学 A	〃	千 葉	2	0	2
L 421	△高 分 子 物 理 学 B	〃	浜	2	2	2
L 430	※△高 分 子 物 性 特 論 A	〃	深 田	0	2	2
L 431	△高 分 子 物 性 特 論 B	〃	土 井	0	2	2

L 440	△応用光学特論	講義	大頭, 小松	2	2	4
L 450	※△応用結晶学特論	//	小林(謙), 上江洲	0	2	2
L 460	計測特論A	//	大照	2	0	2
L 461	計測特論B	//	中村	0	2	2
L 462	計測特論C	//	小林(寛), 町田	0	2	2
L 470	制御システム特論	//	久村	2	0	2
L 480	分子構造論(学部合併)	//	石黒	2	0	2
L 490	計測概論(学部合併)	//	大照, 中村	2	2	4
L 610	数理解物理学演習I	演習	堤	3	3	6
L 611	数理解物理学演習II	//	堤	3	3	6
L 620	応用関数方程式演習I	//	飯野	3	3	6
L 621	応用関数方程式演習II	//	飯野	3	3	6
L 630	※△素粒子理論演習A	//	並木	3	3	6
L 631	※△素粒子理論演習B	//	並木	3	3	6
L 640	△高エネルギー物理学演習A	//	並木	3	3	6
L 641	△高エネルギー物理学演習B	//	大場	3	3	6
L 650	△理論核物理学演習A	//	山田	3	3	6
L 651	※△理論核物理学演習B	//	山田	3	3	6
L 660	△実験核物理学演習A	//	藤本	3	3	6
L 661	△実験核物理学演習B	//	長谷川	3	3	6
L 670	※△宇宙線物理学演習A	//	藤本	3	3	6
L 671	※△宇宙線物理学演習B	//	長谷川	3	3	6
L 680	原子核工学演習A	//	道家	3	3	6
L 681	原子核工学演習B	//	黒沢	3	3	6
L 682	原子核工学演習C	//	菊池	3	3	6
L 690	△核物性演習	//	大槻	3	3	6
L 691	※△X線・粒子線・放射線演習	//	大槻	3	3	6
L 700	統計力学演習	//	加藤	3	3	6
L 701	プラズマ物理演習	//	加藤	3	3	6
L 710	△電子線物性演習	//	市ノ川	3	3	6
L 711	※△イオンビーム物性演習	//	市ノ川	3	3	6
L 720	磁気共鳴演習	//	植松, 近	3	3	6
L 721	磁気共鳴演習	//	植松	3	3	6
L 730	△光物性演習A	//	大井	3	3	6
L 731	※△光物性演習B	//	大井	3	3	6
L 740	△理論固体物理演習A	//	木名瀬	3	3	6
L 741	※△理論固体物理演習B	//	木名瀬	3	3	6
L 750	結晶化学演習	//	近	3	3	6
L 760	△量子生化学演習A	//	鈴木	0	3	3
L 761	※△量子生化学演習B	//	鈴木	3	0	3
L 762	△光生物学演習A	//	鈴木	3	0	3
L 763	※△光生物学演習B	//	鈴木	0	3	3
L 770	※△実験生物物理学演習A	//	石渡	3	3	6
L 771	△実験生物物理学演習B	//	石渡	3	3	6

L 780	△統計物理学演習A	演習	齋藤	0	3	3
L 781	※△統計物理学演習B	〃	齋藤	3	0	3
L 782	△理論生物学演習A	〃	齋藤	3	0	3
L 783	※△理論生物学演習B	〃	齋藤	0	3	3
L 785	※△統計物理学演習C	〃	相沢	3	0	3
L 786	△統計物理学演習D	〃	相沢	0	3	3
L 787	※△非線形・非平衡物理学演習A	〃	相沢	0	3	3
L 788	△非線形・非平衡物理学演習B	〃	相沢	3	0	3
L 790	△生体エネルギー論演習	〃	浅井	3	3	6
L 791	※△生体構造論演習	〃	浅井	3	3	6
L 800	△細胞機能調節機構論演習	〃	安増	3	3	6
L 801	※△形態形成機構論演習	〃	安増	3	3	6
L 810	△個体調節機構論演習A	〃	石居	3	3	6
L 811	※△個体調節機構論演習B	〃	石居	3	3	6
L 820	※△比較内分泌学演習A	〃	石居	3	3	6
L 821	△比較内分泌学演習B	〃	菊山	3	3	6
L 830	△遺伝子調節機構論演習	〃	平	3	3	6
L 831	※△解析遺伝学演習	〃	平	3	3	6
L 840	△光合成演習	〃	桜井	3	3	6
L 841	※△生体膜演習	〃	桜井	3	3	6
L 850	△個体群動態論演習A	〃	大島	3	3	6
L 851	※△個体群動態論演習B	〃	伊野	3	3	6
L 860	※△生態系機構論演習	〃	大島	3	3	6
L 870	△生理生態学演習	〃	伊野	3	3	6
L 871	△細胞生物学演習A	〃	並木(秀)	3	3	6
L 872	※△細胞生物学演習B	〃	並木(秀)	3	3	6
L 880	△巨大分子物性演習A	〃	千葉	3	3	6
L 881	※△巨大分子物性演習B	〃	千葉	3	3	6
L 890	△放射線分子物性演習A	〃	浜	3	3	6
L 891	※△放射線分子物性演習B	〃	浜	3	3	6
L 900	※△生理光学演習	〃	大頭	3	3	6
L 901	△応用光学演習	〃	大頭	3	3	6
L 910	△光情報学演習	〃	小松	3	3	6
L 911	※△光物理演習	〃	小松	3	3	6
L 920	△強誘電体物理演習	〃	小林(謙)	3	3	6
L 921	※△結晶光学演習	〃	小林(謙)	3	3	6
L 930	△結晶構造解析学演習	〃	上江洲	3	3	6
L 931	※△X線光学演習	〃	上江洲	3	3	6
L 940	△情報工学演習A	〃	大照	3	3	6
L 941	※△情報工学演習B	〃	大照	3	3	6
L 950	△情報変換物理演習	〃	中村	3	0	3
L 951	△情報変換材料演習	〃	中村	0	3	3
L 952	※△情報変換工学演習	〃	中村	3	0	3
L 953	※△情報変換特論演習	〃	中村	0	3	3

L 960	△電子材料工学演習	演習	小林(寛)	3	3	6
L 961	※△電子計測工学演習	〃	小林(寛)	3	3	6
L 970	※△システム解析演習	〃	久村	3	3	6
L 971	△制御理論演習	〃	久村	3	3	6
L 980	※△天体物理学演習A	〃	大師堂	3	3	6
L 981	△天体物理学演習B	〃	大師堂	3	3	6
L 990	特定課題演習・実験	演習・実演				4

物理学及応用物理学専攻履修方法

1. 指導教授が担当する演習科目は必ず履修しなければならない。
2. 演習科目は13単位以上履修してもその分は修了必要単位数に算入しない。

〔注意〕 学部合併の講義（生物物理A～D，分子構造論，計測概論，プラズマ物理学特論I）については既に学部で単位を取得した者に，大学院で重複して単位を与えることはできない。

数 学 専 攻

大学院の数学専攻の目的は，学部で得た数学の知識をもとにして，より深く数学を学び，ただ既成の数学の知識を吸収するだけでなく，新しい数学の分野を開拓したり，未解決の問題を解いたり，研究活動を行うことにある。

また修士課程修了後，社会に出る者は，学部卒業後，すぐ社会に出る者に較べて，数学の知識においてのみならず，数学に対する理解力，評価力，潜在的研究能力において，一段の進歩をとげて修了することが要求される。修士課程では講義もあるが，セミナーが中心であり，その準備は十分行われなければならない。

(1) 研究指導

部 門	番 号	研 究 指 導	担 当 教 員
数学基礎論および 情報科学部門	M 010	数 学 基 礎 論 研 究	広 瀬
	M 011	数 学 基 礎 論 研 究	福 山
	M 012	情 報 科 学 研 究	寛
代 数 学 部 門	M 020	代 数 幾 何 学 研 究	有 馬
	M 022	整 数 論 研 究	寺 田
	M 023	代 数 学 研 究	足 立
	M 024	代 数 学 研 究	日 野 原
	M 025	代 数 学 研 究	近 藤
	M 026	保 型 函 数 論 研 究	橋 本
	M 030	トポロジ - 研 究	野 口
幾 何 学 部 門	M 031	トポロジ - 研 究	伊 藤
	M 032	幾 何 学 研 究	鈴木(晋)
	M 033	微 分 多 様 体 研 究	小 島(順)

関数解析部門	M 021	代数解析学	研究	上野
	M 040	リ一群	研究	清水
	M 041	関数解析	研究	洲之内
	M 042	関数解析	研究	和田
	M 043	発展方程式	研究	宮寺
関数方程式部門	M 044	発展方程式	研究	石垣
	M 045	発展方程式	研究	(未定)
	M 050	多様体上の解析学	研究	郡
	M 051	偏微分方程式	研究	入江
	M 052	偏微分方程式	研究	垣田
	M 053	常微分方程式	研究	杉山
	M 054	非線形偏微分方程式	研究	小島(清)
	M 055	非線形偏微分方程式	研究	堤
	M 056	非線形偏微分方程式	研究	飯野
	M 057	非線形偏微分方程式	研究	山田
関数論部門	M 060	関数論	研究	(未定)
	確率統計部門	M 070	数理統計学	研究
計算数学部門	M 071	数理統計学	研究	鈴木(武)
	M 080	計算数学	研究	中島
	M 081	数値解析	研究	室谷

(2) 授業科目

番号	学 科 目 名	区 別	担 当 教 員	毎週授業時間数		単 位
				前期	後期	
M 210	数学基礎論特論	講義	福山	2	2	4
M 220	情報科学特論	〃	高橋, 島内	2	2	4
M 230	代数学特論	〃	日野原, 近藤	2	2	4
M 240	△代数解析学特論	〃	有馬	2	2	4
M 250	△整数論特論	〃	橋本	2	2	4
M 260	代数学幾何学特論	〃	藤田	2	2	4
M 270	トポロジ一特論	〃	野口, 福田	2	2	4
M 280	※△位相幾何学特論	〃	伊藤	2	2	4
M 290	△リ一群特論	〃	清水	2	2	4
M 300	△幾何学特論	〃	福田	2	2	4
M 310	幾何学特論	〃	鈴木(晋)	2	2	4
M 320	※△解析特論A	〃	入江	2	0	2
M 321	※△解析特論B	〃	宮寺, 和田	2	2	4
M 330	※△解析多様体特論	〃	郡	2	2	4
M 340	△偏微分方程式特論A	〃	小島(清), 山田	2	0	2
M 341	※△偏微分方程式特論B	〃	垣田, 小島(清)	0	2	2
M 350	常微分方程式特論	〃	杉山, 西本	2	2	4
M 360	※△応用解析特論	〃	洲之内, 石垣	2	2	4

M 370	※ 関	数	論	特	論	講 義	(未定)	2	2	4
M 380	△ 確	率	論	特	論	〃	青 木	2	2	4
M 390	※△ 数	理	統	計	学	特	草 間, 鈴木(武)	2	2	4
M 400		計	算	数	学	特	中 島	2	2	2
M 410		数	値	解	析	特	室 谷	2	0	2
M 420		計	画	数	学		五 百 井	2	2	4
M 430	※△ 微	分	多	様	体	論	小 島(順)	2	2	4
M 440		保	型	函	数	論	橋 本	2	2	4
M 445		非	可	換	解	析	上 野 平	0	2	2
M 452		統	計	的	漸	近	赤 野 平	2	2	2
M 460		情	報	科	学	特	寛 瀬	2	2	4
M 610		数	学	基	礎	論	広 瀬	3	3	6
M 611		数	学	基	礎	論	広 瀬	3	3	6
M 620		数	学	基	礎	論	福 山	3	3	6
M 621		数	学	基	礎	論	福 山	3	3	6
M 630		情	報	科	学	演	寛 瀬	3	3	6
M 631		情	報	科	学	演	寛 瀬	3	3	6
M 640		代	数	幾	何	学	有 馬	3	3	6
M 641		代	数	幾	何	学	有 馬	3	3	6
M 650		代	数	解	析	学	上 野	3	3	6
M 651		代	数	解	析	学	上 野	3	3	6
M 660		整	数	論	演	習	寺 田	3	3	6
M 661		整	数	論	演	習	寺 田	3	3	6
M 670		代	数	学	A	演	足 立	3	3	6
M 671		代	数	学	A	演	足 立	3	3	6
M 680		代	数	学	B	演	日 野 原	3	3	6
M 681		代	数	学	B	演	日 野 原	3	3	6
M 690		代	数	学	C	演	近 藤	3	3	6
M 691		代	数	学	C	演	近 藤	3	3	6
M 700		保	型	函	数	論	橋 本	3	3	6
M 701		保	型	函	数	論	橋 本	3	3	6
M 710		ト	ポ	ロ	シ	-A	野 口, 福田	3	3	6
M 711		ト	ポ	ロ	シ	-A	野 口, 福田	3	3	6
M 720		ト	ポ	ロ	シ	-B	伊 藤	3	3	6
M 721		ト	ポ	ロ	シ	-B	伊 藤	3	3	6
M 730		幾	何	学	演	習	鈴木(晋)	3	3	6
M 731		幾	何	学	演	習	鈴木(晋)	3	3	6
M 740		微	分	多	様	体	小 島(順)	3	3	6
M 741		微	分	多	様	体	小 島(順)	3	3	6
M 750		リ	一	群	演	習	清 水	3	3	6
M 751		リ	一	群	演	習	清 水	3	3	6
M 760		関	数	解	析	A	洲之内	3	3	6
M 761		関	数	解	析	A	洲之内	3	3	6
M 770		関	数	解	析	B	和 田	3	3	6

集中講義

演 習

M 771	関数解析B	演習II	演習	和田	3	3	6
M 780	発展方程式A	演習I	//	和宮	3	3	6
M 781	発展方程式A	演習II	//	宮寺	3	3	6
M 790	発展方程式B	演習I	//	石垣	3	3	6
M 791	発展方程式B	演習II	//	石垣	3	3	6
M 800	発展方程式C	演習I	//	(未定)	3	3	6
M 801	発展方程式C	演習II	//	(未定)	3	3	6
M 810	多様体上の解析学	演習I	//	郡	3	3	6
M 811	多様体上の解析学	演習II	//	郡	3	3	6
M 820	偏微分方程式A	演習I	//	入江	3	3	6
M 821	偏微分方程式A	演習II	//	垣田	3	3	6
M 830	偏微分方程式B	演習I	//	垣田	3	3	6
M 831	偏微分方程式B	演習II	//	垣田	3	3	6
M 840	常微分方程式	演習I	//	杉山	3	3	6
M 841	常微分方程式	演習II	//	杉山	3	3	6
M 850	非線形偏微分方程式A	演習I	//	小島(清)	3	3	6
M 851	非線形偏微分方程式A	演習II	//	小島(清)	3	3	6
M 860	非線形偏微分方程式B	演習I	//	堤	3	3	6
M 861	非線形偏微分方程式B	演習II	//	堤	3	3	6
M 870	非線形偏微分方程式C	演習I	//	飯野	3	3	6
M 871	非線形偏微分方程式C	演習II	//	飯野	3	3	6
M 940	非線形偏微分方程式D	演習I	//	山田	3	3	6
M 941	非線形偏微分方程式D	演習II	//	山田	3	3	6
M 880	関数論	演習I	//	(未定)	3	3	6
M 881	関数論	演習II	//	(未定)	3	3	6
M 890	数理統計学A	演習I	//	草間	3	3	6
M 891	数理統計学A	演習II	//	草間	3	3	6
M 900	数理統計学B	演習I	//	鈴木(武)	3	3	6
M 901	数理統計学B	演習II	//	鈴木(武)	3	3	6
M 910	計算数学	演習I	//	中島	3	3	6
M 911	計算数学	演習II	//	中島	3	3	6
M 920	数値解析	演習I	//	室谷	3	3	6
M 921	数値解析	演習II	//	室谷	3	3	6
M 930	特定課題	演習・実験	演習・実験				4

数学専攻履修方法

1. 指導教授が担当する演習科目は必ず履修しなければならない。
2. 演習科目は13単位以上履修してもその分は修了必要単位数に算入しない。
3. 共通科目の現代数学概論A・Bについては、数学専攻の修了必要単位数に算入しない。

V 研究指導・授業科目内容

(授業科目の横にある数字は、前期・後期の
毎週授業時間数ならびに単位を示す)

共 通 科 目

5000 ラプラス変換論 (講) 2-2-4 (教授 杉山 昌平)

ラプラス変換論の一般理論とその工学上の応用につき講義する。

選択上の注意：初等関数論を履修済みのこと。

5010 現代数学概論A (講) 2-0-2 (教授 足立 恒雄)

理工学諸分野を研究する人達のために、現代数学の中で代数系の部門の入門を解説する。
とくに群論、束論の入門と応用について述べたい。

5011 現代数学概論B (講) 0-2-2 (教授 入江 昭二)

ベクトル解析、ルベーク積分、関数解析、微分方程式等からいずれかを選んで講義する
予定である。テキストは講義の始めに指定する。

5020 量子力学概説 (講) 2-2-4 (教授 並木 美喜雄)

量子力学は物質構造、化学反応および原子核などを内容的に理解するのに必要な学問で
ある。はじめ量子力学が生れるまでのことを簡単に説明してから本論に入る。本講義では
1個の粒子の量子力学が主になるが、量子力学の理論体系、多体問題や光の吸収放出など
にもふれる予定である。

選択上の注意：力学の初歩的知識がが要求される。

5030 原子核概説 (講) 2-2-4 (教授 山田 勝美)

原子核について初めて学ぶ者のための講義であり、原子核の構造、崩壊、反応、核力、
素粒子、実験装置等について概説する。

選択上の注意：初等的な量子力学を知っていることが必要である。

5040 統計力学概説 (講) 2-2-4

(教授 斎藤 信彦)
(教授 加藤 綱一)

これは応用物理学科および物理学科以外の学生のために設置されたもので、学部の講義統計力学(B)を聴講する。

選取上の注意：統計力学(A)程度の熱力学の知識をもっていることが望ましい。

5050 建築音響学 (講) 2-2-4

(教授 伊藤 毅)

建築音響学の沿革、残響理論、拡散音場、室内音響設計、音響特性の測定および評価、吸音構造、遮音構造、消音構造、騒音防止、騒音の測定と評価、振動の測定と防止、材料の音響測定などについて講述する。

本講義には“音響工学”および“騒音制御工学”を教科書として使用する。

5060 情報理論 (講) 2-0-2

(教授 平澤 茂一)

Shannon 流情報理論について講述する。Fano, Gallager らによって近代化された体系の中で、離散系の情報理論に焦点を合わせる。情報量の概念、情報源符号化、通信路符号化などについて理論的に展開し、さらに情報縮約論についても言及する。最後に通信路符号化を具体的に実現する誤り訂正符号など符号理論の基礎についても述べる。統計学に基礎をおく情報理論と、抽象代数学にささえられた符号理論のもつ数学的な美しい体系を理解することが重要でありまた目的でもある。

5070 同位元素工学 (講) 2-2-4

(教授 黒沢 龍平)

放射性同位元素の使用に関する我が国の規制は非常にきびしいがそれにもかかわらず広い領域でこれらを有力な道具として利用している。本講義は概論の内容である学部の放射性同位元素実験学とは異なり高度な知識と事例について講義し放射性同位元素を使用した研究や実験の計画や実行に資することを目的としている。

なお、重複を避けるため放射線安全に関する諸問題の多くは保健物理学 (L6011) で扱うのであわせて受講することを希望する。

5080 画像情報処理特論 (講) 0-2-2

(講師 釜江 尚彦)

画像情報の入力(撮像を含む)、処理、出力(表示を含む)に関する技術をハードウェア、ソフトウェアの両面から講義する。

講義内容は、符号化処理(テレビジョン、ファクシミリ)、画像処理の目的、アルゴリズム及び応用例、画像通信の分類及びサービス例、コンピュータグラフィクスなどである。

5090 騒音・振動制御工学 (講) 0-2-2

(講師 中野 有朋)

音源となる機器等の騒音・振動防止および騒音・振動公害対策手法並びにこれらに関する

る知識の習得を目的とする。

振動と波動，振動と音響，音響と騒音，騒音・振動防止技術と防止対策，騒音・振動診断，騒音・振動評価，騒音防止材料，騒音・振動予測シミュレーション及び騒音・振動防止設計法，騒音・振動防止事例等について述べたあと，環境騒音，環境振動問題の動向及び音響・振動利用状況等を探る。

環境工学特論 2 単位を修得していることを前提とする。

随 意 科 目

6000 テクニカル・コミュニケーションⅠ（講）2-2-4（教授 篠田 義明）

目的：英語で科学・技術論文、およびレポートを書く基本的ルールを指導する。

内容：英語による論文、あるいは技術文は、機械的な和文英訳では解決できない多くのルールや問題を含んでいる。このため、英米でも、これらの文章作成法についての科学的研究が進み、専門分野を問わず、技法習得の方法が確立している。

この授業では、専門分野に関係なく、日本人が英語で科学技術論文やレポートを書く場合に、特に注意すべき点や問題点を指摘しながら、次の体系で講義と演習を行なう。

1. 英語特有の問題点を修辞の面から考察。
2. 論文・レポート作成の基本ルールの考察。
(a) Abstract, (b) Summary, (c) Long report,
(d) Short report を中心。
3. 演習。

6001 テクニカル・コミュニケーションⅡ（講） 2-2-4（講師 チェスター プロッシアン）

テクニカル・コミュニケーションⅠをさらに発展させた Advanced Course である。ライティングと並行して、英語による口頭発表の演習も行なう。

機 械 工 学 専 攻

機械工学専門分野

A010 産業数学研究

(教授 山本勝弘)

機械工学における種々の問題に対処するため、数理的な解析能力を養成することを目的とする。主に連続体力学、流体工学の諸問題を対象に、数値解析、データ処理、O・Rなどの手法を吟味、検討する。

A020 流体工学研究

(教授 田島清瀬)

流体およびその流れが何らかの形で関与する現象は誠に多い。また、流体力学上の方法論には独自のものがあるが、方法論として他分野に影響を与えることも少なくなり、この観点から流体工学の基礎を理解することは重要である。

応用面としては振動・騒音を含めた流体機械およびそれを含むシステムに関する非定常問題を扱う。この面から、液体およびガス体の高速流動に関連する諸現象を調査する。

A021 流体工学研究

(教授 川瀬武彦)

流体を媒体として物質やエネルギーを輸送・伝達する方法は、きわめて基本的な形態である。このような機能を司る系の、総合的な解析の方法の確立と最適な系の設計が本研究の目的である。

その場合、系が流体機械などの非線形要素を含むことを考えると系を非線形回路網として視るのが自然である。本研究では、個々の機械・装置の特性を解析し、同時に系がもつ力学的諸性質を非線形回路理論によって明らかにする。

A022 流体工学研究

(教授 大田英輔)

流体工学にあらわれる力学的諸現象の解明や再認識を、基本的な実験・解析研究を通じておこなう。主として気体や液体および気液二相流体の高速流動に関わる熱流体物理的現象、さらに発生する振動や騒音などを中心に研究し、随時、流体機械・計測などへの応用を企てる。第1年度は文献研究を主とし、流体工学上の諸法則を正しく理解し、実験方法などの基礎的な用意をしたうえで、第2年度における応用実験・解析へ発展する。

A023 流体工学研究

(客員教授 松木正勝)

流体を媒体としてエネルギーを変換する流体機械は工業界で広く使われており、その効

率の向上，信頼性の向上は重要である。そのためには流体機械の内部の流れを支配する法則を理解する必要がある。本研究では内部流動を実験および解析研究を通じて明らかにすることを目的とする。例としては遠心圧縮機，ラジアルタービンを取り上げて研究を進める。

A030 内燃機関研究 (教授 斎藤 孟)

内燃機関は機械工学の基礎の上に立つ広い技術知識の集約によって作られた原動機である。本研究では，内燃機関を対象に，燃焼，伝熱，熱流体力学などの熱工学に関する専門分野の知識を修得し，それらを基に内燃機関に関する最新の研究を通じて，熱機関工業，自動車工業等へ進む技術者，研究者としての能力を養うことを目標に研究指導を行う。最近の研究としては，ガソリン機関，ディーゼル機関の燃焼と排気，エンジンの振動，その対策，新しい燃料のエンジンの開発，エンジンの省エネルギー対策などが主要なテーマになっている。

A031 内燃機関研究 (教授 大聖 泰弘)

本研究は機械工学の各分野の技術が Systematic に総合された内燃機関を対象とし，先端的なテーマを選んで実験の計画，実施とその解析，シミュレーション等を行わせ，この分野での高度技術者・研究者としての能力を養成することを目標とする。例えば，燃焼現象に関連する基礎的研究のほか，出力性能，低公害性，経済性を考慮した機関の最適化等を研究テーマとする。

A032 熱工学研究 (教授 永田 勝也)

学部機械工学科の基礎教育の上に修士課程での熱工学に関する専門教育を受けた学生に対し，エネルギー・環境に関する研究の指導を行い，その分野の技術者，研究者ならびに行政担当者を養成することを目的とする。

A033 熱工学研究 (助教授 勝田 正文)

伝熱工学はエネルギー変換機器の設計と密接に関連して発達してきた。現在，省資源，省エネルギーが叫ばれる中，変換技術の多様化が進んでいる。すなわち，原子炉，太陽熱等の新しい変換系の開発，そして廃熱の再利用，コンバインドサイクル等，従来システムの改良である。これらの多様化に答えるべく，新しい伝熱の知識が要求され，進展中の学問体系である。

本研究では，今後より広いそして厳しい条件下で使用される可能性の高いエネルギー変換機器の伝熱問題から先端的なテーマを取り上げ，一人の学生がテーマの構成から研究のまとめまで一貫担当して行くことにより，熱工学の高級技術者，研究技術者の養成を目標とする。

A041 構造振動研究

(教授 山 川 宏)

各種の動的な荷重下にさらされている幾何学のおよび材質的に複雑な機械構造物に対し、その設計の合理化をはかろうとする場合、エネルギー原理に主として立脚した離散的な解析法の使用と、設計の効率の向上を目的とした数理計画法などの併用は、汎用性のある統一的な手法として有効なものと考えられる。

本研究ではそのような認識の上に、基礎概念から出発した研究指導を行う。

A042 機械設計研究

(教授 和 田 稲 苗)

機械設計研究では、設計工学の基礎となる専門分野を追求して設計に対する認識力、開発力、創造力などを高める目的のために、軸受及び潤滑工学を縦として、工学基礎を横とする設計システムに視点を合せた解析的並びに実験的研究が行われる。この研究に指導教授及び学生が集束することによって、科学技術の進展に寄与することができる高度の技術者及び研究者としての素養と学識をもつ人材の育成が行われる。

A043 材料力学研究

(教授 林 郁 彦)

変形しうる物体の工学的理論を研究する。すなわち、種々の外力ならびに環境条件のもとで、部材の強度、変形特性ならびに安定性などを対象とし、部材の設計ならびに機械構造物の構成などを追及する。連続体の力学としての巨視的視点と物性物理学としての微視的視点との両面から、主題に応じて思考し、研究指導したい。

A044 機器設計研究

(教授 山 根 雅 巳)

テーマとして、たとえば楽器の自動演奏装置をとりあげ、必要とされる基礎的な専門分野、周辺分野の研究をおこない、それに基づいて、希望の性能を有する装置の開発をおこない、開発研究を通じて機器設計技術者を養成することを目的とする。

A045 設計基礎研究

(教授 林 洋 次)

機械設計の基礎分野を追求するために、主要な機械要素の一つである軸受を取挙げ、潤滑工学の観点から理論的および実験的研究を行い、その力学的特性を明らかにすることによって、この種の分野における解析的取扱いを確立する。主として、レオロジ、非ニュートン流体潤滑、軸受面の弾性変形問題、すべり軸受で支持された系の振動問題、流体潤滑における差分法や有限要素法などの数値解析法、またこれらに関連する研究も行う。

A046 CAD工学研究

(教授 山 口 富士夫)

CAD技術の学問としての体系はまだ十分とは云えない。特に、干渉問題として分類される処理技術においてこの傾向が見られる。本研究においては 4×4 行列式法による干渉問題の統一処理理論を完成し、それによる処理の体系化を行い、更には、その理論に基づ

くハードウェアプロセッサ（ポリゴンエンジン）のあるべき姿を研究することを目的とする。この研究の過程において、CADによる機械部品の設計システムの開発を行う。

A050 精密加工研究 (教授 中 沢 弘)

精密さは現代の工業製品に要求される重要な属性の一つである。これを実現させる加工法および加工システムを研究の対象とする。加工法に関しては、切削加工のような除去加工のみならず、レーザを応用した付加加工法も含まれる。加工システムに関しては、CD/CAMと人工知能を組合せた研究を行なう。

A060 応用材料工学研究 (教授 井 口 信 洋)

機械は設計、材料及びその加工から成る。本研究は機械材料を中心とした機器の応用開発を目指す。材料の適切な使用と、その結果の機械の特性との関係を研究する。

A061 材料設計研究 (教授 三 輪 敬 之)

機械は構成材料から組立られ所定の機能を発揮する。したがって、その構成材料も機械の機能に適合するように設計選定されねばならない。材料を機能目的に応ずるように合理的に設計する立場で材料研究を行う。

A071 生物制御研究 (教授 加 藤 一 郎)

生物、とくにヒトの運動制御システムについて“構成による解析”手法を軸として、その協調的制御の構造と機能を解明する。これによりシステムの新しい制御原理への手掛かりを求めめることもできよう。

具体的には、人工の手・足、人工皮膚感覚などの機械モデルの開発および人間機械システムの情報・動力的問題などについて研究を進める。

A072 生物制御研究 (教授 土 屋 喜 一)

生物および医学の機械工学あるいは制御工学との境界領域である生物機械工学(Biomechanics)ならびに生物制御(Bio-control)の周辺において開拓的、創造的に問題を解析設計する能力を養う。

最近の研究としては、①医工学(人工心臓、人工心臓、人工呼吸器、心臓マッサージ、臓器保存など)、②生物力学(魚の遊泳、みみずの運動など)、③流体制御(流体素子の基礎設計およびその応用、カルマン渦流量計など)などである。

A073 プロセス工学研究 (教授 河 合 素 直)

近年制御系はますます巨大化・複雑化するにいたり、系を一つのシステムとして捉えることが要求されてきた。本研究は、制御系を構成しているプロセスの特性を、そのダイナ

ミクスをも含めた形で、回路論的視点をもとに捉え、これをもとに系の力学的挙動を明らかにすることを目的とする。これは、さらに系の合理的設計あるいはある種の最適制御へと展開していくことを意図している。

A074 制御工学研究 (教授 橋 詰 匠)

エネルギー・動力システムを主対象として、「計測・制御系」を核とするシステムの解析・設計法を追究する。

A075 制御工学研究 (助教授 武 藤 寛)

A080 材料加工学研究 (教授 松 浦 佑 次)

金属材料およびその他の材料を加工成形する際の材料の挙動と変形機構について機械工学と材料工学の両分野の立場から解析する。溶解凝固による鑄造と塑性変形による成形加工における基礎的理論と塑性加工方式としての圧延、鍛造、押出し、引抜き、深絞り、曲げ、矯正および特殊な加工における材料挙動、加工の力学および加工機械の特性について研究を進める。主なる最近のテーマは高静水圧下及び管材の変形様式の押出し特性、塑性変形抵抗および変形能の解析および完全密閉型鍛造の変形機構および粉末鍛造などである。

A082 塑性工学研究 (教授 本 村 貢)

物を作ることが人間であり、その1つの工学が塑性工学であるという視点から、物体変形の力学的解析、塑性工学に関連する機械・システムの開発のハードとソフトを研究する。

具体的には、宇宙空間を想定した真空中での加工、多自由度制御形鍛造、形状記憶合金材の加工開発、多ロール圧延加工、セラミックスの塑性加工、複合加工などについての研究を進める。

A210 オペレーションズ・リサーチ (講) 0-2-2 (講師 前 田 整 志)

1. operations research (O. R) の基本概念
2. convex analysis
3. convex programming
4. linear programming and simplex algorithm
5. integer programming and branch and bound algorithm

(ある目的に向う人間活動の最も合理的な方法を研究する学問として)

A220 統計学特論 (講) 2-0-2 (講師 前 田 整 志)

1. 確率変数と確率分布
2. モンテ・カルロ法

3. 重回帰分析

その他時間があればほかの統計的方法についても述べる。

A230 生体情報解析学 (講) 0-2-2 (教授 野 呂 影 勇)

最近、設計から生産管理に至るまで、生体情報を重要な評価基準とする傾向が強くなっている。技術者、科学者が知っておくべき基本的な事項について、実用的見地から解説される。理論は最少限度とし、測定装置の紹介、人体への装着法、測定例の解析の演習を中心とする。筋電、脳波、心拍、眼球運動(眼球電位とアイカメラ)最後に、これらの方法をいくつか用いて行う産業現場での実験例をビデオなどで紹介する。

基本的な一方向流れの問題を中心に、代表的な純粘性流体モデル、粘弾性流体モデルの特徴を解説する。巨視的な流体力学の立場で、解析の筋道を明らかにし、数値解析の適用を考慮して連続体力学の諸概念と枠組みを把握することに重点をおく。

A240 レオロジー (講) 0-2-2 (教授 山 本 勝 弘)

基本的な一方向流れの問題を中心に、代表的な純粘性流体モデル、粘弾性流体モデルの特徴を解説する。巨視的な流体力学の立場で、解析の筋道を明らかにし、数値解析の適用を考慮して連続体力学の諸概念と枠組みを把握することに重点をおく。

A250 材料力学特論A (講) 2-2-4 (教授 林 郁 彦)

「材料力学」「弾性学」「塑性学」「構造力学」から接続される講義であって、対象は機械・構造を構成する固体要素、部材に生ずる反力および変形に関連する問題の一群である。そのうち材料の強さに関する部分は「材料強度特論」にゆずり、ここでは最近開発された弾性論、粘弾性論、塑性論、熱応力論、衝撃応力論などの成果から、主題を選ぶ。

選択上の注意：学部機械工学科における「材料の力学」、「弾性学」および「塑性学」またはそれに準ずる学科目を修得していることを要求する。

A251 材料力学特論B (講) 0-2-2 (教授 山 川 宏)

「材料力学」と総称されている分野は、いわゆる弾性論を基幹としつつも、現在までに種々な多くの分枝を生じて発展していきいる。ここでは特に主題を固定することなく、これらの分枝的な分野から興味ある問題のいくつかを取り上げたい。

A260 潤滑工学特論 (講) 2-0-2

(教授 和 田 稻 苗)
(教授 林 洋 次)
(講師 石 渡 秀 男)

固体の滑り及び転がりにおける摩擦及び摩擦機構を解明したのちに、流体の潤滑作用を知るために、潤滑剤の性質を明らかにし、それが古典流体潤滑論に及ぼす挙動を通覧して、

まず潤滑工学の基礎を把握する。次にこれに立脚して、気体及び非ニュートン物体であるビンガム、マクスウェル・ケルビン物質などのレオロジー潤滑論に論及し、併せて軸受及び摺動面の設計基礎を確立する。

選択上の注意：学部において流体の力学及び機械設計を修得しておくことが必要である。

A270 不規則振動論 (講) 2-0-2 (講師 下郷 太郎)

- (1) 統計的手法の導入
(確率密度, エルゴード性, 相関関数, ガウス過程)
- (2) スペクトル解析
(パワースペクトル, コヒーレンス, ケプストラム, 自己回帰モデル)
- (3) 線形システムの不規則振動
(線形一般論, モード解析, 乱流による振動, 波浪による振動, 地震応答)
- (4) 非線形システムの不規則振動
(非線形微分方程式, フォッカー・プランク方程式, モーメント方程式, 等価線形化法, 摂動法)
- (5) 非定常不規則振動
(非定常振動モデル, 不規則係数励振系の安定性)
- (6) 信頼性解析
(初通過確率, 極値確率)
- (7) 不規則振動の制御
(制振器設計, 最適制御)

A271 非線形振動論 (講) 0-2-2 (講師 辻 岡 康)

非線形振動系の固有振動, 強制振動, 自励振動等について線形振動との関連のもとに教授し, 主として機械系の振動問題をとりあつかう。

A280 機械設計特論 (講) 2-0-2 (教授 山根 雅巳)

機械部材が使用中に実際に受ける荷重による強度を知るためには, 実験室内でその荷重を再現する特殊な試験機が必要とされる。そのような試験機の設計, 制御および強度についての考え方について述べる。

選択上の注意：学部機械工学科における「材料力学」, 「機械材料」またはそれに準ずる学科目を修得していることを要求する。

**A290 流体力学特論 (講) 2-2-4 (教授 田島 清 瀬)
(教授 大田 英 輔)**

流体力学における力学的諸問題の基礎理論を講じ, これによって関連問題に対する解析

力や計算能力を養う。流体抵抗，境界層，乱流，特殊流体の力学などに関する考え方と研究動向を概説する。

選取上の注意：流体の力学，流体機械に関しては学部程度の知識を持っていることが必要である。

A300 ガスタービン工学特論（講） 2-2-4 （客員教授 松木 正勝）

速度型内燃機関であるガスタービンは，高効率，軽量，大出力の特長によって航空用，発電用，産業用など多方面で広い出力範囲で利用され始めている。

本講では，先づガスタービンのサイクルとその特長を講ずる。次いでガスタービンの構成要素である，圧縮機，燃焼器，タービン，制御器，等について，その作動理論，設計法，運転取扱上の注意事項等について，基本的事項に重点を置いて述べる。また実用機における問題点についてもふれる。

A310 内燃機関特論Ⅰ（講） 2-0-2 （教授 斎藤 孟）

Ⅰ，Ⅱを通じて，主として往復動内燃機関の理論と実際について，最近の研究成果をとり入れて講義する。主な内容はつぎのとおりであるが，年次によって若干変わる。

内燃機関の性能，火花点火機関の燃焼と排気，燃料の性状，新型原動機（成層給気機関，スターリング機関等），新燃料機関（ガス機関，アルコール機関等）。

選取上の注意：学部におけるつぎの講義を修得していること。内燃機関

A311 内燃機関特論Ⅱ（講） 0-2-2 （教授 大聖 泰弘）

Ⅰにひきつづき，つぎの内容について講義する。

圧縮点火機関の燃焼と排気の実際。各種の熱力学的サイクル論。燃焼過程および排気汚染物の生成過程の数値シミュレーション。各種の乱流燃焼特性。吸排気系の理論。

選取上の注意：内燃機関（学部3年），内燃機関特論Ⅰを選択修得していること。

A320 燃焼工学（講） 2-0-2 （教授 永田 勝也）

燃焼過程の工業的利用の歴史は古く，その応用面も多岐にわたっている。この講義ではこれら各種の実用面を参照しながら，燃料の種類や燃焼装置にとらわれずに燃焼現象を総合して体系づけようとする。もちろん燃焼工学は発展途上の学問であってその体系化はまだ十分でないが，非常に多様な現象をまとめて，理解しやすく応用に便にする一つの試みが示される。

A330 伝熱工学特論（講） 0-2-2 （助教授 勝田 正文）

学部の「移動・速度論」程度の基礎知識の上に立って，伝熱工学，移動現象論の新しい

問題を扱う。相互関係のある移動現象，相変化をともなる伝熱と移動現象，化学変化をともなる伝熱と移動現象等を含む。

選択上の注意：熱力学，移動速度論あるいはこれと同程度の講義を受講していることが望ましい。

A340 熱装置（講） 0-2-2 （未定）

講義の主項目は次のようである。

- ① 移動速度論概説
- ② 熱装置と関係の深い化学熱力学の基礎事項
- ③ 化学反応速度の基礎事項

熱装置設計に直接関係のある基礎事項に重点をおき演習を含む。

A350 熱機関特論（講） 0-2-2 （講師 永島俊三郎）

蒸気原動所の主構成機である蒸気タービンを中心に，損失の定義と評価方法，高効率対策，超々高圧高温蒸気タービンプラントなどを論述するとともに，アドバンスプラントとして

- 1) 原子力発電プラント
- 2) 各種コンバインドサイクル
- 3) コージェネレーションシステム

の現状と将来展望を解説する。

新エネルギー開発の現状を紹介し，未来の熱機関につき論じる。

A360 自動車工学A（講） 2-0-2 （講師 山中旭）

90年代の自動車工学のテーマは，80年代のテーマ3EIS (Environment, Energy, Economy, Safety) に加えて国際社会問題（貿易摩擦，ENICS 諸国の追い上げ），ユーザーの多様化と多くの問題をかかえながら，本格的な技術競争の時代に突入しつつある。これらの諸問題に対応する W. U. V. (Waseda University Vehicle) の計画，設計，とそして前年度の工学的に注目すべき車を中心に（80年度 GM X-Car, 81年度 MERCEDES-BENZ New S-CLASS, 82年度 GMJ-Car, 83年度 World Car, 84年度 M-BENZ 190E, 85年度 PONTIAC FIERO 86年度 M-BENZ W124, 87年度 W. U. V. とニッサンエクサ，88年度 Andi 80 quattro）新しい展開を計る。自動車の歴史，目的と種類，その性格派生，社会へのインパクト，基本計画，原動機の選定，デザイン，各部の設計，性能，負荷計算，密度計算，自動車の安全，生産技術，研究開発法について講義する。

〔参考書〕 関敏郎，斎藤孟，佐藤武監修「自動車の基本計画とデザイン」山海堂

A361 自動車工学B (講) 0-2-2

(講師 木原良治)

自動車用エンジンの製品企画の展開手法とそれに伴う主要エンジン諸元の決定のための設計段階の進め方の概要を講義する。又乗用車用ディーゼルエンジンの動力性能、特性、構造、主要部位の設計、燃焼室系、噴射系、潤滑系の設計および公害対策の技術などについて具体的に説明する。

A370 機械加工学特論 (講) 2-2-4

(教授 中沢 弘)

機械加工は製品を最終形状に仕上げる上で最も重要な加工法である。本講では、そのうちとくに切削加工、研削加工、レーザ加工およびこれらを用いた生産システムについて、その理論と実際に生起する諸問題を解説する。

A380 歯車理論 (講) 2-2-4

(未定)

機械の重要要素である歯車について歯形曲線、かみあい理論に関する種々の解析法を述べる。さらにこれをもとにし歯車の歯切法、測定法についても言及する。

選択上の注意：機構学の知識を必要とする。

A390 精密加工システム特論 (講) 2-2-4

(講師 古川 勇二)

最近の機械加工は超精密化、高速化、およびシステム化の傾向にある。本講においてはこれらの傾向に対応した加工機械のサーボ設計技術、ソフトウェアプログラムなどと加工精度との関連について概説し、さらに単体の加工機械あるいは複数の機械群を無人化するときのメカトロニクス技術、総合的FA化技術について解説する。

キーワード：超精密、NC工作機械、ソフトウェア、メカトロニクス、FMS、FA、ロボット

A400 溶接システム工学特論 (講) 2-2-4

(講師 山本 一 道雄
講師 荒谷 雄)

産業界では近年FA、FMSに溶接生産システムが広く導入されている。本講ではこれに対応して(1)生産システムの基本概念、(2)適用する溶接プロセスの機構および基礎現象、(3)溶接機器の種類および基本原理・特性、(4)溶接ロボットの基礎工学、および(5)インテリジェント化に必要な溶接センサの原理・特性について講義する。また理解を深めるためにビデオおよびシネフィルムをできるだけ利用して解説する。

A410 物性計測システム特論 (講) 2-0-2

(講師 岸本 健)

固体からプラズマの特性を計測するためのセンサについての特性やその計測系を支配する理論とノウハウについて議論する。

次に計測系に不可欠なデータ処理々論とサーボ制御について実際的な知識を修得する。

A420 植物工学特論 (講) 0-2-2 (教授 三輪 敬之)

機械工学と植物バイオテクノロジーの関わりについて、一つは、バイオテクノロジーを支援するための機械工学という観点から、もう一つは植物の生命現象の本質(バイオソフト)を理解し、それを機械工学へ応用するという観点からアプローチする。

A430 溶接工学特論 (講) 2-0-2 (講師 蓮井 淳)

溶接法は融接法・圧接法およびろう接の3種に大別され、それらはまた多くの種類に分類される。本講では、各種溶接法の原理と溶接過程において生起する諸現象の理解を通して、それぞれの特質を明らかにする。そして機械・装置等を設計、製作するに当たって溶接を合理的に活用するための基礎を講述する。

本講には、熱切断法および溶射法も含める。

A440 材料工学特論I (講) 2-0-2 (教授 井口 信洋)

機械材料を応用するための材料科学、材料 CAD/CAM、及び現在の新素材の代表的なものを講述する。

A441 材料工学特論II (講) 0-2-2 (講師 西原 公)

A450 システムの力学 (講) 2-2-4 (教授 川瀬 武彦)

多くの機械や装置、プラントは、同種のもしくは異種の形態のエネルギーの発生・伝達・変換・消費を司る要素から成り、それ自身が一つの力学系を構成している。講義では、このような力学系をなり立たせている要素の基礎的な性質を系の機能要素として再構成しながら、力学系の作動を表現する基本的な法則について考察する。

A460 制御系の解析設計 (講) 2-2-4 (教授 河合 素直)

近年制御系はますます巨大化、複雑化するにいたり、系全体を統一的に見ることが要求されてきた。本講では制御系およびそれを構成している各要素の力学的挙動ならびに各要素の相互作用を中心に、回路論的視点をもとに制御系の解析設計について論ずる。なお、本講は「システムの力学」より接続するものである。

A470 生物制御工学A (講) 2-2-4 (教授 加藤 一郎)

生物工学の立場より、ヒトの運動系とサーボ機構とを対比しつつ、制御工学の新たな視点を確立することが本講の目標である。

具体例として、人体の構造、機能、性能などの解析、機械モデルの構成法などについて扱う。

A471 生物制御工学B (講) 2-2-4 (教授 土屋 喜一)

生物および医学における機械工学的あるいは制御工学的側面を素材にしながら、生物機械工学あるいは医工学について述べる。内容としては、人間を含む生物体における機械力学、流体工学、計測制御工学、ならびに人工臓器を中心とした臓器工学を含む。

**A480 制御工学特論 (講) 2-2-4 (講師 町山 忠弘)
(助教授 橋 詰 匠)**

エネルギー・システムを対象として、システムの広義力学的挙動と制御に関する試論を概説する。Pre-requirement として「プロセス工学特論」の履習が必要である。

A490 制御工学 (講) 2-0-2 (助教授 武藤 寛)

**A500 塑性工学特論 (講) 2-2-4 (教授 松浦 佑次)
(教授 本村 貢)**

材料の塑性挙動と成形加工との関連について解析する塑性工学を理解するよう専門分野別に分担講述する。

1. 塑性変形の解析における力学的基本法則
2. 材料強さとしての塑性変形抵抗の解析
3. 加工方式別(圧延、鍛造、押出し、引抜き、深絞り、曲げおよび矯正)による力学的解析と変形特性
4. 最近のトピックス

A510 表面加工特論 (講) 2-0-2 (未定)

繰返荷重を受ける部材の疲れ強さに対しては、部材表面の性状が著しい影響をおよぼし、たとえば砥粒投射あるいはローラによる機械的な表面加工は、疲れ強さ向上の効果が大きい。まず表面あらさをとり上げてそのスペクトル解析について述べ、次いで、砥粒投射における現象を数式化して解析する方法について講述する。

A520 精密機器系の設計 (講) 2-2-4 (講師 川上 常太)

精密機器系(メカトロニクス等)の構成要素は機構複合体、アクチュエータ、パワー源とこれらに対する制御系である。従来、こうした系の設計手順は概して経験的に処理されていたと云える。

本講は動的な操作機器系を対象とし、需要・要求仕様に応じて技術的な“設計課題”を抽出・特定し、主として機能設計から機能担体設計に到るまでの手順論をまとめる。

また複数の実題により、手法の援用を検討する。

A530 流体関連振動 (講) 2-0-2 (教授 田島清瀬)

流体の運動が何らかの形で関係する振動現象が各方面において重要視されてきている。流れによって起される振動、後流りずの流出に伴う振動、流体を介した連成振動、スロッシングなどについて、その機構と性質を説明し、最近の研究動向を述べ、この種の現象を解明する。

A540 CAD工学特論 (講) 2-0-2 (教授 山口富士夫)

今年度は、曲線、曲面の数式による記述の各種方式について論ずる。

- ・曲線と曲面の基礎理論
- ・Hermite 補間に基づく曲線と曲面
- ・スプライン補間に基づく曲線と曲面
- ・Bernstein 近似に基づく曲線と曲面
- ・B-スプライン近似に基づく曲線と曲面

A610 産業数学演習 I 2-2-4 (教授 山本勝弘)

連続体力学、流体力学、数値解析、O・Rに関連する名著を年度毎に適宜選択し、輪読する。

A611 産業数学演習 II 2-2-4 (教授 山本勝弘)

各自の修士論文のテーマの位置づけを目的として、最近の文献を調査し、要約、批判を行わせる。

A620 流体工学演習 I 2-2-4

(教授 田島清瀬
教授 川大木
教員 松木正勝)

A621 流体工学演習 II 2-2-4

(教授 田島清瀬
教授 川大木
教員 松木正勝)

従来発展してきた流体工学の方法論を理解し把握するために、重要な流体工学関係著書・論文の講読をおこなう。流体力学理論、流体機械工学あるいは流体システムの力学などについて、物質・力・エネルギーの伝達を表現する基礎法則の正確な認識、実験・測定方法の調査、重要な成果の再確認などをおこなう。同時に、個々の課題について実験的学習を併せおこない、流体工学上の諸問題に対決し、解析し得る実践的能力を養う。

A 630 熱工学演習 2-2-4

(教授 齋藤 孟也
教授 永田 勝也
教授 大勝 聖正
助教 藤田 正文)

主として前期1年度生を対象に、熱工学部門の全教員が交代で指導し、伝熱、燃焼工学、熱設備、内燃機関などの講義に関連して、最近の文献の研究、調査、演習等を行う。

A 631 熱工学特別演習 2-2-4

(教授 齋藤 孟也
教授 永田 勝也
教授 大勝 聖正
助教 藤田 正文)

主として前期2年生を対象に熱工学に関連する問題のうちからテーマを選択させ、関係文献の調査、研究方針の決定、実施計画の立案、さらにはその実施に至るまでの総合的な演習を行う。

A 640 内燃機関演習Ⅰ 2-0-2

(教授 齋藤 孟)

内燃機関特論Ⅰの講義に関連して、最近の文献の研究、調査、演習を行う。

A 641 内燃機関演習Ⅱ 0-2-2

(教授 大勝 聖 弘)

内燃機関に関する重要文献の精読や調査を目的とする多読を行うと同時に、これらの内容に関連した Case study を適宜実施する。

A 650 エネルギー・環境演習 2-2-4

(教授 永田 勝也)

石油ショックに端を発した燃料資源の高騰から省エネルギーが叫ばれ、一方では極度に悪化した環境の改善が望まれている。両者を調和させながら、正しく産業を発展させるのは、われわれ技術者の使命である。ここでは、このエネルギー・環境の一つの接点として燃焼による公害の発生をとりあげ、内外の論文を調査し、批判、検討を加える。

A 660 伝熱演習 2-2-4

(助教 藤田 正文)

伝熱、燃焼、流体の流れ、物質移動、に関する最新の研究論文、あるいは基礎的な著書を題材として演習を行ない、熱工学の基礎学力を確実にし、研究の構成方法を学ぶ。

A 670 構造振動演習Ⅰ 2-2-4

(教授 山川 宏)

年毎に適当な教材を選定し、それを中心として、主として輪講形式により演習を行う。

A 671 構造振動演習Ⅱ 2-2-4

(教授 山川 宏)

主として学生各自の修士論文テーマに関連した文献研究より取材し、学生相互の研究発表を中心として演習を行う。

A680 設計工学演習Ⅰ 2-2-4 (教授 和田 稲 苗)

この演習は、設計工学に対する基礎知識を発展させる目的で、潤滑摩擦特論と関連を保ちながら関係する文献の調査並びに輪講を行うとともに、実験演習を実施することによって、学習能力を高めるべく修士1年に用意されている。演習の資料には、設計工学の諸問題及び潤滑に関する諸文献並びに実験材料が採用される。

A681 設計工学演習Ⅱ 2-2-4 (教授 和田 稲 苗)

この演習は、設計工学演習に接続するもので、主として修士2年及び博士学生に対して、専門分野の先端にある高度の文献を輪講形式によって進められる。なお、各自の研究経過あるいはその成果について報告討論することによって、相互の学識の交換を行い、かつ研究能力を高めるべく用意されている。

A690 材料力学演習Ⅰ 2-2-4 (教授 林 郁 彦)

材料力学に関する古典的なものから、最近の成果まで、名著、論文を介して、輪講形式で学習を行なう。

A691 材料力学演習Ⅱ 2-2-4 (教授 林 郁 彦)

材料力学に関する古典的なものから、最近の成果まで、名著、論文を介して、輪講形式で学習を行なう。

A700 機器設計演習Ⅰ 2-2-4 (教授 山 根 雅 巳)

機器設計研究で取りあげているテーマに必要な基礎的な分野に関して演習する。電気機器、電子回路、自動制御理論、過渡現象論、音響工学、等

A701 機器設計演習Ⅱ 2-2-4 (教授 山 根 雅 巳)

同上、修士論文テーマのために必要な事項に関して、より専門的に演習する。

A710 設計基礎演習Ⅰ 2-2-4 (教授 林 洋 次)

機械設計の基礎分野に対する解析能力を養成するために、連続体の力学における基礎的取扱いを習得する。演習課題としては、材料力学および流体力学における簡単な微分方程式を取挙げ、まず従来の古典的解析方法を通覧し、つぎに、ルンゲクッタ法、差分法、有限要素法などを適用し、電子計算機によって数値計算を行い、この種の分野における数値解析法を体得する。

A711 設計基礎演習Ⅱ 2-2-4 (教授 林 洋 次)

設計基礎演習Ⅰで習得した基礎知識を発展させるために、軸受工学や潤滑工学などの機

械設計の基礎分野における種々の分野の文献を調査し、問題点を指摘しかつ整理する。これに基づいて、各自に与えられた演習課題に対して、新しい概念や知見を考案し、理論的および実験的考察を加え、途中経過ならびに成果を発表し、討論を行うことによって、さらに理解を深め、機械設計における解析能力を養う。

A720 CAD工学演習Ⅰ 2-2-4 (教授 山口 富士夫)

学部3年度に開設されている「CAD工学」を履修していることを前提とする。まず「CAD工学」で学んだ知識を用いて、基本的なCAD工学の技術の実習と演習を行い、CADシステムの構築を行うにあたっての、基本的手法を修得する。

A721 CAD工学演習Ⅱ 2-2-4 (教授 山口 富士夫)

内外の文献を輪講することにより、更に高度の技術を身につけるとともに、システム設計の技術に習熟し、さらには研究問題に対処する能力を修得する。

A730 精密加工演習Ⅰ 2-2-4 (教授 中 沢 弘)

精密加工研究に関連した最近の文献の研究、調査、演習を行なう。

A731 精密加工演習Ⅱ 2-2-4 (教授 中 沢 弘)

修士論文作成過程において出現する精密工学上の諸問題を通して、問題解決能力を養うべく指導する。

**A750 材料工学演習Ⅰ 2-2-4 (教授 井 口 信 洋)
(教授 三 輪 敬 之)**

工業材料を中心に、製品設計まで含めた材料の捉え方について演習と輪講を行う。

**A751 材料工学演習Ⅱ 2-2-4 (教授 井 口 信 洋)
(教授 三 輪 敬 之)**

新素材、生物材料(植物)をシステムの観点から捉え、その機械機器への応用について演習と輪講を行う。

A760 バイオメカニズム演習Ⅰ 2-2-4 (教授 加 藤 一 郎)

A761 バイオメカニズム演習Ⅱ 2-2-4 (教授 加 藤 一 郎)

サイボーグ工学、リハビリテーション工学、ロボット工学関係の文献輪講。

A770 バイオメカニクス演習Ⅰ 2-2-4 (教授 土 屋 喜 一)

生物工学のなかで力学的側面を重視する分野はバイオメカニクス(Biomechanics)と称されており、工学の体系をなしたのは比較的最近であるが、世界的にその進展速度はめざ

ましく研究成果が急増しつつある現状である。

本演習では、生物の形態と機能、生物力学、生物の運動、流体制御などについて、演習と文献輪講を行なう。

A771 バイオメカニクス演習Ⅱ 2-2-4 (教授 土屋 喜一)

バイオメカニクス演習Ⅰに接続する。

本演習では、医学・医療と機械工学および制御工学の境界領域である医工学、医療工学、人工臓器、臓器工学など、人間の身体のしくみを対象とした新しい分野について、演習と文献輪講を行なう。

A780 プロセス工学演習Ⅰ 2-2-4 (教授 河合 素直)

プロセスの構成は年々複雑になってきたが、これらは混合現象、熱移動、物質移動、反応などの基本的なものからなりたっている。本演習は、これらプロセスの力学的挙動を解析し、プロセス設計、計装計画に取り組む基礎的な能力を養うことを目的とする。

A781 プロセス工学演習Ⅱ 2-2-4 (教授 河合 素直)

プロセス制御系を一つのシステムとして把え、系の力学的挙動をもとにシステムの設計を進める能力を演習を通じて養う。

A790 制御工学演習Ⅰ 2-2-4 (教授 橋 詰 匠)

A791 制御工学演習Ⅱ 2-2-4 (教授 橋 詰 匠)

「修士論文研究」の周辺で随時各個に課題を設定していく。

A800 計測・制御工学演習Ⅰ 2-2-4 (助教授 武 藤 寛)

A801 計測・制御工学演習Ⅱ 2-2-4 (助教授 武 藤 寛)

A810 材料加工学演習Ⅰ 2-2-4 (教授 松 浦 佑次)

金属材料およびその他の材料の加工における変形挙動とその成形に関する内外の重要研究論文、文献を選択し、各自輪講によりその主旨を解説、討論して理解力と指導力を強化する。

A811 材料加工学演習Ⅱ 2-2-4 (教授 松 浦 佑次)

金属材料およびその他の材料の加工における変形挙動とその成形に関する内外の重要研究論文、文献を選択し、各自輪講によりその主旨を解説、討議して理解力と指導力を強化する。

A 812 材料加工学特別演習 2-2-4 (教授 松浦 佑次)

材料加工における変形挙動と解析に関するテーマ実験について研究方針、実施計画の立案と実施について実証的に指導力と実行力を付与するため自由課題による研究を行う。

A 830 塑性工学演習Ⅰ 2-2-4 (教授 本村 貢)

塑性工学に関連した新しい知見と塑性工学の解析法を修得する。特に、大学院前期課程で必要な研究テーマに関する文献を論議し、力学的解析手法を体得する。連続体の力学や金属材料特性を復習し、塑性流動の基礎概念を確たるものとし、塑性変形理論の比較検討をし、整理展望する。

A 831 塑性工学演習Ⅱ 2-2-4 (教授 本村 貢)

塑性工学演習Ⅰを履修していることを原則とする。大学院前期課程の研究テーマに関した文献の論議はもとより、塑性変形特性の知見を深くし、実験解析法を確たるものとし、塑性工学における変形機構の力学的解析を明らかにし、基礎研究により作り出される基礎的知識を、実際の・応用的・開発的知識へ積み上げることを演習する。社会への機械工学技術者・研究者および大学院後期課程の塑性工学研究者としての素地を養う。

A 832 塑性工学特別演習 2-2-4 (教授 本村 貢)

塑性工学に関連した書籍を完読するとともに、塑性工学研究者および機械工学研究者・技術者としての指導性と塑性加工技術への意識の向上を養う。すなわち、塑性工学に関する測定技術、実験解析法および従来の理論による計算法の理論を修得し、各種金属加工技術の開発への研究と基礎的研究との総合的理解とを基礎とする。

工業経営学専門分野

B 033 経営管理学研究 (教授 石渡 徳彌)

本研究は、企業の経営管理活動における計画業務のうち、主として本社機構でのマクロの計画業務に関連する諸問題の研究を対象としている。内容としては、経営情報システム、販売・流通情報システム、マーケティングリサーチ(市場分析・実態調査)、およびマーケティングモデルなどに関する研究が含まれる。

なお、本研究の演習科目は、マーケティングリサーチ演習A、およびBである。

B 011 生産管理学研究 (教授 十代田 三知男)

生産管理システムにおける静的な特性、動的な挙動を定量的に解析するための各種の手法(数理解析、数値解析、シミュレーションによる解析)を習得させ、この結果をシステム設計に関連させるための考え方を研究する。

B 021 生産管理学研究

(教授 池 沢 辰 夫)

品質管理とは広義に解釈すれば、顧客に十分満足してもらえる限りにおいて最も経済的な品質水準の製品を生産し販売していくために組織内のいろいろなグループが払う品質開発、品質維持、品質改良の努力を一本にまとめる効果的なシステムであるといえる。

すなわち、

管理面としては 1. 新製品管理 2. 受入資材管理 3. 工程管理 4. 特別工程調査：

手法面としては、統計理論の応用による 1. 管理図 2. 抜取検査 3. 実験計画法 4. 信頼性解析：があり、この両面について、「講義」「品質管理演習 A、B」などを中心に研究を行うものである。

B 010 生産管理学研究

(教授 片 山 博)

生産システムの分析と設計及び管理運営についての理論及び現場への適用について研究する。特に、需要等の環境条件に応じた生産予測方式、生産計画方式、生産指示方式、生産実施方式、進捗管理方式及びそれらの自動化、情報化の問題を中心に扱う。

B 034 生産管理学研究

(教授 長谷川 幸 男)

生産システムの構成、必要な要素技術、システム技術等の諸課題を中心に、技術革新および国際化時代における生産システムの諸課題について研究する。

B 012 生産管理学研究

(教授 中 根 甚一郎)

生産システムを受注から設計、手配、製造、供給までを含めた一連のサブ機能の流れとして把握、統合化生産情報管理システムを設計して行くための方法論および技法の開発、研究をおこなう。また生産システム構築に際しては、企業を取り巻く環境、経営戦略、技術革新との関連も考慮する。

B 040 プラントエンジニアリング研究

(教授 石 館 達 二)

プラントエンジニアリングはプロジェクトエンジニアリングとメンテナンスエンジニアリングをその領域とする。本研究はこの分野について、技術的、経済的両側面から理論及び実際について考究する。

B 041 プラントエンジニアリング研究

(教授 高 橋 輝 男)

生産システムを構成する先端の自動化技術たとえば FMS (Flexible Manufacturing System), 搬送、保管などに関する諸研究を行なう。また自動化システムに関連する評価、安全性などについても新しい視点から研究する。

B 042 プラントエンジニアリング研究

(助教授 吉本 一穂)

生産の場としての工場の施設並びに生産指示に関連する諸問題をとりあげ、その合理的な設計、建設、維持管理について、理論的、具体的な追及を行う。

B 020 オペレーションズリサーチ研究

(教授 春日井 博)

オペレーションズリサーチ(A)にあつては工業経営の各分野にORにおけるモデルの構築の仕方を研究の主体におき、特に多段階在庫を含む在庫管理システム物流システムの研究を行う。

B 023 オペレーションズリサーチ研究

(教授 森戸 晋)

線形計画・非線形計画・組合せ計画などの数理計画法の理論を研究し、経営工学の各分野におけるそれらの応用をサーベイまたは開拓し、実用上の問題点を検討する。また各種数理計画アルゴリズムの開発、データ構造などプログラム化にあつての留意点、効率評価などを研究する。

B 022 インフォメーションシステム研究

(教授 平澤 茂一)

情報システム特に計算機とその記憶システムを主な対象として理論ならびに方式開発などの研究を行なう。ファイルシステムとデータ構造、計算機複合体、計算機システムの高信頼化および、コンピュータネットワークなどの応用研究を扱う。また、情報理論とその応用に関する研究を行なう。情報の高信頼化、圧縮、保護など情報そのものの性質を対象とする他情報理論の経営工学への応用を図る。その他、知識情報システムについて理論的、応用的両側面から研究を行う。

B 024 インフォメーションシステム研究

(教授 東 基衛)

インフォメーションシステム、特にマルチメディア化、知識化、分散化の進展するシステムについて、その概念モデル、開発・運用・評価の方法論及び自動化ツール、ヒューマンインタフェイスなどに関する研究を行う。

B 050 ヒューマンファクターズエンジニアリング

(教授 尾関 守)

本研究は、企業活動に関与する人間の行動ならびにその労務管理について、それぞれの時代的背景の下に生まれた労務管理学説について整理し、現代における労務管理の方法科学としての体系化について研究する。さらに人間行動のシステムの考察から、企業の行動理論との関連を研究対象とする。

B 031 ヒューマンファクターズエンジニアリング研究 (教授 横溝 克己)

本研究は生産工学のうち作業設計、管理に関する諸問題、特に生産に関しては作業研究

の基礎的研究並びに作業者に関する諸特性，さらに最近問題となりつつある精神作業に対する作業環境，作業条件，負担に関する研究も行う。

B 060 環境工学研究

(教授 塩 沢 清 茂)

最近，わが国の公害問題は最も悪い状況の時にくらべて鎮静化に向いつつあるが，よりよい環境で社会生活を営むことは国民の願いである。

公害発生要因は極めて複雑であり，したがってその解決策もまた当然非常に困難である。しかしながらいろいろの立場から研究し，その防止対策を講ずる必要がある。

そこで本科目では，公害関係法令，公害の人や生物への影響，公害防止技術，工場における公害防止対策等の立場から重要な課題について研究する。

B 210 生産管理学特論 (講) 2-0-2

(教授 片 山 博)

市場環境と生産条件に応じた生産管理の方式とそのシステム化の理論及び方法を論ずる。特に生産管理システムをその機能の観点からいくつかのサブ・システムに分け，各サブ・システムにおける既存モデルの紹介及びモデル化の方法に焦点をあてる。

1. 生産管理におけるモデル化の考え方
2. 生産のための予測モデル
3. 生産計画モデル
4. ライン生産システム・モデル
5. ロット生産システム・モデル
6. 個別生産システム・モデル
7. 生産管理のシステム化モデル

本講義は学部課程における生産管理学のほか作業研究，統計的方法演習などの知識を必要とする。

[参考書] 村松林太郎；生産管理（朝倉書店）。

B 220 生産管理解析 (講) 0-2-2

(教授 十代田 三知男)

見込み生産における需要予測，生産計画，在庫管理を含む一連のシステムについて，その挙動の解析および設計に関する手法，理論を論ずる。

B 230 電子計算法 (講) 2-0-2

(教授 十代田 三知男)

経営工学，管理工学に関する研究を進めるために必要な，プログラミングの技法について講義する。

前半に，それ等の基礎となる特殊計算技術，例えば FORTRAN による各種乱数の発生等について，後半には，システムシミュレーション等の実際の計算事例について述べる。

使用するプログラミング言語は，当分の間，FORTRAN に統一する。

選択上の注意：本講義を受講するには、理工学部の 142C 『電子計算演習』程度を終えていることを必要とする。

B 240 オペレーションズ・リサーチ特論（講） 2-2-4

（教授 春日井 博）

① 待ち行列理論の適用とシミュレーション ② リニア・プログラミングの適用とシミュレーション ③ ネットワーク理論の適用とシミュレーション ④ 動的計画法の適用とシミュレーション ⑤ 統計的方法の探求と適用およびシミュレーション
を主体に経営・管理 (Management) の OR Approach の意義、役割、効果について述べ、マネジメントシステム設計の基盤について論述する。

OR モデルの設計の仕方、特に在庫モデル、待ち行列モデル、配分モデル、ネットワークモデル、動的モデルのたて方、適用およびシミュレーションを主体に、マネジメントの OR アプローチの意義、役割、効果等について述べ、マネジメントシステム設計の基盤について論述する。

B 250 品質管理特論（講） 0-2-2

（教授 池 沢 辰 夫）

製品品質の安定化および向上を目的として行なわれる品質管理について、管理面と手法面について講義する。

管理面として 1. 品質管理の機能 2. 製品の信頼性 3. 新製品管理

手法面として 1. 一般の統計手法 2. 管理図法 3. 工程解析の手法

B 260 情報システム特論（講） 2-2-4

（教授 平 澤 茂 一）

情報システムをささえるいくつかの基礎的理論につき講述する。まず情報理論特に情報縮約論、次いで符号理論とこれと深くかかわる情報代数などについて言及する。最後にファイル管理、データ構造論などについて述べる。

B 271 数理計画特論 A（講） 2-0-2

（教授 森 戸 晋）

単体法（主、改訂、双対など）・双対性などの線形計画法の基礎知識を前提として数理計画法の理論・アルゴリズムについて解説する。主として LP とネットワーク（最大流、最小費用流、最短路、マッチングなどの諸問題）や整数計画法などの組合せ最適化問題を扱い、関連する計算の複雑さの理論に言及する。このほか動的計画法、非線形計画法、大規模（線形）計画法の基礎を講義する。

B 272 数理計画特論 B（講） 0-2-2

（教授 森 戸 晋）

数理計画法の応用に重点を置き、モデル化、パッケージの使い方、プログラム開発、結果の見方と使い方等を論ずる。取りあげるモデルは、主として、数理計画特論 A で理論面

を扱う線形計画モデル，整数計画モデルである。

B 290 マーケティングリサーチ特論 (講) 0-2-2 (教授 石 渡 徳 彌)

本講義は，学部第4年に設置してある「市場調査」に接続するもので，内容としては，企業の社会環境の問題，販売・流通情報システム，MDS S (マーケティング意思決定支援システム)，予測の諸問題などが含まれる。

B 300 人間工学特論 (講) 2-2-4 (教授 野 呂 影 勇)

将来，科学者や技術者として，人間と機械のシステムを設計するときに必要な人間工学の知識と方法を習得する。ビデオを用いた講義と演習による。

演習予定課題：階段の勾配，棚の高さと流し台の寸法，人間内の情報処理速度，視軸とビジュアルシステム，コンピュータワークステーション。最後に企業（計算機，電器製品，自動車等）で実際に行っている人間工学調査についてビデオで紹介する。

B 310 作業研究特論 (講) 2-2-4 (教授 長谷川 幸 男)

作業研究とは目的の製品を得るために最善の作業方法やその所要時間を決めたり，それを分析する技術であるが本講義では併存講義である工程技術および管理，人間工学との関連性を持たせ，作業の分析，編成とその計画，およびその管理システムの改善に重点をおき，動作経済，疲労，作業設計，自動化などにも言及し，またゲストを迎えてディスカッションを実施する。

B 321 生産システム設計特論 A (講) 2-0-2 (教授 中 根 甚一郎)

生産，物流などものの流れの計画，管理システムを1つの統合システムとして構築して行くための方法（システム設計法）を論ずる。本講では統合生産情報管理システムの設計に焦点をあて，ケースメソッドにより授業を進めて行く。

B 322 生産システム設計特論 B (講) 0-2-2 (教授 長谷川 幸 男)

最近急速な進歩を遂げつつある FA (Factory Automation) システムや CIM (Computer Integrated Manufacturing) システムの設計に必要な設計のためのアプローチ，条件設定の方法，システムの構成要素となる自動化機器，生産管理システム，ヒューマンファクタ等について考察を加え，最後に事例研究を行なう。

B 331 工場計画特論 A (講) 2-0-2 (教授 高 橋 輝 男)

生産活動の展開される工場は物を扱う生産設備の自動化に，これらを運用する製品設計，生産管理などが連なってシステム化されつつある。こうした工場を計画する際の方法を論ずる。Computer Integrated Manufacturing (CIM) の計画学ともいえる。

B 332 工場計画特論 B (講) 0-2-2 (助教授 吉本 一穂)

レイアウトを主柱としユティリティ、コミュニケーション、マテリアルハンドリングの各システムを統合した工場の設計並びに運用について論じる。

選択上の注意：この講義は工場計画特論 A と補完的關係にあるので、これを聴講していることが望ましい。

B 340 設備管理及エンジニアリング・エコノミー (講) 0-2-2 (教授 石 館 達 二)

設備管理は設備の固有技術に基くことは当然であるが、企業における設備を対象とする場合は、その活動の範囲、程度を示すべき経済性の研究が不可欠である。

本講義は、設備の管理、保全活動をその活動により期待される機会利益との関係によって擱えることを中心に、保全制度、保全標準、保全効果の測定などについて、また設備計画については、エンジニアリングエコノミーの立場より投資に対する経済性研究の方法、考慮すべき問題点について述べる。

B 350 ヒューマン・リソース・マネジメント特論 (講) 2-0-2 (教授 尾 関 守)

まず、労務管理の本質的意義について究明し、労務管理研究の経営工学的接近について考察する。

第二に、労務管理の主要学説について論じ、わが国の労務管理論の本質と背景を探る。

第三に、労務管理の関連諸科学と、労務管理の方法科学としての体系化について論じる。

第四に、各論のうち、職務人事情報の活用、要員計画、資格制度等雇用管理上の I. E 的問題点、日本の賃金体系のあり方、労働時間短縮を含む作業条件管理の問題、職場モラルと生産性、動態的マネジメントと経営参画論、業務監査の一環としての労務監査体系等々、特に労務管理の今日的課題ならびに今後の問題点について考察する。

最後に、「現代労務管理」発展の動向として行動科学とシステム思考の導入にふれて説明する。

B 360 行動システム論 (講) 0-2-2 (教授 尾 関 守) (講師 宮 本 日出雄)

現代科学のニューフェースは、なんといっても、行動科学の出現と、システムズ・アプローチに代表される。

この講義では、学生に対し、まず行動科学的人間のモデルならびにシステムとしての人間行動過程を解説すると同時に、つぎにこれに対して意思決定論、一般システム理論を背景とした考え方にもとづく有機体としての企業行動の基本モデルを説明し、企業の行動理論について考察する。

従って、その内容を集約すると、次の四項目にまとめられよう。

1. 人間行動とシステム
2. 一般システム論と行動
3. 行動過程のシステム把握
4. 企業の行動理論

B370 環境工学特論 (講) 2-2-4

(教授 塩 沢 清 茂)
(教授 平 田 彰)

現在わが国は、環境に対する国民の強い関心と環境保全を求める社会的要請に支えられ、強力な環境保全対策が進められている。

本講義では、はじめに環境工学の構造にふれ、産業公害のうち、大気汚染、水質汚濁などの防止技術を述べ、また環境問題と社会との関連などについて論述する。

その主な内容はつぎの通りである。

1. 公害関係法令
2. 環境の現状と汚染の発生源
3. 環境問題
4. 大気汚染防止技術
5. 水質汚濁防止技術
6. 国または公共団体および企業の公害防止対策
7. 環境と社会、都市問題等

B380 エネルギー管理特論 (講) 2-0-2

(教授 塩 沢 清 茂)

現在省エネルギー対策は国家的見地のみならず、企業の合理化にとっても重要である。とくにエネルギーに関する諸問題の重要なわが国の現状からエネルギーの確保およびその有効利用は極めて重要である。本講義は省エネルギー対策として重要な基本的諸問題について述べる。

すなわち、まずわが国のエネルギー需給の現状について、つぎに生産を行なう場合のエネルギーコスト、熱および動力設備の技術および管理の広範面に亘る応用工学について述べる。同時に事例によってその内容の理解に便ならしめる。

さらに公害問題との関連に触れる。

B392 経営科学A (講) 2-0-2

(助教授 土 方 正 夫)

1. 意思決定論
2. 意思決定支援システム論

組織の環境適応過程を、意思決定とこれを支援する情報システムの両側面からとらえ、それぞれの概念、理論、技法について解説してゆく。意思決定支援システムについては、その有効性をめぐって様々な議論がなされているが、これらについても紹介してゆく予定

である。

B 393 経営科学B (講) 0-2-2

(助教授 村越稔弘)

経営科学の方法はどうして現場で使われないのか?

これまでのシステムアプローチの問題点をほりさげ、それへの対応として生まれてきた方法を検討する。人間を含むシステムの扱いが主題となる。(1)システムの考え方、(2)人間を含むシステムの特長性、(3)現在のアプローチ、(4)応用分野、危機管理、組織設計等の項目を扱う予定。

OR、システム理論の基礎知識を前提とする。

〔参考図書〕吉谷龍一、松田正一「システム設計の基礎と理論」泉文堂、1987。

B 394 応用統計学A (講) 2-0-2

(講師 宮崎晴夫)

応用確率論として次の内容の講義を行なう。

- (1) 確率および母関数
- (2) 複合分布と分枝過程
- (3) 再帰過程
- (4) ランダム・ウォークと拡散過程
- (5) マルコフ・チェイン
- (6) 出生死滅過程と待ち行列。

B 395 応用統計学B (講) 0-2-2

(講師 小林龍一)

多変量解析は最近コンピュータの利用と関連して有用性をまし、社会の各分野で活用されるようになった。そこで本講義ではコンピュータのプログラミングも言及しながら、重回帰分析・主成分分析・数量化理論の入門を講述する。基礎知識としては統計的考え方の理解があることが望ましいが、これは熱意があれば克服できるので、興味をもつ方の受講を期待する。参考書は小林竜一著相関回帰分析法入門(日科技連出版社刊)と同じく数量化理論入門(同上出版社)である。

B 400 工業管理会計 (講) 2-2-4

(講師 小沢康人)

製造企業における、経営意思決定および業績評価を行なうに必要な会計情報および会計情報システム研究の対象とし、つぎのような諸項目について講義する。

① 会計情報と会計情報システム——経営におけるその貢献 ② 問題発見のため会計情報分析と比較 ③ 利益計画：収益性と流動性、利益計画に必要な諸計算 ④ 予算編成と予算による統制 ⑤ 原価能率の評価に必要な計算 ⑥ 代替案の評価・選択：特殊原価調査 ⑦ 事業部制下の利益計画と業績評価 ⑧ 生産性分析 ⑨ 内部監査 ⑩ 工業管理会計における諸問題。なおこの講義は1年間で終了するため、履修者はあらかじめ

めつぎの図書を一読のうえ、出席されるよう希望する。

〔参考図書〕 伊藤 博著「管理会計の基礎」白桃書房 昭和45年
溝口一雄編「管理会計講義」青林書院新社 昭和47年

B 410 ソフトウェアマネジメント (講) 2-0-2 (教授 東 基 衛)

ソフトウェアの開発・流通・利用などのライフサイクルを通して管理的側面を述べる。特に生産性、品質のメトリクス、ソフトウェア生産のシステム化、品質保証、プロジェクトコントロール、人間要因などに焦点をあてる。

B 411 オフィス情報システム特論 (講) 0-2-2 (教授 東 基 衛)

学部4年のオフィス情報システムに接続し、オフィスワークステーション、分散システム、VANなどの要素技術およびシステム化技術、ヒューマンインタフェイス、ならびにセキュリティなどを中心に述べる。

B 610 生産管理演習 I 2-2-4

(教授 十代田 三知男)
(教授 片 山 博)

古典的生産管理の現行方式を理解させ、さらに新しい生産管理の手法と理論について、研究、演習を行なわしめる。

B 611 生産管理演習 II 2-2-4

(教授 十代田 三知男)
(教授 片 山 博)

生産活動の各分野における個々の問題について内外の研究論文および最近のトピックスを通じて研究に対するアプローチの方法を体得せしめると共に、システム理論、数理解析とモデル化及びシミュレーション技法を併用して生産管理システムの特性と設計を研究せしめる。

B 612 生産システム設計演習 I 2-2-4

(教授 中 根 甚一郎)

生産システム開発のための枠組みとしての生産戦略、経営環境の内容、動向を把握し、演繹的システム設計法にもとづき生産システム設計の演習を行う。演習は文献、事例および実際のケースを使って進める。

B 613 生産システム設計演習 II 2-2-4

(教授 中 根 甚一郎)

本演習は生産システム設計演習 I をさらに展開したものとして位置づけ、以下のような事項について設計演習を行う。

- ・脱工業化社会における新しい生産システムの開発
- ・生産システムの国際間移転および海外展開

◦ CIM (Computer Integrated Manufacturing) 開発

B 630 オペレーションズリサーチ演習Ⅰ 3-3-6 (教授 春日井 博)

生産・流通の各種の問題点の抽出、モデルの設計、シミュレーション等問題解決のプロセスについて論じ、国内、国外の文献特に外国文献・論文の輪読・討議さらには練習問題、ケース・スタディを行う。

本演習受講者は、オペレーションズリサーチ特論の履修をすること。

B 631 オペレーションズリサーチ演習Ⅱ 3-3-6 (教授 春日井 博)

生産・流通の各種の問題点の抽出、モデルの設計、シミュレーション等問題解決のプロセスについて論じ、国内、国外の文献特に外国文献・論文の輪読・討議さらには練習問題、ケース・スタディを行う。本演習受講者は、オペレーションズ・リサーチ特論およびオペレーションズ・リサーチ演習Ⅰを履修した者に限る。

B 640 品質管理演習Ⅰ 2-2-4 (教授 池 沢 辰 夫)

品質管理において、とくに

1. 管理図設計
2. 抜取検査設計
3. 実験計画設計
4. 信頼性解析

などに重点をおき、統計理論の応用による設計演習を行う。

B 641 品質管理演習Ⅱ 2-2-4 (教授 池 沢 辰 夫)

品質管理の管理面と手法面における内外の著名な文献について講読を行うと共に品質管理面における諸問題についての研究演習を行うものである。

B 650 情報システム演習A 2-2-4 (教授 平 澤 茂 一)

データの信頼性、データの圧縮ならびにデータの持つ基本的性質について情報理論、符号理論および数理論理学などを用いて研究する問題の中からテーマを選び文献輪読あるいは演習を行なう。

B 651 情報システム演習B 2-2-4 (教授 平 澤 茂 一)

コンピュータネットワーク、計算機を含むシステムの方式設計、評価、あるいはシステムの高信頼化などについて、システムのモデル化ならびにその解析を行なう問題の中からテーマを選び文献輪読あるいは演習を行なう。

B 655 ソフトウェア工学演習Ⅰ 2-2-4 (教授 東 基 衛)

ソフトウェア工学の基本的なツール及びその環境について演習を行う。開発環境としては UNIX をとりあげ、個人環境の設定、プログラム内部設計、作成、単体テストおよび文書化の基本的ツールを用いた演習を行う。

B 656 ソフトウェア工学演習Ⅱ 2-2-4 (教授 東 基 衛)

ソフトウェア工学の新しい技術、特に要求分析、プロトタイプング、自動生成、ソフトウェアCADなどについて、その利用、評価に関する演習を行う。

B 660 数理計画演習A 3-3-6 (教授 森 戸 晋)

整数計画、ネットワーク等の組合せ最適化問題を中心とした数理計画の理論およびアルゴリズムを文献論議や演習を通じて研究する。

B 661 数理計画演習B 3-3-6 (教授 森 戸 晋)

経営工学分野を中心として数理計画の応用をサーベイし問題点を分析すると同時にアルゴリズムの効率評価を検討する。

B 680 マーケティングリサーチ演習A 2-2-4 (教授 石 渡 徳 彌)

本演習は、主としてマーケティングリサーチに関連する諸手法、すなわち、経済時系列分析、計量モデル、数量化理論、サンプリング理論、調査の設計、消費関数、生産関数などに関する問題の中からテーマを選び、演習を行なう。

B 681 マーケティングリサーチ演習B 2-2-4 (教授 石 渡 徳 彌)

本演習は、主として企業のマーケティング活動に関する経済、社会環境の諸問題や経営情報システムの問題などについて演習を行なう。

B 700 作業研究演習A 2-2-4 (教授 横 溝 克 己)

作業研究に関する実際の問題を提起し、その処理や解決方法を研究する。演習方法としてはケースメソッド授業方式により進めてゆく。必要に応じ工場において検討することもある。

作業研究特論を受講することが望ましい。

B 701 作業研究演習B 2-2-4 (教授 横 溝 克 己)

作業研究に関する種々の問題について、内外の文献、研究を参照しながら討論を進めてゆく。その他とりあげる問題としては作業方式、事務・間接作業の測定、集団作業と個人作業における作業管理、今後の諸問題(自動化、工業ロボット、高年令者労働、障害者労働)

働)にも言及する。

作業研究特論を受講しておくことが望ましい。

B 702 応用ロボット工学演習Ⅰ 2-2-4 (教授 長谷川 幸 男)

従来人間が行っていた作業をロボットに置換する場合に、最適なロボットの仕様を決定し、他の機器と併せて作業システムを構築するための作業解析や作業システム設計技法について実際の作業を対象に演習を行なう。

B 703 応用ロボット工学演習Ⅱ 2-2-4 (教授 長谷川 幸 男)

応用ロボット工学演習Ⅰに同じ。

B 710 工場計画演習A 2-2-4 (助教授 吉 本 一 穂)

生産の場である工場の設定は、そこで行われる生産活動を規制することになる。とくに立地、建屋・設備のレイアウト、物の流れいかんは生産の成果に大きな影響を与える。本演習は主として、このレイアウト、物の流れについて内外の研究および事例を検討し、これらの計画を策定せしめるものである。

B 713 工場計画演習B 2-2-4 (教授 高 橋 輝 男)

生産システムはCAD/CAMおよび生産管理など情報処理システムと物を直接扱かう加工、組立、搬送、保管、検査などが一体となってトータルシステム化されつつある。本演習ではこうしたシステムの設計について内外の技術動向を理解し、検討して、基礎的な部分を固め、新しい技術開発の準備を行なう。

B 711 設備管理及エンジニアリングエコノミー演習 2-2-4

(教授 石 館 達 二)

設備の計画、選定、取得後の管理方式の設定、保全水準の決定、保全の効果測定などにつき、技術的および経済的な側面より、演習問題、文献を通じて検討を加える。

B 712 プラントエンジニアリング演習 2-2-4 (教授 石 館 達 二)

(助教授 吉 本 一 穂)

生産の場としての工場の総合的な計画をするために、物質の流通・設備・建設・保全の諸計画、プラントレイアウト、エンジニアリングエコノミーなどの問題について、これらの分析、総合化を文献に基づく演習およびフィールドスタディの実施を通じて行う。

B 720 ヒューマンリソースマネジメント演習A 2-2-4

(教授 尾 関 守)

この演習では、労務管理、行動科学などの主要学説、労務管理と関連諸科学との関係、

並びに方法科学としての労務管理など、労務管理の基礎理論について、内外の文献にもとづいて研究する。従って、ここでは労務管理原論、労務管理学の背景であり、基礎科学である産業心理学、産業社会学、労働経済学、労働医学、労働法学等々との関係、労務管理手法体系の研究、人間行動モデル、企業行動理論等々についての歴史的名著、基礎的原典についてゼミを行う。

B 721 ヒューマンリソースマネジメント演習 B 2-2-4

(教授 尾 関 守)

演習 B では、労務管理の現代的課題について研究する。最近における学会発表論文、学術雑誌論文を素材として研究指導すると同時に、毎年国により発表される「労働白書」を中心として、労務政策の流れ、労務問題の動向、について分析検討し、今後の労務管理の課題について研究ゼミを行う。

B 730 環境工学演習 I 2-2-4

(教授 塩 沢 清 茂)

文献研究演習として、公害に関する関係法令、人体及び動植物等への影響、公害に関する調査研究、国または地方公共団体の防止設計、公害防止技術等の重要な課題について最近発表されている内外の論文を選んで調査、検討する。

B 731 環境工学演習 II 2-2-4

(教授 塩 沢 清 茂)

論文作成のための研究として、現在つぎのようなテーマによって行われている。

環境アセスメントに関する研究

大気汚染の予測と制御

光化学大気汚染

酸性雨

熱エネルギーの有効利用と環境汚染

省エネルギー

以上のテーマについての内外の文献の演習及び研究実験を行なう。

B 732 管理システム分析実習 3-3-2

(教授 十代田三知男, 池沢 辰夫)
(助教授 片 山 博)

工業経営において、生産をはじめ品質、設備、工程、人間関係、原価などの各種の管理システムの研究をすすめる場合、実際の現象を常に理論と対比しながら研究することが必要である。特に管理システムの研究においては研究室内で実験操作することは困難であるから、企業の実現象について調査実習する必要がある。従って、この実習では種々の IE 的あるいは QC 的システム改善手法を実際の場に適用することを通じて、理論と実際の現象の関係を知らると同時に、理論を理解しそれを発展させるための問題点の把握をねらいとする。

電 気 工 学 専 攻

電気工学専門分野

C010 確率システム研究

(教授 秋月 影 雄)

実際のシステムは多かれ少なかれ不規則な外乱を受けているので、このような入力を受けたり、パラメータ変動を伴うシステムの研究を主として理論的な面からおこなうもので、信号の処理、雑音をうけるシステムの解析、推定、同定、制御などについての理論的な研究のほか、システムの異常検知などの具体的な問題も取り扱っている。特に知識工学的アプローチに最近の関心がある。

C011 情報システム研究

(教授 白井 克 彦)

人間の言語機能を中心に色々な角度から研究を進めている。主なテーマは、音声、自然言語、図形の情報処理およびマン・マシンインターフェースに関する諸問題である。これらの情報処理を効果的に実行するハードウェアとソフトウェアの実際的な研究も取り上げている。

C020 計 算 機 研 究

(教授 門 倉 敏 夫)

デジタル計算機のハードウェアとソフトウェアに関する分野、特にロジックを通じてのCAD 問題、システムプログラムの諸問題を研究する。

C021 計算機制御研究

(教授 成 田 誠之助)

計算機制御システムは、計算機技術、制御技術、および通信技術を複合したものである。最近の研究テーマは、分散制御システムのシステム・アーキテクチャ、並列処理システム、汎用スーパーコンピュータなどである。

C022 計算機工学研究

(助教授 笠 原 博 徳)

C023 計算機ソフトウェア研究

(助教授 深 沢 良 彰)

C030 制 御 工 学 研 究

(教授 示 村 悦二郎)

システムの制御における諸問題の理論的研究の指導をおこなう。最近の主なテーマは、むだ時間系の制御理論、多変数制御系の設計理論、分布定数系の最適制御理論などである。理論の展開にあたっては、完璧な数学的厳密さが、要求されることは当然であるが、現実

のシステムはおける技術的要請をどのようにとらえ、どのような方向に理論を構築していくかという問題が、工学における理論にとっては特に重要で、この点に注意して指導をおこなう。

C031 制御工学研究

(教授 小林 精次)

制御工学が対象とするシステムは非常に多方面に及び、数学的手法も多彩であるが、本研究では主として大規模多変数システム、未知あるいは変動パラメータを含むシステムの制御問題をいろいろな角度から研究する。最近の主なテーマは、適応制御系の構成理論、あいまい制御器の設計法、多変数制御系の設計問題、列車群の制御手法などである。

C032 制御工学研究

(教授 内田 健康)

計測制御における諸問題の理論的研究を行う。大規模システムの低次元モデル化、最適制御、推定および情報構造の問題、測定系の最適化、むだ時間を含むシステムの推定・制御問題が主なテーマとなる。

C040 半導体工学研究

(教授 木俣 守彦)

固体電子素子を実現するために必要な物性的諸問題に関する研究を行う。即ちその素材の選定、単結晶及び薄膜形成及びその評価、物理現象の組合せによる機能素子実現の可能性の追究などを行う。

C041 半導体工学研究

(教授 尾崎 肇)

新しい電子素子をめざした電子材料および固体内電子の動的現象の研究を目的とする。現在は、1. 層状構造物質の電子状態、2. 非晶質半導体の電子状態、3. 半導体の非線形伝導、4. 近接系の超伝導 を主テーマとしている。各主テーマ内で各人が適度な独立性と関連性を有する具体的テーマをもって研究する。

C042 半導体工学研究

(教授 鈴木 克生)

半導体工学の分野は日進月歩の発展をしている。既に見出されている現象の正しい理解と物質の示す新しい機能の発見のために電子物性の基礎を研究することを目的とする。

C050 電気機器研究

(教授 小貫 天)

電気エネルギーに関係する機器についての研究を行うが、当分、リニアモータ、超電導機器、磁気浮上、パワーエレクトロニクスなどが主たる課題である。他に自動制御用機器や電磁流体機器なども考えられる。研究の手法として、有限要素法や境界要素法などの解析、メカトロニクスの実践面が必要である。

C 051 電気機器研究

(助教授 石山 敦士)

電気機器の設計・制御に関する研究を行う。最近の主なテーマは、超電導応用機器並びに電磁界数値解析法とそれに基づく電気機品の最適設計である。

C 060 電力システム研究

(教授 田村 康男)

電力システムは多種かつ多数の要素から成立ち、エネルギーと情報が共存するシステムの典型で、幾多の制約・環境条件のもとで、合意された目標を達成すべく計画・運用されている。

また電力システムはトータルエネルギーシステムの構成要素として、今後開発される新エネルギー源との協調を迫られている。

境界領域に留意しつつ、電力システムを理論と実際の両面から理解させ、これを通じてシステム一般に対する研究能力を養って行きたい。

C 061 電力システム研究

(教授 岩本 伸一)

特にコンピュータを利用した電力システムの解析、制御、運用手法の研究を行なう。現在用いられている技術の改善と、将来用いられるであろう技術の開発に主眼を置く。数値解析、システム工学等の適用も、具体的な電力システムを用いて考慮する。

C 070 高電圧工学研究

(助教授 入江 克)

電気エネルギーの生成・輸送・変換を対象とした高電圧現象の工学的応用の研究を行う。

高電圧印加時の気体の絶縁破壊現象の制御応用及びその結果として生ずるプラズマの保持、加熱、診断、データ処理を通じての制御、応用を直接のテーマとする。

具体的には早稲田大学新概念プラズマ実験装置(FBX)、プラズマ診断システム(レーザー、分光システム)、大電力制御システム(投入器、遮断器)を中心とした総合システムの制御、運営を行う。高電圧工学に関する物理現象の解明、工学としての応用、プロジェクトの運用法についての研究指導を行う事を目的とする。

C 071 高電圧物性研究

(教授 大木 義路)

電気電子材料の主として高電界下、または放射線照射下における電気物性、光物性について研究を行なう。(1) プラズマ CVD による有機薄膜の作成と評価、(2) 光ファイバの放射線物性と光物性、(3) 高分子絶縁材料の高次構造と電気的性質の関係、が主なる課題である。

C 080 回路理論研究

(教授 松本 隆)

電気回路網の解析および合成に関する研究を行なう。特に非線形回路網に重点をおき、

トポロジー構造と素子特性の相互依存関係を解明する事を目的とする。現在のテーマは電子回路の chaos, neural networks 等である。

C210 確率システム理論A (講) 2-0-2 (教授 秋月 影 雄)

信号のスペクトル解析の理論と計算機処理法について講義する。フーリエ変換, 定常確率過程, サンプリング定理等の基礎理論にひきつづいて, FFT (高速フーリエ変換) によるノンパラメトリックなスペクトル解析法をのべる。さらにAR (自己帰帰) モデルにもとづくパラメトリックな解析法についてのべ, レビンソン・ダービン, バーク, 共分散法などのアルゴリズムを紹介する。

C211 確率システム理論B (講) 0-2-2 (教授 秋月 影 雄)

不規則に変動する入力やパラメータをもつダイナミカルシステムの理論について講義する。マルコフ過程, 確率微分方程式についての解説が主体となるが, 物理系の確率微分方程式による表現, モーメント解析, 確率密度関数の決定など工学的な応用を考慮して講義する。

C220 情報システム論 (講) 2-0-2 (教授 白 井 克 彦)

デジタル信号処理, 統計的パターン認識, 音声情報処理, 画像処理などのうちいずれかについて講義する。計算機および線形システムに関する初歩的な知識を仮定する。

C230 計算機特論 (講) 2-0-2 (教授 門 倉 敏 夫)

Logic を通して Digital System を論じ, Case study として特定の計算機の理論設計を詳述して行く。

選択上の注意: 学部当該学科程度の計算機に関する論理知識が必要である。

C240 計算機制御 (講) 2-0-2 (教授 成 田 誠 之助)

計算機制御システムの中核となるミニコンピュータ, マイクロコンピュータのシステムアーキテクチャ, ソフトウェア, 通信技術, 応用事例を講ずる。

C250 非線形システムの安定論 (講) 0-2-2 (教授 示 村 悦二郎)

非線形常微分方程式で記述されるシステムの安定問題を扱う。リアプノフの安定論を基礎とし, さらにポポフの安定理論を用いて, 制御系の絶対安定の問題を考察する。

C260 最適制御理論 (講) 2-0-2 (教授 内 田 健 康)

最適制御理論は, 与えられたシステムの制御において, もっともよい制御方策を見いだす問題に対して数学的解法を与えるもので, 近代制御理論の中心的課題の一つである。最

適制御の研究は年々発展しているが、この講義では、すでに体系のととのったいくつかの理論を解説し、この分野で研究を進めようとする者に対して基礎知識を考えることを目的とする。

C270 半導体工学 (講) 0-2-2 (教授 木 俣 守 彦)

半導体物性及びその Devices としての応用。

選択上の注意：量子力学の入門程度の講義をうけていることがのぞましい。

C280 固体電子工学 (講) 2-0-2 (教授 尾 崎 肇)

固体内電子の動的ふるまいについて講義する。

C290 固体論 (講) 2-0-2 (教授 鈴 木 克 生)

半導体、半金属、金属における電子状態、輸送現象(電気伝導、熱伝導)、および光学的、磁氣的性質について述べる。

選択上の注意：物性論、量子力学および統計力学についての初歩的な知識をもっていることを仮定する。

C300 エネルギー機器工学 (講) 2-0-2 (教授 小 貫 天)

電気-機械間のエネルギー変換を中心に、エネルギー変換の機器に関する理論について述べる。可動部のある場合の電磁現象についての電磁界微分方程式の解法とくにその境界要素法および有限要素法による数値解法について詳述する。

C310 電気機器工学 (講) 2-0-2 (助教授 石 山 敦 士)

超電導現象を応用した電気機器について論じる。特に超電導マグネットの安定化技術について詳述する。

C320 回路理論 (講) 0-2-2 (教授 松 本 隆)

電気回路網の解析および合成に関する基本的諸事実を学ぶ。特に非線形回路網に重点をおく。内容は次の諸項目を含む：素子特性の記述(抵抗、キャパシタ、インダクタ、メモリスタ)、 n -ポート、相反性、歪相反性、エネルギー、パワー、受動性、能動性、実質受動性、Kirchhoff 則の代数トポロジック的特徴付け、着色枝定理、Tellegen の定理、状態と状態方程式、Lyapunov 安定性、混合ポテンシャルと Gradient システム、電子回路の Chaos。

C330 線形システム理論 (講) 2-0-2 (教授 小 林 精 次)

線形システム理論への入門である。工学に現れる種々の現象を、ダイナミカルシステム

として把握することを目的とする。内容に次の諸項目を含む：状態方程式，状態遷移行列，零入力応答，零状態応答，可制御性，可観測性，安定性，Kalman 正準構造，実現問題，状態観測器など。

C340 電力回路（講） 2-0-2 （教授 田村康男）

本講では電力回路を広義に解釈する。つまり，電力システムの構成要素の特性，電気機械現象などを個々に述べるのではなく，電力システムの計画と運用の見地から問題向きに電力回路の定式化，特性評価，簡略表現とその応用を講述する。

342 電力システム工学，141B 数値解析の履修を希望する。

C350 電力系統理論（講） 2-0-2 （教授 岩本伸一）

電力系統の解析，制御，運用に用いる理論を概説し，実系統へのシミュレーションを例証する。内容は，電力潮流計算，過渡安定度計算，故障計算，サージ計算である。講義は英語で行なう。

C360 高電圧工学（講） 0-2-2 （助教授 入江克）

この10年間に急激な発展をとげた，核融合研究，レーザー工学研究等を通じ開発された新しい高電圧機器に見られる放電現象について論じる。

学部課程の高電圧工学の知識をもっている事を仮定する。

C370 プラズマ・ダイナミックス（講） 2-0-2 （助教授 入江克）

1980年代のブレイクイーブン条件に近い大型トカマクの高 β 化研究のプロセスで発見された今後の核融合炉開発に不可欠の種々のプラズマの性質を論じる。

学部課程の核融合工学の知識をもっていることを仮定する。

C380 誘電体電子物性（講） 2-0-2 （教授 大木義路）

誘電体の電子状態，とくに高電界下での電子の挙動について述べる。

C390 計算機アーキテクチャ特論（講） 2-0-2 （助教授 笠原博徳）

C400 ソフトウェア工学（講） 0-2-2 （助教授 深沢良彰）

C610 確率システム理論演習Ⅰ 2-2-4 （教授 秋月影雄）

確率システムに関する基礎的な著書を選んでゼミをおこなう。

C 611 確率システム理論演習Ⅱ 2-2-4 (教授 秋月 影 雄)

確率システムに関する最近の論文を選んでゼミをおこなう。また、時としては受講者の研究成果について検討もおこなう。

C 620 情報システム論演習Ⅰ 2-2-4 (教授 白井 克 彦)

計算機利用における基礎事項について演習を行う。一つは、実データを扱おう際の基礎を身につけることで、理論の修得と実際の演習を行う。もう一つはミニコンおよびマイクロプロセッサの応用に関するもので、ネットワークなどのハードウェアあるいはソフトウェアのいずれかについて演習を行う。

C 621 情報システム論演習Ⅱ 2-2-4 (教授 白井 克 彦)

音声、聴覚、言語などの関係の文献の輪講を行う。

C 630 計算機特論演習Ⅰ 2-2-4 (教授 門 倉 敏 夫)

デジタル計算機のソフトウェアに関する文献をセミナー形式で進めて行く。

C 631 計算機特論演習Ⅱ 2-2-4 (教授 門 倉 敏 夫)

デジタル計算機のハードウェアに関する文献をセミナー形式で進めて行く。

C 640 計算機制御演習Ⅰ 2-2-4 (教授 成 田 誠之助)

計算機制御システムに関するいくつかのテーマにつき、文献研究を行なう。

C 641 計算機制御演習Ⅱ 2-2-4 (教授 成 田 誠之助)

各自の修士論文研究テーマに関連する文献を中心にセミナー形式で行なう。

C 642 計算機工学演習Ⅰ 2-2-4 (助教授 笠 原 博 徳)

C 643 計算機工学演習Ⅱ 2-2-4 (助教授 笠 原 博 徳)

C 644 ソフトウェア工学演習Ⅰ 2-2-4 (助教授 深 沢 良 彰)

C 645 ソフトウェア工学演習Ⅱ 2-2-4 (助教授 深 沢 良 彰)

C 650 制御工学A演習Ⅰ 2-2-4 (教授 示 村 悦二郎)

既成の制御理論に関する理解を深めるために、制御理論の分野から適当なテーマを与え、一連の重要な文献を研究した結果をまとめて発表する形式をとる。

C651 制御工学A演習Ⅱ 2-2-4 (教授 示村悦二郎)

修士論文の研究テーマあるいは関連するテーマに関する自己の理論的展開を報告し討論することにより、研究のまとめ方を体得させ、あわせて批判力の養成を目指す。

C660 制御工学B演習Ⅰ 2-2-4 (教授 小林精次)

制御工学全般にわたって必要な幅広い素養を身につけることを主たる目的として、ゼミナール形式により、内外の名著、重要な学術論文を研究し、併せて問題発見能力と発表能力を育成する。

C661 制御工学B演習Ⅱ 2-2-4 (教授 小林精次)

独創力と問題解決能力を育成することを主目的として、各自、具体的なテーマについて関連する文献を調査し、未解決の問題を探り、問題解決の方向を摸索して研究成果を発表する。

C670 制御工学C演習Ⅰ 2-2-4 (教授 内田健康)

システム制御の研究に必要な基礎的知識を深めることを目的として、既成の制御理論、情報理論から適当なテーマを選び文献研究を行う。

C671 制御工学C演習Ⅱ 2-2-4 (教授 内田健康)

各自の研究テーマに関する理論的展開を報告し討議する。

C680 半導体工学A演習Ⅰ 2-2-4 (教授 木俣守彦)

半導体工学の物性的基礎を確立するための文献研究。

C681 半導体工学A演習Ⅱ 2-2-4 (教授 木俣守彦)

半導体工学に於けるトピックス及び研究テーマに関する文献研究。

C690 半導体工学B演習Ⅰ 2-2-4 (教授 尾崎肇)

固体電子工学の基礎的知識として必要な物性論のうちからテーマを選び、テキストを定めて輪講する。

C691 半導体工学B演習Ⅱ 2-2-4 (教授 尾崎肇)

各自の研究に直接関係のある原著論文を輪講する。

C700 半導体工学C演習Ⅰ 2-2-4 (教授 鈴木克生)

固体物性論における適当なテーマについて本を決めセミナーを行う。

選択上の注意：物性論，量子力学，統計力学についての初歩的な知識をもっていることを仮定する。

C701 半導体工学C演習II 2-2-4 (教授 鈴木 克 生)

半導体基礎論の分野でその時点におけるトピックスについて文献を指定してセミナーを行う。

選択上の注意：物性論，量子力学，統計力学についての初歩的な知識をもっていることを仮定する。

C710 電気機器工学A演習I 2-2-4 (教授 小 貫 天)

修士1年生を対象とする輪講である。題材は，内容が基礎的で，文章が平易かつ名文である欧文の成書より選ぶ，内容は年によって異なるが，電気エネルギーに関する機器や解析法について取り扱う。

C711 電気機器工学A演習II 2-2-4 (教授 小 貫 天)

修士2年を対象とする輪講で，各自の研究分野における論文誌掲載論文を中心に検討・論議を行うものである。また各自の研究成果についても発表討論する。

C720 電気機器工学B演習I 2-2-4 (教授 小 貫 天)

電気機器について適当なテーマを選び，ゼミナール形式による文献研究を行う。

C721 電気機器工学B演習II 2-2-4 (教授 小 貫 天)

各自選択した研究の報告と討論を行う。

C730 回路理論演習I 2-2-4 (教授 松 本 隆)

電気回路網の解析および合成に関する重要な文献を輪講する。

C731 回路理論演習II 2-2-4 (教授 松 本 隆)

電気回路網の解析および合成に関するテーマを各自が選び，研究内容を報告，討論する。

C740 電力システム工学演習I 2-2-4 (教授 田 村 康 男)

電力システムは技術上の新陳代謝が極めて活潑で，man-made system でありながら時として未知の現象が現われる分野でもある。理論と実際の融合が強調されるゆえんである。

また電力システム工学は多くの境界領域にかかわり合いを持つので，回路や制御に関す

る理論，コンピュータのソフトウェアとハードウェア，情報伝送さらにに経済学をも充分理解し，広い視野に立って研究を進める必要がある。

このような環境をふまえて，電力システムの総合的理解をはかるべく，ゼミナール，演習，実験，見学などを有機的に組合せて行きたい。

C741 電力システム工学演習Ⅱ 2-2-4 (教授 田村 康男)

電力システム工学演習Ⅰの基本方針に沿いながら，電力システムに対する理解をさらに深める。

C750 電力系統理論演習Ⅰ 2-2-4 (教授 岩本 伸一)

電力系統理論に関する基礎的な文献を輪講し，コンピュータ実習および討論等を通して総合的理解をはかる。

C751 電力系統理論演習Ⅱ 2-2-4 (教授 岩本 伸一)

電力系統理論に関する最新の文献を学会誌等より選び，検討を加え，最終的には各自の研究の完成を導く。

C760 高電圧工学演習Ⅰ 2-2-4 (助教授 入江 克)

高電圧工学，放電工学，核融合工学，プラズマ工学に密接に関連した諸文献を基に，各種実験を行い，高電圧工学上の諸問題の整理を行っていく。これにより各人の研究テーマの理解を深め，研究方針をたてる素地をはぐくむ事を目的とする。

C761 高電圧工学演習Ⅱ 2-2-4 (助教授 入江 克)

高電圧工学演習Ⅰではぐくまれた諸知識を更に発展させ，自ら学術論文を書き，発表する事により新たな研究の発展に貢献できる事を目的とする。

C770 高電圧物性演習Ⅰ 2-2-4 (教授 大木 義路)

電気電子材料の高電界下での電気物性について内外主要文献を用いて研究する。

C771 高電圧物性演習Ⅱ 2-2-4 (教授 大木 義路)

Ⅰと同様に文献研究を行う。また，必要に応じて受講者各自の研究成果について検討を加える。

電子通信学専門分野

D010 回路工学研究

(教授 平山 博)

電気回路網の解析, 特に大規模回路網をコンピュータにより解析するための手法を研究し, さらに一般的な組合せ問題に対するヒュリスティック算法について研究を行う。

また通信網のトラフィック制御, 網の信頼性向上のための網管理などについて, グラフ理論を用いた基礎理論の研究を行う。

D011 情報通信網研究

(教授 富永英義)

電話網, データ通信, コンピュータネットワーク, 等の情報の流れを対象とする網に関係する研究を行なう。

情報網の要素としての, コンピュータで代表される情報処理装置の構造や情報の表現と処理方式に関する基礎的な問題ととりあつかい, 必要に応じて, システムモデルを作り, 装置実験を行なう。また情報網の機能と構造を対応した情報の流れの問題, を定式化し, 体系化する研究を行なう。回路網理論の手法を利用して, 網のモデル化をおこない, 網のモデルに対する理論的な研究を行ない, その理論の検証のために必要に応じて, 計算機シミュレーションを行なう。

D012 ネットワーク・システム研究

(教授 大附辰夫)

回路理論, グラフ理論, 計算機プログラミング, 通信理論, 等が修得されていることを前提として, これらを応用して大規模システムを計算機を利用して解析・設計するための理論と手法についての研究を行う。具体的な課題として, アルゴリズムとデータ構造, ヒュリスティック算法, LSIの配置配線設計, 通信網の設計, 道路交通網のシミュレーションなどについての研究を行う。

D020 情報システム工学研究

(教授 小原啓義)

知識処理を中心とした情報工学についての研究指導を行なう。ハードウェア又はソフトウェアの一方に偏ることなく広く情報工学の各分野にわたり研究している。現在の主な研究テーマは次の通り。複合計算機システム, 並列処理, アルゴリズム論, パターン認識, 信号処理, 自然語理解, 知的CAI, 人工知能など。

D021 情報通信基礎研究

(教授 堀内和夫)

情報理論・通信理論・言語理論・計算理論・回路網理論・システム理論・信頼性理論・制御理論・波動理論・電磁界理論など, 情報と制御に関するいくつかの分野の中から各人が特定の課題を選び, その数学的理論について研究指導を行なうものである。

そのため、研究の手段としての数学的手法の十分な啓発を要求すると共に、課題がもつ本来の意義に関する深い検討をつねに課している。

D 022 情報数理工学研究 (助教授 大石 進一)

情報工学における諸問題や非線形理論等を中心に主に理論的・数理的研究を行う。

D 023 情報構造研究 (教授 村岡 洋一)

人工知能、ソフトウェア工学、アーキテクチャ等広い範囲からトピックを集め、先進的なコンピュータ(ソフト・ハード含む)構築のために必要な技術について研究する。具体的なテーマとして、並列処理アーキテクチャ、神経回路網、知識表現用言語、マルチメディアデータベース等が対象となる。ソフトウェア、ハードウェアの両面から、コンピュータの新文化を追求する。

D 030 光・電波工学研究 (教授 香西 寛)

本研究室においてはマイクロ波、ミリ波回路並に回路素子の研究を行っている。特に誘電体線路及回路素子の解析と実験研究に力を入れている。また InAs 及 InSb を用いた固体プラズマによるマイクロ波発振素子の研究も行っている。

D 031 光・電波工学研究 (教授 副島 光積)

本研究においては、電波の周波数を、電波法に規定される VLF から、マイクロ波、ミリ波等を経て可視光線に至るまでのすべてのスペクトルに関し検討を行う。電波の発生に関しては、諸種の電子管や半導体素子に基く発振源につき、また電磁放射に関しては、線状アンテナや各種開口アンテナあるいは Phased Array などや、受光、発光素子に至るまでを網羅する。また電波伝搬に関しては、VHF よりマイクロ波、ミリ波、さらに光波の伝搬を学ぶので電磁気学と光学の研究は最も重要である。

D 032 光・電波工学研究 (教授 加藤 勇)

本研究は低周波から高周波、マイクロ波、さらに光波に至る領域の電波と物質との相互作用の解明とその工学的応用について研究するもので、おもにプラズマ現象、量子電子現象、電気・磁気光学現象を中心にし、各種のレーザとそれらの媒質、および得られた光波の応用として光伝送回路(ファイバ、薄膜光導波路)、導波形光回路素子など、また光子材料およびその応用として光子工学などを研究対象として取り扱う。

D 033 光・電波工学研究 (教授 高畑 文雄)

D 040 電子工学研究 (教授 伊藤 糾次)

機能デバイス、超高速デバイスの開発を目的とする半導体材料ならびに、イオンと固体

の相互作用に基づく電子物性に関する研究を行う。例えば、(1)固体へのイオン注入効果、(2)イオン後方散乱効果、(3)ヘテロ接合構造、(4)イオン化分子線エピタキシー、(5)レーザCVD、等の研究ならびにデバイスへの応用とそのための基礎技術の開発。

D041 電子工学研究 (教授 内山明彦)

本研究では医用電子工学と生物学とを主として扱っている。近年は医学においても電子計測をはじめ情報処理など多くの分野に電子工学技術が用いられている。例えば、循環系の計測、バイオテレメトリ、筋電のパターン認識などが当研究でのテーマである。

また、生物の優れた機能を解析し、これを工学に取り入れるために呼吸系をはじめ種々のシミュレーションの研究を対象としている。

D042 電子工学研究 (教授 大泊 巖)

電子新素材およびその製法に関する基礎研究を界面科学の観点から行う。最近とり上げている具体的なテーマは次の通りである。

固体界面の原子的尺度での構造と物性
マイクロイオンビームの応用
ソフトデバイスの探索

D050 音響工学研究 (教授 伊藤 毅)

音響工学およびオーディオ工学の研究者または技術者に必要な学識および技術を修得させることを目的として演習、実験および研究指導の形で教育する。

主な研究分野：音響学の基礎理論、電気音響、音響機器、音響測定、室内音響、騒音制御、振動防止、水中音響、録音および再生、オーディオ工学、その他。

選択上の注意：振動、波動の基礎理論、電気回路理論、電子工学、情報工学および電子計算法の基礎的知識を十分に修得していることを必要とする。

必要な外国語：英語および独語を主にするが、まれに仏語の文献を読む。

D210 情報回路工学 (講) 2-0-2 (教授 富永英義)

データ通信、電子交換のシステム機成論、およびメモリ装置の基礎と応用を講ずる。特に次の項目を中心に講ずる。

- (1) 情報処理装置の構造と構成
- (2) 通信ネットワークにおける情報制御手順
- (3) 情報処理システムの信頼性とシステム構成
- (4) メモリ素子、装置の原理と構造
- (5) メモリアクセス方式
- (6) ファイルメモリ処理方式

(7) セル構造をした論理回路

D220 電磁気学特論 (講) 0-2-2 (教授 副島光積)

学部の電磁気学に接続して、その advanced course を講述する。すなわちマクスウェルの理論を電磁界の興味ある諸問題、特にマイクロ波回路、アンテナ、あるいはマイクロ波電子管などに適用し、電磁気学の理解を深めると共に、工学上の諸問題への応用に重点をおく。

選択上の注意：電磁気学ならびに回路理論に関し一通り理解を必要とする。

D230 情報システム工学 (講) 2-0-2 (教授 小原啓義)

ハードウェア、ソフトウェアを含めて情報処理システムに関するトピックスを講義する。講義内容は年度初頭の講義の際発表する。

選択上の注意：学部において情報処理又は電子計算機に関する単位を修得していること。

D240 電子材料 (講) 0-2-2 (教授 伊藤糾次)

固体電子デバイスに用いられる材料のうち、主役的な半導体（元素半導体および化合物半導体）を取りあげ、まずその物性と構造の関係、ならびに単結晶化の問題について述べる。ついで、デバイスとするために必要な不純物制御、エピタキシャル成長等の問題について、半導体物理・化学に基づく考察を加味しながら講述する。また、必要に応じて、その評価方法についても概説する。

D250 音響工学 (講) 2-0-2 (教授 伊藤毅)

音響工学技術者または研究者として、必要な学識を修得させることを目的として、現代音響工学に含まれている主要な問題について講義する。

選択上の注意：振動、波動の基礎理論、電気回路理論および電子工学の基礎的知識に習熟していることを必要とすると共に372音響工学4単位を修得していることを前提とする。

D260 回路工学 (講) 2-0-2 (教授 平山博)

グラフ理論を用いた、回路網の一般理論の講義を行い、線形活性回路網の解析について話をし、さらに非線形回路を機能回路としての見方について講義する。

D270 マイクロ波回路 (講) 2-0-2 (教授 香西寛)

導波管伝送系を中心とし、基本的な各種マイクロ波電送系の理論的解析について論じ、併せて最近のトピックス的な問題についても言及する。

D 280 システム解析特論 (講) 2-0-2

(教授 堀内和夫)
(助教授 大石進一)

この講義は、関数解析の提供してくれる手段を用いて情報伝達・制御システムなどのダイナミックシステムを解析する方法論の概略ならびにその応用例について講述するものである。完備距離空間における Banach の縮小写像の原理から出発して陰関数定理を示し、また、有限次元空間における連続作用素に関する Brouwer の不動点定理を説明し、ついで、Banach 空間におけるコンパクト集合の性質に関連して Schauder 型の不動点定理をみちびく。さらに、Krasnosel'skii の摂動理論を説明する。そして、これらの数学的原理・定理をシステム解析のために順次適用して行く。取扱う対象は、主として非線形連続システムである。

D 290 半導体計測 (講) 2-0-2

(教授 大泊 巖)

主としてイオンを用いる半導体物性の測定法について、原理および測定技術を講義し、最新の測定例の紹介ならびに解説を行う。

D 300 生物工学特論 (講) 2-0-2

(教授 内山明彦)

学部の生物工学を基礎とし、更に高度の生物機構までを対象とする。神経方程式から入り、神経回路網の動作を電子回路網モデルによってシミュレーションした結果、感覚系のモデル、記憶のモデルなどを扱う。更に、生物体内の多重帰還制御系として、循環系、呼吸系などについても講義を行なう。

D 310 光・量子電子工学 (講) 0-2-2

(教授 加藤 勇)

気体レーザーを中心にして、レーザーの励起・発振機構とその媒質としてのプラズマ特性について論じ、さらに基礎・応用に関する二、三の最近のトピックスについて解説する。

選択上の注意：電子物性、プラズマ電子工学について、一通りの知識のあることが望ましい。

D 320 電子回路の CAD (講) 0-2-2

(教授 大附辰夫)

先ず近年の VLSI 設計の基本的な流れおよび関連した CAD 技術について概説する。次に大規模システムの解析を前提としたプログラミング技法を修得させる。引き続き、論理シミュレーション、回路シミュレーション、デバイスのモデル化、テストパターン生成、レイアウト設計／検証、テスト容易化設計、レイアウトの標準化方式など基本的な CAD 関連技法について解説する。

D 330 情報処理システム設計 I (講) 2-0-2

(教授 村岡洋一)

並列処理等の最新のコンピュータアーキテクチャ及びソフトウェア科学のトピックを講

義する。

D 331 情報処理システム設計Ⅱ (講) 0-2-2 (未 定)

D 340 衛星通信工学 (講) 0-2-2 (教授 高 畑 文 雄)

D 610 回路工学演習Ⅰ 2-2-4 (教授 平 山 博)

電気回路網の解析のために必要なグラフ理論の知識を習得するための演習を行い、さらに CAD の基礎となる電気回路網解析に対する各種の手法を演習する。

D 611 回路工学演習Ⅱ 3-3-6 (教授 平 山 博)

最適化問題のための手法として、リニヤプログラミングLP、ダイナミックプログラミングDP、ブランチバウンド法をとりあげて演習を行う。回路網の信頼性に関する演習を行い、さらにコンピュータを用いた計算法を習得させるために、問題を作製して実際のプログラムを作る。

D 620 情報通信網演習Ⅰ 2-2-4 (教授 富 永 英 義)

専門部門における基礎的な知識の習得と整理を目的として、テーマに応じた文献を体系的に調査した報告書にまとめる。また、それら先人の成果の検証を行なうために、適当なテーマを選んで、電子計算機シミュレーションを行ない、その結果を研究報告の形式をとった報告をせしめる。

さらに、それらの結果にもとづき、新しい問題点、未解決な問題、の所在を明確にせしめ、研究テーマの方向づけを行なうものとする。

D 621 情報通信網演習Ⅱ 3-3-6 (教授 富 永 英 義)

修士論文として報告をせしめる研究テーマに関連した演習とする。

テーマの進捗状況に合わせて、研究報告の形式をとった中間報告をせしめる。演習の手段としては、調査、装置実験、計算機シミュレーション理論研究、を含むものとする。

D 630 ネットワーク・システム演習Ⅰ 2-2-4 (教授 大 附 辰 夫)

大規模システムの解析・設計のために必要な計算機のプログラミング技法とその実システムへの適用例に関する最新の文献を中心として研究討論を行う。

D 631 ネットワーク・システム演習Ⅱ 3-3-6 (教授 大 附 辰 夫)

修士論文の研究テーマに関連した基本的問題についての研究討論をし、問題の解法を計算機プログラムとして具現して、理論と手法の実証を行う。

D640 情報システム工学演習Ⅰ 2-2-4 (教授 小原啓義)

情報工学における主要な文献をセミナー形式により研究討論する。

D641 情報システム工学演習Ⅱ 3-3-6 (教授 小原啓義)

情報工学に関する論文をセミナー形式により研究討論する。

D650 情報通信基礎演習Ⅰ 2-2-4 (教授 堀内和夫)

R2105情報工学研究(堀内和夫)に関連した演習科目で、あらかじめ選定された特定の課題に関する主要文献をえらび、その内容を精読して、えられた成果の本質について十分な検討を加えることにより、特定課題に対するその文献の寄与を評価させる。

D651 情報通信基礎演習Ⅱ 3-3-6 (教授 堀内和夫)

情報工学B演習Ⅰに続く演習科目で、あらかじめ選定された特定の課題に関するいくつかの検討事項について、詳細に調査、検討し、かつ討議を行なう。この演習の成果は逐次的に修士の学位論文作成への段階として生かされることになる。

D660 情報数理工学演習Ⅰ 2-2-4 (助教授 大石進一)

情報工学や非線形理論の最新のトピックスを選び、関連する文献の輪講や問題点の抽出等の検討を行う。

D661 情報数理工学演習Ⅱ 3-3-6 (助教授 大石進一)

情報工学演習Ⅰ等を通じて明らかになった研究課題について討論を行う。

D670 情報構造演習Ⅰ 2-2-4 (教授 村岡洋一)

アーキテクチャ及びAⅠ関連の主要文献について、研究討論を行なう。

D671 情報構造演習Ⅱ 3-3-6 (教授 村岡洋一)

修士論文研究テーマを中心に、研究報告及び討論を行なう。

D680 光・電波工学A演習Ⅰ 2-2-4 (教授 香西寛)

マイクロ波回路の基本精密測定について演習ならびに実験を行う。

D681 光・電波工学A演習Ⅱ 3-3-6 (教授 香西寛)

マイクロ波回路の応用測定につき演習ならびに実験を行う。

D 690 光・電波工学B演習I 2-2-4 (教授 副島 光 積)

- (1) 電磁波源, 光源 (たとえばレーザー) など
 - (2) アンテナ: 線状アンテナ, 各種開口アンテナ, その他の特殊アンテナ, 光波に対しては適当な受光素子など
 - (3) 電波伝搬, 光波の伝搬 (光伝送路, optical fiber など含む)
 - (4) 低雑音受信機など
- に関する興味ある問題につき演習を行う。

D 691 光・電波工学B演習II 3-3-6 (教授 副島 光 積)

電波工学B演習Iに接続して, その Advanced course に関し演習を行う。

特に衛星通信をはじめとする Global な情報伝送やミリ波以上光波までの波長の短い領域の電波工学が重要な課題になると思われる。

D 700 光・電波工学C演習I 2-2-4 (教授 加藤 勇)

電波と物質との相互作用を理解し, その工学的応用に関する基礎知識を得させるため, 毎年著書または論文を選定し輪読を行なう。

D 701 光・電波工学C演習II 3-3-6 (教授 加藤 勇)

電波工学研究に関連した文献の調査および検討した結果を報告させ, 各人の成果に基づき本研究に必要な理論, 実験, 計測技術の修得を目的とした指導を行なう。

D 705 光・電波工学D演習I 2-2-4 (教授 高畑 文雄)

D 706 光・電波工学D演習II 3-3-6 (教授 高畑 文雄)

**D 710 電子工学B演習I 2-2-4 (教授 伊藤 糾次)
(教授 大泊 巖)**

電子工学研究の実施に必要な基礎知識に関する問題を取りあげ, 主として文献にもとづいた演習を行なう。

**D 711 電子工学B演習II 3-3-6 (教授 伊藤 糾次)
(教授 大泊 巖)**

電子工学研究に必要な新しい理論, ならびに実験, 分析技術の修得を目的として, 文献を交えた演習を行なう。

D 720 電子工学C演習I 2-2-4 (教授 内山 明彦)

本研究においては生物の感覚器などの中から各人が選び, これについてモデルを設計する。その結果を電子通信特別実験においてシミュレーションする。

D721 電子工学C演習Ⅱ 3-3-6 (教授 内山明彦)

演習Ⅰで設計したモデルについて解析を行ない、さらに細かなモデルを作り検討を加える。

D730 電子工学D演習Ⅰ 2-2-4 (教授 大泊 巖)

固体の結晶構造および不完全性、イオンと固体の相互作用、薄膜の構造と物性に関する知識を修得させるために、原著の輪読、国内外の学術雑誌の関係発表論文の調査を行う。

D731 電子工学D演習Ⅱ 3-3-6 (教授 大泊 巖)

結晶成長、イオン注入、薄膜の形成など固体デバイスの製法に関する基礎知識を修得させる。また、電子顕微鏡、電子スピン共鳴、イオンの後方散乱などの固体物性測定手段の原理、使用法、測定データの解釈のしかたについて指導する。

D740 音響工学A演習Ⅰ 2-2-4 (教授 伊藤 毅)

音響工学研究者として必要な文献の研究および音響工学に関する新しい分野の開発研究を行なう。

D741 音響工学A演習Ⅱ 3-3-6 (教授 伊藤 毅)

音響工学に関する新しい分野の開発研究を行ない、論文作成の資料を作る。

D750 電子通信特別実験 3-3-2 (全 教 員)

本実験は前期課程第1年次において高度の専門技術を修得するために、各部門ごとに関連したテーマを選定して実験を行う。各人はそれぞれが所属している部門において準備されたテーマについて指導教員の指導にしたがい実験計画を作成する。次にこの計画にしたがって実験を行い、結果を報告書にまとめて指導教員に提出する。

建設工学専攻

建築学専門分野

E 010 建築史研究 (教授 渡辺 保 忠)

建築は時代の下部構造としての生産技術や生産関係に密接に関連するばかりでなく、上部構造としての時代精神や価値観の変革と無関係であり得ない。したがって建築は、超時間的理論では創造し得ず、その創作方法論は歴史的時間の把握を必要とする。本学の建築史研究は、ただ単に過去の建築を研究することにとどまらず、このような建築創造における理論的背景の学たることを目的とし、その成果としての建築論を重視し、その理論の実験としての設計に関心をもつ。

E 011 建築史研究 (教授 中 川 武)

建築の歴史的考察を通して、建築表現と設計方法および設計技術の体系との関連を追究する。建築学的方法の探究としての、建築の歴史概念の創造を目標とする。

E 020 建築計画研究 (教授 石 山 修 武)

E 021 建築計画研究 (教授 穂 積 信 夫)

建築計画における設計方法の研究を行う。作品研究、作家研究、設計方法論、かたちの意味論などを通して、自己の設計方法の確立を目的としている。

E 022 建築計画研究 (教授 池 原 義 郎)

建築制作を中心とし、設計者としての視点に立っての建築計画、設計理論、意匠論の研究を行う。

E 023 建築計画研究 (教授 渡 辺 仁 史)

建築空間を利用する人間の行動モデルの研究を中心とし、単に施設の使われ方を調査するだけではなく、それを設計にフィードバックするための理論を追求する。

E 030 都市計画研究 (未 定)

E 031 都市計画研究

(助教授 佐藤 滋)

都市計画の計画技術と居住環境の形成の関連を歴史的視点もふまえて調査分析を行う。特に住宅系の居住地における計画方法論の確立を主眼として研究する。

E 032 都市計画研究

(教授 戸沼 幸市)

人間の居住環境を自然、人間、人工の三つの要素に分け、それらを規模、密度、動きの三つの側面から個別にあるいは全体的に研究し、その成果を居住環境の計画につなげていく。

E 040 建築構造研究

(教授 風間 了)

基礎、地盤を考慮した建築物の振動性ならびに建築の耐震設計に採用すべき入力地震波のモデル化に関する研究を行う。

E 041 建築構造研究

(教授 松井 源吾)

建築構造に加わる外力は静的なものとしては「垂直荷重」がある。床、梁はこれを柱に伝えるが、その伝達方法の計画を「膜の撓みとの相似」、「ホログラフ」の利用などの実験と弾性理論と併行して研究する。動的なものとしては、「地震動」「動風圧」について、これらをランダム過程として実測および理論的に研究し建物の振動と関連させる。

外力による各種構造物に起る応力を求める手段としては「光弾性実験」を用い、その力の流れを研究し、構造物の設計に役立てることを目的とする。

E 042 建築構造研究

(教授 谷 資信)

建築構造の耐震性を評価するためには、建築構造を構成するフレーム、耐震壁、ブレースなど、すなわち、耐震要素の復元力特性と配置とを知ることが重要である。

本研究では、主に鉄筋コンクリート耐震要素に注目して、地震応答に関連する復元力特性とその配置の効果について、理論的ならびに実験的方法による研究を行う。

E 043 建築構造研究

(教授 田中 弥寿雄)

平面板・曲面板につき海洋波ならびに外周地盤等との相互作用問題を取扱う。また鉄筋コンクリート短柱の地震時の性状につき考究する。

E 044 建築構造研究

(教授 古藤田 喜久雄)

構造物の基礎構造について、土質力学の基盤に基づいた研究を対象とする。このほか静力学的問題については、がけ災害の問題なども対象とするほか、地震時について地盤震害など、防災の見地による問題を研究の対象とする。

E 045 建築構造研究

(助教授 西谷 章)

E 050 建築設備研究

(教授 井上 宇市)

建築設備工学に関する高級技術者および研究者の養成を目標とする。すなわち各種の実験、実習、演習を行い、学部において学修した設備工学の基礎知識の把握を確実なものとすると同時に、より高度の技術を研修する。

研究課題としては、電算機による機器のシミュレーション、室内空気分布、設備システムの最適設計、電算機制御などを対象とする。

選択上の注意：空調機および設備実習を履修していること。

E 051 建築環境研究

(教授 木村 建一)

建築環境設計に関する研究を行う。環境問題・エネルギー問題に対処しつつ、特に熱環境の調整と体感評価および自然エネルギー利用の研究に重点を置いている。学部において、環境工学関係の科目を多く習得していることが望ましい。

E 052 都市環境研究

(教授 尾島 俊雄)

建築・都市・社会システムのあり方と実態を研究することで、特に問題が顕著化してきた都市の環境問題を学ぶ。学部においては環境計測、設備実習、広域環境論などを選択しておくことが望ましい。

E 060 建築材料及施工研究

(教授 田村 恭)

建築生産の基本となる建築材料、施工法並びにこれに関連する諸技術について、調査や研究を行なう。特に建築材料に関しては、各種の材料の特性について理論的ならびに実験的研究を行う。また、建築施工に関しては、建築産業の正しい発展の姿を志向しつつ、資材・労務の在り方、生産システムをめぐる諸問題について、経営工学的な追究をする。

E 061 建築材料及施工研究

(教授 神山 幸弘)

建築物の実体として構法をとらえ、構法計画のプロセス、性能、各部位構法、工業化構法、生産性など構法設計の原理とその実際について考究する。

E 062 建築材料及施工研究

(教授 嘉納 成男)

建築工事における計画、管理をめぐるシステムズアプローチ、OR技法の理論と実際の研究を通じ、建築工事マネジメント・システムの在り方並びにその確立に要求される法論を考究する。

E 210 建築史 (講) 2-2-4

(教授 渡辺 保忠)

建築生産史を講述する。一般に考えられる狭義の〈生産史〉の範囲ではなく、〈建築における上部構造と下部構造との関連について〉が主要な考察の対象となるはずである。

E 220 建築美学および建築論 (講) 2-2-4 (教授 中川 武)
(講師 上松 佑二)

「よい建築」であることの判断の根拠において、建築美学および建築論の占める役割は大きい。近代建築における方法論史の具体的展開として講述する。

E 230 建築計画 A (講) 0-2-2 (教授 石山 修武)

E 231 建築計画 B (講) 0-2-2 (教授 穂積 信夫)

クラスに参加する各自の学部卒業計画を紹介し、その作品を通して設計方法と表現を検討する。その過程において、他の建築家の作品を例証し、時代の表現としての意味を討論する。設計を専攻する学生のセミナー形式で授業を行う。

E 232 建築計画 C (講) 2-0-2 (教授 池原 義郎)

E 240 建築設計計画理論 (講) 2-2-4 (教授 渡辺 仁史)
(講師 中村 良三)

人間にとって好ましくない空間的状况を回避するためには、まず空間と人間の相互関係の現状を理解し、そして新しく提案する人間-空間のシステムを活用するモデルを作る必要がある。ここではそうした理解や創造的行動が特に問われる建設の企画段階で重要なテーマとなる施設規模、配置、経路問題決定のためのモデルを中心にして考えてみたい。また、実際に演習を通して理解を深める。

E 250 都市計画特論 B (講) 0-2-2 (講師 田村 明)

現代都市はさまざまな矛盾をたえず発生させる。しかし、多くの人々は都市を離れて生活することはできない。したがって矛盾を冷静に見極めながら、これを解決し、さらによりよい生活を求める都市づくりが必要である。いまのところ都市計画の理論と都市の現実にはかなりのギャップがあるが、実践の中で新しい都市づくりの方法を探索したい。一方的な講義ではなく、受講者との討論のなかでこれらの課題を検討したい。

E 251 都市計画特論 C (講) 0-2-2 (助教授 佐藤 滋)

地区レベルの居住環境改善計画の具体的事例をとり上げて、個々の事例ごとに問題の発生からそれへの対処、その成果等を分析し、各自の視点で今後の解決策を提示する。これらを通して、都市計画理念と方法論の展開過程を理解し、これからのあり方を追求する。

E 252 都市計画特論 D (講) 2-0-2 (教授 戸沼 幸市)

(スケール論を基礎とした都市設計論)

人間尺度論を基礎にして人間の居住環境の設計方法をゼミナール形式で問題にする。

E 260 建築構造A (講) 2-2-4

(教授 谷 資 信)
(講師 桜 井 謙 爾)

主として、耐震構造に関する基礎的事項について述べる。

内容としては、耐震理論、耐震計画、耐震設計、弾塑性構造解析などが含まれている。

選択上の注意：学部における専門選択科目のうち、建築構造力学(Ⅱ)、建築振動学、地震工学および構造設計(A)、(B)、(C)、建築構造計画、構造実習を履修していることが望ましい。

E 261 建築構造B (講) 2-2-4

(教授 田中弥寿雄)
(講師 堀江文雄)

曲面論にもとづき、弾性論の一般基礎方程式を誘導し、各種解法について述べ、また塑性論に基く解説を行う(田中)。種々の形式にて表現された仮想仕事の原理を、構造物系の弾性解析および弾塑性解析に応用する仕方と解析例を説明する(堀江)。

選択上の注意：学部における専門選択科目のうち、建築構造力学(Ⅱ)構造実習(A)、(B)を履修していることが望ましい。

E 262 建築構造C (講) 2-2-4

(教授 松井源吾)
(講師 田治見 宏)

建築構造物の地震応答解析に関連する各種の動的問題、および、地盤における波動伝ばについて述べる。(田治見)

材料力学の補講として、単純応力、曲げ、ねじり、応力集中、熱応力、材料の破損について詳細に説明し、併せて光弾性との関連をのべる。(松井)

E 270 振動論 (講) 0-2-2

(教授 風間 了)

多自由度系の振動を仮想仕事の原理を用いて記述して、これを一般座標で表わすことによりラグランジェの運動方程式を誘導する。ラグランジェの運動方程式を活用して、各種の運動方程式の導入の手法を示す。

モードの直交性を証明して、このモードの直交性を応用して各種の多自由度系(絃、縦振れ、剪断、曲げ等)のモーダル解析の手法を明らかにする。

E 280 建築基礎工学 (講) 2-2-4

(教授 古藤田 喜久雄)

基礎地盤の物理的、力学的諸性質およびその調査法に関する問題点、弾性理論による地中の応力およびひずみ分布と地盤反力係数理論との関係、直接基礎およびくい基礎の鉛直方向および水平方向支持力の問題、さらに基礎の動的問題として、地盤の震害、くい基礎の地震時の挙動について考え講述する。

E 290 地震学 (講) 2-0-2

(講師 笠原 慶一)

最近における地震学の成果をふまえて、震源モデルにはじまり、そこから放出された地震波がどのように伝わり、地表付近に到達した地震波が地下構造の差異によりどのように変形されるか等、震源からサイトに至る地震波の挙動について講義する。なお、受講にあたって、特に予備知識は必要としない。

E 300 建築設備工学 (講) 2-0-2

(教授 井上 宇市)

建築設備のより高度の技術を学修するために配管内の圧力変化、機器と配管系の圧力バランス、省エネルギー方式、地域暖冷房、空調調和機器内の物質移動などについて講述する。

選取上の注意：設備基礎理論 (I) (II) および空調調和設備を履修していること。

参考書：藤田重文，化学工学 (I)

E 310 建築環境論 (講) 2-0-2

(教授 木村 建一)

建築計画における環境工学上の興味ある諸問題について講述する。熱、湿気、空気、音、光などの各種環境要素の外乱に対し、建築環境空間に生ずる種々の応答を解明することによってシステムティックな環境設計の方法を追求する。

E 311 自然エネルギー論 (講) 0-2-2

(教授 木村 建一)

各種の自然エネルギー利用の方法とその意義について理解を深め、エネルギー問題の将来に関連して自然エネルギー利用の位置づけを論ずる。内容は、太陽熱給湯・暖房・冷房、パンプシステム、太陽電池、地熱発電、風力、波力、小水力、海洋温度差発電、バイオマス、ソーラーボンドなどを扱う。

E 320 都市環境論 (講) 2-0-2

(教授 尾島 俊雄)

都市環境をインフラストラクチャーとスーパーストラクチャーに大別し、そのインフラストラクチャーの中でも機械系と自然系の関連を中心に講述する。これ等の関連でも物理系と社会系に関して出来得る限り実施例を挙げて論じ、今後の都市開発に伴う技術的諸問題について講義する。

E 330 設備特論A (講) 0-2-2

(講師 吉川 光雄)

最近の建築物は、インテリジェント化の方向にあり、熱源機器を含めて空調システムも省エネ性だけでなく、細分化への対応、負荷変動に対するスムーズな追従性等が強く要求されてきている。多岐に亘る熱源機器から、その建物に最適なものを選ぶことが我々に要求される。本講では、空調設備用熱源機器の特性、構造、使用限界、問題点を幅広く理解

できるようカリキュラムを組み、OHPの活用の他、見学会も行う。対象機器は各種冷凍機、ヒートポンプ、ボイラ、ポンプ等とする。

E 331 設備特論B (講) 2-0-2 (講師 前田 宗 治)

建築設備における自動制御および中央監制について最新の技術(コンピューターコントロール)などを含めて講述する。

E 332 設備特論C (講) 2-0-2 (講師 李 春 夫)

E 333 設備特論D (講) 0-2-2 (講師 村 上 處 直)

E 340 建築材料 (講) 2-2-4 (教授 田 村 恭)

各種の建築材料の性質を建築物の性能との関連において講じ、設計・施工管理上の要点の把握に役立たせる。又建築生産方式の変革期において、新材料並びに新技術を開発する上での理念についても講述する。

選択上の注意：学部にお築いて建材料学Ⅰ、Ⅱ及びⅢを修得していることが望ましい。

E 350 建築施工A (講) 2-0-2 (講師 伊 藤 得 平)

建築物に対する工事管理の考え方は、TQCの導入に伴ない近年急速な変化を示しつつある。そこで、関係技術者の持つべき施工への新しい理解について、工事中や工事後に起り勝ちなトラブルの実態をふまえながら、以下に重点を置いて講述する。

- 1) 施工対象の捉え方
- 2) 施工の川上管理と設計
- 3) 工事管理の手法と考え方

E 351 建築施工B (講) 0-2-2 (教授 田 村 恭)

本講は学部、大学院を通じて進められて来た建築施工に関する講義の総括として、建築生産活動の中で重要な地位を占める技術の研究開発について講述する。

内容は、過去における建築技術の発展の経緯、建設業の特質、その技術の特質、研究開発の一般的仕組み、建設業における研究開発活動の内容とその特質などである。

E 360 建築生産論 (講) 2-0-2 (講師 岩 下 秀 男)

建築生産活動を狭義の技術問題に止めずに、社会科学的な観点をも含めた複合的な視点に立って理解する。

具体的には、①建築需要の量と質、②建築産業の構造特性、③建設労働問題、④契約発注方式、⑤建築費、⑥建築の生産性、等を中心にとりあげる。

E 370 建築構造法 (講) 2-2-4 (教授 神山 幸弘)

架構、壁、床、天井、屋根などの建築部位の構成原理について述べるとともに建築生産との関連においてこの問題をとらえ、構法設計の理論と実際について講述する。

E 380 建築生産管理 (講) 2-2-4 (教授 嘉納 成男)

建築生産における工事過程を中心に、合理化の考え方とその管理的側面について講義する。講義項目は次の通りである。

①日本の建設産業と建設業、②建築工事と管理、③建築工事における管理手法、④工事計画のアルゴリズム、⑤ネットワーク・ベースド・マネージメント、⑥建築工事の情報管理

E 390 空間構成論 (講) 0-2-2 (講師 鈴木 恂)

建築計画の分野において、空間論はどのような意味をもち、どのように成立しているのか。空間概念の多様な展開を概観しつつ、それを建築計画の主軸に据え直して、多面的に考察しようとする。その考察を通して〈もの〉としてとらえられる建築を空間の側から再検討してみる。同時に空間実現のための諸方法を示す実例をもって、具体的で視覚的な講義を行なう。

E 610 建築史A演習I 2-2-4 (教授 渡辺 保忠)

建築書における古典の文献として木割書を取りあげ、これの読解力を養う演習を行う。

E 611 建築史A演習II 2-2-4 (教授 渡辺 保忠)

一定の主題を定め受講者が分担研究し、その成果の討論と講評を通じて、研究方法の基礎を習得する。

E 620 建築史B演習I 2-2-4 (教授 中川 武)

古建築の多角的解析を通して時代の建築表現の構造を把握する。

E 621 建築史B演習II 2-2-4 (教授 中川 武)

一定の主題のもとに受講者が分担研究し、各自の発表と討論、講評を通じて、建築史方法論の基礎を習得する。

E 630 建築設計計画A演習I 2-2-4 (教授 石山 修武)

E 631 建築設計計画A演習II 2-2-4 (教授 石山 修武)

E 640 建築設計計画B演習I 2-2-4 (教授 穂積 信 夫)

設計課題に対し、その制作過程において、機能の把握と意味の表現、技術の選択と総合の演習を行う。個人別単独設計を行うが、その他に協同解析を課すことがある。

E 641 建築設計計画B演習II 2-2-4 (教授 穂積 信 夫)

各人の選択する限定された研究題目について、個別指導を行う。研究題目は、設計理論および設計手法に関するもの他に、単独設計計画を選択することができる。

E 650 建築設計計画C演習I 2-2-4 (教授 池 原 義 郎)

共通の課題をもとに、原則として各個人ごとに設計・制作の演習を行う。課題によっては、グループ制作を行うこともある。

E 651 建築設計計画C演習II 2-2-4 (教授 池 原 義 郎)

各自の研究テーマをもとに、設計計画制作、或は理論展開のための演習を行う。

E 660 建築設計計画D演習I 2-2-4 (教授 渡 辺 仁 史)

指定したテーマに従って各自行動モデルの作成あるいは作成あるいは調査報告書を作成し、人間と空間との関わりを基礎的把握を行なう。

E 661 建築設計計画D演習II 2-2-4 (教授 渡 辺 仁 史)

各自が設定したテーマに基づき、文献研究、討論によって論文または計画案を作成する。

E 670 都市計画B演習I 3-3-6 (未 定)

E 671 都市計画B演習II 3-3-6 (未 定)

E 680 都市計画C演習I 3-3-6 (助教授 佐 藤 滋)

具体的な場所とテーマを設定し、問題の定位から分析、計画提案までを共同で行う。各自の研究テーマをふまえつつ、総合的視点で都市計画に取り組み、演習を行う。

E 681 都市計画C演習II 3-3-6 (助教授 佐 藤 滋)

各自の研究テーマに基づき、関連する計画事例の分析評価を行い、修士論文に結びつく演習を行う。

E 690 都市計画D演習I 3-3-6 (教授 戸 沼 幸 市)

テーマを定めて共同研究を行う。

E 691 都市計画D演習Ⅱ 3-3-6 (教授 戸 沼 幸 市)

各人のテーマの展開を論文または計画案としてまとめる。

E 700 建築構造A演習Ⅰ 3-3-6 (教授 風 間 了)

E 701 建築構造A演習Ⅱ 3-3-6 (教授 風 間 了)

演習Ⅰは内外の文献研究に基づくゼミナールによって、基礎、地盤を考慮した建築物の振動性状と入力地震波を追究するとともに、演習問題によって理解を深める。演習Ⅱは演習Ⅰを発展継続させる。

**E 710 建築構造B演習Ⅰ 3-3-6 (教授 松 井 源 吾)
(助教授 西 谷 章)**

外国図書、主としてティモセンコの諸著書をテキストとして演習し、数学と力学と現象との関連を把握せしめる。

**E 711 建築構造B演習Ⅱ 3-3-6 (教授 松 井 源 吾)
(助教授 西 谷 章)**

外国の諸論文をテキストとし、その検討と応用について研究し、演習する。

E 720 建築構造C演習Ⅰ 3-3-6 (教授 谷 資 信)

耐震構造に関連のある基礎的な内外文献資料について、各自の研究目標にあわせて研究し、それにもとづく構造解析の演習を行う。

E 721 建築構造C演習Ⅱ 3-3-6 (教授 谷 資 信)

耐震構造に関連のある内外文献資料についての研究を、各自の修士論文に関連させて行い、具体的な構造解析演習を行う。

E 730 建築構造D演習Ⅰ 3-3-6 (教授 田 中 弥寿雄)

曲面板の線形および非線形応力解析に関し、静的荷重および動的荷重に対して有限要素法その他の解法による研究を行う。

E 731 建築構造D演習Ⅱ 3-3-6 (教授 田 中 弥寿雄)

鉄筋コンクリート構造につき研究を行う。特に鉄筋コンクリート短柱の地震時の挙動を実験研究ならびに有限要素法等に基く解析により追究する。

E 740 建築構造F演習Ⅰ 3-3-6 (教授 古藤田 喜久雄)

土質力学および基礎構造を対象とした地盤の性質について、基本的な問題を対象にした演習のほか、本研究に関する解析学についての演習を行う。

E 741 建築構造 F 演習 II 3-3-6

(教授 古藤田 喜久雄)

構造物の基礎構造について、応用的な問題の演習、とくに防災的な問題についての演習を行う。

E 750 建築構造 G 演習 I 3-3-6

(講師 桜井 譲爾)

構造物の静力学、動力学の解析問題について、個別に研究課題を与え、その課題について文献研究、解析方法の検討、数値解析を行ない、その中間段階、最終結果を題材として討論を行う。

これらの過程を通じて構造解析についての基礎技術、知識を体得できるよう計画している。

選択上の注意：学部の建築構造関連科目ならびに大学院における関連科目を履修していることが望ましい。

E 751 建築構造 G 演習 II 3-3-6

(講師 桜井 譲爾)

建築構造 G 演習 I で体得した知識技術を基にして、建築構造、特に金属構造物の構造解析、耐震設計に関して、関連分野をも含めた課題を個別に与え、その文献研究、中間結果、最終成果について討論を行う。

これらの過程を通じて、建築構造学に対する総合的な知識技術を体得しうよう計画している。

選択上の注意：建築構造 G 演習 I を履修していること。

E 760 建築設備演習 I 3-3-6

(教授 井上 宇市)

自動制御理論、線形計画法、ダイナミック計画法、システムシミュレーション、エコロジなどに関する外国文献の輪読を行い、設備基礎理論の学修を行う。

E 761 建築設備演習 II 3-3-6

(教授 井上 宇市)

各自の研修している専門に関する内外文献に関する輪読および討論を行う。

E 770 建築環境演習 I 3-3-6

(教授 木村 建一)

建築環境設計に関する文献研究を通じて、外国文献の理解力を養い、研究の方法や動向について考究せしめる。

E 771 建築環境演習 II 3-3-6

(教授 木村 建一)

建築環境設計に関する文献研究に基いて、応用演習課題を課し、研究論文の作成に役立たせる。

E 780 都市環境演習 I 3-3-6 (教授 尾 島 俊 雄)

世界各都市のインフラストラクチャー、環境容量の実態から原単位を計算することや、外国文献によって算定手法の各様を学ぶ。又随時演習を課する。

E 781 都市環境演習 II 3-3-6 (教授 尾 島 俊 雄)

都市環境を計測する方法を学ぶ。リモートセンシング、パーセプション、アセスメント等の手法を用いて、日本各都市の実態を算出する。文献の輪講や演習によって更に体験を深める。

E 790 建築材料及施工 A 演習 I 3-3-6 (教授 田 村 恭)

外国文献による各自の研究発表並びに輪講を通じて、広く建築材料及び施工研究の理論や動向を考究する。また、文献蒐集と整理の手法、情報管理の在り方についても学習する。

E 791 建築材料及施工 A 演習 II 3-3-6 (教授 田 村 恭)

文献による課題研究を行うほか、演習を課する。

E 800 建築材料及施工 B 演習 I 3-3-6 (教授 神 山 幸 弘)

外国文献による各自の研究発表並びに輪講によって建築構法の理論や動向について考究せしめる。また随時演習を課して学習を行う。

E 801 建築材料及施工 B 演習 II 3-3-6 (教授 神 山 幸 弘)

年間数テーマを設定し、内外の文献調査により、その内容をまとめ、各自の研究発表を行うとともに討論を通じて構法研究を追求する。

E 810 建築材料及施工 C 演習 I 3-3-6 (教授 嘉 納 成 男)

各自の研究テーマに関する外国文献の抄録及び発表を通じて既往の研究の学習並びに文献調査の方法を習得する。

E 811 建築材料及施工 C 演習 II 3-3-6 (教授 嘉 納 成 男)

文献輪講とそれに関する電子計算を用いての演習

**E 820 建築史調査・実習 6-6-4 (教授 渡 辺 保 忠)
(教授 中 川 武)**

夏休の集中授業として古建築の実測とその実測図作製を習練する。有機的な曲線を主とする古建築の実測とその製図は難しく、古建築の基本的な理解、実測方法の工夫、摺本・写真技術など、多くの手ほどきを必要とするが、なしとげたあとに得られる自信は大きい。

また一つの建築を木割の解析，改造の痕跡や文献史料を駆使しての復元過程の考察等，総合的に研究することの意義は大である。

土木工学専門分野

F 010 構造設計研究 (教授 村上博智)

土木構造物のうち，主として地中構造物を取りあげて，その合理的設計法について研究する。

F 012 構造解析研究 (教授 平嶋政治)

土木構造物の構造解析を，理論的実験的に研究する。

最近，特に重点を置いている問題は，薄い板の集合からなる構造部材が，圧縮，曲げ，振りなどの作用を受けるときに生じる断面形状の変化に伴って現われる構造工学上の諸問題である。

F 014 コンクリート工学研究 (教授 関 博)

コンクリート構造物に関して，機械的ならびに構造的立場から研究を行なう。前者については，内部鋼材の腐食と防食対策ならびに設計への反映の手法，特殊な混和剤によるコンクリートの品質改良などである。後者は限界状態設計法を研究の主体とし，使用限界におけるひびわれの問題などを構造設計的に検討する。

F 011 構造設計研究 (教授 堀井健一郎)

土木構造物のうち主として橋梁構造を取りあげてその合理的設計法を研究する。直接の対象とする項目は設計荷重の決定，解析モデルの想定，耐荷力の評価，設計・製作・架設の精度等に関する諸問題である。なお橋梁を主たる対象とする理由はこれが比較的取扱いやすい構造物であるからであって，研究の目標としては他の一般構造物への拡張を念頭においている。

F 013 構造解析研究 (教授 宮原 玄)

構造物の挙動は有限の自由度を有する離散系または無限の自由度を有する連続系によって表現される。1950年代以来発展を続けているマトリックス構造解析法は前者に属する。すなわち，構造物を有限要素によって離散化し，要素に設けた節点における力・変位関係式を誘導し，変位の適合条件および力の平衡条件を適用して構造解析を行う。

ここでは，マトリックス構造解析法およびその応用例として地盤・基礎・構造系の相互作用問題を研究する。

F 020 都市計画研究

(助教授 中川 義 英)

都市計画、地方計画および国土計画の制度・技法の歴史の変遷、都市問題と都市問題、都市活動の将来予測と各種都市施設の適正配置及びその為の技法と技法の開発、等について講義及び各種演習を通して研究し、高度な技術を附与することを目的とする。

都市計画・都市工学は各種工学の組み合わせの上になりたつものであることを銘記の上科目を選択されるよう期待する。

F 030 土質力学研究

(助教授 赤木 寛 一)

土の力学的性質を徹視的観点から詳細に解明し、それに基づいて実際の土木工事に伴う地盤挙動の合理的な評価・予測に関する研究を行う。軟弱地盤のシールドトンネル、開削盛土工事に伴う地盤挙動および地震時の地盤の力学性状などを主な研究対象とする。

F 031 土質施工学研究

(教授 森 麟)

土質工学と土に関係する施工学の分野を取扱う。このうち主として土質安定、構造物基礎、掘削、盛土、地中構造物、トンネル、シールド工法などについての設計施工にかかわる理論を対象とする。

F 040 水工学研究

(教授 吉川 秀 夫)

河川および水資源開発に関する計画、設計などについて理論的、実験的に研究する。このうち主として開水路流れの特性、流砂、拡散などを対象とする。

F 041 水工学研究

(教授 銚川 登)

水工学のうち海岸工学、水文学および河川工学に関する研究を行う。波動現象、流出現象、開水路の流れの現象、治水計画などについて研究する。

F 042 水工学研究

(教授 遠藤 郁 夫)

水工学研究は上水道工学、下水道工学、および、河川における水質汚濁制御に関する研究、更に、汚染土壌の安定化に関する研究などについても研究を行なう。

F 050 土木数理解析研究

(教授 依田 照 彦)

土木構造物の力学的挙動を、解析的に研究する。

研究の対象は、非線形問題、座屈・耐力問題、弾塑性問題などである。

F 210 地中構造特論 (講) 2-2-4

(教授 村上 博 智)

構造物をかこむ周辺の地山又は地盤の性質および施工法などが構造物の強度と変形に対して大きな影響を与える地中構造物の一般的特性および設計法について述べる。

F 220 構造解析特論 (講) 2-2-4 (教授 平嶋 政治)

弾性力学に基礎をおいた構造部材の静的安定問題を解説する。

古典的線形理論の位置づけ、飛移問題、分岐問題、平衡方程式による解法、エネルギー法による解法などをドイツ語の文献を用いて講義する。

なお、ドイツ語の予備試験を実施する。

F 230 コンクリート工学特論 (講) 2-2-4 (教授 関 博)

コンクリートの基本的物性について述べ、さらに、コンクリート構造の限界状態設計法(終局一断面破壊、使用一ひびわれ、疲労)について講義する。

F 240 構造設計特論 (講) 2-2-4 (教授 堀井 健一郎)

構造物の設計に関連する具体的事項の中から問題点を指摘し、現在行われている実状を解説すると共に将来の動向を検討する。

年度によってとりあげる問題は多少の変更を行う予定であるが、設計の基本概念・設計荷重・安全性の考え方・応力調整・接合法・耐震および耐風設計・二次応力等を対象とする。

F 250 構造力学特論 (講) 2-2-4 (教授 宮原 玄)

マトリックス構造解析法について解説する。この解法によれば、構造解析の基本原理にたしかえて、解析方法を一般的に記述することができ、また統一的に把握することができる。ここでは、変位法と応力法についてのべた後に両者の双対性を明らかにする。また、理解を深めるために、基本的な静的問題を演習として課す。

**F 260 応用弾性学 (講) 2-2-4 (教授 村上博智)
(教授 宮原 玄)**

構造物設計上の力学的基礎概念への寄与を目的として、弾性学の基礎および応用について述べ、また理解を深めるために演習を課し、また同時に実験を行なうことがある。ポテンシャルエネルギーを用いて、有限要素法を包括的に解説する。

選択上の注意：学部において、応用力学、材料力学または構造力学等を修得しておくことが必要である。

**F 270 都市計画特論 A (講) 2-2-4 (助教授 中川 義英)
(講師 鈴木 信太郎)**

都市問題の解決を都市計画(フィジカル・プランニング)の面から追求することを目的として、一般的なまたは特殊な題目を選んで講義する。

F 280 土質力学特論 (講) 2-2-4 (助教授 赤木 寛一)

土質工学の理論としての土質力学のうち、土の応力・変形・強度特性を中心に連続体力学としての土質力学、一般的な土の力学挙動、弾塑性体および弾粘塑性体の理論とその適用、粒状体の理論などについて解説する。

F 290 土質施工学特論 (講) 2-2-4 (教授 森 麟)

トンネル、シールド工法、土質安定、地盤改良工法の施工に必要な基礎的理論について取上げ講義する。

F 300 河川工学特論 (講) 2-2-4 (教授 吉川 秀夫)

治水計画、水資源計画および流出現象、洪水現象、河床変動現象などのとらえ方と解析法について講義する。

F 310 海岸工学特論 (講) 2-0-2 (教授 鮎川 登)

有限振幅波、不規波、海浜流の理論などについて講義する。

F 320 水質汚濁制御工学特論 (講) 2-2-4 (教授 遠藤 郁夫)

水質汚濁制御工学特論は上下水道を主体とする土木工学と広義の環境工学を一体として講義する。基礎的事項として、物理的、化学的および生物学的のプロセスについて述べ、次に代表的問題をとりあげ、基本的考え方および設計法を詳述する。

F 330 水理学特論 (講) 2-2-4 (教授 鮎川 登)

流体力学の基礎、水理現象のとらえ方と解析法などについて講義する。

F 340 土木数理解析特論 (講) 2-2-4 (助教授 依田 照彦)

主として、連続体の力学を研究する際必要となる数理解析手法について講義する。

F 610 構造設計A演習(a) 3-3-6 (教授 村上 博智)

都市トンネルの設計、施工および研究に関する国内外の動向を知るための文献的研究である。

F 611 構造設計A演習(b) 3-3-6 (教授 村上 博智)

山岳トンネルの設計、施工ならびに研究に関する諸外国の動向を知るための文献的研究である。

F 620 構造解析A演習(a) 3-3-6 (教授 平 嶋 政 治)

土木構造物に使用される薄肉断面部材の、曲げ振れ問題を研究する。

F 621 構造解析A演習(b) 3-3-6 (教授 平 嶋 政 治)

薄肉構造部材に生じる各種の安定および振動問題を総合的に研究する。

F 630 コンクリート工学演習(a) 3-3-6 (教授 関 博)

コンクリートの材料的な物性に関して、内外の文献を通して総合的に検討する。

F 631 コンクリート工学演習(b) 3-3-6 (教授 関 博)

コンクリート構造部材の力学的弾・塑性挙動に関して、内外の文献を通して総合的に研究し、設計への対応を検討する。

F 640 構造設計B演習(a) 3-3-6 (教授 堀 井 健一郎)

橋梁の設計に関する内外の文献について研究するほか随時実橋の製作・架設現場の見学、測定調査および実験室における模型実験等の実習も行う。使用文献は最近のうす勢を示すと考えられるものをその年度ごとに指示する。

F 641 構造設計B演習(b) 3-3-6 (教授 堀 井 健一郎)

ここでは(a)において取上げなかった対象をとりあげる。

F 650 構造解析B演習(a) 3-3-6 (教授 宮 原 玄)

F 651 構造解析B演習(b) 3-3-6 (教授 宮 原 玄)

マトリックス構造解析法の理解を深めるための演習である。基本的な例題を解くと共に地盤・基礎・構造系の相互作用問題に関する国内・外の文献を選び、輪講形式で討論および解説をして内容の理解をはかる。

演習(a) 主に、地盤・基礎・構造系の静的問題を取扱う。

演習(b) 主に、地盤・基礎・構造系の動的問題を取扱う。

F 660 都市計画A演習(a) 3-3-6 (助教授 中 川 義 英)
(講師 鈴 木 信 太 郎)

都市計画特論Aに関連させ、更に制度・技法の歴史的変遷、将来予測、等に関する問題の一部を、文献の研究等を通して探求する。

F 661 都市計画A演習(b) 3-3-6 (助教授 中川 義 英)
(講師 鈴木 信 太 郎)

都市計画A演習(a)で取り上げ得なかった問題を取り上げる。

F 670 土質力学演習(a) 3-3-6 (助教授 赤 木 寛 一)

土の強度・変形に関する理論および塑性力学に関する基礎的文献を用いて研究演習を行う。

F 671 土質力学演習(b) 3-3-6 (助教授 赤 木 寛 一)

地盤の力学的挙動を合理的に評価・予測するための理論および解析手法に関する基礎的文献を用いて研究演習を行う。

F 680 土質施工学演習(a) 3-3-6 (教授 森 麟)

主として土質工学全般および土に関する施工法の問題についての文献を用いて研究演習を行う。

F 681 土質施工学演習(b) 3-3-6 (教授 森 麟)

(a)と同じ範囲で、そこで取扱わなかった問題について研究演習を行う。

F 690 水工学A演習(a) 3-3-6 (教授 吉 川 秀 夫)

水の流れを主として流体力学的に取り扱った文献について研究、演習を行う。

F 691 水工学A演習(b) 3-3-6 (教授 吉 川 秀 夫)

流砂水理学に関する文献について研究、演習を行う。

F 700 水工学B演習(a) 3-3-6 (教授 鮎 川 登)

水文学、水理学に関する文献について研究・演習を行う。

F 701 水工学B演習(b) 3-3-6 (教授 鮎 川 登)

海岸工学に関する文献について研究・演習を行う。

F 710 水工学C演習(a) 3-3-6 (教授 遠 藤 郁 夫)

水工学C演習(a)は、上水道工学および水資源工学に関する諸問題などについて、例題或は実際例について解析を行う。

F 711 水工学C演習(b) 3-3-6 (教授 遠藤 郁夫)

水工学C演習(b)は、下水道工学、および河川における水質汚濁制御に関する諸問題などについて、例題或は実際例について解析を行なう。

F 720 土木数理解析演習(a) 3-3-6 (教授 依田 照彦)

土木工学分野における数理解析手法に関する文献について研究・演習を行う。

F 721 土木数理解析演習(b) 3-3-6 (教授 依田 照彦)

土木数理解析手法に関する基礎的文献を輪講し、例題演習により数理解析手法を修得する。

F 730 都市計画A特別実習 6-6-4 (助教授 中川 義英)

都市計画の技法を研修するため、実例の検討、ケーススタディーを、図上、できれば実地について実習する。

資源工学専門分野

G010 資源科学研究

(教授 今井直哉)

近代岩石学・鉱床学を地質学の側面からだけでなく物理化学的・地球化学的側面から考究する。

G011 資源科学研究

(教授 大塚良平)

この研究は地下資源の利用に関する基礎的研究を目的としている。すなわち地殻の構成単位である岩石・鉱物を material としてとらえ原料科学的立場から、詳細な研究を行なう。この立場は外国においても Rohstoffkunde あるいは Science of Raw materials として定着している。具体的には対象とする岩石・鉱物の結晶化学的性質、物性、生成および反応に関する諸問題を研究し、material としての性質を明らかにするとともに、新しい利用方法や新材料を開発するための基礎的データを得ることを目標としている。

G012 資源科学研究

(教授 鞠子正)

地殻中に存在する金属資源について、地質学、鉱物学および地球化学的な立場から研究を行う。

G013 資源科学研究

(教授 梶貞夫)

資源の枯渇が問題にされ、関連の科学・技術が急速な進歩をとげている現況では、鉱物の有効的な利用について研究する場合、天然産の鉱物とともに合成鉱物の基礎的研究も必要である。本研究ではこのような見地に立って、非金属鉱物の鉱物学的諸問題を研究する。

G021 応用力学研究

(教授 橋本文作)

地球の表面および地下に存在する各種資源の開発作業を一つのシステムとしてとらえ、システム工学の立場から、これらを安全、かつ、合理的に行うための力学を中心とした数値解析の研究を行う。

選択上の注意：地質学、弾塑性力学、材料力学、流体力学の基礎知識および FORTRAN IV の知識があることを必要とする。

G022 探査工学研究

(助教授 野口康二)

G030 原料工学研究 (未定)

G031 原料工学研究 (教授 原田 種 臣)

この研究は、1) 選鉱・選炭、2) 選鉱・選炭産物の最適原料化(新しい利用を含む)、3) 固形廃棄物処理、4) 水処理等に関する技術の追求からなっている。

上記 1)・2) は現在利用されている鉱物の完全回収と高度利用、未利用資源の原料化をねらいとして、3)・4) は資源リサイクリングおよび環境保全の視点からそれぞれ行なわれる。

G032 原料工学研究 (教授 中村 忠 晴)

本研究は選鉱・選炭およびその最適原料化に係る化学的組成・構造などから追求するもので、分析化学を基礎とし、化学分析の観点から行う。

G040 石油工学研究 (教 教 山 崎 豊 彦)

本研究は石油の開発と生産及び原油や油層の物理・化学的性質を研究するものである。又時にはオイルサンド、油母頁岩の性質や開発生産方式についても研究する。特に最近の傾向として、油層評価や回収法の立場から油層シミュレーションが検討されているので、その解析法も又研究の重要な一部であり、油層の物性や原油・ガスの化学的、物理化学的性質と相まって、将来の開発と生産技術の発展に寄与するために行うものである。

G051 開発・環境工学研究 (教授 岩 崎 孝)

地下資源の開発手順と、開発に伴って発生する災害及び鉱害の予防対策、リクラメーション手法などを含む開発環境の保全・修復の方策を研究する。

G052 安全工学研究 (教授 名 古 屋 俊 士)

各製造工場の製造工程より発生する粉じん、金属ヒューム等の有害物質に対して、測定及び分析等工学的な研究を行い、その防止対策としての作業環境管理、作業管理および安全指導等に関する研究と、産業の基礎となる原材料資源の開発と利用に伴って発生する災害要因の究明とその予防に関する研究を行う。

G060 地層学研究 (教授 山 崎 純 夫)

この研究は地下資源の探査・開発および利用の基礎的研究を目的とし、とくに地球表層の堆積岩を地層学的側面から研究する。すなわち碎屑成堆積岩、生物起源堆積岩、火山起源堆積岩等に関連する地下資源生成についての地質学的諸問題の追求をする。

G061 構造地質学研究 (教授 坂 幸 恭)

地質構造は、大は大陸の解体・漂移から小は顕微鏡的なものまで、いずれも岩石の変形

の産物であり、その様式は岩石の物性、変形時の環境、歪速度による。

この研究では初生的な形態がわかっており、従って変形像を容易に把握することができる地層を対象とし、野外調査で明らかにされる程度の規模の地質構造を解析し、これと地殻変動との関係を明らかにすることを目的とする。

G062 古生物学研究

(教授 平野弘道)

古生物学の研究領域とその素材は著しく広範囲に及ぶが、本研究では (1) 中生代軟体動物の進化様式にかかわる諸問題、(2) その基礎情報を得る為の現生軟体動物の生態・成長及び形態変異、(3) 地質時代尺度の確立のための化石層序学、を主たる課題とする。

G210 岩石鉱床成因論 (講) 2-0-2

(教授 今井直哉)

鉱床形成という事象は地殻の局所における特定元素或は物質の異常な濃集現象に外ならず、鉱床を構成する物質は特殊な岩石と見なさねばならない。この講義は上述の立場に立って最近急速な発展をとげた岩石成因論と鉱床成因論とをいかに調和させるかを主眼とする。まず、古典的鉱床成因論を述べるとともに、火成岩成因論の最近の動向、特に玄武岩・花崗岩問題の核心に触れ、これとマグマ性鉱床形成との関連を論じ、さらに変成理論におよび、変成鉱床の問題に言及する。また、堆積性鉱床の成因については、堆積環境を支配する物理化学的条件の立場から論ずる。

選取上の注意：この講義を選択する者は次の知識をもつことが必要である。

(1) 珪酸塩系における相平衡 (2) 鉱床学、特に鉱床成因論 (3) 地質学 (4) 岩石学 特に岩石成因論 (5) 鉱物平衡論

使用外国語 英語・独語

G220 資源地質学 (講) 2-0-2

(講師 吉川恵章)

最近数年間における非鉄金属資源の需要動向を勘案しつつ、国内資源および海外資源の埋蔵量、地質鉱床条件について述べる一方、最近注目されるレアメタル資源の世界的分布状況、埋蔵量、今後期待されるハイテク産業への用途見透し等を紹介する。又、新しい地質調査法としてのリモートセンシング等に触れると共に地質構造規制の重要性を若干の鉱床例について説明し、地質鉱物鉱床学の学理がどの様に探査に役立っているかを講述する。さらに、最近注目されて来た新しい資源として地熱、マンガン団塊、コパルトリッチクラストの探査の現状を紹介する。

G230 堆積岩特論 (講) 0-2-2

(教授 山崎純夫)

堆積盆における堆積条件等によって分類される各種岩相を岩石学的観点から概説し、堆積のメカニズム、堆積後のダイアゲネシス、地層の変形、堆積岩構成物質等について論述する。

G240 層位学 (講) 2-0-2 (教授 山崎 純夫)

層位学の史的発展について講述する。地史的、層位学的な具体的各地域例を中心に諸論文を講読検討しつつ教授する。

選取上の注意：一般地質学，特に岩石学，鉱物学，地史学の知識をもたなければならない。

G250 実験鉱物学 (講) 0-2-2 (教授 大塚 良平)

現代の鉱物学は，結晶化学，物性論，熱力学および反応速度論を四大支柱として，めざましい発展をとげつつあり，一面において，materials science としての性格をあきらかにしている。

本講義では，実験鉱物学の分野において得られた，最近の興味ある成果の中，とくに鉱物の熱的性質および加熱変化について述べる。

鉱物学，岩石学に関する基礎的知識を必要とする。

G260 金属鉱床学特論 (講) 2-0-2 (教授 鞠子 正)

金属鉱床はその産状・成因から種々の型に分類されているが，本講ではその各々について，地質学・鉱物学的な特徴を明らかにするとともに成因論について詳述し問題点を指摘する。本年度は安定同位体の金属鉱床成因論への応用について述べる。

G270 非金属鉱物学特論 (講) 0-2-2 (教授 堤 貞夫)

鉱物のうち非金属鉱物として大別される鉱物からとくに数種の鉱物について，自然界と実験室における形成の物現化学的条件を関連づけつつこれらの鉱物の結晶化学，物性論的な講義を行う。

G280 無機結晶化学特論 (講) 0-2-2 (講師 宇田川 重和)

無機結晶化学の応用論として，近年，新素材の一つとして脚光を浴びているセラミックスの材料特性と構造（結晶構造，微構造など），構造と製造プロセスとの関係を結晶化学的立場から解説し，さらにセラミックスの材料設計の概念についても論述する。

本講義を受講する者は，無機化合物，鉱物などの結晶化学について基礎的知識を有することが望ましい。

G290 探査工学特論 (講) 0-2-2 (講師 龍 神 正夫)

地下構造の探査は鉱物資源の発見・開発を目的とするのみならず，土木・建設部門や軟弱地盤の防災などに関連しても重要である。

本講義においては地震，重力，磁気，電気，電磁などの物理現象を応用して地下を調査

解明しようとする物理探査法に関し、主として測定、データ処理、解析の現場実務について調査例を基に概説する。

G310 坑内通気特論 (講) 0-2-2 (教授 橋本文作)

温熱的環境条件と労働衛生、適正な風量配分のための坑内通気回路網の解析、坑内温度の予測法、坑内冷却の方法等について述べ、一部の演習を行なう。

FORTRAN VI の初歩、学部課程における固体中および境界の伝熱問題、湿り空気の特性などの知識を必要とする。

G320 岩盤工学特論 (講) 2-0-2 (講師 菊地宏吉)

本講義は、ダム等の土木構造物およびトンネル等の岩盤構造物基礎の主体をなす岩盤の物理的特性ならびに工学的特性を解説すると共に、これらの特性を把握するための岩盤の調査・試験ならびに評価法についての解説を主な内容としている。

特に本年度は岩盤の浸透流について新しい研究成果を内容に加えたいと考えている。

G330 岩石レオロジー (講) 0-2-2 (教授 橋本文作)

Macro-Rheology の概念、一般的な変形モードの解説を行ったのち、時間依存の変形と破壊に関して破壊力学的な解説を行う。

初等材料力学、弾性力学の知識を必要とする。

G340 資源リサイクリング (講) 2-0-2 (教授 原田種臣)

産業廃棄物および都市廃棄物に含有される資源を再生し、その効果として環境への残留物を減少・無害化することにより、資源の延命と環境保全を図るのが資源リサイクリングの目的である。本講義では資源リサイクリングに関する最新の研究成果を紹介しつつ学術上の問題点を明らかにし、併せて学理追求の手法と技術の動向につき講述する。

G350 選鉱学特論 (講) 2-0-2 (教授 原田種臣)

選鉱学のうち、「選別」に関する最新の研究成果を紹介しつつ学術上の問題点を明らかにし、併せて学理追求の手法と技術の動向につき講述する。

したがって関連する単位操作の主なもの、重液選別・比重選別・浮遊選別・磁力選別・静電選別および放射能選別である。

G360 石炭原料工学 (講) 2-0-2 (講師 今泉常正)

人類の生存にとって、エネルギーと資源のもつ重要性は多言を要しない。この講義は一次エネルギーの需給の見通しと、その中に占める石炭の役割から始まり、石炭の物理性・化学性、R/P、分類など、石炭の基礎知識の総合的な把握を目指す。次に世界の資源・エ

エネルギーの環境内におかれたわが国の立場、今後わが国が依存せざるを得ない海外石炭資源の賦存状況、資源輸入の3方式等を解説し、石炭を資源化するための重要段階である“選炭”と“加工利用”の問題に入る。

選炭の役割とプロセスの概論、燃焼と排煙処理、COM、CWM、輸送技術、石炭を利用した下排水処理、各種の脱灰法と超低灰分炭の製造、石炭のガス化、液化、石炭灰の有効利用、公害防止、などの諸問題を各論として講述する予定である。

G370 選鉱製錬工場計画 (講) 0-2-2 (講師 後藤佐吉)

各種金属の鉱石を選鉱、製錬によって金属材料にする過程で、これら両プロセスは密接な関連性をもつものであるにかかわらず、過去において科学的基本分野の相違から単独に研究が行われたきらいがあった。加えて最近では公害防止が緊要問題となり、また資源節約の観点から金属のリサイクリングも重視されている。これらすべての問題点を包含した総合的視野から選鉱製錬工場設計の要点について講義ならびにセミナーを行うものである。

G380 機器分析特論 (講) 0-2-2 (教授 中村忠晴)

機器分析の応用性を目的とし、その一般論的な機構と各構造部の概略について述べる。

G390 油層工学 (講) 0-2-2 (教授 山崎豊彦)

油層工学は地層内、多孔質岩石中の流体の運動を基として、油田開発およびその評価を行なう手段であり、これについて特に基礎的問題を講義する。その内容は次のようである。

1. 浸透性岩石の基礎的特性：岩石の力学的性質と、孔隙、浸透率の関係、流体飽和度と電気伝導度および音の伝播速度等物理的性質の相関性 2. 多孔質岩石中における多相流体の特性：表面張力、毛管凝縮、相対浸透率等について 3. 炭化水素の相平衡論：相の基礎概念、ガスの分子運動による平衡状態の考察、気液平衡とその応用 4. 油層流体の特性とその応用：油層中の炭化水素の分離と分析法、コア分析法、炭化水素の高圧下における特性 5. 油層の評価：D. S. T. 解析の処理方法、Logging data の処理、油層岩の容積評価、炭化水素および水分の評価 6. 物質収支：物質収支方程式の検討、物質収支方程式による油層の評価

参考方献

Petroleum Reservoir Engineering: J. W. AMYX, D. M. BASS, R. L. WHITING

Applied Petroleum Reservoir Engineering: B. C. CRAFT, M. F. HAWKINS

Fundermental Reservoir Engineering: L. P. DAKE

G400 石油探査開発技術 (講) 2-0-2 (講師 松沢明)

最近の石油探鉱法や開発技術の進歩は極めて著しい。特に海洋での石油開発が進むにつれ、その技術は従来のもものと著しく異って来た。ここでは石油探鉱法の進歩や解析法の進

歩について述べ、開発技術では特に海洋での油田開発について、新技術を紹介し、2, 3の実例について述べる。

G410 石油工業化学特論 (講) 2-0-2 (教授 森田 義 郎)

石油精製工業はいま大きな変換期にさしかかっているが、その進行方向にそって、重点的な講義をする。すなわち、石油の基本的な性質、炭化水素の分離、炭化水素の転化、石油化学原料の製造、石油類のガス化、脱硫、脱硝等の公害防止技術等特論的な解説をする。応用化学専攻燃料化学の前期講義と類似した内容のもので、初歩的な石油精製の子備知識を必要とする。

G420 粉塵工学 (講) 0-2-2 (教授 岩崎 孝)

鉱工業における粉塵の諸問題、特に粉塵計測、粉塵の衛生工学のほか、粉塵爆発の機構と対策、粉塵による大気汚染の発生現象とその防止法などについて述べる。

G430 防災科学 (講) 2-0-2 (教授 名古屋 俊 士)

安全工学の一分野として、化学反応を伴う災害と化学反応の関与する災害防止法の究明を行なう。特に産業に関連の多い火災・爆発災害に重点をおき、その現象の解説を行ない燃焼・爆発の火源を検討し、防火・防爆対策を考究する。

G440 開発・環境工学 (講) 2-0-2 (教授 岩崎 孝)

資源の開発計画、特に開発に伴って発生する鉱害、および鉱山災害の防止計画、リクラメーションの手法などについて述べる。

G450 エネルギー資源概論 (講) 0-2-2 (講師 松 沢 明)

原子力、石炭、石油、天然ガス、地熱等エネルギー源の賦存と形態について、その特性と化学的な性質を検討し、その生産方式の進歩について講義されるだろう。

G460 構造地質学特論 (講) 0-2-2 (教授 坂 幸 恭)

岩石が示す大小の変形像を岩石生成後に生じた地殻変動の指示者としてとらえ、各種地質構造の成因と意義及びこれを形成した作用との関連について研究する。

G470 古生物学特論 (講) 2-0-2 (教授 平野 弘 道)

中生代ジュラ紀・白亜紀に著しい適応放散をしたアンモナイト類について、その個体発生・系統発生・生態・化石層序学的意義について論述する。また、その基礎として、現生オウムガイ類の生態・解剖学的特徴・個体発生について、比較動物学的に詳しく論述する。

G480 労働環境管理 (講) 2-0-2 (教授 名古屋 俊 士)

近年の科学技術の発達と生産活動の活発化により、生産現場における有害物質及び有害条件による作業員への影響は複雑多岐にわたっている。そのために、作業環境における作業員の安全と健康を守るために、徹底した労働環境管理が必要である。

本講では、労働衛生管理を行うために必要な知識と技術的手法について述べる。

G490 物理探査工学 (講) 2-0-2 (助教授 野 口 康 二)

G610 資源科学A演習A 3-3-6 (教授 今 井 直 哉)

野外地質学のうちで最も重要な地質図作製法、および地質柱状図作製法についての演習を行なう。

G611 資源科学A演習B 3-3-6 (教授 今 井 直 哉)

最近の熱力学の知識、とくに水・炭酸ガス・硫黄のフィジチーを岩石学・鉱床学の分野に導入し、岩石・鉱床の成因を物理化学的側面から考察する。

G620 資源科学C演習A 3-3-6 (教授 大 塚 良 平)

鉱物の結晶化学およびその characterization に関する演習を行なう。

G621 資源科学C演習B 3-3-6 (教授 大 塚 良 平)

鉱物学の分野における熱力学の具体的応用例について演習を行う。

G630 資源科学D演習A 3-3-6 (教授 鞠 子 正)

鉱石鉱物の共生・鉱石組織について演習を行う。

G631 資源科学D演習B 3-3-6 (教授 鞠 子 正)

種々のタイプの金属鉱床について Case Study を行う。

G640 資源科学E演習A 3-3-6 (教授 堤 貞 夫)

化学組成上複雑な非金属鉱物を例として記載鉱物学的な演習を行う。

G641 資源科学E演習B 3-3-6 (教授 堤 貞 夫)

論文講読

G660 応用力学演習A 3-3-6 (教授 橋 本 文 作)

G661 応用力学演習 B 3-3-6 (教授 橋本文作)

岩石の破壊条件を考慮しつつ構造周辺岩盤の静的、動的地圧問題などを対象として岩盤力学を基礎とするこれらの解析手法と、坑内通気および開発システムに必要なシミュレーションの手法についての演習を主とする。これらの演習を適宜二つに分け、隔年演習として2年間で完結するように実施する。

G670 探査工学演習 A 3-3-6 (助教授 野口康二)

G671 探査工学演習 B 3-3-6 (助教授 野口康二)

G680 原料工学A演習A 3-3-6 (未定)

G681 原料工学A演習B 3-3-6 (未定)

G690 原料工学B演習A 3-3-6 (教授 原田種臣)

1) 選鉱・選炭 2) 選鉱・選炭産物の最適原料化(新しい利用を含む)に関する技術システムを原料特性、単位操作の有効性、環境保全性、経済性、地域性等と調和させて設計しうる能力の増強を目指し、この演習科目を置く。

G691 原料工学B演習B 3-3-6 (教授 原田種臣)

1) 固形廃棄物処理、2) 水処理に関する技術システムを処理対象物の特性、単位操作の有効性、環境保全性、経済性、地域性等と調和させて設計しうる能力の増強を目指し、この演習科目を置く。

上記 1) においては鉱業その他の産業廃棄物と都市ごみを対象にし、2) では鉱水処理法を扱う。

G700 原料工学C演習A 3-3-6 (教授 中村忠晴)

L4018に関連し、各種分析機器の原理および装置の特性などについて演習し、原料工学への応用性の発展を目的とする。

G701 原料工学C演習B 3-3-6 (教授 中村忠晴)

L4018に関連し、原料工学に係る物質への具体的応用について演習を行う。

G710 石油工学演習A 3-3-6 (教授 山崎豊彦)

本演習では石油の開発技術に関連する工学分野について演習する。その内容は次の通りである。1) 海洋掘削法、2) ケーシングプログラム、3) 泥水の選択と比重調整、4) セメンチングと仕上げ法、5) 試油・試ガスの解析、6) 検層解析

G711 石油工学演習B 3-3-6 (教授 山崎 豊彦)

本演習では油層工学及び生産技術に関する工学的、科学的分野について検討する。その内容は次の通りである。1) 油層の埋蔵量評価法, 2) 油層シミュレーション 3) 生産計画 (生産推移予測) 4) 生産施設の選択と設計 5) 貯油, 輸送計画

G730 安全工学演習A 3-3-6 (教授 名古屋 俊士)

作業環境工学及び労働衛生工学に係る文献を用いた演習を行う。

G731 安全工学演習B 3-3-6 (教授 名古屋 俊士)

災害事例, 職業性疾病等実務的な事例を中心に安全工学に役立つ演習を行う。

G740 開発・環境工学演習A 3-3-6 (教授 岩崎 孝)

地下資源開発の手順及び開発計画, および未利用資源の有効活用法について演習を行う。

G741 開発・環境工学演習B 3-3-6 (教授 岩崎 孝)

鉱山災害及び鉱害防止設備等の計画と設計に関する演習を行う。

G750 地層学演習A 3-3-6 (教授 山崎 純夫)

地層学を主題とする地質学的諸問題について指導し, 大陸内部にみられる堆積相と対比しつつ日本列島に分布する地向斜堆積物の特殊性について演習する。

G751 地層学演習B 3-3-6 (教授 山崎 純夫)

各種の堆積条件によって生成した岩類を, 顕微鏡的組成と組織によって分類し, 地向斜堆積物の岩石学的特性について演習する。

G760 構造地質学演習A 3-3-6 (教授 坂 幸恭)

野外における地質構造の識別と記載法及びそれに基づく変形像の解析法について演習する。

G761 構造地質学演習B 3-3-6 (教授 坂 幸恭)

個々の地質構造から組立てられる堆積岩積成体全体の変形像を把握するためには, 地殻変動に先行する堆積盆地の初生的な形態・環境及びそこにおける堆積作用の全容を復元する必要がある。この観点から, 主として堆積構造による堆積盆地解析の方法を演習する。

G770 古生物学演習A 3-3-6

(教授 平野 弘道)

古生物を対象とした進化様式についてのケース・スタディを積み重ね、進化のテンポとモードについての現在の問題点を明確にする。

G771 古生物学演習B 3-3-6

(教授 平野 弘道)

生物進化のテンポとモードに関する問題を、相対成長解析、古生物地理学、分岐分類学、化石層序学、生態層序学の観点から、最近のトピックスを中心に、解説、文献研究、セミナーを行なう。

材料工学専門分野

H010 非鉄金属製錬学研究

(教授 不破 章雄)

非鉄製錬及び素材製造の各工程での反応速度論的な研究を行ない、プロセスの物理化学的な理解を深める。物性的な研究も併せて行なう。

H011 鉄鋼製錬学研究

(教授 草川 隆次)

金属製錬学研究のうち鉄鋼製錬関係で、製鉄、製鋼、造塊铸造等について、その各々のプロセスの理論および応用について研究するものである。

演習A、Bについては、各プロセスにおける問題について文献等により調査し、討論し、その問題について報告をまとめる。

また特に最近には物質移動また凝固の問題が重要であるため、その基本について講義を行ったり、輪講を行ったり、その応用について文献調査、実験を行う。

これらの基礎知識を基に修士論文を作成する。

H020 金属電気化学研究

(教授 藤瀬 直正)

金属工学に電気化学を活用する立場から、これに必要な電気化学理論の理解と適用限界、応用の際の諸注意などを明らかにし、又、文献に対する読解力と批判力を養い、主として、金属工学的観点から創造性を重視して実験研究を行ない、柔軟な発想で自然を観察、洞察することを目的とする。

H021 高温材料化学研究

(教授 加藤 栄一)

高温化学反応を用いた半導体製造プロセスおよび金属製錬反応について研究を行なう。現在進めている主な研究は次の通りである。

- (1) CVD 法による薄膜製造過程の熱力学的ならびに反応速度論的研究
- (2) 質量分析法による半導体材料の熱力学的性質の測定
- (3) 鉄の凝固過程における気孔生成に関する研究

H030 鉄鋼材料学研究 (教授 南 雲 道 彦)

H031 耐食材料学研究 (教授 中 井 弘)

材料はそれを取り囲む環境によって影響を受け腐食損耗する。この現象を防ぐために耐食性のある材料が要求される。

本研究はこの要求をみたす材料の研究をつぎの諸点について行う。

- (1) 材料と腐食環境との反応
- (2) 腐食生成物の組成および構造
- (3) 耐食性材料の開発

H032 結晶構造研究 (客員教授 佐 藤 亮一郎)

積層不整が問題となる結晶的物質について理論的および実験的研究を行なう。

H040 金属加工組織学研究 (未 定)

H051 材料表面工学研究 (教授 上 田 重 朋)

材料の腐食や摩耗を防ぐことは工業的に強く要望され、このための加工処理技術は①表面の作成法、②表面層の改質法また機能を付与すること、③金属被覆法および④非金属被覆法に分類されている。「材料表面工学研究」においては、②表面層の改質、③金属被覆法、④非金属被覆法に重点をおいて、応力腐食割れの防止、高温酸化に対する抵抗性、耐摩耗性および光エネルギーの選択吸収性などの表面の機能化について基礎的研究を行なう。

H052 薄膜材料学研究 (教授 大 坂 敏 明)

薄膜の核形成・成長機構の研究を行なう。現在進めている主な研究は、次の四つに分けられる。

- 1) 分子線エビタキシー法による化合物半導体薄膜の成長研究 一主に、反射高速電子回折法による動的観察を通して一
- 2) 蒸着微粒子(10nm以下の粒子径)のオージェ電子、光電子分光法ならびに分子軌道法による電子状態の研究。
- 3) 超高真空その場観察用電顕による薄膜成長の研究。
- 4) グラフォエビタキシーの機構解明とその応用研究。

H060 鑄造工学研究

(教授 堤 信久)

機械材料に対する要求は、近代化にともない厳しくなり、鑄造及びその材料の工学的研究は極めて重要である。鉄鋼材料としておらずに鑄鉄、C V及び球状黒鉛鑄鉄の液相及び固相における黒鉛核生成、球状黒鉛及びその異常化の形態学的研究、ペーナイト変態、A1変態の解明、特殊目的のための材質的研究のほか、鑄造によるセラミックス構造体の成形、セラミックスと鑄鉄の接合及び複合化などについて研究する。

H061 凝固工学研究

(教授 中江 秀雄)

金属の凝固に関する基礎から応用までを幅広く、文献を中心とし演習を混えて詳述する。凝固の分野は近年、鑄造のみにとどまらず、半導体、セラミックス、機能材料等への応用が進展している。そこで凝固に関連する基礎から応用までの幅広い研究を行う。

H070 粉体金属加工学研究

(教授 渡辺 恍尚)

粉体金属に混合、圧縮成形、焼結の処理をほどこして金属材料を製造する。いわゆる粉末冶金に関する基礎および応用研究を行なうものである。基礎研究においては主として粉体金属そのものの性質、それに圧縮成形、焼結の機構に関する研究を対象とし、応用研究においては主として各種機械構成品用焼結材料の製造ならびにそれらの性能に関する研究を対象としている。

選取上の注意：当研究を希望する者は、学部専門学科卒業程度の粉末冶金の知識を持つことが必要である。

使用外国語：英、独。

H080 セラミック材料工学研究

(教授 一ノ瀬 昇)

セラミック材料の機能性を重視し、基礎および応用研究を行なう。現在進めている主な研究には下記のようなものがある。

- (1) 低温焼結および高熱伝導性セラミック基板の研究
- (2) 圧電・電歪材料の研究
- (3) 非直線抵抗体における電気伝導機構に関する研究
- (4) 透光性セラミックスの研究
- (5) セラミックセンサの研究
- (6) 超伝導セラミックスの研究

H081 電子材料学研究

(教授 宇田 応之)

固体内電子の振舞いを、分光学的に研究する。主な手段は 1) イオン励起 X線・電子分光法、2) 光電子分光法、3) 分子軌道の計算に分けられる。

H210 非鉄製錬学特論 (講) 2-0-2 (教授 不破章雄)

非鉄製錬のうち、いわゆるシリコン等の新金属の製錬、精製等について、それらのプロセスの概略について講義する。また3元素の状態図については詳しく演習を行う。

H220 鉄鋼製錬学特論A (講) 2-0-2 (教授 草川隆次)

製鉄、製鋼、造塊の基礎理論、特に脱酸、真空溶解、脱酸、脱硫、脱磷、鋼の凝固機構等について詳述する。その他、最近の鉄鋼製錬学に関するトピックスについて述べる。

選択上の注意：学部鉄鋼製錬学を履修のこと。

H230 鉄鋼製錬学特論B (講) 0-2-2 (講師 関根寛)

近年の制御圧延技術や連铸材の直送圧延技術の発展の中で、今まで鉄鋼材料に構造材としての外形を与える工程とされていた「熱間圧延」は、同時に材質附与の工程でもあったことが明らかになってきた。本講では、熱間圧延時のオーステナイトの再結晶挙動および熱間圧延後のオーステナイト/フェライト変態を経由しての組織、材質の形成、さらに Si-Mn 鋼および Nb 添加高張力鋼の制御圧延および制御冷却について述べる。

H240 金属電気化学特論 (講) 2-0-2 (教授 藤瀬直正)

本講は、金属工学と電気化学との境界領域であるが、ここでは主として金属工学的観点から、まず陽極反応として、巨視的および微視的な金属組織および構造と、陽極溶解、電解分離、電解加工、不動態および陽極酸化などの関係について論じ、また陰極反応としては、水素の放電、金属電析の理論、析出金属の組織および構造などについて講義する。

H250 高温材料化学特論 (講) 0-2-2 (教授 加藤栄一)

学部で修得した物理化学、金属組織学、高温反応の熱力学を基礎とし、主として熱力学を応用して、金属製錬過程や半導体の製造過程の物理化学的解析を行なう。

H260 鉄鋼材料学特論 (講) 2-0-2 (教授 南雲道彦)

H270 腐食防食特論 (講) 0-2-2 (教授 中井弘)

材料の環境による腐食とそれに対する防食について講述する。材料の腐食は高温度における現象に限定し、とくに硫化腐食についてはその腐食現象、腐食機構、腐食生成物の性質などを詳細に解説する。防食については腐食現象の理論的な考察を行う際少しふれる程度にとどめる。

H280 非鉄金属材料学特論 (講) 2-0-2 (未定)

非鉄金属材料の鑄造材や圧延材などの性質は、その熱処理や圧延方法などの条件により

著しく影響されることは勿論であるが、その材料の素材すなわち鋳物や鋳塊の質に依存することもまた大である。これらの素材の質は、溶解、鋳込、凝固の各過程におけるその非鉄金属および合金の溶湯の諸性質、凝固機構などに影響される。しかしそれらにはまだ解明されていない多くの基礎的な諸問題がある。この講義では、これらの点について研究されつつある主な基礎的問題を取り上げ、さらにそれらの研究結果の応用についても述べる。

選択上の注意：学部当該学科にての修得程度の金属組織、金属材料の知識を持っていないければならぬ。

H310 材料表面工学特論 (講) 2-0-2 (教授 上田重朋)

表面硬化法のなかで、特に金属の表面層を改質する化学的熱処理をとりあげ、金属の表面から他元素が浸透拡散する現象について、金属の表面反応ならびに拡散理論に基づいて解説するとともに、これらの表面工学への応用について講述する。

H320 電子線材料学特論 (講) 0-2-2 (教授 大坂敏明)

電子線による回折模様形成ならびに電子顕微鏡による像形成について講義する。前者については、逆格子の概念を十分に理解するために、単結晶回折模様の解析方法について詳しく説明する。後者については、電磁レンズによる像形成理論を通して、薄膜材料の結晶格子像の形成、種々の格子欠陥のコントラストについて解説する。

H330 素形材工学特論 (講) 0-2-2 (教授 梶信久)

生産工場の近代化は重要問題である。本講は鋳物工場の諸設備を中心としてその近代化、機械化につきその理念を実際と関連させつつ述べるものである。生産工場の近代化の方向は単に鋳造工場のみにとどまらないので、素形材加工法の塑性加工、溶接、粉末冶金の各工場における生産への適用にも言及し、その考え方について例をあげつつ汎論的に述べる点に特徴がある。素形材工場における生産性、その機械化自動化に際しての具備すべき条件、工場内の流れと運搬、諸設備機械、及び総合的ラインの構成につき述べ、コンピュータの応用、産業用ロボットの適用、公害対策、環境衛生及び経済性との関連性にも触れつつ詳細に述べる。

H331 凝固工学特論 (講) 2-0-2 (教授 中江秀雄)

鋳造の基礎原理である凝固に関し、核生成、成長、結晶制御等の分野を中心として幅広くその基本原理を講義する。講義は凝固学の古典的なものから、最新の文献について、実際の現象と原理を対応させつつ行う。また凝固に関連した原子論的な取扱いと、速度論的な解析能力を育成する。

H340 粉末冶金学特論 (講) 2-0-2 (教授 渡辺 侖 尚)

粉末冶金に關しての固相焼結と液相焼結について、それらの理論を述べ、とくに焼結体特有の現象である気孔の残留、生成あるいは消滅などの動態について説明する。工業的応用例としては、主として機械部品用合金および軸受合金につき焼結と気孔との関係、金属組織と焼結温度との関係に重点をおいてそれらの製造法に關して講述する。

選択上の注意：学部当該学科修得程度の粉末冶金学、金属材料学の知識を持つことが必要である。

H350 機能性材料学特論 (講) 2-0-2 (教授 一ノ瀬 昇)

機能性を有する新材料について講義する。特に、電子・電気的、磁氣的、光学的および化学的機能を有する金属、セラミックス、高分子および複合材料について解説する。

H360 結晶構造特論 (講) 0-2-2 (客員教授 佐藤 亮一郎)

最密球充填構造における各種積層不整の回折効果に關する理論を概説する。

H370 電子材料学特論 (講) 2-0-2 (教授 宇田 応之)

電子材料の基本的性質を理解するため、固体電子論を講義する。また実用材料(半導体、酸化物超電導体、磁性体など)の最近の話題も紹介する。

H610 非鉄製錬学演習A 3-3-6 (教授 不破 章 雄)

物質移動論、熱移動論、運動量移動のいわゆる“移動論”を金属工学へ適用し、その応用分野での各種演習を行なう。

H611 非鉄製錬学演習B 3-3-6 (教授 不破 章 雄)

金属製錬プロセスの新しい解析方法、手法等について、文献を中心に演習を行なう。

H620 鉄鋼製錬学演習A 3-3-6 (教授 草川 隆 次)

製銑、製鋼、造塊等の工程中における種々の問題をあげ、その問題について、文献を調査し、討論し、その問題について報告をまとめる。

H621 鉄鋼製錬学演習B 3-3-6 (教授 草川 隆 次)

鉄鋼製錬上物質移動論また金属凝固学が最も重要である。この問題について、その基本を講義すると共に輪講したり、またその応用事項については文献調査、実験、あるいは見学を行いその基礎学問から応用までについての知識をこの演習によって得られるように行なう。

H630 金属電気化学演習A 3-3-6 (教授 藤瀬直正)

金属工学に必要な電気化学の基本的理論を理解しその適用限界を知り、金属工学に電気化学的手法を活用する能力をつけることを目的とする。又、文献を調査して、従来の固定観念を超越して、理解力、批判力、創造力を養成する。

H631 金属電気化学演習B 3-3-6 (教授 藤瀬直正)

水溶液中の電気化学的腐食理論とその適用限界など、非平衡状態の自然電位と、速度論としての分極現象を、主として、巨視的、微視的な金属工学的観点との関係において、適宜文献および実験結果を討論して修得することを目的とする。

H640 高温材料化学演習A 3-3-6 (教授 加藤栄一)

熱力学の基本的な法則を理解し、それを応用する力を養うのを目的として演習を行なう。

H641 高温材料化学演習B 3-3-6 (教授 加藤栄一)

CVD法を用いた薄膜製造過程や金属製錬過程を熱力学、あるいは反応速度論を用いて解析する能力を養う。

H650 鉄鋼材料学演習A 3-3-6 (教授 南雲道彦)

H651 鉄鋼材料学演習B 3-3-6 (教授 南雲道彦)

H660 耐食材料学演習A 3-3-6 (教授 中井弘)

腐食環境とくに腐食性ガスと材料との反応を、主として基礎的な単一成分組成から実際的な多成分組成までのガスを想定した反応モデルについて考察する。

H661 耐食材料学演習B 3-3-6 (教授 中井弘)

演習Aにおいて理論的に得られた結果と、実際の研究室および現場で得られた結果とを比較検討する。

H670 結晶構造演習A 3-3-6 (客員教授 佐藤亮一郎)

積層不整の回折結晶学に関する従来の文献について演習を行なう(その一)。

H671 結晶構造演習B 3-3-6 (客員教授 佐藤亮一郎)

積層不整の回折結晶学に関する従来の文献について演習を行なう(その二)。

H680 金属加工組織学演習A 3-3-6 (未定)

H681 金属加工組織学演習B 3-3-6 (未定)

H710 材料表面工学演習A 3-3-6 (教授 上田重朋)

表面層を改質する方法たとえば化学表面熱処理法に分類されている浸炭法、窒化法、拡散被覆法などの表面反応、拡散現象について、内外の文献を調査し、実験結果を討論する。

H711 材料表面工学演習B 3-3-6 (教授 上田重朋)

耐摩耗・防食、とくに応力腐食割れ防止を目的とする金属被覆ならびにアルミニウム系地の酸化皮膜および表面の機能化などに関する内外の文献を調査し、実験結果を討論する。

H720 薄膜材料学演習A 3-3-6 (教授 大坂敏明)

薄膜材料の表面構造について最近の研究状況を調べるとともに、表面の主要な研究手段である RHEED, AES, XPS そして SIMS についての原理、実験について演習する。

H721 薄膜材料学演習B 3-3-6 (教授 大坂敏明)

薄膜、微粒子の結晶成長について、電顕内その場観察を主体に調査し、結晶成長研究の立場から最近の電子顕微鏡の応用について演習する。

H730 鑄造工学演習A 3-3-6 (教授 梶信久)

種々の鑄鉄の凝固時及び固相における黒鉛核生成と成長、球状黒鉛及びCV黒鉛の形態学、構造用セラミックスの成形及び鑄鉄との接合、ペーナイト変態などについての文献調査ならびに研究実験の計画と結果の統計的解析方法について修得させる。

H731 鑄造工学演習B 3-3-6 (教授 梶信久)

演習Aにおいて修得した技術を研究対象である種々の鑄鉄、セラミックス及び接合界面の組織解析に応用するためマイクロ組織の画像処理、EPMA, SEM その他の機器の解析を修得させ、またその演習を行なう。

H740 凝固工学演習A 3-3-6 (教授 中江秀雄)

金属凝固の基礎となる分野の最新の文献を中心として、その基礎と応用に関する調査を行う。これら調査と並行して、基礎理論を実験を通して体験させ、その演習を行う。

H741 凝固工学演習B 3-3-6 (教授 中江秀雄)

ここでは応用に関するものを主として行う。上記Aの調査、演習に基づいて凝固の諸問題を抽出し、各個のテーマに関する深く掘下げた理論的検討・考察を行う。これら演習を

通して凝固現象とその応用に関する解析力を養うと共に、論文としてのまとめ方を修得させる。

H750 粉体金属加工学演習A 3-3-6

(教授 渡辺 侑尚)

ここでは基礎的なものを取扱うが、その対象となるものは粉体そのものの現象、圧縮成形に関する現象および焼結に関する現象などである。

選択上の注意：国内外の研究結果をも資料として深く検討するものであるから、当演習を希望する者は、同時に粉末冶金特論（講）を受講し、しかも粉末冶金に関する実験を行っていることが必要である。

使用外国語：英，独。

H751 粉体金属加工学演習B 3-3-6

(教授 渡辺 侑尚)

ここでは応用に関するものを取扱うが、その対象となるものは主として各種機械構成部品用材料に関する粉末製造、圧粉体成形、焼結体製造の諸条件および製品に対する性能などに対する諸問題である。

選択上の注意：国内外の研究結果をも資料として深く検討するものであるから、当演習を希望する者は、同時に粉末冶金特論（講）を受講し、しかも粉末冶金に関する研究を行っていることが必要である。

使用外国語：英，独。

H760 機能性材料学演習A 3-3-6

(教授 一ノ瀬 昇)

機能性材料、主としてセラミック材料分野の最新の文献を中心として、その基礎と応用に関する調査を行なう。これらの調査と並行して、実際にサンプルを試作し、プロセス・評価技術を体験させ、その演習を行なう。

H761 機能性材料学演習B 3-3-6

(教授 一ノ瀬 昇)

ここではセラミックスを中心とした機能性材料の応用研究を主体とする。機能性セラミックスの応用分野はエレクトロニクス全般にわたるが、個々のテーマごとに深く掘下げた理論的考察を行ない、応用面での能力を養うと共に、論文としてのまとめ方を修得させる。

H780 電子材料学演習A 3-3-6

(教授 宇田 応之)

加速イオンを微量元素の分析や化学結合状態の解析に、いかに利用するかを実験と計算の両面から演習する。

H781 電子材料学演習B 3-3-6

(教授 宇田 応之)

固体表面の電子構造を研究するため、新しい光電子分光法を開発する。この目的を達成するため、実験と計算の両面から演習する。

応用化学専攻

応用化学専門分野

J 010 無機材料化学研究

(教授 加藤 忠 蔵)

天然および合成無機化合物の X線分析, 熱分析, 分光分析による構造の研究と物理化学的性質の測定を基礎として, これらの無機化合物に化学処理, 物理処理を施したときの構造と性質の変化について研究する。またこれらの無機化合物を吸着剤, イオン交換剤, 触媒, セラミックス材料, 電子材料などの工業材料として捉え, 種々の利用について研究する。さらに無機有機複合物の新しい化合物について合成と性質の研究を行う。

J 011 無機合成化学研究

(助教授 黒田 一 幸)

本研究では様々な機能を有する無機化合物の合成, 構造研究, 物性測定を行う。特に層間化合物の合成, 表面修飾と性質, 新しい分子ふるいの開発と孔径の制御, 無機高分子材料の合成, 窒化物炭化物系セラミックスの新合成法の開発, 無機-有機相互作用を利用した無機化合物の分子設計等の分野を中心に研究を行う。

J 020 高分子化学研究

(教授 土田 英 俊)

高分子の科学は, 化学, 物理, 生物などの諸分野にも亘るが, 更に産業を通して社会にも広く関連している。本研究では, 高分子物質の理解についての基礎となる高分子化学の研究につき, なるべく多くの方法を比較検討して進展させる能力を養成することを目的とする。

特に機能設計に重点を置いた立場から, 高分子金属錯体とその物性機能, 酸素錯体, 電磁高分子, エネルギー変換分子システム, 生体関連機能など, 高分子錯体化学を中心とした新分野の展開を研究する。

選取上の注意: 当研究を希望する諸君は, 学部で高分子化学とそれに関連する学科の履修が必要である。

J 021 高分子化学研究

(教授 西出 宏 之)

高分子化学の基礎を把握し, その研究方法について柔軟に関連分野の手法と比較し, 研究推進できる能力を養成する。具体的には, 要求される機能を発現できる化学構造の設計, その化学構造を有する高分子化合物の合成について研究する。気体分子の選択透過膜, 磁性をもった高分子, 医薬用高分子化合物などで, これらのうち適当な課題を選び研究指導を行なう。

J 030 燃料化学研究

(教授 森田 義郎)

本研究は燃料化学に関する研究を行なうもので、石油類の接触反応を主とするが、その他の化石燃料の化学や新技術も取り上げる。その内容は燃料化学および触媒化学に関する演習、燃料化学者として必要な基礎実験および研究実験等を行ない、併せて論文の作成を行なう。

J 031 燃料化学研究

(教授 菊地 英一)

石油をはじめとする化石資源の燃料およびケミカルズ(石油化学製品)への変換反応に関する基礎研究を行う。主として触媒反応の研究であり、炭化水素の転化、一酸化炭素やメタノールの転化(C₁ケミストリー)、燃焼反応等の研究課題について実験および演習を課し、研究指導を行う。

J 040 応用生物化学研究

(教授 鈴木 晴男)

生物物質およびそれに関連した諸物質(誘導体、類似体など)の学術的ならびに実用的利用を目指した基礎的研究を行う。これらの物質の中でも特に炭水化物、核酸、酵素が主として選ばれ、それらに関連した適当な諸テーマについて研究指導を行う。

J 041 応用生物化学研究

(教授 宇佐美 昭次)

生物化学は境界領域の学問として各分野からの急速な発展の基礎の上になつて新しい展開をみせている。とくにいわゆる応用生物科学(Applied life science)の重要な部門を占める微生物の応用領域は、従来とは全く異なつた基盤の上になつて今後広範な飛躍的發展を遂げるものと考えられる。当研究(宇佐美)の研究課題は、微生物を使用する発酵生産への応用、微生物(菌体資源)の量産への応用、微生物機能の他産業プロセスへの利用、酵素・生体触媒の開発と利用、さらにはこれら微生物の細胞融合、遺伝子組み換えを含めた新しい育種技術などで、これらの分野から適当なテーマを鑑み研究指導する。

J 050 電子材料化学研究

(教授 逢坂 哲彌)

電極反応に関連する物理化学的研究部門である。本部門では、電気化学のプロセスを利用した応用方面につながる研究に重点を置いている。特に、エレクトロニクス関連材料の湿式成膜プロセスによる合成(磁性体、薄膜抗体など)およびその応用、また、電解重合導電性高分子の高密度電池材料への応用研究、乾式成膜プロセスによるショットキーバリア型太陽電池材料の研究などについて研究を進めていく。

J 060 化学工学研究

(教授 城塚 正)

化学工学は物理化学、移動速度論を基礎とし、単位操作、反応工学、プロセスシステム工学が主体となっているが、本研究では特に光化学反応などを利用した反応装置工学、ま

た拡散単位操作の中で最近公害処理法として注目されている高度分離技術について研究を行なう。これらの研究課題について演習および実験を課し、研究指導を行なう。

J 061 化学工学研究 (教授 平田 彰)

移動速度論・拡散操作・生物化学工学・環境化学工学等に立脚し、下記の研究を行う。

- 1) MOVPE・CZ法による電子材料(半導体基板, 超格子型半導体)用単結晶成長法。
- 2) 光感応性微生物・酵素による有機合成, 固定化菌体・酵素バイオリアクターの開発。
- 3) 難分解性有害物質を含む産業排水・生活雑排水の生物処理, 公共用水域の生物浄化。
- 4) 液膜法(溶媒抽出法)によるバイオプロダクト・レアメタルの高度分離精製法の開発。
- 5) 界面現象(マランゴン対流等)の関与する諸移動現象(流動・伝熱・拡散)の解明。

J 062 化学工学研究 (教授 豊倉 賢)

新しい相の生成を伴う不均一系の諸現象に対する化学工学的研究を行なう。本研究においてはミクロ的な分子サイズの粒子の挙動, 非平衡状態の解明とそれらに基づくマクロ的な粒子挙動に関する諸現象の定量化を操作・装置を考慮して行なう。したがって異相系反応, 異相間拡散現象, 流動, 伝熱から蒸発・晶析・凝集沈澱などの単位操作およびそれらによる有機・無機化学プロセス全般の開発研究をも包含する。

J 063 化学工学研究 (教授 酒井 清孝)

人工腎臓および人工肺に関連した医用化学工学の研究を行なう。

血液中に蓄積した毒素を膜あるいは吸着剤を用いて除去するのが血液浄化療法であるが, 工学的にこの血液浄化療法を検討する時, (1)膜 (2)モジュール (3)人体とのシステムという3つの異なる観点から考察していくのが合理的である。血液の膜分離, モジュール内の溶質移動, 限外濾過, コンパートメントモデルなど解決すべき問題が山積している。これらの点について研究を進めていく。

J 070 合成有機化学研究 (教授 佐藤 匡)

有機化学の基礎理論および反応を理解し, 新しい有機合成化学反応の開発を研究する。

J 080 反応有機化学研究 (教授 長谷川 肇)

本研究においては, 次に述べる各種化学反応を通じ, 主として反応機構を中心として, 反応の改良, 新反応の開発, 新物質の合成の研究を行なう。

- (1) ビニルオキシラン, ビニルアジリジンの有機金属錯体を用いた反応。
- (2) チイランとオレフィン, アセチレン類との付加反応。

(3) スルフィドラジカルカチオンを用いた反応。

(4) 希土類元素を用いた有機反応。

J 081 精密合成化学研究

(助教授 清水 功 雄)

「有機化合物の合成に必要な新規有機合成反応の開発を行う。」

J 090 量子化学研究

(教授 宮 崎 智 雄)

化学結合や化合物の諸性質を理解するためには量子化学的手法によってその電子状態を知ることが必要である。本研究は量子化学的取り扱いの一つである分子軌道法を修得し、同法による計算結果を用いて分子の構造と物理化学的測定値との対応を検索し、あるいは化学反応等を解析する。

J 210 無機化学特論 (講) 0-2-2

(助教授 黒 田 一 幸)

無機化学の広範な研究分野の中から物理化学的な取り扱いを基礎にしつつ、無機物質の構造と機能の関連を中心に取り上げる。極めて多岐にわたる無機化合物の中から対象を絞り、また化学熱力学、結晶構造論、無機合成化学、無機反応機構、新しい機器分析手段の発展等のテーマの中から年度によって適宜選択して説明し、討論する。

選択上の注意：学部・無機化学Ⅰ・Ⅱ、無機固体化学などを履修していることが望ましい。

J 220 無機材料化学特論 (講) 2-0-2

(教授 加 藤 忠 蔵)

化学工業、セラミックス工業、電子工業、建設工業などの諸工業に利用されている無機工業材料一般をとり上げ、それらの合成法、構造、基礎的性質、応用などについて解説する。主としてとり上げる材料は次の通りである。

1. 無機化学合成品, 2. セラミックス材料, 3. 電子材料, 4. 耐火材料, 5. 特殊耐熱材料, 6. 断熱材料, 7. 研磨材料, 8. 無機センシ材料, 9. 顔料, 10. 螢リン光材料, 11. 吸着材料, 12. 無機有機複合材料。

J 230 応用鉱物化学特論 (講) 0-2-2

(教授 加 藤 忠 蔵)

工業に利用される無機材料は天然の鉱物から合成されたものが多い。そこで実際に利用される鉱物についての結晶構造、物理化学的性質について学んだのち、これらの鉱物からの新しい化合物の合成とその確認、さらに物理化学的性質よりの実際の利用についてのべる。特に粘土鉱物の化学処理、物理処理、有機化合物との複合物の合成、生成物の性質と利用について重点をおく。

本講義は無機化学部門に所属している者に限る。

J 240 高分子物性 (講) 2-0-2 (教授 西出 宏之)

溶液中での高分子鎖の挙動, 高分子材料の界面特性, 高分子固体の粘弾性など, 高分子化合物の物理化学を解説する。

選取上の注意: 学部で物理化学, 高分子化学を履修していることが望ましい。

J 250 高分子合成化学 (講) 2-0-2 (教授 土田 英俊)

高分子合成化学について, ラジカルまたはイオンの開始反応による, また, 段階反応による高分子生成機構を述べる。反応概念に関しては量子力学, 界面物理, 電子論の基礎と関連させた解説のほか, 照射重合にも触れる。

なお, 生体を構成する高分子とその生物活性の関連を説明し, 核酸や蛋白質などの生合成機構や, 生理機構のモデルとなる合成物質系についても言及する。高分子の生成論全般について, 高分子の構造および連鎖間の相互作用が, 機能とどう関連しているかという観点から討論したい。

選取上の注意: 学部で無機化学・有機・物理化学および高分子化学, 高分子物理学などを履修していることが望ましい。

J 260 高分子材料学 (講) 0-2-2 (教授 西出 宏之)

分離機能高分子材料, 電子・情報材料, 医薬用高分子化合物を中心に, 高分子材料の最近の進歩を, 機能高分子材料の分子設計の立場から述べる。

選取上の注意: 学部で高分子化学を履修していることが望ましい。

J 270 生体高分子 (講) 0-2-2 (教授 土田 英俊)

生命現象は緻密な化学反応の積み重ねとして理解されるようになって来ているが, これを担っているのが生体の高分子である。つまり, 生体高分子の作用の解明によって生命の最も基本的な性格が理解できる。このような観点から, 核酸 (DNA, RNA), 酵素, タンパク質, 多糖につき, その構造と特性の関連, 生体機能に果している役割を述べ, 更にはそれらの生合成機構にも触れる。

全般を通じ高分子科学と生命科学の接する領域の理解を深めるだけでなく, 進んで機能を持つ分子の理解や設計が何処まで可能になるのかを討論するだけでなく, 最新の観測手段についても詳しく述べる。

選取上の注意: 学部で基礎となる化学 (有機・無機・物化) のほか, 高分子化学, 高分子物理学, 生物化学を履修していることが望ましい。

J 280 燃料化学 (講) 2-2-4 (教授 森田 義郎)

学部の有機工業化学ならびに石油化学の上級課程に相当する。内容は石油の成分, 炭化水素の分離とコンバージョン, 脱硫, 脱硝等の公害防止技術, 重質油の有効利用, 石炭の

性状と乾留ガス化、シェールオイル、燃焼などについて、基礎および工業の重要事項を取り上げて講義する。

J 290 触媒化学特論 (講) 2-0-2 (教授 菊地英一)

本講義は概論的な触媒化学より一步進めたものである。その内容は工業触媒の特性、活性の表示、触媒の被毒、触媒研究に用いられる機器分析、触媒反応の解析に用いられる動力学的手法ならびに規則性等である。

選択上の注意：物理化学、有機化学、無機化学、初歩的触媒化学の予備知識を必要とする。

J 300 有機接触反応特論 (講) 0-2-2 (教授 菊地英一)

石油化学をはじめとして、有機化学工業においては触媒を用いた接触プロセスが数多くある。本講義はこれらのプロセスの基礎となる触媒反応の機構を中心にとりあげ、触媒と有機化学反応とのかかわりを取り扱う。

選択上の注意：触媒化学特論を履修していることが望ましい。

J 310 生物化学特論 I (講) 2-0-2 (教授 鈴木晴男)

学部の生物化学 A では生体物質の有機化学について広く浅く講義をするのに対して、本講義ではその中から比較的狭い範囲の物質またはテーマを取りあげて、比較的深い基礎知識を与えるようにする。したがって、講義の内容は年度により変動することがある。

Prerequisite; 学部・生物化学 A, B

J 311 生物化学特論 II (講) 0-2-2 (教授 宇佐美昭次)

近年、生物化学の分野では生体内で起る物質の化学変化とそれに伴って生ずるエネルギーの獲得と利用など物質代謝の方面における進歩にはめざましいものがある。また生物を構成する成分、とくにタンパク質、核酸、酸素など生物的な特性をもつ物質の化学も、物理学的な思索と分析技術の進歩とあいまって年ごとに新しい展開をみせている。本講義はこれらの一部を取りあげ詳述するが、その主題は年度により変動する。

Prerequisite; 学部・生物化学 I, II

J 320 微生物工学特論 (講) 0-2-2 (教授 宇佐美昭次)

この講義は鉱工業・産業および環境保全・社会福祉に活用される微生物工学の現状および将来性などについて述べる。すなわち、従来の発酵生産という分野にとどまらず菌体の量産あるいは他産業工程または環境、資源対処の微生物機能の利用という新しい方向に進みつつある微生物応用技術について解説する。

Prerequisite; 学部・生物化学 I, II。生物化学工業、大学院・生物化学特論 I

なお、本講義の履修は、一部実験的内容を含むので応用生物化学部門の者に限る。

J 330 食料工学特論 (講) 2-0-2 (教授 鈴木 晴 男)

食料物質の化学, 栄養, 生産, 加工, 保存などに関連した諸問題から, 適当なテーマを選出して解説する。

選択上の注意: 一部は実験をとまうので応用生物化学部門所属者に限る。

J 340 工業物理化学特論 (講) 2-0-2 (教授 逢坂 哲 彌)

本講義では, 界面二重層を中心とする界面化学, 電極反応速度論, 電子材料のための表面処理技術などに重点を置き, 工業物化学分野で特に顕著な近年の進歩について述べる。

J 350 電気化学特論 (講) 0-2-2 (教授 逢坂 哲 彌)

近年の各分野に应用されている電気化学的手段を利用した測定法についてくわしい説明解説をし, 電池材料, 光電極反応, 表面処理等各分野への応用例につきセミナー形式で講述する。

J 360 成分分離工学特論 (講) 2-0-2 (教授 城塚 正)

蒸留, 吸収, 抽出などの従来個別的に論じられた拡散系単位操作群に, 最近発展した膜分離法, 超遠心法などの化学成分の分離操作法の基礎理論を統一的に論述する。

J 370 反応工学特論 (講) 0-2-2 (教授 城塚 正)

反応装置の設計法について, 異相間反応, 触媒反応速度論の詳細と, 最近体系化されつつある, 光反応工学, 重合反応工学, 高温反応工学, 生物化学工学について論述する。

J 380 システム工学特論 (講) 0-2-2 (教授 城塚 正)

化学工業プロセスは反応装置と単位操作装置の大型プロセスシステムである。この構成サブシステムの機能を表現し, これにもとづき最適システムの合成論について講述する。

J 390 プロセス設計特論 (講) 2-0-2 (教授 豊倉 賢)

化学工業プロセスは, 原料面, 装置・操作面, 製品の三局面を有し, その調和のうえに確立されている。本講では, 資源の埋蔵・生産量およびその形態によって如何なる操作装置が開発されて来たか, また製品形態, 品質, 生産量の時代的推移が, 操作法, 装置を如何に変革して来たかを肥料工業その他を例示して講述するとともに, 化学工学理論に基づく新プロセス開発の手法にも言及する。

J 400 生体工学特論 (講) 0-2-2 (教授 酒井 清 孝)

Biomedical Engineering (医工学) の研究は, 最近米国の多くの化学工学者によって行なわれているが, 我国では数少ない化学工学者で研究されているにすぎない。生体は多く

の複雑な化学反応，単位操作を行なう精密小型化学プラントと考えられ，生体の機能またはそれを代行する装置の研究に化学工学が役に立つのは至極当然である。特に人工臓器の設計，生理学の実験や理論展開に化学工学手法を応用することが可能である。また膜分離技術は物質移動型人工臓器には不可欠である。これらの点につき講述する。

J410 輸送現象特論 (講) 2-0-2 (教授 平田 彰)

化学プロセスにおける諸現象機構の解析手法として重要な移動速度論について，特に界面現象，異相接触界面における運動量・物質移動現象および化学反応を伴う物質移動現象等に関して，モデル化手法，解析法，解の普遍化およびその応用について講述する。接触界面の対象としては平界面・気泡・液滴を取り扱い，化学反応の対象としては均相反応および不均一系触媒反応を取り扱う。

選択上の注意：学部におけるモデル解析法，移動速度論ⅠおよびⅡの教科内容と同程度の知識を必要とする。

J420 プロセスダイナミックス (講) 2-0-2 (講師 村上 昭彦)

輸送現象論に立脚したプロセスの動特性について講述する。

J430 化工研究手法特論A (講) 0-2-2 (未 定)

化学工学の分野における2, 3の具体的研究例をあげ，その研究手法の特徴およびその他の手法などについて講述する。

J431 化工研究手法特論B (講) 0-2-2 (講師 古崎 新太郎)

化学工学における研究のフィロソフィー，および研究の進め方について，下記の分野における研究例を紹介しながら広く検討を行う。

- (1) 機能材料を用いる分離
- (2) 生物化学工学 (バイオセパレーションとバイオリアクター)
- (3) その他

J440 プロセス開発特論 (講) 0-2-2 (講師 小久保 良)

新化学プロセスの開発は新製品を工業的に製造するか，現製品のコストダウン，性能向上のために必要である。プロセス開発のステップに応じ基盤となるフィロソフィーと化学工学の運用を論じ，プロセス開発の実例を紹介する。

J450 有機合成化学特論 (講) 2-0-2 (教授 佐藤 匡)

いくつかの典型的な有機合成反応につき，その反応理論を考察する。

J460 有機反応特論 (講) 0-2-2 (助教授 清水 功 雄)

有機金属化合物の反応について講述する。

J470 有機反応速度論 (講) 2-0-2 (教授 長谷川 肇)

有機反応機構を研究する上に、速度論的取扱は重要であって、その理論的内容に習熟していなくてはならない。この講義では、基礎となる理論的知識を与えると同時に、反応速度を扱っている論文について、研究目的、得られる結果等を要約し、使っている方法、提案している機構を検討する。

J480 分子軌道論 (講) 2-0-2 (教授 宮崎 智 雄)

化合物の物理的あるいは化学的諸性質を理解するうえで分子軌道の概念は極めて有効である。本講義は分子軌道法の理論とその計算法を詳細に説明し、その応用について述べる。

J610 無機材料化学演習 3-3-6 (教授 加藤 忠 蔵)

(助教授 黒田 一 幸)

化学工業、セラミックス工業、電子工業などに利用されている天然および合成の無機材料の合成法、物理化学的性質、利用などに関する文献をゼミを通して学ぶ。

本演習は無機化学部門に所属している者に限る。

J611 応用鉱物化学演習 3-3-6 (教授 加藤 忠 蔵)

(助教授 黒田 一 幸)

天然鉱物およびそれから合成された無機高分子化合物の構造、物理化学的性質、利用に関する文献をゼミを通して学ぶ。

本演習は無機化学部門に所属している者に限る。

J620 高分子物性演習 3-3-6 (教授 西出 宏 之)

高分子の化学構造と物理化学的性質の相関について文献、セミナーを通して学ぶ。本演習の履修は高分子化学部門に所属するものに限る。

J621 高分子材料演習 3-3-6 (教授 西出 宏 之)

分離機能、導電性、医薬用高分子材料に関する基礎手法を習得するため、文献調査と演習実験を行なう。本演習の履修は高分子化学部門に所属するものに限る。

J630 高分子合成化学演習 3-3-6 (教授 土田 英 俊)

高分子生成論の立場から連鎖の規制を問題にすると、高分子の分子量、分子量分布、組成分布、重合単位の序列、立体異性 (立体規則性)、光学異性、側鎖基や末端基の制御

などは、まず手はじめの対象である。更に、分子内あるいは分子間の相互作用力、およびそれらの協同性に基づく高次構造化の理解とその設計は、極めて重要なので十分な演習が必要とされる。

J 631 生体高分子演習 3-3-6 (教授 土田 英俊)

主な生体高分子の特徴は何か。機能とこれらの特徴あるいは構造との関連はどうか。生体内組成における高分子の位置づけと役割、分子レベルの化学反応とどう結びつくのか。生体高分子の生成過程はどのようになっているのか。また、エネルギー的あるいはエントロピー的に大きな障害はどのように除かれているのか。

これらの設問に対し、演習を通じ具体的な理解を深め、個々について実際に再現してみるための試みを実施する。

J 640 燃料化学演習 3-3-6 (教授 森田 義郎)

燃料化学、とくに石油化学、石炭化学に関する重要な文献を調査報告し、討議する。燃料化学の広い知識の習得、発表し討議する能力の養成を目的とする。

J 650 触媒化学演習 3-3-6 (教授 菊地 英一)

触媒化学に関する重要な文献を調査報告し、討議する。触媒化学の広い知識の習得、発表し討議する能力の養成を目的とする。

J 660 生体物質化学演習 3-3-6 (教授 鈴木 晴男)

応用生物化学研究(鈴木)において各人が選出したテーマ物質を中心として、内外の文献を調査して整理し、輪番制でわかりやすく解説を行ったのち、全員で討議を行う。

本演習の履習は応用生物化学研究部門(鈴木)に所属するものに限る。

J 661 応用生物化学特別演習A 3-3-6 (教授 鈴木 晴男)

応用生物化学研究における研究実験(各自の研究テーマに直接関係したものに限らない)に必要な基礎的実験の理論および技術を修得するために行なう。

本演習の履習は応用生物化学研究部門(鈴木)に所属するものに限る。

J 670 生体反応化学演習 3-3-6 (教授 宇佐美 昭次)

微生物酵素の使用方法は複雑多様化し、生体触媒的な使用が広範囲に開発されつつあって、今後あたかも化学工業における触媒工業のような位置に変わることが予想される。

本演習はこうした生体触媒による化学反応の広い産業応用・開発を目的として、研究実験に直接必要となる基礎的な知識の修得のために、おもに文献調査を行なう。

本演習の履習は応用生物学研究部門(宇佐美)に所属するものに限る。

J 671 応用生物化学特別演習 B 3-3-6 (教授 宇佐美 昭 次)

微生物酵素の生産過程を主体的に活用して、主原料基質を生化学的転換することを目的とした応用生物化学研究に必要な基礎的実験の理論および技術(実験を含む)を修得するために行なう。

本演習の履修は応用生物化学研究部門(宇佐美)に所属するものに限る。

J 680 工業物理化学演習 A 3-3-6 (教授 逢 坂 哲 彌)

工業物理化学的基礎研究に必要な測定法、特に近年著しく進歩した種々の機器の使用法ならびに結果の理論的解析法の会得を目的とする演習を実施し、研究者としての基礎的素養をやしなう。本演習の履修は工業物理化学研究部門に所属するものに限る。

J 681 工業物理化学演習 B 3-3-6 (教授 逢 坂 哲 彌)

前項に示す演習 A で学んだ種々の測定法、解析理論などの応用により、基礎あるいは応用研究を如何にして推進すべきかについて修練を重ねることを目的として、特定課題について演習実験を課する。

本演習の履修は工業物理化学研究部門に所属するものに限る。

J 690 化学工学特別演習 A 3-3-6 (教授 城 塚 正)

化学工業において拡散単位操作は重要な技術であるが、特に高度分離技術は資源開発や環境保全技術として重要であり、これに関して最近の膜分離法や超泡分離法などの開発が急速に展開されている。そこで本演習ではこれらの分離技術について文献調査および演習を行なう。

J 691 反応工学特別演習 3-3-6 (教授 城 塚 正)

反応工学において従来あまり取り上げられていない光化学反応、生化学反応、電気化学反応などを取り上げ、これらの反応を行なうための反応装置、すなわち光化学反応装置などの設計のための問題点について教授し、文献調査および演習を行なっていく。

J 700 化学工学特別演習 B 3-3-6 (教授 平 田 彰)

大容量中に微量に存在する難分離性の有害成分および有用成分の完全分離除去および回収のための既往諸分離操作の改良および新しい分離操作の開発を目的とし、成分分離法の基礎理論より創造的開発までに至る過程を通じ、移動速度論に立脚した、新しい成分分離手法の体系化を模索する。

J 701 輸送現象特別演習 3-3-6 (教授 平 田 彰)

輸送現象特論の項で記述した内容について、歴史的に重要な研究および最近のトピック

ス等について充分なる研究調査，研究成果の再検討を行ない，主として討論を通じ，移動速度論の本質とその意義を理解する。さらに，電子材料（IC基盤・光デバイス）用単結晶成長現象および超格子型半導体単結晶（GaAs-AlGaAs）の単原子層成長現象への活用を行う。

J 710 化学工学特別演習 C 3-3-6 (教授 豊倉 賢)

化学工学は基礎的には熱力学的平衡論と速度論とからなり，特に固液間の相変換を伴う移動現象を対象として演習を行なう。一方，装置内の状態は流動特性を加味することによって，温度，濃度その他各種因子の分布が考えられ，これらと平衡論・速度論を組み合わせることによって，装置・操作の設計を行なうことができる。本演習では最近の論文を参照しつつ，これらを検討するとともに新しい装置操作の開発法を修得する。

J 711 プロセス設計特別演習 3-3-6 (教授 豊倉 賢)

環境処理プロセスを含めて，化学プロセスは多種多様の製品を得ているが，それらの製造装置・操作法は化学的・物理的特性によって大幅に異なる。プロセス設計においては，装置・操作法を適格に選定するとともに，必要に応じて新たな装置を開発せねばならず，本演習においては晶析を主要現象とする有機・無機化学プロセスを例に，これらについて学習するとともに最適設計法を修得する。

J 720 化学工学特別演習 D 3-3-6 (教授 酒井 清孝)

燃焼装置の実例として，液中燃焼装置を取り上げる。そして燃焼工学的問題点と同時に装置内で起っている流動，伝熱と言った輸送現象論の問題点について討論し，装置内熱効率を増加させるべく努力すると同時に，装置形式の改善を進めて行く。

J 721 生体化学工学特別演習 3-3-6 (教授 酒井 清孝)

人工腎臓の性能評価を行なう事によって，各種ダイアライザの問題点を指摘する。そして血液浄化膜およびモジュール設計に対して化学工学的手法を用いて検討していく。

J 730 有機合成化学特別演習 3-3-6 (教授 佐藤 匡)

有機化学全般の問題につき各自いくつかの文献を集め，それらをまとめて総説形式で発表する。

J 731 有機反応化学特別演習 3-3-6 (教授 佐藤 匡)

有機反応論に関して新着雑誌の中から適当なものを各自選択し，それを問題形式として提出しその解説を行う。

J 740 反応有機化学特別演習 3-3-6 (教授 長谷川 肇)

当研究室で取扱っているテーマに関連のある論文を選び、その内容について検討を行う。

J 741 有機光化学反応演習 3-3-6 (教授 長谷川 肇)

光反応の教科書について輪講を行うと同時に、最近の光反応の研究論文についても討論を行う。

J 750 量子化学特別演習 B 3-3-6 (教授 宮崎 智雄)

分子軌道法の理論と計算法について演習を行う。

J 751 有機量子化学演習 3-3-6 (教授 宮崎 智雄)

電子状態にたいする分子軌道法の計算値を基にして有機化合物の諸性質を解析する方法について文献を引用して、演習を行う。

J 760 有機金属化学特別演習 3-3-6 (助教授 清水 功雄)

有機金属化合物の合成、構造および反応について文献調査を行い討論する。

J 761 有機合成計画法特別演習 3-3-6 (助教授 清水 功雄)

天然有機化合物等の生理活性物質の合成法について文献調査を行いその内容について議論し、合成戦略の理解を深める。

J 770 応用化学特別実験 3-3-2 (全 教 員)

応用化学分野各部門において研究実験を実施する場合、高度な分析機器の使用が必要となる。特に分光分析、X線分析、磁気スペクトル分析、クロマトグラフ分析、熱分析、電気分析は最も使用頻度が高いので、専門の教員が理論、方法、応用について説明を行い、操作習得の実習を行う。

尚、受講は応用化学専門分野の学生に限る。

化学専門分野

K 010 有機化学研究 (教授 高宮 信夫)

本研究においては有機化合物の構造、各種合成反応、および反応機構について研究を行

い、この間有機化学の色々な研究方法を修得し、幅広い能力を養成する。本研究では現在主として触媒化学の反応に重点をおいている。

K 011 有機化学研究 (教授 多田 愷)

1) 複雑な有機分子の光化学反応について構造と反応性の関係を検討する。研究手段としては生成物の構造決定、消光実験、発光スペクトル、低温赤外吸収、ラマン効果等を用いる。

2) 生体物質モデルとしての有機金属化合物の合成と、その機能を検討する。この目的のためには有機金属錯体を用いている。

上記両テーマ共模擬生体反応を目指している。

K 012 有機化学研究 (教授 新田 信)

光反応や熱反応による有機化合物の合成やその反応機構を明らかにする。原子価異性の問題、歪みを持つ分子や新しい非ベンゼン系芳香族化合物の合成と反応性などを研究する。

K 020 量子化学研究 (教授 井口 馨)

第二量子化形式に基づくグリーン関数の理論の多体問題への応用、原子分子の衝突理論の化学反応論への応用等を研究し量子化学の最新の問題を追求する。

K 021 量子化学研究 (教授 伊藤 礼吉)

分子の電子状態に関する基礎的取り扱いについて分子軌道法の立場から理論的考察を行う。また水素結合に関する量子化学的諸問題を研究する。なおトンネル効果による陽子転移反応、同位体効果なども扱う。

K 030 構造化学研究 (教授 高橋 博彰)

分子構造に関する理論的および実験的研究を行なう。本研究ではつぎのような問題をとらげる。

- (1) 非線形ラマン分光法による電子的励起状態の分子構造の研究。
- (2) 共鳴 CARS 分光法による生体関連分子の構造の研究。
- (3) 時間分解共鳴ラマン分光法による反応機構の研究。

K 031 構造化学研究 (教授 伊藤 紘一)

ペプチド、蛋白質核酸等の生体物質又はその関連化合物の立体構造を、主として赤外及びラマンスペクトル等の分子分光学的手段を用いて明らかにし、上記物質の生体反応系における役割を構造化学的に解明する。又生体関連物質水溶液の数 10GHz 以下の領域の誘電分散の測定を行い、主として水分子の誘電緩和過程の解析を通して、上記水溶液の動的構造を明らかにする。

K040 無機錯体化学研究 (助教授 松本和子)

混合原子価錯体の合成、構造、酸化還元反応、配位子置換反応等を、X線回折、電子スペクトル、磁氣的及び電気化学的方法により研究する。特に金属の異常原子価状態の安定化とこれを用いた生体類似反応系の開発を目的とする。

K210 有機化学特論A (講) 2-0-2 (教授 多田 愈)

有機化学に関する最新のトピックスにつき講義する。主題としては天然物や理論的に興味ある物質の合成、反応活性種、生体模擬反応等を取り上げる。

K220 有機化学特論B (講) 0-2-2 (教授 新田 信)

芳香族性の概念、物理的・化学的諸性質について明確にし、非ベンゼン系芳香族化合物に関する最近の論文をとりあげ、研究の目的や結論について検討し解説する。

K230 有機分析化学特論 (講) 2-0-2 (教授 高宮 信夫)

有機化学を研究する上に必要な分析法および分析理論について広く理解できるように講義を行なう。重点は最近特に目覚ましい発展をとげつつある機器分析法におく。

K240 量子化学特論A (講) 2-0-2 (教授 伊藤 礼吉)

分子分光學と分子軌道法の関係について述べ、水素結合の理論を経験的に取扱う。水素結合のもつ性質や水素結合効果について量子化学的考察を行う。さらにピコ秒パルスの分光學および非経験的分子軌道法の現状について説明する。

K241 量子化学特論B (講) 0-2-2 (教授 井口 馨)

本講義においては学部における量子化学または量子力学の課程を修了した学生を対象として、分子対称群、分子の電子状態および核振動状態の理論、化学反応および分子間力の理論等を説明する。

K250 構造化学特論A (講) 2-0-2 (教授 高橋 博彰)

非線形ラマン分光法 (coherent anti-Stokes Raman, inverse Raman, stimulated Raman gain, Raman induced Kerr effect, hyper Raman) の理論とその応用および時間分解共鳴ラマン分光法について説明する。

K251 構造化学特論B (講) 0-2-2 (教授 伊藤 紘一)

蛋白質、核酸等の生体高分子を含めた一般の高分子の立体構造を決定する為の物理化学的手段について概観する。特に分子分光學的手段については、少々詳しく論ずる。高分子溶液の誘電緩和過程の解析から明らかにされる動的構造についても言及する。又、現在ま

で得られている生体高分子の静的及び動的構造に関する知見を整理し、それが生体反応機構を如何に説明するか検討する。

K260 無機錯体化学特論 (講) 2-0-2 (助教授 松本和子)

代表的な無機錯体を取り上げ、その構造および反応性を述べるとともに、錯体化学を研究する上で必要なX線回析法、電気化学的手法等について説明する。

K610 有機化学特別演習B 3-3-6 (教授 高宮信夫)

有機化学に関する論文紹介を雑誌会形式で行なう。論文はその都度必要に応じて指定する。

K611 有機触媒反応演習 3-3-6 (教授 高宮信夫)

有機触媒反応に関する論文紹介を雑誌会形式で行なう。論文はその都度必要に応じて指定する。

K620 有機化学特別演習C 3-3-6 (教授 多田 愈)

有機化学の最近の成果につき問題形式で討論する。

K621 有機化学特別演習D 3-3-6 (教授 新田 信)

最新論文の内容を問題形式で与え、これに解答する形で最新理論を学んでゆく。

K630 有機化学理論演習 3-3-6 (教授 多田 愈)

有機化学の発展を追跡するため近着論文の紹介を通して討論し、最新有機化学の動向を探る。

K631 構造有機化学演習 3-3-6 (教授 新田 信)

最近の論文より光反応、熱反応などに関するものを取りあげ、電子的、構造的因子と反応性、反応機構などを討論し理解してゆく。

K640 量子化学特別演習A 3-3-6 (教授 井口 馨)

グリーン関数の理論およびファインマンダイアグラムの理解習得、LCAO-SCF理論による分子の波動関数の計算法、原子分子の衝突反応の断面積計算法、および電子計算機プログラム構成の習得等を行う。

K641 固体量子化学演習 3-3-6 (教授 井口 馨)

分子結晶における励起子、電子の状態およびフォノンによる散乱、捕獲などの理論を学び、電気伝導、構造相転移などを理解する。

K 650 量子化学特別演習 C 3-3-6 (教授 伊藤 礼吉)

量子化学研究の理論的結果を実際に電子計算機によって求めることが主な内容である。非経験的分子軌道法のプログラミングに当りサブルーチンの構成やコントロールカードの運用などを実習する。

K 651 水素結合論演習 3-3-6 (教授 伊藤 礼吉)

水素結合系のプロトンの断熱ポテンシャルがどのように決定されるかを検討し、そのポテンシャルからえられる $AH \cdots B$ 系の AH 伸縮振動の波動関数を数値的に厳密に求めて振動論や不確定性原理などの物性基礎への寄与を検討する。FORTRAN IV のプログラミングが主な仕事である。

K 660 構造化学演習 3-3-6 (教授 高橋 博彰)

分子の基準振動および格子振動の計算法に関する基礎理論を理解させ、さらにこれに対する群論の応用が可能となるよう指導する。

K 661 分子分光学演習 A 3-3-6 (教授 高橋 博彰)

本演習では、赤外吸収、およびラマン効果の測定と解析に関する理論面および技術面の指導を行なう。

K 670 生体高分子構造化学演習 3-3-6 (教授 伊藤 紘一)

- (1) 蛋白質核酸等の生体高分子の立体構造解明の為の種々の物理化学的手段の原理と方法。
 - (2) 生体高分子溶液の動的構造解析手段としての NMR, 誘電分散の原理と方法。
 - (3) 現在までに明らかにされている生体高分子の立体構造に関する知見の整理。
 - (4) 生体高分子の静的及動的構造とそれらの生体反応系ではたす役割との関連。
- 以上の項目について演習を行う。

K 671 分子分光学演習 B 3-3-6 (教授 伊藤 紘一)

- (1) 蛋白質、核酸等の生体高分子を含めた一般の高分子のコンホメーション解析手段としての赤外及びラマンスペクトルの原理と方法及び実際の測定に際しての試料の調製法。
 - (2) 高分子の振動スペクトル解析の為の基準振動計算法の原理とそのプログラミング。
 - (3) フーリエ変換法による GHz 領域の誘電分散の測定法の原理と生体関連物質水溶液誘電緩和過程の解析。
- 以上の項目について演習を行う。

K680 無機錯体化学演習A 3-3-6 (助教授 松本和子)

錯体化学に関する論文紹介を雑誌会形式で行う。論文は近着のものから重要性の高いものを選ぶ。

K681 無機錯体化学演習B 3-3-6 (助教授 松本和子)

錯体化学を研究する上で必要な手法の原理と実際面を輪講形式で学習していく。

K690 化学特別実験 3-3-2 (全 教 員)

応用化学専攻内の各部門において研究を行う場合、高度な技術を要する分析機器の使用が必要となる。特に分光分析、X線分析、ガスクロマトグラフ分析、熱分析、磁気分光は殆んどが使用するのでこれらをまとめて、それぞれの専門の教員が理論、方法、応用について説明を行い、操作習得の実習を行う。

なお受講は応用化学専攻の学生に限る。

物理学及応用物理学専攻

L 010 数理解物理学研究

(教授 堤 正義)

数理解物理学に現われる種々の非線形偏微分方程式の解の構造を関数解析の手法を用いて研究する。実関数論、関数解析の基礎的知識が必要である。力学、電磁気学、量子力学の知識を持っていることが望ましい。

L 011 数理解物理学研究

(教授 飯野 理一)

関数解析とその数理解物理学への応用の研究。

注意：1) 実変数関数論(ルベグ積分)と関数解析の初等的な部分を学習しておくことが望ましい。2) 応用関数方程式演習は必修である。

L 020 素粒子理論研究

(教授 大場 一郎)

素粒子物理の理論的研究。特に、クォーク・レプトンの対称性と各種ゲージ相互作用、模型と模造および高エネルギー素粒子反応の現象論的分析を行う。

選択上の注意：力学、電磁気学、統計力学、量子力学について基礎的な知識が必要である。本研究選択の学生は素粒子理論演習および高エネルギー物理学演習を選択しなければならない。

L 021 素粒子理論研究

(教授 並木 美高雄)

素粒子構造および高エネルギー素粒子反応の理論的研究を行う。この主題と関連して、多粒子系の量子論および応用数学の諸問題の研究を取り入れることがある。

選択上の注意：力学、電磁気学、統計力学、量子力学についての基礎的な知識が必要である。本研究選択の学生は素粒子理論演習および高エネルギー物理学演習を選択しなければならない。

L 022 理論核物理学研究

(教授 山田 勝美)

原子核の構造、崩壊および反応を理論的に研究すると共に、その成果を天体物理学や原子力に応用することも行う。原子核構造は、量子力学的多体問題の手法を用いたり、新しい原子質量公式を考案することによって追求する。また崩壊および反応については、とくにベータ崩壊、巨大共鳴、高エネルギー重イオン反応等に重点をおいて研究する。

L 030 実験核物理学研究

(教授 藤本 陽一)

宇宙線超高エネルギー現象の実験を中心に、原子核物理学とその境界領域の主として実

験的研究を行う。

L 031 実験核物理学研究

(教授 長谷川 俊 一)

宇宙線超高エネルギー現象の実験を中心に、原子核物理学とその境界領域の主として実験的研究を行う。

L 040 原子核工学研究

(教授 道 家 忠 義)

この専修課程では原子核物理、放射線物理に基く基礎技術の開発を行い、かつ、その成果を利用した物理実験をも行う。ここでは、次のような研究に重点を置いている。

i) 放射線物理：放射線検出器および加速器開発の基礎としての放射線と物質との相互作用の研究

ii) 放射線検出器の開発：新しい原理に基く検出器の開発

iii) 宇宙線物理：開発された新しい検出器を使用した高エネルギー一次宇宙線の研究、将来、素粒子実験にも着手する予定。

iv) 加速器を用いない素粒子実験：磁気単極子の探索、宇宙ニュートリノの検出、素粒子物理から予言される宇宙 γ 線の検出等。

L 041 原子核工学研究

(教授 黒 沢 龍 平)

ここでは

i) 放射線による体内外被曝量の評価法とそれに必要な測定法等に関する研究

ii) 放射線被曝による生体の影響の調査研究

iii) 放射線的環境の危険性の評価と被曝の防止ならびに放射線管理法に関する研究などとそれらを中心とした放射線管理上の諸問題について考察する。

L 042 原子核工学研究

(教授 菊 池 順)

ここではエレクトロニクスに重点をおいた原子核工学の研究を行う。

i) 放射線検出器とそれに附随するエレクトロニクスの開発

ii) 宇宙物理：微弱放射線検出器を用いた宇宙物質中の宇宙線による誘導放射能の測定。宇宙物理に関連した高エネルギー核反応の研究。

L 050 核物性・粒子線物性研究

(教授 大 槻 義 彦)

加速器による軽イオン、重イオンおよび放射性物質からの α 、 β 、 γ 線、それに陽電子線を固体に衝突させることによって、固体の物性物理学を研究するものである。

とくに重イオン、低速イオンの阻止能の問題、重イオンの周期場による共鳴励起（いわゆるOKOROKOV効果）、固体表面での荷電変換、イオン・ビームが固体プラズマ中に作るプラズマ波動のふるまい、磁性体との相互作用による偏極ビームの生成、結晶軸による

チャンネリングおよびディチャンネリングの問題などが主な研究内容である。

90%以上が理論的研究であるから、量子力学、物性物理学の初歩などに精通していることが望ましい。

L 051 統計物理学研究

(教授 加藤 鞆 一)

統計力学の手法を用いて、非平衡状態、特にプラズマ中の非線形現象を研究することを目的とする。現在、(1) 無衝突プラズマ中の非線形振動およびその減衰あるいは成長、(2) 大きく乱れたプラズマ流の理論的解析、(3) ビーム・プラズマ系の安定性の問題、(4) 反転磁場ピンチに現れる緩和状態の解析、を対象として研究を行なっている。

選取上の注意：本研究では、第一年度に統計力学演習、第二年度にプラズマ物理学演習を選取することが望ましい。

L 052 統計物理学研究

(教授 相澤 洋 二)

非線形非平衡系の統計力学。エルゴード問題ならびに散逸構造、カオス、フラクタル、パターン形成などの基礎的問題を研究する。(1)力学が生み出す多様なカオス現象をエントロピー理論や分岐理論などの力学系の理論によって調べる。(2)凝縮系、反応拡散系、流体系、プラズマ系などの平衡から遠く離れた状態に広く観測されている秩序パターン、乱流パターン、フラクタルパターンの発生機構を調べる。(3)生物系に顕著にみられる非線形非平衡現象の理論的研究も行ってゆく。これまでは、生体膜、筋収縮、形態形成などの理論研究を行ってきたが、巨大システムとして特に注目される免疫系や神経系の理論研究も合わせて行う。

L 053 理論固体物理研究

(教授 木名瀬 亘)

固体物理学は物理学において広範囲な分野を含んでいるが、当研究においてはとくに強誘電体の相転移機構、光物性、誘電体と半導体の中間物質の理論的研究を行なう。

この研究の基礎として、電磁気学とくに誘電体に関する分野、熱力学、統計力学、量子力学における分子論的問題に習熟しておくことが必要である。

L 060 粒子線物性研究

(教授 市ノ川 竹 男)

本研究科目の主題は電子またはイオンと固体との相互作用を実験的に研究していくもので、電子またはイオンの固体による散乱、回折、チャンネリング、放出粒子、スパッタリング等の現象を測定することによって、粒子線の固体内での振舞や、固体との相互作用を研究する。さらにこれらの現象から固体の表面構造、格子欠陥、熱振動、吸着分子等の性質を電子またはイオンのエネルギー分析器と組合せて解析する。本研究科目を修得するためには電子線物性演習およびイオンビーム物性演習が必修である。

L 061 電波物性研究 (教授 植松 健一)

この研究では、マイクロ波やミリ波による電子スピン共鳴吸収その他の実験手段を用いて、強磁性体、反強磁性体および常磁性体の物性研究を行う。交換積分、 g 値、磁気異方性、転位温度、磁気緩和、磁性と電気伝導などの興味ある挙動に注目する。またとくに、磁性体の薄膜を作成し、薄膜を通して研究することに一特徴をもっている。

本研究は、磁性演習と磁気共鳴演習とを必修とする。なお、これら演習は二年にわたり履修するものとする。

L 062 光物性研究 (教授 大井 喜久夫)

誘電体結晶の電子構造およびその中の不純物の性質を光吸収、反射、蛍光、光電導、磁気共鳴などの手法を用いて研究する。またこれらの結晶の構造相転移に関する研究を行なう。なお、光物性演習は本研究の必修科目である。

L 063 磁性体物理研究 (教授 近 桂一郎)

磁性体物理学、遷移金属化合物の結晶化学、イオン結晶の格子欠陥などの分野から適当なテーマをえらび、主に実験的研究を指導する。なお、磁性演習および結晶化学演習は本研究の必修科目である。

L 070 理論生物学研究 (教授 鈴木 英雄)

現代生物学では、生物の営む諸生活が細胞レベルの基本的諸過程に還元され、かつこれらの諸過程を荷なう物質群が明らかにされつつある。本研究の目的は、これら物質群の相互作用・相互転換・相互変化の機構を理論的に解明して、細胞レベルの基本的諸過程ひいては生物の諸生活を統一的に理解することである。なお、量子生化学演習と光生物学演習は本研究の必修科目である。

L 071 実験生物物理学研究 (教授 石渡 信一)

主に骨格筋や心筋などの横紋筋を素材にして、生物のもつ秩序構造の形成と維持の機構を、特にフィラメント構造に着目しつつ分子レベルで明らかにしていく。また、筋収縮とその制御の分子機構を物理的・化学的側面から研究する。さらに、非筋細胞の機能発現における収縮タンパク質の役割を研究する。実験生物物理学演習 A、B を必修とする。

L 072 統計物理学・理論生物学研究 (教授 斎藤 信彦)

当研究室は理論生物学、統計物理学の中から、いくつかの問題を取扱ってきたが、現在の中心的な問題は、理論生物学においては、蛋白質のコンフォメーション及びその転移に関する理論、生態系の数学的問題、神経回路などである。また統計物理では、力学系の乱雑挙動(カオス)に関する数値実験を行ない、カオスの発生のメカニズムを探っている。

L 073 分子生物物理学研究

(教授 浅井 博)

筋肉収縮の分子機構に関する研究。蛋白質のダイナミックな構造変化と機能発現との関連。ツリガネムシやデイデニウムなどの原生動物の運動性や行動に関する研究。情報伝達の担い手としての種々の生体膜とくに感覚受容器膜の機能と構造。将来は脳や中枢神経系の働きに関する研究も始めたい。他に新しい生物物理的な研究手段の開発。

L 074 発生生物学研究

(教授 安増 郁夫)

発生生物学のとりあつかう分野は、胚発生にとどまらず、成熟、老化過程もふくむ広い分野である。従って、現在物理的、化学的・形態学的手法で研究されつつある生理現象とその調節機構とともに、時間的な変化とそれをひきこす機構を解明することも要求されることになる。この分野で、細胞内・細胞間情報物質発見・生成機構、代謝系調節及び遺伝情報選択機構との関連・それにとまなう細胞分化過程及び分化の固定を中心とする。

L 075 動物生理学研究

(教授 石居 進)

多細胞動物で空間的に離れている細胞同士の関係を規定しているのが神経系と内分泌系である。本研究は、主として生殖現象に関係している動物の形態、機能、物質代謝、行動などを対象とし、そこで内分泌系が果している役割や、内分泌系と神経系との相互関係を、生物学的、化学的、物理学的方法を用いて、解明してゆくことを目的としている。またこのような系の進化の過程についても注意を払ってゆきたい。

L 076 内分泌学研究

(教授 菊山 栄)

L 077 遺伝学研究

(教授 平 俊文)

生命体の活動はその遺伝情報にもとづいている。この遺伝情報の分子的特性が、物質代謝、細胞分化、器官特性、個体の特徴、および種社会の特性を現わしている。このように広い分野を取扱う遺伝学は、歴史的には遺伝子概念の変遷過程としてとらえることができる。特に現在、分子レベルの遺伝子とその発現機構としての器官分化・形態形成との関連について分子遺伝学の立場から研究を進める。

L 078 植物生理学研究

(教授 桜井 英博)

生物界のエネルギー獲得系の中心に位する光合成の研究の現状および今後の発展の方向について研究する。

L 079 生態学研究

(教授 大島 康行)

生物の集団に関する諸問題を研究対象とし、とくに、生物個体群および生態系の動態と安定性、それを支配する諸要因や制御機構の研究をおこなう。

L 07A 生理生態学研究 (教授 伊野良夫)

集団を形成する生物の環境適応や順化に関して生理学的観点から研究を行う。

L 07B 生体制御研究 (助教授 並木秀男)

L 080 巨大分子物性研究 (教授 千葉明夫)

巨大分子物質は生物の基本構成物質であり、また、工業の分野でも特異な物質として利用され、そのいずれもが重要なものである。巨大分子の性質にはまだ明らかでない点が多く、物性物理の興味ある対象となっている。

本研究では、高分子溶液の相転移、強誘電性高分子の相転移と圧電性、高分子固体の相溶性、微細構造、の研究を主に行っている。

なお、本研究を選択した者は、巨大分子物性演習 A 及び B を必修とする。

L 081 放射線分子物性研究 (教授 浜 義昌)

本研究では高分子も含めた有機物質の放射線照射効果を取扱う。とくに、照射によって物質内に起る変化の初期過程、生成した活性種の挙動等について種々の実験法を用い多面的に検討している。現在の主な研究テーマは、(1) 被照射有機物の電子スピン共鳴、(2) 被照射有機物の熱ルミネッセンス、(3) ODESR 法による短寿命活性種の研究である。本研究科目を履修する者は放射線分子物性演習 A、B を必修とする。

L 090 結晶物理研究 (教授 小林 謙三)

本研究は結晶の示す独得な物理的諸性質；とくに誘電性、弾性、圧電性、光学性、熱的性質の精密測定を行なうとともに、さらにこれらの性質が発生する起因を徹視的に解明する。またこの過程で得られる結晶物理的性質を実用的に応用する新しい原理を探究する。

結晶の物理的性質の起因を徹視的に理解するためには、不安定な異常状態における物理的性質を調べることがもっとも有効である。この意味で結晶の相転移現象を調べることが重要であり、現在は強誘電性結晶の相転移に重点をおいて研究を展開している。たとえば (1) 強誘電転移に伴う物理的性質の変化の精密測定、(2) 間接型強誘電転移の理論的研究、(3) 結晶の旋光能、電気旋光係数と強誘電性との関係、(4) 電気旋光係数の実用的応用など。

本研究と関連する演習科目：強誘電体物理演習、結晶光学演習

L 091 結晶物理研究 (教授 上江洲 由晃)

本研究は、工業技術の種々の面において重要な役割を果たす結晶の呈する物理的諸性質を、X線振動数領域における電磁波と結晶との相互作用を通して、原子論的に解明することを目的とする。実験手段としては、

1. 運動学的、動力学的 X線回折、2. X線散漫散乱、3. X線非弾性散乱、などを用いる。

現在はとくに強誘電体の相転移現象を対象とした研究を行なっている。
本研究と関連した演習科目：結晶構造解析学演習，X線光学演習状態

L100 応用光学研究 (教授 大頭 仁)

本研究では、主としてレーザから得られるコヒーレント光の基本的性質とその応用分野を中心に研究を進める。特に工学的応用のみではなく、医学などをも含めた広い分野での光学計測法を中心に、さらには今後の重要課題である光通信の諸問題、たとえば光導波路や光変調、光情報処理なども研究する。

また、光情報処理あるいは生理光学の立場から、生体の視覚系の問題も取扱う。特に眼球光学系と網膜の諸機能の基礎研究と同時に、その光学的計測法、眼鏡の諸問題、視覚障害者用人工眼の研究も行う。コヒーレント光学演習および生理光学演習を必修とする。

L101 光物理研究 (教授 小松 進一)

理工学の諸領域と光学との関わりは年とともに深まりつつある。

光の波動性と粒子性に関する基本的な物理現象について論じ、これらの新しい原理に基づく光計測や光情報処理、オプトエレクトロニクスなどへの応用法を研究する。

光情報学演習，光物理演習を必修とする。

L110 情報工学研究 (教授 大照 完)

情報処理システムの研究である、生物の情報処理機能と対比しつつ理論に片よらず、実験に片よらず、工学への応用の立場に立って、その都度、具体的なテーマを取り上げる。“数学モデル” 計算機ソフトウェアからエレクトロニクス回路の構成まで融合した研究を行う。

本研究では、情報工学演習AおよびBを必修とする。

L111 情報変換工学研究 (教授 中村 堅一)

本研究では、像情報の表示および記録のために必要なセンサや媒体の物性および変換方式の研究を行う。さらに新規にデバイスや応用面の開発を目的とした諸問題の実験的研究を行う。

本研究では、情報変換物理演習，情報変換材料演習，情報変換工学演習および情報変換特論演習を必修科目とする。

L112 電子計測工学研究 (教授 小林 寛)

半導体，強誘電体，磁性体などの単結晶，或は非晶質材料，その他色々な材料の特性を活用して、オプトエレクトロニクスを含む電子工学全般に亘り，各種情報の変換，計測を行ない，高度な情報の記憶処理への応用について研究する。

本研究では電子材料工学演習及び電子計測工学演習を必修とする。

L 113 制御工学研究 (教授 久村 富持)

主として工学的情動的システムを中心に、その解析と状態推定、制御問題を取り扱う。現在、研究中のテーマは以下の通りであるが、その性質上、古典制御理論、微分方程式、行列、確率過程、最適化手法などを習得していることが望ましい。1. 未知パラメータを含むシステムの適応制御問題。2. 画像認識に基づく制御問題。3. ベトリ・ネット理論の制御システムへの応用。なお、当研究の演習科目(必修)は、システム解析演習、制御理論演習である。

L 120 実験天体物理学研究 (教授 大師堂 経明)

L 210 数理物理学特論 A (講) 2-0-2 (教授 飯野 理一)

数理物理学に関連する関数方程式の諸問題の中から、適宜に話題を選び解説する。

L 211 数理物理学特論 B (講) 0-4-4 (教授 堤 正義)

数理物理学におけるいくつかの話題を選びその関数解析的アプローチについて解説する。

L 220 量子力学特論 (講) 2-2-4 (教授 並木美喜雄)
(教授 大場 一郎)

この講義の目的は、場の量子論または量子力学的多体問題などについての基礎的な知識を与えることである。毎年同じ内容の講義をするわけではなく、学年毎に話題をえらぶので内容が変りうる可能性がある。

選択上の注意：この講義の聴講者は、学部程度の量子力学、統計力学および場の量子論初歩の知識をもっていることが要求される。

L 230 素粒子物理学 A (講) 2-2-4 (教授 並木美喜雄)
(教授 大場 一郎)

現在発展中の素粒子物理学についての基礎的な知識について解説する。

選択上の注意：量子力学、統計力学および原子核概論などの知識をもっていることが望ましい。

L 231 素粒子物理学 B (講) 2-2-4 (講師 二宮 正夫)

素粒子物理学について特にその物理的背景の解明に意を注ぎながら考究する。既成の理論の学習にとどまらず素粒子理論の困難の解決にどんな路があるかを意欲的に探究したい。

選択上の注意：この講義は、素粒子理論研究(並木)、同(大場)を選択している学生を

対象にして行なわれる。

L 240 原子核物理学A (講) 2-2-4 (教授 山田勝美)

主として、原子核構造、原子核崩壊および低エネルギー核反応について講義を行なう。
選択上の注意：量子力学および初等的な原子核理論の知識をもっていることが要求される。

**L 241 原子核物理学B (講) 2-2-4 (教授 藤本陽一)
(教授 長谷川俊一)**

前半において、高エネルギー核反応、宇宙線、プラズマ物理、宇宙物理について解説する。また後半には、原子核の安定性、ベータ崩壊、原子核多体問題におけるいくつかの最近の研究を紹介する。

量子力学、相対論および原子核概論の知識をもっていることが必要である。

L 250 天体物理学特論A (講) 2-0-2 (教授 大師堂経明)

いわゆる相対論的天体物理学を中心にして、入門的講義を行なう。ここで相対論的というのは、特殊および一般相対論の関係する諸現象をひろく含み、高エネルギー天文学・重力の関係した宇宙現象を解明する。学部における天体物理学、相対性理論の講義内容を前提にする。また FFT を使った像合成等の最近の観測技術の発展についても述べる。

L 251 天体物理学特論B (講) 2-0-2 (教授 大師堂経明)

L 260 放射線物理 (講) 2-0-2 (教授 道家忠義)

高速荷電粒子と物質との相互作用を中心として放射線の物質に与える影響について論ずる。

内 容

1. 一次過程(阻止能) 2. 二次過程——総合過程(イオン対生成 W 値, G 値等)
3. γ 線, 中性子線と物質との相互作用 4. マイクロ・ドゼメトリー 5. 放射線損傷(飛跡生成の機構も含む)

L 270 原子核工学特論 (講) 0-2-2 (教授 道家忠義)

原子核関係の技術、特に加速器と放射線計測とにおける最近の技術的進展の模様について述べると共にその将来の展望について論ずる。内容は出来るだけ焦点を絞り細論したいので年により中心テーマを変えて行くつもりである。昭和63年度は加速器技術の最近の進展情況を中心として講義する予定である。

L 280 保健物理 (講) 2-2-4 (教授 黒沢龍平)

保健物理とは放射線や放射性物質を扱う際の危険性を予測し、危険を防止する方策を講ずると共にそのような危険が生じた際の状況や措置などについて研究する学問分野である。この学問は種々の分野の研究の成果を基礎にして組み立てられているばかりでなく実務的な面もあわせて持っている。主として放射線の危険性の基本的な概念とそれにもとづく体内外被曝の評価法ならびに放射線管理法などについて講義する。

放射性物質の利用や取扱いについては同位元素工学(0009)で講義する。

**L 290 統計力学特論 (講) 2-2-4 (教授 加藤 鞆 一)
(講師 清水 敏 寛)**

この講義では非平衡状態の熱力学および統計力学について学習する。平衡状態の熱力学および統計力学に比べると未解決の問題が多く線形理論の適用できる範囲を除けば、現在も研究が進められている。

非平衡の熱力学、ブラウン運動、揺動散逸定理、Onsager-Machlup の定理、H定理、熱力学的極限などを取り上げる。

選択上の注意：統計力学A、Bおよび量子力学Aを習得していることが望ましい。

L 300 プラズマ物理学特論Ⅰ (講) 2-0-2 (教授 加藤 鞆 一)

入門的な核融合研究解説の後に、電磁場内の荷電粒子の運動の解析を特にドリフトと断熱不変量に重点を置いて進める。さらに熱平衡プラズマ中に発生する種々な線型波動の考察および電磁流体力学への入門についても述べる。

選択上の注意：統計力学A、B、連続体の物理、電磁気学を習得していることが望ましい。

L 301 プラズマ物理学特論Ⅱ (講) 0-2-2 (教授 加藤 鞆 一)

電磁流体力学的平衡状態を出発点とし、コンパクト・トーラス系の安定性の問題を中心に磁場閉じ込め核融合装置の物理を述べる。また慣性核融合の諸問題についても触れる。

選択上の注意：統計力学、連続体の物理、電磁気学を習得していることが望ましい。

L 310 物性物理特論A (講) 0-2-2 (教授 植松 健 一)

強誘電体の相転移機構と光学的性質について集中的に講義を行う。

L 311 物性物理特論B (講) 2-0-2 (教授 木名瀬 亘)

L 312 物性物理特論C (講) 2-0-2 (教授 大井 喜久夫)

微視的な電磁気学、統計力学および量子力学の立場から主として固体の諸物性について講義を行う。

L 313 物性物理特論D (講) 0-2-2 (教授 大槻 義彦)

固体物理学における強誘電体・半導体などを中心として新しい問題について講義する。とくに、相転移に伴う諸物性の変化、不整合相、結晶表面の問題についてくわしく説明する。

L 320 結晶物理学特論A (講) 2-0-2 (教授 市ノ川 竹男)

固体表面・界面の結晶構造を解析する方法と理論について概説する。具体的には低エネルギー電子回折、イオンチャネリング、走査型トンネル顕微鏡による解析法が述べられる。さらに、金属、半導体、セラミックス、超電導材料等の表面に現れる再配列構造の例が示され、それらの構造がつくる表面準位(バンド構造)や表面の物性について触れる。各種の表面・界面の評価解析法も紹介される。

L 321 結晶物理学特論B (講) 0-2-2 (講師 星 埜 禎男)

X線、中性子線の原子による散乱、物質系による散乱・回折の基礎理論、実験・解析法等について述べ、この方法が、相転移現象など物性科学の研究に果している役割りにつき論述する。

**L 330 結晶群論 (講) 2-0-2 (教授 小林 謙三)
(教授 上江洲 由晃)**

群論は、対称の数学であり、現代物理学の諸相の研究に有用であるが、とくに物質の相転移現象を理解するためには、不可欠の利器となっている。

本講義は、結晶物理学における対称群の性質の解説に主眼をおき、次の諸項を取り扱う。

1) 群の表現論, 2) 点群, 空間群の既約表現, 3) 結晶の電子状態, 4) 相転移理論。

L 340 相対性理論特論 (講) 0-2-2 (講師 江 沢 洋)

L 350 生物物理A (講) 2-0-2 (教授 鈴木 英雄)

基本的な生体物質、特にタンパク質と核酸の構造・機能について解説し、さらに遺伝情報・外界情報の受容・伝達・制御および生体エネルギー変換の機構を論ずる。

L 351 生物物理B (講) 0-2-2 (教授 石 渡 信一)

生体の各レベルにおける秩序構造とその形成機構、生体機能とその制御機構について典型的な例をあげて述べる。さらに筋肉を中心とした運動系を取り上げ、生体機能発現の分子の機構について述べる。

L 352 生物物理 C (講) 2-0-2 (教授 齋藤 信彦)

蛋白質や核酸の物理化学, 特に遺伝情報, 調節, 進化, 蛋白質の構造と機能, そのコンフォメーションの転移, 調節作用などについてのべる。神経回路系についてのべることもある。授業は隔年に行われる。

L 353 生物物理 D (講) 0-2-2 (教授 浅井 博)

生物学, 生理学, 生化学などの分野において物理学の立場より興味のある現象, 特に情報の伝達, エネルギーの変換などについて解説する。たとえば遺伝, 蛋白質の物理化学, 神経伝導, 膜輸送, 光合成, 筋肉収縮, 電子およびエネルギー伝達などである。

L 360 内分泌学特論 A (講) 0-2-2 (教授 菊山 栄)

高等動物が出生し, 生長・成熟をかさね, 次の世代をつくり得るようになるまでの過程で, 液性調節物質がどのように関与しているかを主としてのべる。

L 361 内分泌学特論 B (講) 2-0-2 (教授 石居 進)

多細胞の動物において, 細胞間の情報伝達を化学物質によって行なっているのが内分泌系であり, 電気信号と化学物質の両者の組合せで行なっているのが神経系である。この両系は決して独立して機能しているのではなく, 密接な相互関係を持っている。神経内分泌学はこの両者の関係を取り扱う学問分野であるが, この神経内分泌学の歴史, 最近の進歩, 将来の方向について学んでゆく。

L 370 生理学特論 (講) 2-0-2 (教授 安増 郁夫)

最近急速に発展している核酸および蛋白合成の話題を中心として, 形質, 機能の発現機構, すなわち, 遺伝因子 (物質としては DNA) の情報選択 (mRNA 合成調節), 蛋白合成系における情報発現およびそれらの機構について述べる。

選択上の注意: 物理学, 化学, 生物学, の基礎知識である。

L 380 遺伝学特論 (講) 0-2-2 (教授 平 俊文)

生命体の諸活動はすべてその遺伝情報にもとづいている。しかしその遺伝情報の発現には, 分子レベル, 細胞レベル, 個体レベル, および集団レベルでの特性がある。これらの各レベルにおける問題点と遺伝子進化について論究する。

L 390 植物生理学特論 (講) 2-0-2 (教授 桜井 英博)

光合成におけるエネルギー変換の機構についてのべる。また, ミトコンドリアなど他の生体膜系におけるエネルギー変換の機構と構造についても論ずる。

L 400 生態学特論A (講) 2-0-2 (教授 大島 康行)

生態系の機能と構造, 生態系内のエネルギーの転換と物質循環, それにともなう生態系の動態と安定性, それを支配する制御機構に関する諸問題を展望する。

L 411 生態学特論B (講) 0-2-2 (教授 伊野 良夫)

植物の生育する場の主な環境要因を概説し, それらの要因が植物に与える影響, および植物が示す適応現象について生理・生態学的に論ずる。

L 412 細胞生物学特論 (講) 2-0-2 (助教授 並木 秀男)

L 420 高分子物理学A (講) 2-0-2 (教授 千葉 明夫)

巨大分子の物理学は必然的に多岐にわたる。高分子物理A, B, 及び高分子物性特論A Bの4つの講義を通じて, なるべく広い範囲をカバーするように配慮した。高分子物理Aでは, 巨大分子の物理的挙動を支配している分子レベルでの原理の基本を明らかにする目的で, 鎖状統計論, 高分子溶液論, 高分子構造論を主な内容とした基礎的な問題を取り扱う。

L 421 高分子物理学B (講) 2-0-2 (教授 浜 義昌)

今日, 高分子物質は, 原子力発電等にもなう原子炉の周辺機器材料, 絶縁材料, その他多くの方面で利用されている。講義においては高分子物性の基礎的なひとつの問題点である高分子固体内における電子の挙動について種々の現象を通して解説する。主な内容は, 放射線と高分子, 高分子の緩和現象等についてである。

L 430 高分子物性特論A (講) 0-2-2 (講師 深田 栄一)

高分子物性特論A, Bでは, 高分子物性研究の最近のトピックスを中心に取りあげる。高分子物性特論Aでは, 高分子物質の電気物性, 特に最近発展した圧電性, 焦電性, 強誘電性高分子の研究を中心に, 生物レオロジーや生物電気, 生物磁気に関連した問題を取りあげる。

L 431 高分子物性特論B (講) 0-2-2 (講師 土井 正男)

高分子化合物に対する放射線照射効果の基礎になる放射線と物質の相互作用, 特に電子及びラジカルイオンの性質と反応性を, パルス電子線照射法および低温マトリックス法を用いて得られた結果にもとづいて解説する。また, 高分子化合物を用いた最近の放射線プロセスの現状と問題点について考察する。

L 440 応用光学特論 (講) 2-2-4

(教授 大 頭 仁)
(教授 小 松 進 一)

光学工業の急速な発展や物性物理学の進展に即して、主として次の諸項目について講義する。光学機械の分野では、収差の除去法について論じ、また新しい光学機械の性能や特性について説明を行なう。量子光学や統計光学の分野では光のコヒーレンシの問題など統計的手法により解明し、さらに光学系の一般結像論を展開するとともに光学的情報処理の問題に言及する。物性光学の分野では、電気光学効果、旋光性および回折結晶学等の解説を行なう。また赤外、可視、紫外にわたる分光学の分野を展望する。

選択上の注意：学部当該学科修得程度の光学系および物性物理学系の知識を持つことを前提としている。

L 450 応用結晶学特論 (講) 0-2-2

(教授 小 林 謙 三)
(教授 上江洲 由 晃)

結晶の現代技術における役割は多岐にわたっている。この講義では、将来の情報変換素子、記憶素子の開発の基礎となる物質と光の相互作用を中心として取扱う。次の項目について詳述する。電気光学効果、磁気光学効果、音響光学効果、光屈折効果、光高調波発生、光パラメトリック効果、誘導ラマン、ブリュアン効果および電気旋光効果。

L 460 計測特論A (講) 2-0-2

(教授 大 照 完)

前半で、記憶を回路的性質から定義、分類し、ついで記憶素子から構成される学習機械について述べ、応用の立場から比較検討する。

後半では、記憶の拡散過程からランダム入力確率密度計算機にふれ、さらに素子の誤動作、閾値の分布を考慮に入れた他の型の確率密度計算機を応用例と共に示す。

L 461 計測特論B (講) 0-2-2

(教授 中 村 堅 一)

画像情報の記録、ディスプレイ技術などイメージサイエンスに関する話題をとりあげる。このための像情報の変換手段ならびに、関与する電子材料の特性・例えば非晶質物質、液晶、機能性高分子、エレクトロクロミック、フォトクロミック、電気泳動などのエレクトロニクスに関係した国内外の最近の論文を中心に講義および輪講を行う。

選択上の注意：学部当該学科卒業程度の物理学・数学および電子回路に習熟していることが望ましい。

L 462 計測特論C (講) 0-2-2

(教授 小 林 寛 彦)
(講師 町 田 晴 彦)

創造的な能力を高めるための方法論をのべ、具体的な例として工業技術に関する最新のニーズを課題としてとり上げ、各人からのアイディアをブレインストーミングの手法で掘り下げ、実用にたえる新しい技術を生み出すトレーニングを行なう。

最新のニーズの実例

- (1) ねじしめロボットの眼を考案せよ。
- (2) 回転自在な複数本光ファイバーのコネクタを考案せよ。
- (3) 内部が真空の中空小球の量産法を考案せよ。
- (4) 平行な2本の円柱状ローラの間隙(数 μm ~1mm)の正確な連続的計測法を考案せよ。

L 470 制御システム特論 (講) 2-0-2 (教授 久村 富持)

主として離散時間システムを取り扱い、デジタル制御の基礎を学習する。時間領域での状態変数によるシステム解析、最適制御、状態推定問題などが主な内容である。

学部において、制御工学(線形連続)に関する科目を履修していることが望ましい。

L 480 分子構造論 (講) 2-0-2 (講師 石黒 英一)

以下の項目につき、講義をする。

- 1) 原子の電子構造
水素原子・Hartree-Fock 近似。
- 2) 2原子分子の電子構造
水素分子・Heitler-London 近似・分子軌道法・窒素および酸素分子
- 3) 多原子分子の電子構造
混成軌道・水、メタン、およびベンゼン分子。

量子力学および物理数学の初歩の知識をもっている学生を対象とする。

**L 490 計測概論 (講) 2-2-4 (教授 大 照 完)
(教授 中 村 堅 一)**

この講義は計測全般に亘っての基礎となる考え方および事項を抽出し、具体例を織りまぜながら概説するものである。

- (1) 物理現象、工学現象を計測の立場からみたらどのような見方ができるか。
- (2) アナログカル・アプローチ
- (3) 線形現象と線形回路
- (4) 非線形現象と計測回路
- (5) 情報の性質と扱い方

L 610 数理物理学演習 I 3-3-6 (教授 堤 正義)

関数解析、多様体、偏微分方程式、常微分方程式に関する文献を中心にセミナーを行う。

注意：実関数論、関数論、常微分方程式及び関数解析の初歩に関する確実な基礎的知識が必要である。

L 611 数理物理学演習 II 3-3-6 (教授 堤 正義)

L 620 応用関数方程式演習 I 3-3-6 (教授 飯野理一)

L 621 応用関数方程式演習 II 3-3-6 (教授 飯野理一)

I, II共に非線形偏微分方程式, 凸解析などの論文の講読を主とする。

L 630 素粒子理論演習 A 3-3-6 (教授 並木美喜雄)

素粒子構造理論と各種の現象に関する最新のトピックスを中心に, 短い講義, 文献研究, セミナールなどを行う。素粒子理論研究(並木), 同(大場)の項参照のこと。

L 631 素粒子理論演習 B 3-3-6 (教授 大場一郎)

素粒子構造理論と各種の現象に関する最新のトピックスを中心に, 短い講義, 文献研究, セミナールなどを行う。素粒子理論研究(並木), 同(大場)の項参照のこと。

L 640 高エネルギー物理学演習 A 3-3-6 (教授 並木美喜雄)

高エネルギー素粒子反応に関する最新のトピックスを中心に, 短い講義, 文献研究, セミナールなどを行う。素粒子理論研究(並木), 同(大場)の項参照のこと。

L 641 高エネルギー物理学演習 B 3-3-6 (教授 大場一郎)

高エネルギー素粒子反応に関する最新のトピックスを中心に, 短い講義, 文献研究, セミナールなどを行う。素粒子理論研究(並木), 同(大場)の項参照のこと。

L 650 理論核物理学演習 A 3-3-6 (教授 山田勝美)

原子核構造の理解を深めるための演習である。とくに中心問題となるのは, 陽子と中性子がどのように結合して原子核を構成するか, またそれがどんな核現象と結びついているかである。

選択上の注意: 量子力学および初歩的な原子核理論の知識が必要である。

L 651 理論核物理学演習 B 3-3-6 (教授 山田勝美)

原子核の崩壊や反応, とくにベータ崩壊, 自発核分裂, 光核反応などの進んだ理論を理解するための演習である。

選択上の注意: 量子力学および初歩的な原子核理論の知識が必要である。

L 660 実験核物理学演習 A 3-3-6 (教授 藤本陽一)

宇宙線及び加速器による超高エネルギー現象の実験を研究題目とする人々のための演習である。(隔年)

L 661 実験核物理学演習 B 3-3-6 (教授 長谷川 俊 一)

宇宙線及び加速器による超高エネルギー現象の実験を研究題目とする人々のための演習である。(隔年)

L 670 宇宙線物理学演習 A 3-3-6 (教授 藤 本 陽 一)

宇宙線の起源など、主として宇宙線に関する学際領域を研究題目とする人々のための演習である。(隔年)

L 671 宇宙線物理学演習 B 3-3-6 (教授 長谷川 俊 一)

宇宙線の起源など、主として宇宙線に関する学際領域を研究題目とする人々のための演習である。(隔年)

L 680 原子核工学演習 A 3-3-6 (教授 道 家 忠 義)

原子核工学研究を履修するものは、必ずこの科目を履修しなければならない。内容は原子核工学研究に関する文献の調査およびその発表討論をゼミナール形式でおこなう。

L 681 原子核工学演習 B 3-3-6 (教授 黒 沢 龍 平)

ゼミナール形式により、保健物理学的視野からの原子核工学研究に必要な文献の調査および発表討論を行う。原子核工学研究履修者は必ずこの科目を履修しなければならない。

L 682 原子核工学演習 C 3-3-6 (教授 菊 池 順)

原子核工学研究を履修するものは、必ずこの科目を履修しなければならない。内容は原子核工学研究に関する文献の調査および発表討論をゼミナール形式で行う。

L 690 核物性演習 3-3-6 (教授 大 槻 義 彦)

衝突問題、放射の量子論、固体における素励起に関してゼミナールを行なう。モット・マッセイ、ハイトラー、パインズなどの名著を読む。その他、チャンネルングに関するテキスト、固体における衝突問題のテキストなども使用する。また必要に応じて、大槻の作ったテキストも使用する。

L 691 X線・粒子線・放射線演習 3-3-6 (教授 大 槻 義 彦)

X線、電子線回折の動力学的理論、非弾性散乱の効果などに関してゼミナールを行なう。その他陽電子線消滅の問題もとりあげる。テキストは大槻の作成したもの、デデリックスのテキスト、三宅静雄氏のテキストなどを使用する。

L 700 統計力学演習 3-3-6 (教授 加藤 鞆 一)

非平衡状態の統計力学の知識を身につけ、これを駆使して輸送現象等の理論的解析が出来る水準に達することを目的とする。採り上げる題目は毎年異なるが、非平衡状態の統計力学の発展において重要な役割を果す論文あるいは参考書を輪講形式で討論をまじえながら読み進む。

L 701 プラズマ物理演習 3-3-6 (教授 加藤 鞆 一)

プラズマ物理学における最新の論文の紹介および討論を中心とする。前期では参加者の研究題目と密接な関係にある新しい論文をとりあげ内容の検討および批判を行ない、後期には各自の研究内容を中心とする討論を全員で行ない、研究の促進をはかる。

L 710 電子線物性演習 3-3-6 (教授 市ノ川 竹 男)

電子線回折における運動学的および動力学的理論を習得したうえで、各種格子欠陥の電子顕微鏡像のコントラストの解釈について学び、さらに高エネルギー電子回折における非弾性散乱の影響と菊池像について学習する。さらに低エネルギー電子回折の理論および実験について習得すると共に光電子分光法、オージェ電子分光法、エネルギー損失スペクトロスコープ等による物質の電子状態の解析や表面状態の分析を理論的および実験的に行う方法について習得する。

L 711 イオンビーム物性演習 3-3-6 (教授 市ノ川 竹 男)

各種イオンを結晶に入射すると入射イオンは散乱、チャンネルリング等を起すと同時に試料中の原子をスパッタリングして二次イオンまたは中性原子、分子を放出する。同時に特徴あるスペクトルの電磁波又は電子を発生する。これらの現象はイオンと固体との相互作用を研究するには重要な現象である。ここではこれらの実験的な方法を学ぶと同時にその理論的解釈について習得する。

**L 720 磁性演習 3-3-6 (教授 植松 健 一)
(教授 近 桂 一 郎)**

物質の磁性、とくに秩序磁性に関連した問題を中心とし、物性物理全般にわたって輪講形式の学・演習をおこなう。

L 721 磁気共鳴演習 3-3-6 (教授 植松 健 一)

磁気共鳴吸収は物性研究の有力な手段の一つであり、理論としての重要性もある。演習ではこの基本や実験法をとりあげるが、関連して磁性の各論におよぶことが多い。

L 730 光物性演習A 3-3-6 (教授 大井 喜久夫)

物性物理の基礎的な教科書を取りあげ、輪講をおこなう。同時に新しい興味ある論文を取りあげ、討論する。

L 731 光物性演習B 3-3-6 (教授 大井 喜久夫)

物性物理の新刊書のなかから、専門分野で興味のある本を取りあげ、輪講する。同時に新しい興味ある論文を取りあげ、討論する。

L 740 理論固体物理演習A 3-3-6 (教授 木名瀬 亘)

固体物理学における基礎として熱力学、統計力学、電磁気学における誘電体部門の演習を行なう。

L 741 理論固体物理演習B 3-3-6 (教授 木名瀬 亘)

固体物理学における基礎として、量子力学や分子軌道法、さらに具体的に強誘電体や光物性に対する基礎的演習を行なう。

L 750 結晶化学演習 3-3-6 (教授 近 桂一郎)

主として遷移金属化合物の構造、磁気的性質などについて、輪講形式の演習をおこなう。

L 760 量子生化学演習A 0-3-3 (教授 鈴木 英雄)

生体物質の特徴は、生体化学反応の際にその幾何学的・化学的構造がかなり変化することである。この特徴を考慮して生体物質の電子状態・核状態を決定するには、従来の量子化学的方法がどのように改良されねばならぬか、また如何なる方法が新たに開発されねばならぬか、これら二つの点について研修する。

L 761 量子生化学演習B 3-0-3 (教授 鈴木 英雄)

非断熱的なエネルギー変換の機構に特に注意して、生体化学反応の量子力学的・統計力学的な取扱い、および生体中の基本的な加水分解・酸化還元反応の機構について研修する。

L 762 光生物学演習A 3-0-3 (教授 鈴木 英雄)

光エネルギー受容反応である光合成、および光信号受容反応である光感覚・光走性・光屈性・光形態形成・光周性などに注目して、光生理現象の分子的機構を研修する。

L 763 光生物学演習B 0-3-3 (教授 鈴木 英雄)

光信号受容の初期過程に注目して、光受容体における発色団とタンパク部分との結合様式・相互作用、光受容体における光エネルギー変換の機構、生体膜中での光受容体の存在様式および光照射によるその変化について研修する。

L 770 実験生物物理学演習A 3-3-6 (教授 石 渡 信 一)

生物における構造と機能を研究するための物理的な考え方と実験方法について学ぶ。適当な文献の講読を行う。

L 771 実験生物物理学演習B 3-3-6 (教授 石 渡 信 一)

生物は種類も多く、またそれぞれが多様な構造と機能をもっている。まず生物のもつ多様性を知ること、そして研究の多くのアプローチについて広く深い知識を身につけることに重点をおく。古典及び最新の文献をもとに学ぶ。

L 780 統計物理学演習A 0-3-3 (教授 斎 藤 信 彦)

L 781 統計物理学演習B 3-0-3 (教授 斎 藤 信 彦)

A, Bは交替して隔年に行う。統計力学およびその応用に関する文献のコロキウムを行うほか、各自の研究の進展にともなってそれについて討論を行う。

L 782 理論生物学演習A 3-0-3 (教授 斎 藤 信 彦)

L 783 理論生物学演習B 0-3-3 (教授 斎 藤 信 彦)

A, Bは交替して隔年に行う。理論生物学および実験を含めた生物物理の文献のコロキウムを行う。そのほか、各自の研究の進展にともなってそれについての討論を行う。

L 785 統計物理学演習C 3-0-3 (教授 相 沢 洋 二)

L 786 統計物理学演習D 0-3-3 (教授 相 沢 洋 二)

L 787 非線形・非平衡物理学演習A 0-3-3 (教授 相 沢 洋 二)

L 788 非線形・非平衡物理学演習B 3-0-3 (教授 相 沢 洋 二)

L 790 生体エネルギー論演習 3-3-6 (教授 浅 井 博)

生物は化学的エネルギー、電気的エネルギー、機械的エネルギー、光エネルギーなどの変遷工場のようなものである。生物の機能と構造をそのような面から学習する。第二年目に取得すること。

L 791 生体構造論演習 3-3-6 (教授 浅 井 博)

生物を構成している、蛋白質や核酸などの一次構造・二次構造・高次構造などについての研究を学習する。またこれらの生体高分子がどのように構成されて、生体の機能をもつ

器官が形成されるかについて論じる。

第二年目に取得すること。

L 800 細胞機能調節機構論演習 3-3-6 (教授 安 増 郁 夫)

生体を形成する細胞は、機能・形態ともに分化・即ちその細胞が個体の一員としてはたず役割に従って特殊化されているが、その機能及び調節機構は一般性をもつと考えられる知見が得られつつある。細胞の特殊化を支える遺伝情報制御とその制御機構の一般性・代謝等調節機構に関連する細胞内情報物質の一般性と、それをひきおこす細胞間情報物質の特殊性を中心とし、細胞の機能調節について得られた知見について演習をおこなう。

L 801 形態形成機構論演習 3-3-6 (教授 安 増 郁 夫)

生物の形態は、基本的にはそれを構成する細胞の形態及び特性によると考えれば、個体の形態形成は細胞の形態及び特性の変化(分化)に支配されることになる。細胞接触及び細胞内構造・細胞間物質によって夫々の細胞の形態は決定され、細胞間に於ける接触能力の差によって様々な特定細胞の集団が形成される。これらの現象について物理的・化学的な知見が得られつつある。これらの問題に関連した最近の知見を中心として演習をおこなう。

L 810 個体調節機構論演習 A 3-3-6 (教授 石 居 進)

動物生理学研究、内分泌学特論に関連する最近の主要な論文、その方法に関する報告などを読み、それを中心として討論を行なう。

L 811 個体調節機構論演習 B 3-3-6 (教授 菊 山 栄)

L 820 比較内分泌学演習 A 3-3-6 (教授 石 居 進)

内分泌学特論と関連して、動物の系統と内分泌調節機構との関係や、内分泌系の進化を取り扱った研究を調べてゆく。

L 821 比較内分泌学演習 B 3-3-6 (教授 菊 山 栄)

L 830 遺伝子調節機構論演習 3-3-6 (教授 平 俊 文)

分子としての遺伝子は物質代謝を調節すると同時に、経時的に活性化される。また遺伝子の相互作用も、機能分化も起る。しかし遺伝子の恒常性は高く、突然変異による以外に本質的变化はないとされている。この恒常性の維持機構と活性化、機能分化のメカニズムを分子・細胞・器官の各レベルで論究する。

L 831 解析遺伝学演習 3-3-6 (教授 平 俊 文)

遺伝子の構造と機能および発現の諸相について、微生物から高等動物までを対象としそれぞれの進化レベルについて分子遺伝学的に比較解析する。

L 840 光合成演習 3-3-6 (教授 桜井英博)

光合成における光化学反応系，電子伝達系を中心に演習を行う。

L 841 生体膜演習 3-3-6 (教授 桜井英博)

生体膜の構造と機能およびその研究方法について演習を行う。

L 850 個体群動態論演習A 3-3-6 (教授 大島康行)

生物集団の具体的な基本単位である個体群の維持，変動，調節機構および個体群間の相互関係に関する研究をおこなうための基礎となる演習をおこなう。

L 851 個体群動態論演習B 3-3-6 (教授 伊野良夫)

植物個体群の維持，調節機構について生理生態学の立場から演習を行う。

L 860 生態系機構論演習 3-3-6 (教授 大島康行)

各種生態系を構成する生物集団の構造と機能，およびこれと密接に関係する生態系の動態と安定性，安定性を支配する諸要因と各種の制御機構を研究するための基礎となる演習をおこなう。

L 870 生理生態学演習 3-3-6 (教授 伊野良夫)

諸環境下に生活する生物の生理，生態学的特性に関し演習を行う。

L 871 細胞生物学演習A 3-3-6 (助教授 並木秀男)

L 872 細胞生物学演習B 3-3-6 (助教授 並木秀男)

L 880 巨大分子物性演習A 3-3-6 (教授 千葉明夫)

本演習は，巨大分子物性研究に直接必要な巨大分子の構造研究に関連する高度の専門的な知見を習得するためのものである。研究を進めるための基本的に重要な文献や，海外の最新の文献を研究すると共に，実験装置や，データ処理に関する実験技術論も取り上げる。

L 881 巨大分子物性演習B 3-3-6 (教授 千葉明夫)

本演習は，巨大分子物性研究に直接必要な巨大分子の分子運動や熱力学の研究に関する

高度の専門的な知見を習得するためのものである。研究を進めるための基本的に重要な文献や、海外の最新の文献を研究するとともに、実験装置やデータ処理に関する実験技術論も取り上げる。

L 890 放射線分子物性演習 A 3-3-6 (教授 浜 義 昌)

本演習(A)では放射線と物質の相互作用に関する基礎的な学習を行う。また、物質の放射線照射効果の研究に用いられる主な実験装置の原理、特徴、解析法等について詳細な学習を行う。さらに、この分野における最近の文献について適時紹介、検討を行ってゆく。

L 891 放射線分子物性演習 B 3-3-6 (教授 浜 義 昌)

今日、特射線は物質の改質等広い分野にわたって利用されているが、本演習では物質に対する放射線照射効果の応用面に重点を置き学習を行う。また、関連した最近の文献についても適時紹介、検討を行ってゆく。

L 900 生理光学演習 3-3-6 (教授 大 頭 仁)

生体視覚系の諸機能を、物理的に、また光学の立場から追及することを目的として議論する。方法論としては、主として光学測定、心理物理的測定、電気生理学的測定、医学的測定が中心になっているが、同時にその機能のシミュレーションあるいは生物物理的研究成果についても言及する。医学、心理学、生理学などのかかなり高度の知識も必要であるので、各自学習することが望ましい。

L 901 応用光学演習 3-3-6 (教授 大 頭 仁)

レーザの出現以来、ホログラフィ、光通信、光情報処理などの応用分野と新技術の開発が飛躍的に発展している。ここでは、古典的に完成された光学の体系を改めて見直しながら、量子光学、統計光学、フーリエ結像論、フィルタリング、光情報処理、光通信などを取扱い、コヒーレント光の応用、測定技術の開発などに言及する。古典的な光学の体系を修得していることが望ましい。

L 910 光情報学演習 3-3-6 (教授 小 松 進 一)

光学系と電気系を結合した新しい情報処理技術の開発が近年盛んになっている。ここでは、コヒーレント光学系による光情報処理をはじめ、コンピュータによる光画像の処理などについて、文献と討論を通して学習する。光計測、画像の形成・処理・表示、光演算等の問題を扱い、これらに必要な統計解析やスペクトル解析等の手法を修得する。

L 911 光物理演習 3-3-6 (教授 小 松 進 一)

光応用技術の基礎となる様々な物理現象について、応用との関係を念頭に置きながら学

習する。レーザー発振，光ビームの伝搬，光電変換，光変調，光ヘテロダイン，コヒーレンスと干渉現象，光散乱，光導波の諸問題，さらに統計光学，量子光学，非線形光学などを取り扱う。

L 920 強誘電体物理演習 3-3-6 (教授 小林 謙三)

強誘電物理学は固体物理学のすべての分野と密接な関係をもつが，本演習においては，とくに強誘電体の相転移現象に関する重要論文の渉読と討論，さらに学生の実際の研究内容に関する討論と指導を行う。この過程において，固体構造，結晶対称はもとより，原子，電子の動的挙動と結晶構造の安定性に関する知識を修得させる。また相転移に対する群論的アプローチに関する最近の理論的研究にもなじめるよう配慮する。

L 921 結晶光学演習 3-3-6 (教授 小林 謙三)

結晶光学は古くて新しい学問で，将来の記憶素子，情報伝達素子の開発の基礎となるものである。本演習では原理的な理論，実験に関する論文の渉読と討論，ならびに学生の実際の研究内容に対する討論と指導を行う。

L 930 結晶構造解析学演習 3-3-6 (教授 上江洲 由晃)

物理学・化学・鉱物学にとどまらず薬学・生物学等極めて広い分野に大きな影響を与えているX線結晶構造解析学の理論と技術を，実際に結晶構造解析を行なうことにより習得する。

L 931 X線光学演習 3-3-6 (教授 上江洲 由晃)

X線振動数領域における電磁波の諸性質，および物質との相互作用の運動学的，動力学的過程に関連した文献の渉読，基礎的実験技術の学習を行う。

L 940 情報工学演習A 3-3-6 (教授 大照 完)

計算機を用いて画像情報を処理するためのソフトウェアは勿論，ITV，フライングスポットスキャナー，イメージセクターなどの画像入力装置，前処理装置，インターフェースおよびディスプレイ，ハードコピーなどの出力装置を含めた全画像処理システムを各種の応用例と共に取り上げ，内外の文献を輪読し乍ら演習する。

L 941 情報工学演習B 3-3-6 (教授 大照 完)

物理，生物，社会，工学などの分野で，ランダムネスを含む興味ある現象を取り上げ，ランダムパルスを用いた計算機システムでシミュレートすることにより，これらの現象への工学的な一つのアプローチを試みる。内外の幅広い分野の文献を輪読しながら演習する。

L 950 情報変換物理演習 3-0-3 (教授 中村 堅一)

情報変換に利用され、あるいはその可能性のある物理法則、物理効果、物理現象を総合的に概観する。つづいて、代表的ないくつかの国内外論文を精読し、含まれる内容を吟味してゆく。

L 951 情報変換材料演習 0-3-3 (教授 中村 堅一)

情報変換のために用いられる各種材料の製法、物性およびその測定法についての演習を行う。最近あらたに開発された材料については、国内外の論文に基づいて攻究する。

L 952 情報変換工学演習 3-0-3 (教授 中村 堅一)

情報変換物理、材料についての基礎的知識を応用に結びつけるための手法を中心に演習を展開する。

L 953 情報変換特論演習 0-3-3 (教授 中村 堅一)

情報変換に関するトピックス的な内容をもつ論文の輪読を中心とした演習を行う。

L 960 電子材料工学演習 3-3-6 (教授 小林 寛)

半導体、誘電体、磁性体の結晶や非晶質膜の物性、製法、及び特性などについての新しい研究報告の紹介を中心に応用との関連を常に意識しながらセミナーを行なう。

L 961 電子計測工学演習 3-3-6 (教授 小林 寛)

新しい半導体素子、誘電体素子、磁性体素子、オプトエレクトロニクス素子及びその応用に関する研究報告を紹介し、その効果的な独創的応用の開発に関するブレーンストーミングを行なう。

L 970 システム解析演習 3-3-6 (教授 久村 富持)

システムの安定性、可制御性、可観測性などの特性解析や、離散事象解析のためのネット理論などを中心に、主として外国学術論文を、輪講形式で演習する。「制御理論演習」と対をなし、それらを一年おきに交互に行う。

L 971 制御理論演習 3-3-6 (教授 久村 富持)

離散時間システム、離散事象システムなどに対する制御問題を主にして、輪講形式で行う。内容は、適応制御、画像処理、ネット理論、最適問題などである。「システム解析演習」と対をなし、それらを一年おきに交互に行う。

L 980 天体物理学演習 A 3-3-6

(教授 大師堂 経 明)

- (1)高エネルギー天体现象の電波観測をめざして、高速アナログ及びデジタル技術の習得を行う。key words で示せば、FFT, 低雑音増幅器, 位相測定, 像処理等となる。
- (2)高エネルギー天体现象に関する新着文献の紹介を行う。

L 981 天体物理学演習 B 3-3-6

(教授 大師堂 経 明)

数 学 専 攻

M010 数学基礎論研究 (教授 広 瀬 健)

数学基礎論の現状を認識し、それにもとづいて解決すべき問題を明らかにする。

さらに、整数論やヒルベルト空間における有界線型作用素の性質についての応用などを研究する。

M011 数学基礎論研究 (教授 福 山 克)

従来、証明論、集合論、模型論、帰納的関数論、……などに分かれていた数学基礎論が現在一体となりつつあるのでこのことを踏まえ新しい発展方向を探る。また数学基礎論と他の数学分野との境界領域にも関心を払う。

M012 情報科学研究 (教授 筑 捷 彦)

情報科学、とくにソフトウェアに関係する部分についての現状を認識し、解決すべき問題を明らかにする。それらの解決をはかるとともに、プログラミング環境にどう取り込んでいくかを研究する。

M020 代数幾何学研究 (教授 有 馬 哲)

代数的ベクトル束の研究。Young-Mills 方程式の研究。

M021 代数解析学研究 (助教授 上 野 喜三雄)

代数解析学は種々の解析的対象(超関数、微分方程式、場の量子論)に代数的枠組を与え、研究する分野である。応用範囲は表現論、代数幾何、数理論理と多岐にわたるが、ここでは数理論理に重きを置く。現代の数理論理は新しい研究対象を次々と供給する数学のフロンティアを形成しており必要とされる数学的手段も、代数幾何、微分幾何、無限次元代数の表現論、代数解析学と高度化、抽象化の一途をたどっている。(場の量子論とは非可換空間上で無限次元代数を局所化したものに他ならないのであるからこうした状況も宜なるかなである)すべてとは言わないが、現在の数理論理の問題意識は、やがては次世代の数学の主流となるであろう。

以上の点に鑑み、数学研究の早期から代数解析学の諸概念、手法に習熟することは若い学生にとって教育的であると確信する。

M022 整数論研究 (教授 寺 田 文 行)

代数的整数論の理論、コンピューターによる実験的な扱いなど。

M023 代数学研究 (教授 足立恒雄)

代数学一般の研究を、他の分野との関連のもとに研究する。主題は代数的整数論、不定方程式論、多元環、また計算論、モデルの理論、多様体等の中から適時選ぶ。主に研究者となる者を対象とする。

M024 代数学研究 (教授 日野原 幸 利)

可換代数、有限群の表現論、ホモロジー代数、について研究を行う。

M025 代数学研究 (助教授 近 藤 庄 一)

M026 保型函数論研究 (助教授 橋 本 喜一朗)

M030 トポロジー研究 (教授 野 口 広)

主として微分トポロジーの話題特に特異点の理論、力学系等についての研究を行なう。学部で幾何系と解析系の科目を学習していることが必要である。

M031 トポロジー研究 (教授 伊 藤 隆 一)

力学系、分岐理論について研究する。

M032 幾何学研究 (教授 鈴 木 晋 一)

低次元多様体上の幾何的構造および位相的構造について研究する。

M033 微分多様体研究 (教授 小 島 順)

微分多様体上の微積分、力学系 (dynamical systems), Hamiltonian mechanics, 微分位相幾何学などの範囲でテーマを選び研究する。

M040 リー群研究 (教授 清 水 義 之)

主に、半単純リー群上の調和解析を研究する。リー群のユニタリ表現、Fourier 解析、均質空間上の微分方程式、特殊関数などである。

M041 関数解析研究 (教授 洲之内 治 男)

関数解析およびその種々の応用について研究する。

M042 関数解析研究 (教授 和 田 淳 蔵)

Banach 環、関数環 (Function algebra) について研究する。とくに関数環の研究に重点をおく。関数環は関数論、フーリエ解析学、調和解析学、確率論などと密接な関係をもつことから、それらの分野の中における関数環の位置付けをも明らかにしたい。

M043 発展方程式研究 (教授 宮 寺 功)

関数空間における(微分)作用素 $A(t)$ が与えられたとき、発展方程式のコーシー問題
 $(d/dt)u(t) = A(t)u(t), 0 < t < \infty, u(0) = x$

を作用素論的な立場から考察し、そこで得られる(抽象的)理論の具体的な偏微分方程式への応用を調べる。

M044 発展方程式研究 (教授 石 垣 春 夫)

物理学等に関連して、重要な発展方程式やそれに対応する変分不等式、及びそれらの拘束をうける系の最適制御の問題の解析的なとりあつかいについて学習、研究をする。

M045 発展方程式研究 (未 定)

M050 多様体上の解析学研究 (教授 郡 敏 昭)

複素解析多様体上の微分形式、留数の理論、双対定理等を研究する。

M051 偏微分方程式研究 (教授 入 江 昭 二)

線型および非線型偏微分方程式に関する基礎的な理論について研究する。

M052 偏微分方程式研究 (教授 垣 田 高 夫)

線型あるいは非線型偏微分方程式について、初期値問題、初期・境界値問題などの研究を主体とするが、その基礎的前提としての、関数解析を重視したい。したがって、学部における基本的な知識としての超関数の理論を含む関数解析の修得が必要である。

実際の研究にあたっては、具体的なテーマを上記の問題から年毎に選び、演習 I, II 等を通じて、偏微分方程式研究の基礎力をつくって行くことを目標におく。

M053 常微分方程式研究 (教授 杉 山 昌 平)

常微分方程式及び遅れを含む関数微分方程式、積分方程式、微分積分方程式の基礎理論の研究を中心とし、それらの物理的、工学的応用として最適制御等の研究も併せ行う。

M054 非線型偏微分方程式研究 (教授 小 島 清 史)

本人と相談の上、非線型偏微分方程式論の中から適当なトピックスを研究テーマとして選定して、研究指導を行なう。

M055 非線形偏微分方程式研究 (教授 堤 正 義)

数理物理学に現われる種々の非線形偏微分方程式の解の構造を関数解析を用いて研究する。実関数論、関数解析の基礎的知識が必要である。

M056 非線形偏微分方程式研究 (教授 飯野理一)

主に非線形偏微分方程式と変分不等式の理論およびその応用の研究。

M057 非線形偏微分方程式研究 (助教授 山田義雄)

非線形放物型方程式、双曲型方程式を中心に解の漸近挙動、安定性などの解の性質を研究する。

M060 関数論研究 (未定)

M070 数理統計学研究 (教授 草間時武)

統計学の数学的側面の研究を行う。例えば統計的決定関数論、十分統計量の理論、漸近理論、予測の理論等の研究を行う、かなり色々の数学(例えば積分論、関数解析等)を用いるので、その方面も、必要に応じて勉強していく。

M071 数理統計学研究 (教授 鈴木武)

(1)統計的漸近理論特に漸近十分性について。(2)非正則モデル、ノンパラメトリックモデルにおける推定論

M080 計算数学研究 (教授 中島勝也)

電子計算機を用いて、科学技術上の問題を解く場合の数学理論の応用について研究する。取扱かう問題の多くは、常微分方程式や偏微分方程式で表現されるものの初期値問題や境界値問題である。数値解が真の解にどれだけ近いかを評価することは重要な課題であり、その理論的な研究を数値計算実験と並行して推進する。

予備知識としては、関数解析、関数方程式数値計算法に習熟しているほかに、電子計算機のプログラミングに熟練していることが望まれる。

テキストとしては初年度には最新刊の外国で出版された単行本を用いるが、2年度以上は計算数学関係の内外の専門雑誌の論文を用いる。

M081 数値解析研究 (教授 室谷義昭)

数値解析の研究を行う。最近の話題を中心にテーマを絞って研究を進める。

M210 数学基礎論特論 (講) 2-2-4 (教授 福山克)

数学基礎論は数学理論の構成に用いられる言語を研究対象とする科学であるからして数学の様々な分野と接点を持ち得るのではないだろうか？

かかる問題意識の下で数学基礎論の根幹を概観する。

M220 情報科学 (講) 2-2-4 (講師 高橋延匡)
(講師 高島内剛一)

(前期) 情報科学の分野のうち、計算機システム、オペレーティング・システム、ソフトウェアの設計法を中心に、適当な話題をえらび講義する。

(後期) 数学と情報の両方に関連する話題。

M230 代数学特論 (講) 2-2-4 (教授 日野原幸利)
(助教授 近藤庄一)

可換環論的交叉理論。

M240 代数解析学特論 (講) 2-2-4 (教授 有馬 哲)

M250 整数論特論 (講) 2-2-4 (教授 橋本喜一郎)

整数論における解析学の重要性を鑑み、今年度はゼータ関数を主体に講義する。すなわち、リーマンのゼータ、デデキントのゼータ、合同ゼータ、また種々のL関数がこれである。予備知識は代数学(ガロアの理論位)、複素関数論の初歩である。

M260 代数幾何学特論 (講) 2-2-4 (講師 藤田隆夫)

高次元代数多様体の研究。

M270 トポロジー特論 (講) 2-2-4 (教授 野口 広)
(講師 福田 拓生)

特異点の理論と力学系とを論じ、カタストロフィー的な応用も理論の発展のために論じてゆきたい。

M280 位相幾何学特論 (講) 2-2-4 (教授 伊藤隆一)

位相幾何及びそれに関連したテーマを選び講義する。

M290 リー群論 (講) 2-2-4 (教授 清水義之)

リー群とリー環の関係及び、それぞれの構造について述べる。リー群上の調和解析、とくに球関数、リー群の表現などから講義する。

M300 幾何 (講) 2-2-4 (講師 福田 拓生)

C^∞ 多様体間の写像の特異点について考察する。特に安定特異点、有限確定特異点について考察する。更に他分野への応用について講ずる予定である。予備知識は多様体に関する基礎知識程度でよい。

M310 幾何学特論 (講) 2-2-4 (教授 鈴木晋一)

3次元多様体・結び目理論などから適当なテーマを選び講義する。

M320 解析特論A (講) 2-0-2 (教授 入江昭二)

解析学に関する特殊な話題について講義する。

M321 解析特論B (講) 2-2-4 (教授 宮寺功)
(教授 和田淳藏)

函数解析およびその応用に関する研究の中から基礎的な話題を適宜に選んで解説する。

M330 解析多様体論 (講) 2-2-4 (教授 郡敏昭)

複素解析多様体の理論またはラグランジュ解析を講義する。

M340 偏微分方程式特論A (講) 2-0-2 (教授 小島清史)
(助教授 山田義雄)

最近の偏微分方程式に関する研究の中から、比較的基礎的な話題を年度毎に、二、三えらび紹介する。

選択上の注意：学部におかれた関数方程式B, C, 履修を前提とする。予備知識としては、関数解析(超関数の理論を含む)を理解していることが望ましい。

M341 偏微分方程式特論B (講) 0-2-2 (教授 垣田高夫)
(教授 小島清史)

M350 常微分方程式特論 (講) 2-2-4 (教授 杉山昌平)
(講師 西本敏彦)

常微分方程式の基礎理論を理解させるとともに、関数微分方程式、最適制御、積分方程式の数学的理論及び工学的応用の説明を行う。

選択上の注意：線形代数、関数論、位相数学の初歩を履修していることが望ましい。

M360 応用解析特論 (講) 2-2-4 (教授 洲之内治男)
(教授 石垣春夫)

物理学または工学に関連の深い関数方程式、変分不等式さらに制御の問題等を適宜に選び、その解析的な取り扱いを紹介する。

選択上の注意：複素関数論、実関数論および関数解析の初歩の知識を必要とする。

M370 関数論特論 (講) 2-2-4 (未定)

M380 確率論特論 (講) 2-2-4 (講師 青木統夫)

位相力学系を中心とした講義を行う予定である。

講義の内容を簡単に述べる；閉じた空間上の位相同型のギブス測度，また平衡状態はその位相同型をある種の集合に制限し，位相的エントロピーと関連して構成される。その位相同型の確率論的な挙動が議論できる重要な例として Anosov 微分同相，Axiom A 微分同相などがある。以上の内容を R. Bowen による Lecture notes; “Equilibrium states and the ergodic theory of Anosov diffeomorphisms” に沿って解説したい。

M390 数理統計学特論 (講) 2-2-4 (教授 草間 時武)
(教授 鈴木 武)

M400 計算数学特論 (講) 0-2-2 (教授 中島 勝也)

常微分方程式の初期値問題や境界値問題，偏微分方程式の境界値問題の解法を中心として差分法，関数近似法，有限要素法などを講述する。

M410 数値解析特論 (講) 2-0-2 (教授 室谷 義昭)

数値解析，特に最近の理論を中心にテーマを絞った講義を行う。

M420 計画数学 (講) 2-2-4 (教授 五百井清右衛門)

オペレーションズ・リサーチの分野で発展した諸計画手法の中から，「線型」のものを選んで扱う。

数学的技法は勿論であるが，特にそれが使われる現場との関係を重視する。

○線型計画法 (LP)；シンプレックス計算法，双対原理。

○ネットワーク手法；最短(長)ルート問題，最大流量問題，一般型輸送問題。

M430 微分多様体論 (講) 2-2-4 (教授 小島 順)

微分多様体の上の解析学，力学 (mechanics) の数学的理論，ホモロジー論などから，年度ごとにテーマを選択する。

M440 保型函数論 (講) 2-2-4 (助教授 橋本 喜一郎)

M445 非可換解析学の基礎 (講) 0-2-2 (助教授 上野 喜三雄)

非可換解析学とは，非可換空間 $\text{Spec } \hat{A}$ 上で展開される解析学のことである。非可換空間の例としては，超多様体 (super variety)，量子空間 (quantum space) 等がある。超対称解析学は超多様体上で展開される解析学の総称で，超絃理論を語る為に必要不可欠な言語である。量子空間は，量子化された逆散乱法，2次元可解格子模型の研究の途上で見出されたもので，p-analog 解析学を展開するのに適した空間とされている。

講義では，これら非可換解析学の代数的基礎を講ずる。

M452 統計的漸近理論 (講) 集中講義 (講師 赤平昌文)

M460 情報科学特論 (講) 2-2-4 (教授 笈捷彦)

情報科学のテーマの中から、ソフトウェアに関するものを選択して取り上げる。とくに、プログラムの意味論、検証、合成などについて述べる。

M610 数学基礎論A演習I 3-3-6 (教授 広瀬健)

証明論、公理的集合論について演習を行なう。

M611 数学基礎論A演習II 3-3-6 (教授 広瀬健)

帰納的関数論、モデルの理論などについての演習を行なう。

M620 数学基礎論B演習I 3-3-6 (教授 福山克)

M621 数学基礎論B演習II 3-3-6 (教授 福山克)

数学基礎論研究の現在までの“流れ”を把握することを目標に、基本的諸文献を講読する。

M630 情報科学演習I 3-3-6 (教授 笈捷彦)

プログラミング環境に関する演習を行なう。

M631 情報科学演習II 3-3-6 (教授 笈捷彦)

プログラムの意味論・検証・合成に関する演習を行なう。

M640 代数幾何学演習I 3-3-6 (教授 有馬哲)

単行書または論文の講読。

M641 代数幾何学演習II 3-3-6 (教授 有馬哲)

論文講読。

M650 代数解析学演習I 3-3-6 (助教授 上野喜三雄)

M651 代数解析学演習II 3-3-6 (助教授 上野喜三雄)

代数解析学を数理論理(可積分力学系, 場の量子論, 可解格子模型)に応用する上で基本的と思われる手法, 思想を研究する。最新の話題も適宜織り交ぜながらセミナーをおこなう予定である。

- M660 整数論演習 I** 3-3-6 (教授 寺田 文 行)
 整数論に関する最近の論文を材料にして考究を進める。またコンピューター利用による整数論の探究もあわせて進める。
- M661 整数論演習 II** 3-3-6 (教授 寺田 文 行)
 整数論演習 I の継続である。
- M670 代数学 A 演習 I** 3-3-6 (教授 足立 恒 雄)
- M671 代数学 A 演習 II** 3-3-6 (教授 足立 恒 雄)
 代数的整数論をはじめ、諸種の手法をとり入れた整数論を研究する。
- M680 代数学 B 演習 I** 3-3-6 (教授 日野原 幸 利)
- M681 代数学 B 演習 II** 3-3-6 (教授 日野原 幸 利)
 可換代数、有限群の表現論、ホモロジー代数に関係し、またそれぞれに必要な単行書を使ってセミナーを行う。
- M690 代数学 C 演習 I** 3-3-6 (助教授 近 藤 庄 一)
 単行書または論文の講読
- M691 代数学 C 演習 II** 3-3-6 (助教授 近 藤 庄 一)
 単行書または論文の講読
- M700 保型函数論演習 I** 3-3-6 (助教授 橋 本 喜一朗)
- M701 保型函数論演習 II** 3-3-6 (助教授 橋 本 喜一朗)
- M710 トポロジー A 演習 I** 3-3-6 (教授 野 口 広)
 (講師 福 田 拓 生)
 主として写像および代数曲面の特異点の理論についてセミナーを行う。
- M711 トポロジー A 演習 II** 3-3-6 (教授 野 口 広)
 (講師 福 田 拓 生)
 主として力学系についてセミナーを行う。
- M720 トポロジー B 演習 I** 3-3-6 (教授 伊 藤 隆 一)

- M721** トポロジー B 演習 II 3-3-6 (教授 伊藤 隆一)
力学系についてセミナーを行う。
- M730** 幾何学演習 I 3-3-6 (教授 鈴木 晋一)
- M731** 幾何学演習 II 3-3-6 (教授 鈴木 晋一)
主として 3 次元多様体に関する最近の論文を材料にしてセミナーを行う。
- M740** 微分多様体演習 I 3-3-6 (教授 小島 順)
微分多様体上の微積分, 力学系 (dynamical systems), 力学 (mechanics) の数学的理論, 微分位相幾何学などの範囲でテーマを選び, セミナーの形で行う。
- M741** 微分多様体演習 II 3-3-6 (教授 小島 順)
微分多様体 I 演習と同じ。
- M750** リー群演習 I 3-3-6 (教授 清水 義之)
先ず, 多様体, リー群及びリー環についての知識を整理する。進んで, 多様体上の微積分とくに, 微分幾何学及び均質空間上の幾何と解析を習熟することを目標とする。
- M751** リー群演習 II 3-3-6 (教授 清水 義之)
リー群のユニタリ表現を中心に研究する。表現の構成, 表現の既約性, 既約表現への分解, Plancherel の定現, 球関数など, 一般にリー群上の調和解析を多方面から追求する。
- M760** 関数解析 A 演習 I 3-3-6 (教授 洲之内 治男)
- M761** 関数解析 A 演習 II 3-3-6 (教授 洲之内 治男)
関数解析やその応用に関する事項についてのセミナーを行う。
- M770** 関数解析 B 演習 I 3-3-6 (教授 和田 淳蔵)
Banach 環, 関数環についての基礎的な学習をする。そのあと関数環の基本的で比較的取りくみやすいテーマをもとにして関数環の本質をさぐっていく。
- M771** 関数解析 B 演習 II 3-3-6 (教授 和田 淳蔵)
関数環の研究および関数環とフーリエ解析学, 調和解析学, 確率論などの関係の究明を行なう。それと共に関数環の根本的な問題の解明に努力する。

M780 発展方程式A演習I 3-3-6 (教授 宮 寺 功)

発展方程式論を作用素論的な立場から考察する際、その基礎になるバナッハ空間における線形・非線形半群の理論及びそれに関連する関数解析の分野について研究を行う。

M781 発展方程式A演習II 3-3-6 (教授 宮 寺 功)

演習Iに引続き、抽象的発展方程式論の研究及びその発展系偏微分方程式論への応用を考察する。

M790 発展方程式B演習I 3-3-6 (教授 石 垣 春 夫)

発展方程式研究の趣旨にそって、学習の準備として、テキスト、論文等の講読をする。

M791 発展方程式B演習II 3-3-6 (教授 石 垣 春 夫)

演習Iの講読をさらにすすめて、より深く研究をすすめる。

M800 発展方程式C演習I 3-3-6 (未 定)

M801 発展方程式C演習II 3-3-6 (未 定)

M810 多様体上の解析学演習I 3-3-6 (教授 郡 敏 昭)

M811 多様体上の解析学演習II 3-3-6 (教授 郡 敏 昭)

多様体上の解析学、とくに函数論、あるいは超函数論を展開する。

M820 偏微分方程式A演習I 3-3-6 (教授 入 江 昭 二)

M821 偏微分方程式A演習II 3-3-6 (教授 入 江 昭 二)

偏微分方程式に関連した文献を講読する。

M830 偏微分方程式B演習I 3-3-6 (教授 垣 田 高 夫)

より具体的な研究に入る準備段階として基本的な論文の理解から始め、どのようなことが問題となるのか、どのように問題を設定すればよいのか等、偏微分方程式を研究するための問題意識の育成を当面の目標としたい。

M831 偏微分方程式B演習II 3-3-6 (教授 垣 田 高 夫)

演習Iでの基礎研究をもとに、研究の方向を限定し、その方向に沿っての集中的な文献研究をすることにより、それらを参考にしつつ、新しい問題を考えるための準備、あるいは新しい問題の設定等を考えて行きたい。

M840 常微分方程式演習Ⅰ 3-3-6 (教授 杉山昌平)

常微分方程式及びその応用に関する内外の諸文献を講究する。さらに、研究成果について討論を行い、将来の発展のための基礎を固めることを目的とする。

M841 常微分方程式演習Ⅱ 3-3-6 (教授 杉山昌平)

関数微分方程式、積分方程式、積分微分方程式、最適制御及びその応用に関する内外の諸文献を講究する。さらに、研究成果について討論を行い、将来の発展のために基礎を固めることを目的とする。

M850 非線型偏微分方程式A演習Ⅰ 3-3-6 (教授 小島清史)

研究テーマに関する基本的事項を主な内容として、セミナー形式で行う。

M851 非線型偏微分方程式A演習Ⅱ 3-3-6 (教授 小島清史)

演習Ⅰに引きついで、研究テーマに関する最近の結果を中心として、セミナー形式で行なう。

M860 非線型偏微分方程式B演習Ⅰ 3-3-6 (教授 堤正義)

M861 非線型偏微分方程式B演習Ⅱ 3-3-6 (教授 堤正義)

M870 非線型偏微分方程式C演習Ⅰ 3-3-6 (教授 飯野理一)

M871 非線型偏微分方程式C演習Ⅱ 3-3-6 (教授 飯野理一)

I, II共に非線型関数解析、関数方程式に関する文献の輪読を主とする。

M940 非線形偏微分方程式D演習Ⅰ 3-3-6 (助教授 山田義雄)

偏微分方程式に関する文献を講読する。非線形問題を解析するための基本的事項の理解を深めるとともに、問題意識の育成を目指す。

M941 非線形偏微分方程式D演習Ⅱ 3-3-6 (助教授 山田義雄)

演習Ⅰに引続き、研究テーマを徐々に絞って文献講読をする。

M880 関数論演習Ⅰ 3-3-6 (未定)

M881 関数論演習Ⅱ 3-3-6 (未定)

M890 数理統計学A演習Ⅰ 3-3-6 (教授 草間 時 武)

数理統計学研究の項で述べたような部門に関する本または論文を読む。そのために必要な数学について学生が良くわかっていない時は、1年間をそのための勉強にあてることもある。

M891 数理統計学A演習Ⅱ 3-3-6 (教授 草間 時 武)

Iにひきつづき、統計的決定関数論、十分統計量の理論、漸近理論、予測の理論等に関する論文を読み、修士論文の準備をする。

M900 数理統計学B演習Ⅰ 3-3-6 (教授 鈴木 武)

基礎力を養うため、基本的な本あるいは論文を読む。

M901 数理統計学B演習Ⅱ 3-3-6 (教授 鈴木 武)

論文を中心に読む。

M910 計算数学演習Ⅰ 3-3-6 (教授 中島 勝也)

計算数学研究の理論を体得するために、セミナーおよび電子計算機による数値計算実験を行なう。

セミナーで用いる文献は最新刊の専門書および専門雑誌であり、当初は文献の選択に関して指導するけれども、各自が選択の眼を開くと共に各自の自由選択にまかせる。

M911 計算数学演習Ⅱ 3-3-6 (教授 中島 勝也)

計算数学演習Ⅰにひき続くもので内容はⅠと同じ。

M920 数値解析演習Ⅰ 3-3-6 (教授 室谷 義昭)

数値解析に関連した演習を行う。特に基礎理論を重視した実習を中心に進める。

M921 数値解析演習Ⅱ 3-3-6 (教授 室谷 義昭)

数値解析に関連した演習を行う。特に最近の理論を重視した実習を中心に進める。

VI 教員免許状取得について

1. 理工学研究科で取得できる免許状の種類および免許教科は次のとおりである。

免許状の種類

高等学校教諭 1 級普通免許状

免許教科

理科・数学・工業

2. 高等学校教諭 1 級普通免許状の取得方法

〔参 考〕

教育職員免許法第 5 条別表 1 からの抜萃

高等学校教諭 1 級普通免許状

基礎資格 イ 修士の学位を有すること

ロ 大学の専攻科又は文部大臣の指定するこれに相当する課程に 1 年以上在学し、30 単位以上を修得すること。

(イ) 本研究科入学以前に高等学校教諭 2 級普通免許状を取得した者、または教育職員免許法第 5 条別表 1 の所定単位を履修し取得条件をみたしていること。

(ロ) 教育職員免許法第 5 条別表第 1 に規定する高等学校教諭 1 級普通免許状の授与を受ける場合の「教科に関する専門科目」の単位の修得方法は、理科・工業の教科についての免許状の授与を受ける場合にあつては 22 単位以上を、数学の教科についての免許状の授与を受ける場合にあつては 20 単位以上を修得するものとする。(教育職員免許法施行規則第 4 条 3 項から抜萃)

(イ) (ロ)にいう「教科に関する専門科目」については事務所に一覧表をおいてあるので、各自確認し、単位修得に誤りないよう十分注意すること。

3. 免許状の申請

原則として本人が授与権者(居住地の都道府県教育委員会)に対して行う。ただし 3 月の修了時に限り、教育職員免許状を必要とする学生(4 月から教職につく者)のために、大学が各人の申請をとりまとめて申請を代行(一括申請)し、学位授与式当日手渡せるようとりはかっている。

その手続については、6 月に一括申請見込数調査を行い、11 月下旬～12 月上旬に授与願用紙を交付するので、掲示に十分注意すること。期限遅れ等により、一括審査を受けられなかった場合は、修了後個人で申請することになる。

Ⅶ 学 生 生 活

1 「学生の手帖」について

この研究科要項とは別に、大学から「学生の手帖」が交付される。研究科要項が理工学研究科における学修を中心に編集されているのに対し、「学生の手帖」は、早稲田大学における学生生活および学園の紹介を中心に編集されている。研究科要項と共に活用してもらいたい。

2 奨 学 金 制 度

早稲田大学で、学生に給貸与している奨学金は、大隈記念奨学金・早稲田大学貸与奨学金・その他の学内奨学金などであり、その他地方公共団体・民間団体の奨学金がある。その詳細については、前記「学生の手帖」に掲載されているから参照されたい。

3 各種証明書類の交付

- (1) 諸証明書 在学・成績・修了見込証明書等は学生の請求により交付する。請求の際は、事務所備付の用紙に記入し、所定の料金（学生の手帖参照）を納入すること。
- (2) 通学証明書 JR・私鉄・地下鉄・都バス等は、最寄駅で学生証を提示すれば購入できる。私営バスその他証明書を必要とする場合は、事務所まで交付する。
- (3) 学生証の再交付 事務所へ手数料を添えて、申請する。代理人の出頭には応じない。
- (4) 学割の交付 学割は学生が夏季や冬季の休暇に帰省する場合ならびに研究活動に必要な場合に発行する。

4 システムカードについて

事務所の窓口業務を迅速に処理することを主な目的として、学生証とともに SYSTEM CARD を交付する。このカードは、事務所での各種届出、申込み等に使用するものであり、学生証と同様、取扱いには十分注意し、常に携帯していなければならない。

1. SYSTEM CARD は入学時に事務所（学籍係）で交付する。
ただし、卒業後も学籍番号の覚えとなるように回収しない。
2. SYSTEM CARD は在学中有効である。
3. SYSTEM CARD を破損・紛失したときは、ただちに事務所（学籍係）に連絡すること。

5 学生相談センター

本大学にはカウンセリング機関として、「学生相談センター」(本部キャンパス診療所ビル内)があり、大久保キャンパスにはその分室が51号館1階11B室におかれている。精神医学的、心理学的な面について専門のカウンセラーが相談指導にあたっている。

6 各種願・届

学生諸君が在学中、本人または保証人になんらかの異動や事故があった場合には、必ず願または届を提出しなければならない。(用紙は大学院事務所にある)。

(1) 休学願 (学則34条参照)

- イ 引続き2ヵ月以上出席することができない者は休学願書を提出すること。
- ロ 病気の場合は診断書を添えること。
- ハ 休学中でも授業料は指定された期日までに納入しなければならない。休学期間中の授業料は半額とする。

(2) 復学願 (学則34条参照)

- イ 復学は学年の始めに限られる。
- ロ 病気回復による場合は、医師の診断書を添えること。

(3) 退学願 (学則36条参照)

- イ 退学願には学生証を添えること。
- ロ 学年の途中で退学する場合でも、その納入期の学費は納めていなければならない。(納入していない場合は、退学とはせず、抹籍扱とする)

(4) 再入学

正当な理由で退学した者が再入学を願出た場合は、学年の始めにおいて選考の上、許可することがある。

(5) 留学願

- イ 在学中に留学できる期間は1年以内とする。特別の事情がある場合は更に2年間に限り延長できる。
- ロ 留学期間中は、長期欠席扱いとし、在学年数に算入しない。
- ハ 留学期間中の学費は、1年間に限り免除することができる。1年間をこえた期間の授業料については半額を免除することができる。
- ニ 留学先の大学等の入学許可証または受入書等を願書に添えて提出すること。

(6) 博士後期課程（博士）在学継続願

イ 博士論文のみ未提出者が更に在学を希望する場合は「大学院博士課程在学継続願」を提出すること。

ロ 継続願を提出しない者は、在学を希望しないものとして、退学の扱いとする。

(7) 改姓名届

改姓名届の場合は戸籍抄本を添えること。

(8) 住所変更届、保証人変更届

本人及び保証人が住所を変更した場合および保証人を変更した場合は、直ちに届出ること。

7 掲 示

学生に対する公示・告示その他の伝達は、掲示をもって行なわれるから学生諸君は常に掲示に注意しなければならない

掲示場 51号館（1階）大学院事務所前

8 授業、時限および交通機関のストと授業について

(1) 授業時限

1時限 9：00～10：30 4時限 14：40～16：10

2 // 10：40～12：10 5 // 16：20～17：50

3 // 13：00～14：30 6 // 17：55～19：25

(2) 交通機関のストと授業について

1. E電等交通機関のストが実施された場合（ゼネスト）首都圏におけるE電のストが
 - A 午前0時まで中止された場合、平常どおり授業を行う。
 - B 午前8時まで中止された場合、3時限目（13時）から授業を行う。
 - C 午前8時まで中止の決定がない場合は、終日休講とする。上記はE電の順法闘争および私鉄のストには適用しません。
2. 首都圏E電の部分（拠点）ストが実施された場合は平常通り授業を行う。
3. 首都圏E電の全面時限ストが実施された場合
 - A 午前8時までストが実施された場合、3時限目（13時）から授業を行う。
 - B 正午までストが実施された場合、6時限目（17時55分）から授業を行う。
 - C 正午を超えてストが実施された場合、終日休講とする。
4. E電を除く私鉄および都市交通のみのストが実施された場合平常通り授業を行う。
5. ただし、人間科学部に設置された授業科目を受講する者については、上記1・2・

3は適用されるが4については

- ① 西武鉄道新宿線または西武鉄道池袋線のどちらか一方でもストが実施された場合
- ② ①の西武鉄道両線のストが実施されない場合でも、西武バス（所沢駅前から運行される路線バス）および西武自動車（小手指駅前から運行されるスクールバス）の両方ともストが実施された場合

次のとおりとする。

- A 午前8時までストが実施された場合、3時限目（13時）から授業を行う。
- B 午前8時を超えてストが実施された場合、終日休講とする。

9 事務所の事務取扱時間等

(1) 事務取扱時間ならびに休業日について

平日 午前9時～午後4時30分

土曜日 午前9時～午後2時

休業日 日曜日、国民の祝日、創立記念日、年末年始（12月29日～1月3日）、夏季・冬季休業中の土曜日

（注）夏季休業・冬季休業等の期間中は、事務処理が平常より遅れる場合があるから留意すること。

10 教室の使用について

授業外に教室を使用したい時は、学部事務所学務係に教室使用願（学務係にあり）を提出しなければならない、教室使用願の提出については次の事項に留意すること。

- イ 使用願には責任者（教員……学生の会の会長等）の印を必要とする。
- ロ 使用願の提出は、使用日の3日前までに行なうこと。
- ハ 使用許可時間は、午前9時00分から午後7時30分までとする。
- ニ 使用許可期間は、最高1カ月とする。それ以上に亘る場合は再度提出すること。
- ホ 使用中は次の注意を守ること。
 - a まわりの授業には充分注意し、その妨げにならぬようにすること。
 - b 教室内の机、椅子その他の什器は動かさぬこと。
 - c 使用許可時間を厳守すること。

11 学生の研究活動について

本大学には、20有余の学会があり、講演会や機関紙の定期的刊行を通じて、学術研究発

表や、各種の広報活動を行っている。

理工学部関係では、機友会、電気工学会、資源工学会、稲門建築会、応用化学会、金属工業学会、工業経営学会、稲土会、応用物理学会、数学会の10の学会と稲工会（旧早稲田高等工学校）、稲友会（旧早稲田工手学校、早稲田大学工業高等学校の連合体）により構成される理工学会が、学術団体として活動している。

12 安全管理

理工学研究科の授業には、各種の装置・機器・化学薬品類が使用される。これらの中には、危険を伴なうものが少なくない。その使用に当っては、指導者の注意に従い、事故の起らないよう、取扱いに充分留意して欲しい。

なお、負傷・急病などの事態が発生した場合は次のように対応すること。

事故発生時

○重傷と思われる場合

ただちに、学部事務所（電-2118, 2119）保健室（電-2425）あるいは最寄りの実験室研究室のいずれかに通報すること、これらの箇所が不在の場合は正門警守室（電-3000）に通報すること。

○中程度の負傷の場合

保健室で応急処置をうけるとともに、指示された医療機関に行くこと。保健室不在の場合は、同室のインターフォンを利用すること。学部事務所か正門警守室に通じるようになっていいる。

○軽傷の場合

保健室で処置をうけるか、下記の各箇所の備付薬品（救急箱）を利用すること。

その他急病等身体不調時

保健室を遠慮なく利用して欲しい。なお、契約病院として最寄りに大同病院（豊島区高田3-22-8・電話981-3213）がある。通常、医師にかかる場合は健康保険証を使用するので、自宅が遠隔地の場合は、本人用の保険証を用意すること。この保険証は在学証明書添えて会社（組合健保の場合）なり当該市町村役場（国民健保の場合）等に申請すれば交付される。

- (注) 1. 救急処置について 素人による薬剤の使用および誤った手当は危険でもあり、また医師の診察の妨げにもなるから保健室看護婦・学部事務所学務係に連絡の上その処置をまつこと。
2. 保健室利用について 保健室内の前室は常時開いている。必要な場合は何時

でも利用できるようになっている。

担架・備付薬品（救急箱）設置場所

号 館	担 架	備 付 薬 品
51	保健室 9階西側廊下	保健室（1階，看護婦常駐）電—2425 学部事務所（1階）電—2118 大学院理工学研究科事務所，工業経営学科実験室（1階）図書室（地下1階），教職員ロビー
52	1階廊下	専門学校事務所（1階）P.M. 3:00～9:00 学生読書室（地階）
53	1階廊下	
54	1階廊下	
56	4階廊下中央	物理基礎実験室（2階） 物理化学実験室（3階） 化学分析・機器分析・工業化学実験室（4階） 化学基礎実験室（5階）
57	2階ホワイエ（56号館側便所前）	製図室（1階）
58	1階廊下中央	流体・熱工学・制御工学実験室（1階）
59	1階廊下中央（材料実験室側）	材料実験室，レポート室，工作実験室（1階） 情報科学研究教育センター事務所（4階）
60	1階北側階段室	材料工学科実験室，環境保全センター事務所（1階）
61	1階南側（シャッター前）	電気工学実験室（1階）電子通信実験室（4階） 測量実習室，土質・資源工学科実験室（地階）
2	2階階段室	高電圧実験室（1階）
65	1・3・5階（56号館側廊下）	化学工学実験室1階

13 理工学図書室 51号館地下1階（座席数224席）

開室時間 { 月～金：9時30分～20時
土：9時30分～19時

閉室日：日曜日・祝日および本大学の定めた休日、その他必要のある場合は閉室する。
理工学図書室は理工学専門の研究図書室として設置されている。また、共同利用を目的として、理工学研究所、システム科学研究所図書を収容している。(鋳物研究所については別に図書室がある)

この図書室の性格上、蔵書構成は内外の理工学系の雑誌(約6000種)を主体とし、その他図書約16万冊を所蔵している。閲覧方法は利用者が書架にある図書資料を直接利用することができる開架方式をとっている。

受付

入室者の確認と退出者のチェックおよび図書貸出証の交付、図書の貸出し返却手続を行う。

閲覧室〔新着雑誌閲覧室〕(座席数 144 席)

内外の新着雑誌(国内雑誌1400種、外国雑誌1500種)の当年度分を排架している。外国雑誌は左側に誌名のABC順、国内雑誌は右側に五十音順に排架してある。

二次資料コーナー

閲覧室手前右側に国内刊行の二次資料(科学技術文献速報など)、左側に外国刊行のもの(chemical Abstracts など)が排架されている。また、各種の辞書が別置してある。

参考図書コーナー

辞書、事典、便覧、ハンドブック、地図、規格等の参考図書が集められている。

レファレンス・サービス

閲覧室に入って、すぐ右側にレファレンス コーナーがある。ここでは、研究・調査を進めていく上で、図書室を活用して必要な文献・情報を入手できるよう、レファレンス係が、利用相談などを通して、援助サービスをしている。必要な文献が図書室にない場合は、相互利用によって国内外の機関より文献の複写(実費負担)をとりよせることができる。このサービスについては次のようなものがある。

1. 他大学への紹介状の発行(学内でも商学部教員図書室は必要)
2. 国内外他大学・研究機関のコピー申込み(国会図書館を除く)
3. 国立国会図書館・慶応義塾大学・大阪大学よりの図書の借用。
4. 資料購入リクエスト

オンライン情報検索サービス

DIALOG (米, DIALOG 社)

JOIS (日本科学技術情報センター)

BRS (米, BRS 社)

※ この3つのシステムにより、オンラインによる情報検索サービスを実施している。

詳細については担当者に相談のこと。

書庫

書庫は上、下2層にわかれ、上層（B1）は左側に合冊された国内雑誌が五十音順に、右側に和洋の図書が分類順に排架されている。国内雑誌の排架は大学誌（和、欧）、一般誌の順となっている。

書庫の下層（B2）は合冊された外国雑誌と国内刊行欧文誌がABC順に、左側から右側へと排架されている。

このフロアにはキャレル（個席）が80席設けられ、閲覧室とあわせて自由に使用できる。

I 利用手続

1. 図書貸出証は図書の館外貸出しを希望する者のみ発行する。
2. 室内に持ち込みできるものは、参考資料、ノート類にかぎられ、その他の携帯品、バッグ・コート類などはロッカーに入れること。
3. 図書の館外貸出しは、図書借用証に所定事項を記入し図書貸出証をそえて受付に提出すること。

貸出冊数および期間

	貸出冊数	貸出期間
大学院生・学部4年生	5冊	1カ月
その他の利用者	2冊	1カ月

6. 雑誌・新聞（合冊を含む）、参考図書および禁帯出のラベルが付してある図書は館外貸出しをしないので必要箇所は複写を利用すること。

II 目録の使い方

1. 図書の目録

蔵書目録として、著者、書名、および件名目録の3種類があり、閲覧室入口左側に備えてある。

件名目録は、その図書の主題を統一されたことばで表し、五十音順に並べたものである。

2. 雑誌の目録

目録カードの排列は、外国雑誌の場合、誌名のABC順に、国内雑誌の場合は、誌名の五十音順に排列してある。カードは誌名、発行所、所蔵巻、号、年月、欠号を、記載してある。

III 図書の分類

「理工学図書分類表」によって分類されている。

Ⅳ 文献複写室

専用カードを使用するセルフの複写機が2台とコイン式セルフ複写機が2台。およびオペレーター専用の複写機が1台、計5台の複写機とマイクロリーダープリンター2台が設置されている。

マイクロフィルムによる撮影や焼付、引伸等は、当室において外部への注文を受けつけているので利用されたい。

なお、著作権に関する一切の責任は、依頼者が負うことになるのであらかじめ承知の上、申し込むこと。

複写時間および料金

複写時間： {月～金 午前9時30分～午後7時30分
 " 土 " ～午後6時30分

複写料金：ゼロックス 1枚につき10円

 : コイン " 10円

14 理工学図書室利用内規

第1条 理工学図書室は主として理工学専門図書館としての機能を発揮し教育と研究活動に資することを目的とする。

第2条 本図書室を利用しうる者は次による。

- (1) 本大学教職員
- (2) 大学院理工学研究科学生
- (3) 理工学部4年 以上の学生
- (4) 本大学専任教員の承認を得、理工学部長がこれを許可した大学院学生、学部学生聴講生、委託学生、専門学校学生、卒業生、個人助手および本学教員との共同研究者。
- (5) その他理工学部長が特に許可した者

第3条 入室に際しては前条(2)・(3)項の学生は学生証を、職員は身分証明書を提示して入室し前条(4)・(5)項の者は図書室利用許可願を提出し閲覧票の交付をうけて入室するものとする。

第4条 第2条(4)・(5)項の利用者の利用期間は当該年度以内とし、継続して利用する場合にはあらためて更新しなければならない。

第5条 図書室利用許可願の書式は別にこれを定める。

第6条 第2閲覧室内のキャレルの使用についてはキャレルを使用内規による。

第7条 本図書室は次の通り開室する。

- (1) 平日 午前9時より午後8時まで

ただし夏期・冬期など授業休止期間中の開室についてはその都度これを定め、あらかじめ

め告示する。

第8条 本図書室は次の通り休室する。

- (1) 毎週日曜日
- (2) 国民の祝日
- (3) 本大学創立記念日(10月21日)
- (4) 夏期・冬期など授業休止期間中その都度定められた日
- (5) 本大学または図書室の都合により休室を必要とするとき

ただし、この場合はあらかじめ告示する。

第9条 本図書室の図書を室外に帯出する場合には所定の手続きを経なければならない。

第10条 室外に帯出することのできる図書の冊数およびその期間は次による。

	貸出冊数	貸出期間
(1) 本大学教職員(非常勤を含む)	10冊以内	2ヵ月以内
(2) 大学院生・学部4年生	5冊 //	1ヵ月 //
(3) 理工学部3～1年生	2冊 //	1ヵ月 //
(4) その他	2冊 //	1ヵ月 //

第11条 前条の貸出期間内であっても本図書室の都合ならびに他から貸出請求があった場合に限り返却を依頼することができる。

第12条 図書の帯出手続きについては別にこれを定める。

第13条 本図書室の図書のうち次の図書は室外に帯出することはできない。

- (1) 逐次刊行物(合冊された雑誌を含む)
- (2) 辞書、便覧、データ類、規格類、文献目録、索引類、地図、法令集
- (3) その他図書室において室外帯出不許可と指定した図書

第14条 室外貸出期間が満了した図書は直ちに返却しなければならない。

第15条 返却したのち再び帯出を希望するときは他に貸出請求がない場合に限り再帯出することができる。

第16条 室外貸出期間が満了するもいちじるしく返却を怠る者は以後の帯出を制限されることがある。

第17条 帯出者が図書を紛失した場合には直ちに届出るとともに現物または相当金額を弁償しなければならない。

第18条 故意に図書資料を破損した者は、相当金額を弁償するとともに6ヵ月間の利用を停止する。

また無断で持出した者は、6ヵ月間の利用を停止する。

第19条 資料の複写については文献複写運用内規によるものとする。

第20条 本内規の改廃については図書委員会の協議を経て理工学部長の承認をうるものとする。

附 則 この内規は昭和43年4月1日から施行する。

附 則 この内規は昭和45年4月1日から施行する。

附 則 この内規は昭和48年4月1日から施行する。

15 施設賠償責任保険について

大学の所有、使用、管理する施設設備（以下「大学施設」という）の不備および管理上の過失、ならびに大学施設に係る教育活動実施中に、何等かの瑕疵によって学生に損害を与え、法律上の損害賠償責任が生じた場合、その損害賠償金および訴訟費用等にあてるために大学が契約している保険である。

早稲田大学大学院学則

第1章 総 則

(設置の目的)

第1条 本大学院は、高度にして専門的な学術の理論および応用を研究、教授し、その深奥を究めて、文化の創造、発展と人類の福祉に寄与することを目的とする。

(課 程)

第2条 本大学院に博士課程をおく。

2 博士課程の標準修業年限は、5年とする。

3 博士課程は、これを前期2年、後期3年の課程に区分し、前期2年の課程は、これを修士課程として取り扱うものとする。

(課程の趣旨)

第3条 博士後期課程は、専攻分野について研究者として自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力およびその基礎となる豊かな学識を養うものとする。

2 修士課程は、広い視野に立って精深な学識を受け、専攻分野における研究能力を養うものとする。ただし、高度の専門性を要する職業等に必要の教育を行うことができる。

(研究科の構成)

第4条 本大学院に次の研究科をおき、各研究科にそれぞれの専攻をおく。(理工学研究科のみ記載)

研 究 科	博 士 課 程	
	修 士 課 程	博 士 後 期 課 程
理工学研究科	機 械 工 学 専 攻	機 械 工 学 専 攻
	電 気 工 学 専 攻	電 気 工 学 専 攻
	建 設 工 学 専 攻	建 設 工 学 専 攻
	資 源 及 材 料 工 学 専 攻	資 源 及 材 料 工 学 専 攻
	応 用 化 学 専 攻	応 用 化 学 専 攻
	物 理 学 及 応 用 物 理 学 専 攻	物 理 学 及 応 用 物 理 学 専 攻
	数 学 専 攻	数 学 専 攻

(学生定員)

第5条 各研究科の学生定員は、次のとおりとする。(理工学研究科のみ記載)

研究科	専攻	修士課程		博士後期課程		合計 総定員
		入学員 定員	総定員	入学員 定員	総定員	
理工学研究科	機械工学専攻	165	330	44	132	462
	電気工学専攻	105	210	28	84	294
	建設工学専攻	115	230	31	93	323
	資源及材料工学専攻	140	280	37	111	391
	応用化学専攻	90	180	24	72	252
	物理学及応用物理学専攻	100	200	27	81	281
	数学専攻	65	130	17	51	181
	計	780	1,560	208	624	2,184

第2章 教育方法等

(教育方法)

第6条 本大学院の教育は、授業科目および学位論文の作成等に対する指導（以下「研究指導」という。）によって行うものとする。

(履修方法等)

第7条 各研究科における授業科目の内容・単位数および研究指導の内容ならびにこれらの履修方法は各研究科において別に定める。

2 学生の研究指導を担当する教員を指導教員という。

3 本大学院の講義、演習、実習などの授業科目の単位数の計算については、本大学学則第11条および第12条の規定を準用する。

(他研究科または学部の授業科目の履修)

第8条 当該研究科委員会において教育研究上有益と認めるときは、他の研究科の授業科目または学部の授業科目を履修させ、これを第13条に規定する単位に充当することができる。

(授業科目の委託)

第9条 当該研究科委員会において教育研究上有益と認めるときは、他大学の大学院（外国の大学の大学院を含む。）と予め協議の上、その大学院の授業科目を履修させることができる。

2 前項の規定により履修した単位は10単位を超えない範囲で、これを第13条に規定する単位に充当することができる。

(研究指導の委託)

第10条 当該研究科委員会において、教育研究上有益と認めるときは、他大学の大学院または研究所（外国の大学の大学院または外国の研究所を含む。）と予め協議の上、博士後期課程の学生にその大学院等において研究指導の一部を受けさせることができる。

(単位の認定)

第11条 授業科目を履修した者に対しては、試験その他の方法によって、その合格者に所定の単位を与える。

(試験および成績評価)

第12条 授業科目に関する試験は、当該研究科委員会の定める方法によって、毎学年末、またはその研究科委員会が適当と認める時期に行う。

2 授業科目の成績は、優・良・可・不可とし、優・良・可を合格、不可を不合格とする。

第3章 課程の修了および学位の授与

(修士課程の修了要件)

第13条 修士課程の修了の要件は、大学院に2年以上在学し、各研究科の定めるところにより所要の授業科目について30単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、修士論文の審査および最終試験に合格することとする。

(博士課程の修了要件)

第14条 博士課程の修了の要件は、大学院博士課程に5年(修士課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む)以上在学し、各研究科の定めるところにより、所要の研究指導を受けた上、博士論文の審査および最終試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者について、当該研究科委員会が認めた場合に限り、大学院博士課程に3年(修士課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む)以上在学すれば足りるものとする。

2 博士論文を提出しないで退学した者のうち、博士後期課程に3年以上在学し、かつ、必要な研究指導を受けた者は、退学した日から起算して3年以内に限り、当該研究科委員会の許可を得て、博士論文を提出し、最終試験を受けることができる。

(博士学位の授与)

第15条 本大学院の博士課程を修了した者には次の区分により学位を授与する。(理工学研究科のみ記載)

理工学研究科 工学博士または理学博士

2 研究科は前項に定める博士のほか学術博士の学位を授与することができる。

(修士学位の授与)

第16条 本大学院の修士課程を修了した者には、次の区分により、学位を授与する。(理工学研究科のみ記載)

理工学研究科 工学修士または理学修士

(課程によらない者の博士学位の授与)

第17条 博士学位は、第15条の規定にかかわらず、博士論文を提出して、その審査および試験に合格し、かつ、専攻学術に関し博士課程を修了した者と同様に広い学識を有することを確認された者に対しても授与することができる。

(学位規則)

第18条 この学則に定めるもののほか、学位授与の要件その他学位に関し必要な事項は、
本大学の学位規則の定めるところによる。

第4章 教員、委員会および職員（省略）

第5章 学年、学期および休業日（省略）

第6章 入学、休学、退学、転学、専攻の変更および懲戒

（入学の時期）

第27条 入学時期は、毎学年の始めとする。

（修士課程の入学資格）

第28条 本大学院の修士課程は、次の各号の一に該当し、かつ、別に定める検定に合格した者について、入学を許可する。

1. 大学を卒業した者
2. 外国において通常の課程による16年の学校教育を修了した者
3. 文部大臣の指定した者
4. 本大学院において、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者

（博士後期課程の入学資格）

第29条 本大学院の博士後期課程は、次の各号の一に該当し、かつ、別に定める検定に合格した者について入学を許可する。

1. 修士の学位を得た者
2. 外国において修士の学位またはこれに相当する学位を得た者
3. 本大学院において、修士の学位を得た者と同等以上の学力があると認めた者

（入学検定の手続）

第30条 本大学院に入学を志願する者は、第40条に定める入学検定料を納付し、必要書類を提出しなければならない。

（入学手続）

第31条 入学を許可された者は、第41条に定める入学金および授業料等を添えて、本大学院所定の様式による誓約書、保証書および戸籍抄本を指定された入学手続期間中に提出しなければならない。

（保証人）

第32条 保証人は、父兄または独立の生計を営む者で、確実に保証人としての責務を果し得る者でなければならない。

- 2 保証人として不適当と認めるときは、その変更を命ずることができる。
- 3 保証人は、保証する学生の在学中、その一身に関する事項について一切の責任を負わなければならない。
- 4 保証人が死亡し、またはその他の理由でその責務を果し得ない場合には、新たに保証

人を選定して届け出なければならない。

5 保証人が住所を変更した場合には、直ちにその旨届け出なければならない。

(在学年数の制限)

第33条 本大学院における在学年数は、修士課程にあっては4年、博士後期課程にあっては6年を超えることはできない。

(休学)

第34条 病気その他の理由で引続き2ヵ月以上出席することができない者は、休学願書にその理由を付し、保証人連署で所属する研究科の委員長に願い出なければならない。

1 休学は、当該学年限りとする。ただし、特別の事情がある場合には、引続き休学を許可することがある。この場合、休学の期間は通算して修士課程においては2年、博士後期課程においては3年を超えることはできない。

3 休学期間中は、授業料の半額を納めなければならない。

4 休学者は、学期の始めでなければ復学することができない。

5 休学期間は、在学年数に算入しない。

(専攻および研究科の変更等)

第35条 専攻および研究科の変更または転入学に関する願い出があった場合には、当該研究科委員会の議を経てこれを許可することができる。

(任意退学)

第36条 病気その他の事故によって退学しようとする者は、理由を付し、保証人連署で願い出なければならない。

(再入学)

第37条 正当な理由で退学した者が、再入学を志願したときは、学年の始めに限り選考の上これを許可することがある。この場合には、既修の授業科目の全部または一部を再び履修させることがある。

(懲戒)

第38条 学生が、本大学の規約に違反し、または学生の本分に反する行為があったときは懲戒処分に付することがある。

2 懲戒は、戒告、停学、退学の三種とする。

(処分退学)

第39条 次の各号の一に該当する者は、退学処分に付す。

1. 品行不良で改善の見込みがないと認められる者
2. 学業を怠り、成業の見込みがないと認められる者
3. 正当の理由がなくて出席常でない者
4. 本大学院の秩序を乱し、その他学生としての本分に著しく反した者

第7章 入学検定料、入学金、授業料、演習料、実験演習料および施設費等

(入学検定料)

第40条 本大学院に入学を志願する者は、第30条の定める手続と同時に入学検定料2万5千円を納めなければならない。

(入学時の学費)

第41条 入学または転入学を許可された者は、入学金、授業料、演習料、実験演習料および施設費等を指定された入学手続期間内に納めなければならない。

2 前項の入学金および施設費の金額は、次のとおりとする。

入学金(昭和62年度生) 24万円

施設費(昭和61・62年度生) { 人文・社会系 第1,2年度 各8万円
理工系 第1,2年度 各18万円

3 第1項の授業料、演習料、実験演習料等の金額は、第42条の別表による。

(授業料等の納入)

第42条 学生は、別表にしたがい授業料、実験演習料等を納めなければならない。

2 納入期日は次のとおりとする。ただし、入学または転入学を許可された者が第41条の規定により指定された入学手続期間内に納める場合は、この限りでない。

第1期分納期日 4月15日まで

第2期分納期日 10月1日まで

(納入学費の取扱)

第43条 すでに納入した授業料およびその他の学費は、事情の如何にかかわらず返還しない。

(中途退学者の学費)

第44条 学年の途中で退学した者でも、その期の学費を納入しなければならない。

(抹籍)

第45条 学費の納入を怠った者は、抹籍することがある。

第8章 外国学生

(外国学生の入学選考)

第46条 外国において通常の課程による16年の学校教育を修了した者、またはこれに準ずる者は、第28条および第29条の規定にかかわらず、特別の選考を経て入学を許可することができる。

2 前項の規定による選考方法は、研究科委員長会の議を経て、各研究科委員会が定める。

(外国学生の入学出願書類)

第47条 前条の規定により入学を志願する者は、必要な書類のほか、日本に在住して、学業に従事することが適法であることを証明するに足る、外国政府その他の官公署の証明書を提出しなければならない。

(外国学生の特別科目)

第48条 第46条および第47条の規定により入学を許可された者については、学修の必要に応じて、一般に配置された科目の一部に代え、またはこれに加えて特別の科目を履修させることができる。

2 前項の規定による特別の科目は、当該研究科委員会が定める。

(外国で修学した日本人の取扱)

第49条 日本人であって、第28条第2号および第29条第2号に該当する者は、本章の規定によって取扱うことができる。

(外国人特別研修生)

第50条 第46条から第48条までの外国学生の規定にかかわらず、外国人であって本大学院において特定課題についての研究指導を受けようとする者があるときは、支障がない限り、外国人特別研修生として入学させることができる。

2 外国人特別研修生の入学手続、学費等については、別に規程をもって定める。

第9章 研修生

(研修生)

第51条 第27条から第29条までの規定によらないで、本大学院において授業科目を履修しようとする者または特定課題についての研究指導を受けようとする者があるときは、研修生として入学させることができる。

(研修生の種類)

第52条 官公庁、外国政府、学校、研究機関、民間団体等の委託に基づく者を委託研修生という。

2 前項に定める研修生以外の者を一般研修生という。

(研修生の選考)

第53条 研修生として入学を志願する者については、正規の学生の修学を妨げない限り、選考の上入学を許可する。

(研修生の履修証明書)

第54条 研修生に対しては、履修した科目について試験を受けたときは、証明書を交付する。

(研修生の入学手続、学費等)

第55条 研修生の入学手続、学費等については、別に規程をもって定める。

(正規学生の規定準用)

第56条 研修生については、本章の規定および別に定める規程によるほか、正規の学生に関する規定を準用する。

第10章 研究生

(研究生)

第57条 本大学院博士後期課程に6年間在学し、博士論文を提出しないで退学した者のうち、引き続き大学院において博士論文作成のため研究指導を受けようとする者があるときは研究生として入学させることができる。

(研究生の選考)

第58条 研究生として研究指導を受けようとする者については、正規の学生の修学を妨げない限り、選考の上入学を許可する。

(研究生の入学手続、学費および在学期間等)

第59条 研究生の入学手続、学費および在学期間等については、別に規程をもって定める。

(正規学生の規定準用)

第60条 研究生については、本章の規定および別に定める規程によるほか、正規の学生に関する規定を準用する。

第11章 交流学生

(交流学生の受託)

第61条 他大学の大学院の学生で、協定に基づき本大学院の授業科目を履修しようとする者または特定課題についての研究指導を受けようとする者を、交流学生として受け入れることができる。

(交流学生の受入手続、学費等)

第62条 交流学生の受入手続および学費等については、当該大学との協定による。

早稲田大学学位規則

(目的)

第1条 この規則は、早稲田大学大学院学則(昭和51年4月1日教務達第1号・以下「大学院学則」という。)に定めるもののほか、早稲田大学が授与する学位について必要な事項を定めることを目的とする。

(学位の種類)

第2条 本大学において授与する学位は、博士および修士とする。

2 博士の種類は次のとおりとする。

政治学博士

経済学博士

法学博士

文学博士

商学博士

工学博士

理学博士

学術博士

3 修士の種類は次のとおりとする。

政治学修士

経済学修士

法学修士

文学修士

商学修士

工学修士

理学修士

(博士学位授与の基準)

第3条 博士の学位は、専攻分野について、研究者として自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力およびその基礎となる豊かな学識を有する者に授与するものとする。

(博士学位授与の要件)

第4条 博士の学位は、大学院学則第14条により博士課程を修了した者に授与する。

2 前項の規定にかかわらず、博士の学位は本大学院の博士課程を経ない者であっても、大学院学則第17条により授与することができる。

(修士学位授与の基準)

第5条 修士の学位は、広い視野に立って精深な学識を修め、専攻分野における研究能力または高度の専門性を要する職業等に必要の高度の能力を有する者に授与するものとする。

(修士学位授与の要件)

第6条 修士の学位は、大学院学則第13条により博士課程の修士課程を修了した者に授与する。

(課程による者の学位論文の受理)

第7条 本大学院の課程による者の学位論文は、修士課程については2通を、博士後期課程については3通を作成し、それぞれに論文概要書を添えて研究科委員長に提出するものとする。

2 研究科委員長は、前項の学位論文を受理したときは、学位を授与できる者か否かについて研究科委員会の審査に付さなければならない。

(課程によらない者の学位の申請)

第8条 第4条第2項の規定により学位の授与を申請する者は、学位申請書に博士論文3通、論文概要書および履歴書を添え、その申請する学位の種類を指定して、総長に提出しなければならない。

(課程によらない者の学位論文の受理)

第9条 前条の規定による博士論文の提出があったときは、総長は、その論文を審査すべき研究科委員会の議を経て、受理するか否かを決定し、受理することに決定した学位論文

について審査を付託するものとする。

(学位論文)

第10条 学位論文は1篇に限る。ただし、参考として、他の論文を添付することができる。

2 前項により、一旦受理した学位論文等は返還しない。

3 審査のため必要があるときには、学位論文の副本、訳文、模型または標本等の資料を提出させることがある。

(審査料)

第11条 第9条の規定により、学位論文を受理したときは、学位の申請者にその旨を通知し、別に定める審査料を納付させなければならない。ただし、一旦納入した審査料は返還しない。

(審査員)

第12条 研究科委員会は、第7条第2項の規定により、学位論文が審査に付されたとき、または第8条および第9条の規定により、学位の審査を付託されたときは、当該研究科の教員のうちから、3人以上の審査員を選任し、学位論文の審査および最終試験または学識の確認を委託しなければならない。

2 研究科委員会は必要と認めたときは、前項の規定にかかわらず本大学の教員または教員であった者を、学位論文の審査および最終試験または学識の確認の審査員に委嘱することができる。

3 研究科委員会は必要と認めたときは、第1項の規定にかかわらず他の大学院または研究所等の教員等に学位論文の審査員を委嘱することができる。

4 研究科委員会は、第1項の審査員のうち1名を主任審査員として指名しなければならない。

(審査期間)

第13条 修士学位の授与にかかわる論文の審査および最終試験は、論文提出後3ヵ月以内に、また博士学位の授与にかかわる論文の審査、最終試験および学識の確認は、論文の提出または学位の授与の申請を受理した後、1年以内に終了しなければならない。ただし、特別の理由があるときは、研究科委員会の議を経てその期間を延長することができる。

(面接試験)

第14条 第8条の規定により学位の授与を申請した者については、博士論文の審査のほか、面接試験を行う。この試験の方法は研究科委員会において定める。

2 前項の規定にかかわらず、研究科委員会が特別の理由があると認めたときは、面接試験を行わないことができる。

(最終試験)

第15条 大学院学則第14条による最終試験の方法は、研究科委員会において定める。

(学識確認の方法)

第16条 大学院学則第17条による学識の確認は、博士論文に関連ある専攻分野の科目および外国語についての試問の方法によって行うものとする。

2 前項の規定にかかわらず研究科委員会が特別の理由があると認めた場合は、学識の確認のための試問の一部または全部を免除することができる。

(審査結果の報告)

第17条 博士の学位に関する審査が終了したときは、審査員はすみやかに審査の結果および評価に関する意見を記載した審査報告書を研究科委員会に提出しなければならない。

(学位論文の判定)

第18条 前条の審査の報告に基づき、研究科委員会は無記名投票により、合格、不合格を決定する。ただし、特別の場合には、他の方法によることができるものとし、その方法については、研究科委員長会の承認を得なければならない。

2 前項の判定を行う研究科委員会には、当該研究科委員の3分の2以上の出席を要し、合格の判定については、出席した委員の3分の2以上の賛成がなければならない。この場合の定足数の算定に当っては、外国出張中の者、休職中の者、病気その他の事由により、引き続き2ヵ月以上欠勤中の者、および所属長の許可を得て出張中の者は、当該研究科委員の数に算入しない。

3 研究科委員会が第1項の可否を決定したときは、研究科委員長はこれを総長に報告しなければならない。

(学位の授与)

第19条 総長は、前条第3項の規定による報告に基づいて学位を授与し、学位記を交付する。

2 学位を授与できない者には、その旨を通知する。

(論文審査要旨の公表)

第20条 博士の学位を授与したときは、その論文の審査要旨は、大学が適当と認める方法によってこれを公表する。

(学位論文の公表)

第21条 博士の学位を授与された者は、授与された日から1年以内に、当該博士論文を、書籍または学術雑誌等により、公表しなければならない。ただし、学位を授与される前に、印刷公表されているときは、この限りではない。

2 前項の規定にかかわらず博士の学位を授与された者は、やむを得ない理由がある場合には、研究科委員会の承認を受けて、当該論文の全文に代えて、その内容を要約したものを印刷公表することができる。この場合、大学はその論文の全文を求めに応じて閲覧に供するものとする。

3 第1項の規定により、公表する場合は、当該論文に「早稲田大学審査学位論文(博士)」と、また前項の規定により公表する場合は、当該論文の要旨に、「早稲田大学審査学位論文(博士)の要旨」と明記しなければならない。

(学位の名称)

第22条 本大学の授与する博士または修士の学位には、早稲田大学と付記するものとする。

(学位授与の取消)

第23条 本大学において学位を授与された者が、次の各号の一に該当するときは、総長は当該研究科委員会および研究科委員長会の議を経て、すでに授与した学位を取り消し、学位記を返還させ、かつ、その旨を公表するものとする。

1. 不正の方法により、学位の授与を受けた事実が判明したとき。
2. 名誉を汚辱する行為があったとき。

2 研究科委員会において前項の議決を行う場合は、第18条第2項の規定を準用する。

(学位記および書類)

第24条 学位記および学位授与申請関係書類の様式は別表のとおりとする。

付 則

(施行期日)

- 1 この規則は、昭和51年4月1日から施行する。

大学院外国人特別研修生に関する規程

(根拠および目的)

第1条 この規程は、早稲田大学大学院学則(昭和51年4月1日教務達第1号。以下「学則」という。)第50条(外国人特別研修生)の規定に基づき、外国人特別研修生(以下「特別研修生」という。)の取り扱いについて定める。

- 2 特別研修生については、この規程によるほか、正規学生に関する学則の規定を準用する。

(受入資格)

第2条 特別研修生として入学することのできる者は、外国の大学において、修士課程修了者またはこれと同等以上の学力を有し、研修生として受け入れることが適当でないと認められる者に限る。

(入学時期)

第3条 特別研修生の入学時期は、学期の始めとする。ただし、事情により学期の中途においても、入学を許可することができる。

(出願手続)

第4条 特別研修生として入学を志願する者は、必要書類に選考料を添えて、当該研究科委員長に願い出なければならない。

- 2 選考料は、研修生として入学を志願する者の額と同額とする。

(科目の履修)

第5条 指導教員が必要と認めた場合は、特別研修生に本大学院または学部配置されている授業科目の一部を履修させることができる。

(在学期間)

第6条 特別研修生の在学期間は、当該学年限りとし、引き続き特別研修生として入学を志願する場合には、改めて願出しなければならない。

(証明書)

第7条 特別研修生が研究報告書を提出したときは、当該研究科は適当と認められた者に対して証明書を発行することができる。

(入学手続)

第8条 特別研修生として入学を許可された者は、所定の学費等を納入して、学生証の交付を受けなければならない。

(学費等)

第9条 特別研修生の入学金および研究指導料は次のとおりとする。

入 学 金 60,000円

研究指導料	人文・社会系研究科	年額	170,000円
	理工学研究科	年額	270,000円

2 特別研修生に対し、演習料または実験演習料、学会費、学友会費等を正規の学生に準じて徴収することができる。

3 在学期間が6か月以内の場合の研究指導料および演習料または実験演習料等は半額とし、6か月を超える場合は全額とする。

4 すでに内入した入学金、研究指導料および演習料または実験演習料等は、事情のいかんにかかわらず返還しない。

(選考料および入学金の免除)

第10条 特別研修生であった者が、引き続き特別研修生として入学を志願し許可された場合には、選考料および入学金を免除する。

大学院研修生に関する規程

(根拠および目的)

第1条 この規程は、早稲田大学大学院学則(昭和51年4月1日教務達第1号)第55条(研修生の入学手続、学費等)の規定に基づき、研修生の取り扱いについて定める。

(入学時期)

第2条 研修生の入学時期は、学期の始めとする。ただし、委託研修生は、事情により学期の中途においても、入学を許可することができる。

(履修単位)

第3条 研修生が聴講できる授業科目の制限単位は、次のとおりとする。

- 一 授業科目のみの場合 20単位
- 二 授業科目および研究指導をあわせて受講する場合 10単位

(出願手続)

第4条 研修生として入学を志願する者は、所定の願書に、履歴書、最近撮影の写真および選考料20,000円を添えて、当該研究科委員長に願い出なければならない。ただし、委託研修生は、このほかに、官公庁、外国政府、学校、研究機関、民間団体等の委託書を添付しなければならない。

(在学期間)

第5条 研修生の在学期間は、当該学年限りとし、引き続き研修生として入学を志願する場合には、改めて願い出なければならない。

(入学手続)

第6条 研修生として入学を許可された者は、入学金および次の区分による所定の学費を納入して、学生証の交付を受けなければならない。

- | | |
|------------------|-------------|
| 一 授業科目のみの場合 | 聴講料 |
| 二 研究指導のみの場合 | 研究指導料 |
| 三 授業科目および研究指導の場合 | 聴講料および研究指導料 |

(選考料および入学金の免除)

第7条 本大学大学院正規学生であった者が、引き続き研修生として入学を志願し許可された場合には、選考料および入学金を免除する。

2 前項の規定により研修生となった者が、次年度以降も引き続き研修生として入学を志願し許可された場合には、選考料および入学金を免除する。

3 第1項の規定によらない研修生が、引き続き研修生として入学を志願し許可された場合には、2年間に限り選考料および入学金を免除する。

(入学金、聴講料、研究指導料)

第8条 研修生の入学金、聴講料および研究指導料は、別表のとおりとする。ただし、本大学において学士の称号または修士の学位を授与されている者の入学金は、半額とする。

(演習料、実験演習料、学友会費、学会費等)

第9条 研修生に対し、演習料または実験演習料、学友会費、学会費等を正規の学生に準じて徴収することができる。

大学院研究生に関する規程

(根拠および目的)

第1条 この規程は、早稲田大学大学院学則(昭和51年4月1日教務達第1号)第59条(研究生の入学手続、学費および在学期間等)の規定に基づき、研究生の取り扱いについて定める。

(出願手続)

第2条 研究生として入学を志願する者は、所定の願書により、当該研究科委員長に願い

出なければならない。

(入学手続、学費)

第3条 研究生として入学を許可された者は、次の区分による所定の学費を納入して、学生証の交付を受けなければならない。

1. 研究指導料 博士後期課程入学時の授業料の半額。
2. 演習料・実験演習料 博士後期課程入学時の演習料または実験演習料の全額。ただし、その年度の前期において学位を取得した場合は半額。
- 2 前項の学費の分納期は、次のとおりとする。

研究指導料	第1期	全額		
演習料・実験演習料	第1期	半額	第2期	半額

(在学期間)

第4条 研究生の在学期間は1年とする。ただし、研究指導を継続して受けようとするときは、2回に限り延長することができる。

- 2 在学期間の延長を希望する者は、毎年度の終りまでに、理由を付して、当該研究科委員長に願い出なければならない。
- 3 在学期間の延長の許可は、当該研究科委員会の議を経て、研究科委員長が行う。

(学友会費・学会費等)

第5条 研究生に対し、学友会費、学会費等を正規の学生に準じて、徴収することができる。

1. The first part of the document discusses the importance of maintaining accurate records of all transactions. It emphasizes that this is crucial for ensuring the integrity of the financial statements and for providing a clear audit trail. The text notes that any discrepancies or errors in the records can lead to significant complications during an audit and may result in the disallowance of certain expenses.

2. The second part of the document addresses the issue of proper documentation. It states that all receipts and invoices must be properly filed and indexed. This not only facilitates the search for specific items but also helps in identifying any missing or duplicate documents. The document further explains that the lack of proper documentation can be a major red flag for auditors and may lead to a more thorough and time-consuming audit process.

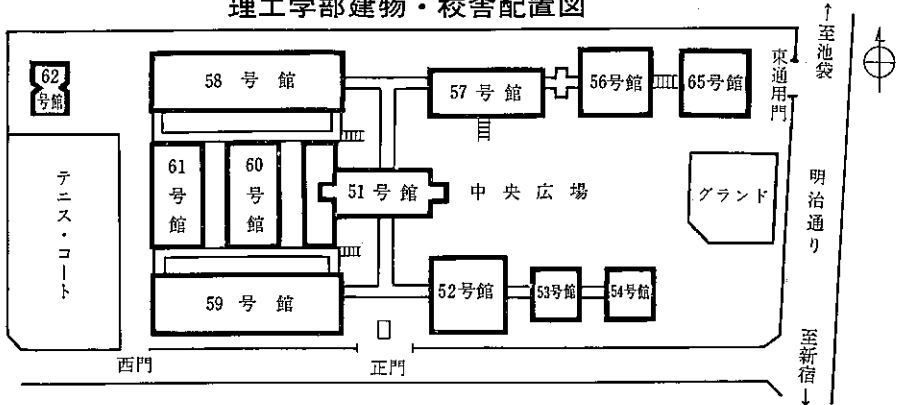
3. The third part of the document discusses the importance of timely reporting. It highlights that all financial information should be reported to the appropriate authorities in a timely and accurate manner. This is essential for maintaining the trust of stakeholders and for ensuring compliance with applicable laws and regulations. The text also notes that late reporting can result in penalties and may damage the organization's reputation.

4. The fourth part of the document discusses the importance of transparency. It states that all financial transactions should be clearly and accurately recorded, and the results should be made available to all relevant parties. This transparency is essential for building trust and for ensuring that the organization's financial performance is accurately reflected in its financial statements. The document further explains that a lack of transparency can lead to misunderstandings and may result in a loss of confidence in the organization's management.



1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

理工学部建物・校舎配置図



号館別・階別 主要用途案内

号館	階	主要用途	号館	階	主要用途	号館	階	主要用途
51	地2	実験室(理工研)	52	地	学生読書室・語学演習室	58	1	共通実験室第1課(熱工学体)
	地1	図書室・実験室		1	教室(180人)・専門学校事務所		2	共通実験室第1課(熱工学流体)
	1	事務所・講義室・学生相談室・共通実験室第2課(工学)・外国人学生相談室		2-3	教室(180人・240人)		3	研究室(計測・流体)
	2	学部長室・会議室・教職員ロビー	53	地	学生読書室	59	1-2	共通実験室第1課(材料)
	3	研究室(一般教育)・ゼミ室		1-4	教室(60人・120人)		3	共通実験室第2課(工作)
	4	研究室・連絡事務室(一般教育)	54	地	サークル部室	60	3	研究室(機械・金属)
	5	研究室・連絡事務室(数学)・ゼミ室		1-4	教室(60人・120人)		4	情報科学研究教育センター
	6	研究室(応物)	55		教室(1800人…予定)	61	地	コントロール室・ボイラー室
	7	研究室・連絡事務室(物理・応物)		地	食堂		1	共通実験室第5課(金属)・研究室(応化)・環境保全センター
	8	研究室(物理・応物)理工研分室事務所	56	1	教室(240人)・生協売店(書籍)	62	2	研究実験室・連絡事務室(材料)
	9	研究室		2	共通実験室第4課(物理基礎)		地	共通実験室第1課(土質)
	10	実験室(理工研)	57	2	共通実験室第5課(物理化学)	65	1-3	共通実験室第5課(資源)
	11	ゼミ室		3	共通実験室第4課(工学基礎)		1	共通実験室第4課(測量)
	12	研究室(資源)		4	共通実験室第5課(物理化学)		2	共通実験室(土木)
	13	研究室・連絡事務室(資源・工学)	58	4	共通実験室第5課(化学分析)	61	1	共通実験室第3課(電気工学)
	14	研究室(工学)システム研ゼミ室		5	共通実験室第5課(工業化学)		2	研究室・連絡事務室(電気)・情報科学研究教育センター
	15	システム科学研究所	59	5	共通実験室第5課(化学基礎)	62	3	研究室(電気)・情報科学研究教育センター
	16	研究室・連絡事務室(土木)		地	食堂・理髪所・談話室・売店		4	共通実験室第3課(電子通信)
17	研究室(建築)	60	1	共通製図室	65	4	研究室(通信)・情報科学研究教育センター	
18	研究室(建築)		2-3	教室(450人)		5	研究室・連絡事務室(通信)	

〒160 東京都新宿区大久保3-4-1
電話 203-4141(代表) 内73-2120



早稲田大学大学院理工学研究科

〒160 東京都新宿区大久保3-4-1

電話 (03)203-4141 [代表]

GRADUATE SCHOOL OF SCIENCE AND ENGINEERING WASEDA UNIVERSITY

3-4-1 Ohkubo, Shinjuku, Tokyo 160 · Phone 03-203-4141